

ハード・ガンズ①

《特務機関E X X P》

著：秋月しょう一郎

第1巻

目次

はじめに	
はじめに	2
前頭文	
前頭文	10
プロローグ	
プロローグ	14
第一章 謹慎と減俸、そして人探し	
第一節	24
第二節	30
第三節	36
第四節	39
第二章 センター街、急襲！	
第一節	46
第二節	62
第三節	70
第四節	78
第三章 モモの長い日記	
第一節	90
第二節	96
第三節	104
第四章 摘発の現場	
第一節	130
第二節	140
第三節	150
第四節	157
第五節	163
第五章 潜入捜査・開始	
第一節	168

第二節	178
第三節	186
第四節	198
第六章 余罪の行方	
第一節	204
第二節	212
第三節	218
自認認証：表明表記	
自認認証：表明表記	228

はじめに

はじめに

どうも秋月しょう一郎です、どうもこの文を書かせてもらいます。どうやらパブーさんの方から「本の書き方について」という簡単なメールが九月の二十四日にタイミング良く来たので、それに従ってこの「はじめに」という文を書かせてもらいます。

実はこの「はじめに」で明かしておかなければならない事は、このハード・ガンズという作品は、1980年代から1990年代にかけて一部の警察モノのテレビドラマで放映された、ストーリーの断片断片の話の内容を、わざとパクって書いた小説作品になっています。

何故、私が、既存のドラマで描かれた一部の内容と、わざと同じ様に書いたかという、大体多分1995年か1996年頃に、テレビを見ていたら、ある放送作家か脚本家の人が直木賞と芥川賞を多分ダブル受賞したあとのその人の記者会見みたいなテレビ番組で、どうやらその直木賞や芥川賞を受賞した人は、自分の弟子達を家に住まわせて、その弟子達が将来自分が脚本や小説を書くときのために色々な話のネタを考えておいて、自分のネタ帳にネタを書き留めておいたらいいのですが、その弟子達の師匠は、その弟子達のネタ帳を勝手に見て読んで、その自分の弟子達のネタを自分のテレビドラマの脚本や小説が何かに使って盗作していたらしいのです。その人の弟子達は、将来自分の小説や脚本にそのネタを使う為に色々な話のネタを考えておいたのだから、その師匠に「自分達の考えておいたネタを自分の脚本や小説などに使うのは止めてくれ、と言っているのに、その弟子達を自分の弟子にして弟子にしている金を取っている、弟子達はちゃんと弟子になってその師匠に弟子にしてもらっている金を払っているのに、その師匠は、弟子から弟子代金の金を取るだけは取って、その弟子達に一切何も師匠として色々な事を教えてやる事もせず、金だけは取りその上その弟子達のネタ帳からネタを勝手に使って自分の脚本や小説や何かを書いてみたいなのです。

だから弟子達は、自分達のネタ帳に書き溜めておいたネタを勝手に読んで自分の脚本や小説に使うのは止めてくれ、とその師匠に言っていたみたいなのです。

でもその弟子達の師匠に当たる人は、テレビ局のインタビューする女性に「弟子達のネタ帳からネタを流用しておいて、それを自分自身の脚本や小説に使うのは盗作では無いのですか、と聞かれていた場面を見たのですが、弟子達に何も一切教えてやる事もせずそれに弟子にしている金を取っているのにもかかわらず、弟子達のネタ帳からそのネタを自分の為に勝手に使っている事をテレビ局のインタビューの女性にそれは盗作なの

では無いのですかと何度も何度も責められると、「自分の弟子のネタ帳を見て何が悪い、自分の弟子のネタを使っているのだから盗作にはならない、俺の弟子にしてもらっている立場なのだから有り難く思え」とか、「喩え弟子達自分自分が考えたネタでも、そのネタを使って先に脚本や小説を書いて作品を完成させた人に特許権が認められるんだから盗作で無い」等と言って、`弟子達が小説や脚本を先に書く事が出来ないから悪いんだ、先に作品を書いて完成させた方に特許権があり盗作にはならない、と大体その様な事を大威張りして言っていたのです。

そして、`もし俺の書いた脚本や小説の真似をしたら、俺には警察に知り合いがいるから、俺の作品からネタを誰かがパクれば、そいつを警察に訴えてその人が盗作者として捕まる事になる、みたいな事を大体記憶をたどってみるとそんな事を言っていたのです。

だから私は、弟子達に弟子にしているても何も師匠として教える事もせず、弟子達から自分の弟子にしてやっている弟子料金を取り、その上、弟子達が止めてくれと何度も自分の師匠に言っているのにその弟子達が大切に考えておいたネタを勝手に使って、脚本や小説を書いているのは、完全に倫理的におかしいと思い、なら私がこの大威張りしている偉い脚本家だか小説家なのかだか知らぬこいつの作品から、わざとパクって小説を書いてやろうじゃないかとそう思ったのです。何か私はそのテレビ放送を見た時、自分には、わざとこのお偉い脚本家だか直木賞、芥川賞作家のテレビ作品から話ネタをパクって小説を書いてどっかの小説大賞に出せば、この威張りこけている本当の盗作者を警察に突き出す事が出来ると何故か根拠の無い自信が湧いてきたのです。

でも、その時もう一人の私の中の人格が`本当にそんな事が出来るのか？、と、疑問に思っていたのですが、何故かその時それが絶対、私には出来るという本当に根拠の無い自信が湧いてきたのです。

でその後、私は統合失調症という病気になってしまうのですが、その統合失調症になって病院に通い始め、薬を飲む事で統合失調症の病気は時間をかければ治ると言われていたみたいで、その後ある日、本屋に行った時、ライトノベルの本が本屋にずらずと平積みされているのを見て、今時のライトノベルはどんなのが流行っているんだと私は思い、とにかく安井健太郎という方の『ラグナロク』という小説を一冊だけ買って、家に帰って読んでみたのです。

すると読み終わったあと、その小説の末巻の方に確か、ラグナロクがスニーカー大賞の受賞作であって、角川スニーカー文庫はスニーカー大賞という小説大賞の作品の投稿を募集しているみたいな広告が載っていたのです。

その為、その当時スニーカー文庫はスニーカー大賞という新人賞を創設して、作品の応募を待っているのだなと思い、正式に本屋でザ・スニーカーというスニーカー文庫の機関誌を購入してみて、その機関誌で正式に角川スニーカー文庫は、スニーカー大賞という小説大賞の募集要項の広告を載せているのだと知ったのです。

だからその当時の私は、病気で丁度、外に出て働く事が出来ないから、家で出来る何かの仕事って無いのかと思っていた時なので、その後、約半年後に、自分の家が新築されてすぐ最初は小説なんか書けるのかと思ったのですが、とにかくワープロを使ってタイトルはまだ未定の小説を書き始めてみたのです。その頃の私は病気で病気になる前の自分が思い出す事は出来ず精神的にも何かの強い力で圧迫されて、薬を飲んでいても、

精神的な苦しみと辛さは起きている時や寝ている時でもずっと途切れる事無く続き、毎日毎日が辛い地獄の様な状態でしたが、いざ小説を書き始めてみると、最初は二十行か三十行ぐらい書いて、『おお、なんか書けそうだぞ』と思い、その後また書き直して、頭に次から次に浮かんでくる言葉を取捨選択しつつ小説を何も判らないまま書いていたら、意外と私でも小説を書く事が出来て、その最初の小説を書いている時、この小説は自分が高校生の時に考えていた原案を元にした小説を書いているのだなと気づいたのです。

そしてその小説は、『風剣伝説』というタイトルにしよう決めて、その小説を書いている途中から、もう既にハード・ガンズの構想が頭に浮かんできていて、この風剣伝説を書き終わったら、ハード・ガンズを書こうとそう思ったのです。

でもその当時、認知障害や記憶障害みたいなモノがあったのですが、何故か小説は何かの神にでも取り憑かれたみたいになって書く事が出来、風剣伝説を書き終わると、少し見直しただけで、風剣伝説のワープロで印刷した原稿を部屋の台の引き出しの中に入れて保管しておき、2002年の一月中旬頃から第八回スニーカー大賞の原稿応募締め切り前の約一週間前辺りになって漸くハード・ガンズという作品を書き終え、風剣伝説とそのハード・ガンズという小説の作品を余り直しもせず、第八回スニーカー大賞に「はじめにお読みください」という一枚の紙に印刷した文章と共に親に郵便局に行ってもらい、その郵便局から郵送して送って見たのです。

するとその後、多分その私の二作品は、選考にかけられず失格になったのだと思いますが、角川スニーカー文庫の編集部の誰かが読んでくれたみたいで、多分その後、スニーカー文庫編集部の方は、選考委員の先生方やその当時にスニーカー文庫で活躍していた全ての作家陣の方々に私の作品を読ませたのかも知れませんが、そしてハード・ガンズという作品は、前記の弟子のネタ帳からネタをパクって脚本や小説を書いていたと思われる、その人（名前は忘れた）や弟子達にも読ませてみたのだと思います。

それで、その人は、私の小説を読みながら、「なあ、これパクってねーか？　パクってるよな？　やっぱりパクってんだよ！！」と怒り、私を多分盗作者だとして、警察に連絡したか何かしたか知りませんが、その弟子のネタをパクっていたその脚本家は、私を自分のテレビの脚本の話の盗作者として警察に捕まえさせようとしたのだと思われる。それで警察（警視庁）の人も私のハード・ガンズというこの小説を読んだのだと思いますが、私はこのハード・ガンズという小説作品で、わざとパクって書いて、その脚本家の言っている事と`逆説、みたいなパクリの部分も書いておいたので、その弟子からネタを盗っていたその脚本家は、『俺の考えたテレビドラマの脚本の内容を盗作している』と訴えたのかも知れませんが、でも本当は`何かの神様の神業、で、私が、わざとパクった部分は全てかどうかまでは知りませんが、多分、弟子達が考えていたネタ帳のネタが元々のオリジナルなネタだったのでしょ。だからさすがに弟子達が怒って、『本当に盗作しているのは、`お前だよ！！』として弟子達が自分のその師匠であるその脚本家の偉い方を逆に警察に訴えたのかも知れませんが。

それで、その脚本家は弟子達に訴えられて、警察に捕まり盗作と倫理法違反で、直木賞、芥川賞の受賞の称号も剥奪され、話はそれで終わったという事です。

私は別に、わざとパクリしましたが、やはり物事を間違っはき違えている人は、神様の裁きに遭うのだとそう思われます。

これが大体の要約ですが、私がこの「はじめに」で何を言いたいかというと、最初はこの作品はパブーさんで無料で公開するのは止めようかと思ったのです、もうその弟子からネタをパクって弟子達の怒りを逆に買い、警察にその脚本家の人は捕まったのだからもう私の作品の役割も終わったのだと思ったからです。だけどよく考えてみたら、やはり私のこのハード・ガンズという作品は、まだまだ他にも役割があるのだと思い直してみたのです。

確かに本当の盗作者は警察に捕まったのだから、もうそれでその人は裁かれて今更、私の書いたこのハード・ガンズという小説をパブーさんで無料公開であってもする必要は無いのかと思って・・

でも散々考えたあげく、やっぱり私のこの作品は世の中の為にも、とても重要な事が書かれている作品だと思うのです。

何が正しいかなどや何が間違っているかなどを若い人が読んで学ぶ為にも、必要なのではないのかとです。

だから、この作品を通して私は一切の金銭的利益を得るつもりはないので、やっぱりこのハード・ガンズはパブーさんで完全無料公開した方が良くそう思い直してみました。

最初は直して公開しようかと思ったのですが、あえて、わざとパクったままの状態です。余り手を加えない方が良くそう思ったのです。

私は、別にちゃんとオリジナルなモノは書こうと思えば書けるので、あえて盗作などする必要は無いのですが、私がわざと既存のドラマの話の一部を色々パクって書いて根拠の無い自信があったのは、私と本当の正しい神が繋がっているという証拠になるのです。

だから、自分の師匠に自分達のネタを勝手に使われていた弟子の立場にあった方々は、もう立派にテレビ業界で活躍していると思うので、そういった意味で、私はこのハード・ガンズという作品を全面的に改稿せずに最初に書いた近いままの状態です、パブーさんで公開発表して完全無料で誰かの読者に読んでもらえれば良いなとそう決めました。

私は決して盗作者ではありません、またついでに、その他二つの事件・事案も大体解決に導けたので、世の中に間違った考えを持つ者が今後出てこない様にするためにも、私のわざとパクった小説は必要であるとそう考え直してみました。

だから喩えそんな理由があっても、このハード・ガンズという作品はパブーさんで公開するのは駄目だとか、お前は一体何様のつもりなのだという様な批判の嵐が多く来るのなら、このハード・ガンズの公開を止めて、パブーさんからこの作品に関しては削除する事にしますが、読みたい人が多い様であれば、世の中の役に立てるためにもやはりパブーさんで無料公開しておく事に決めました。

何か問題が起きる様なら、素直に謝りますが、私の姿勢は正しいと思うでしょ？

やっぱり小説や脚本などを書く人は、世の中の手本にならなければならない作品を書くべきだとそう思うのです。

だから、誹謗中傷は受け付けません、もし何らかの訴えがある様なら、即座にこのハード・ガンズのパブーさんでの公開を取りやめにするから、皆さんには安心してもらいたい事であると思うのです。

でも、私は今まで自分の書いた小説で一切一円たりとも金という利益を得ていないのだから、自信を持って堂々とこの作品をパブーさんで完全無料公開しておきます。

まあ、この作品は「あぶない刑事」などや「その他諸々の警察モノ」などの作品、のオマージュみたいな事も書いている作品なので、その点の方面に関しては寛容に考えて赦してもらえれば良い様にそう私は感じているという事が言いたかった事なのです。

ああそれと、パプーさんの方から早くもこの「ハード・ガンズ① 特務機関E X X P」を紙の本で出版する話や Kindle で売る検討をする話のメールが来ましたが、この「ハード・ガンズ①」に限っては、どれがそのお弟子さんのネタなのか厳密には解りませんが、「神様の力によって完成した話」なので、元々盗作者に盗まれていたそのお弟子さんのネタを使って書かれている筈ですから、元ネタはそのお弟子さんのモノなので、私が勝手にこのハード・ガンズ①を有料で売ることが出来ない話なので、パプーさんで無料公開しておく分には、弟子達からネタをパクっていた盗作者を捕まえることが出来た小説としてそのお弟子さんのネタを使ってこの小説を公開しておく分にはギリギリ証拠を残しておくためにセーフだと思うので、有料化の話には応じられないとしてお断りするしかありません。元々お弟子さんのネタが使われているのだから、そのネタはお弟子さんのネタなので、私がこの小説を有料化してはならないと思うのです。だから私にはこのハード・ガンズ①を有料化する考えは毛頭ありません、パプーさんがせっかくそんなメールをくれたのは有り難いですが、お弟子さんの許可を取らない限り有料化できないので、無料公開しておく分には倫理的観点からしてギリギリセーフだと思うので、そんな事情をわかった上で、パプーさんで無料公開する方向で、私自身、倫理的観点からしてそうしておくべき事だとそう思うのです。「お弟子さん達の考えたネタはお弟子さん達のモノ」です、だから本当の盗作者を捕まえることが出来た「証拠の小説」としてこの本を無料公開しておく分には良いと思いますが、私はこのハード・ガンズ①で金を取る気は一切ありませんから、本当の盗作者を捕まえることが出来た証拠の本として、パプーさんで無料公開しておく分には大丈夫だと思うので、私自身の金銭的利益は一切得るつもりはないことだとそうしておきます。だからそれを良くご理解して頂きたいです、私はこのハード・ガンズ①で金を取る気は一切無いので、もし、もしも二冊目が早く書けた場合においた時にだけは、一応二冊目のアイデアは考えてありますから、もう他人のネタを使うことはしませんから、その場合は二冊目は有料化をする考えは無いことは無いとだけそう申しておくことにしておきます。どうぞより良いご理解をして頂くことを私はそう願ってここにそれを詳しく明記しておくことにしておきます。

私は病気で働けないので金が無いと未婚だし自分の子もいないので、後々困るのですが、どうにか病気でも家族の助けを受けて死ぬ気で生きていくことに決めていますから、それはもう仕方の無いことだとそう諦めて考えていることだとそう思っています。

拝々、私の作品を読んで下さる、皆様方へ・・・

2020年9月下旬某日・書記

前頭文

前頭文

大都会にわだかまる凶悪犯罪、それは都市の闇の部分映しだす鏡だ。

年々増加の一途をたどるそれらの犯罪は、警察の屈指の努力も虚しくその暗躍は絶えない。

誘拐、強盗、密売、裏取引、テロなどの、様々な事件の裏でその顔が見え隠れする犯罪者たちの素顔は狡猾である。

特務機関E X X P、別名《ハード・ガン》と呼ばれる都市特殊機構隊は、その闇の犯罪を撲滅するために組織されたエリート集団だ。

警察の上部組織として機能するその組織の役割は、急増する様々な凶悪犯罪を取り締まる為に結成された。

二〇〇五年に試験的に運営が施行され、二〇一五年の最近になって正式に特務機関として機能するようになり、その活躍が期待されている。

十三年前、未曾有の大震災で壊滅した東京は荒廃し、見るも無惨な裸体をそこに晒していた。

震災のおかげで治安は悪化し、都市は犯罪者の巣窟と化して久しい。

警察は銃武装犯罪に対して無力化、凶悪犯罪は流行、それを受けて特務機関の設営が望まれたのはごく最近のことであった。

彼ら《ハード・ガン》は、警察では合法化されていない、様々な特務任務を請け負いそれを遂行する。

潜入捜査や諜報活動、組織密売捜査や闇取引の摘発、要人警護に都市の治安防止活動と、その任務は様々だ。

それら全ては、政府からの特権を預かり遂行される任務であるが、彼らハード・ガンの面々は、その特権を活かして完全武装化された集団でもある。

その組織の規模はまだ小さいが、年々その規模は拡大し、今現在、約四〇〇人の特務隊員がその職務に就いている。それは治安が悪化して犯罪が蔓延する東京では、まだ微々たる数の総員数であったが、それは致し方ない。

しかし、警察と連携して行われる彼らの活躍は、今後の期待を裏切ることはないだろう。

巷では犯罪が増加し、年々その発生率は上がってきている。

その事態を打開できるのは、警察にはない機動性にすぐれた、特務機関の双肩にかかっているといたっても過言ではなかった。

政府要人もその動向を固唾を飲んで見守る中、彼らのすみやかな対応が望まれる。
特務機関E X X P、彼ら《ハード・ガン》に課せられた任務は、都市の明るい未来を
築く新しい礎となるからだ。

プロローグ

プロローグ

暗やみの中に響く爆音、高崎ナオは、E X X P特務マシン、オートバイクのエグゾーストノーツを全開にする。目の前は直線道路、何も阻むものはない。ヘッドライトに照らしだされる路面を見据えながら、オートバイクにまたがり街を疾走する。排気量二千ccのモンスターマシンを駆る彼女は、今、フルフェイス内蔵のイヤーマイクから聞こえてくる声に、耳を傾けていた。

『いい、聞こえるナオ？ 都内、第七セクタ十八番街で強盗事件発生よ！ 場所は、コンビニエンス・ストア、警察や同僚の特務隊員も今そこに向かっているわ！ だからあなたも、すぐ急行して。現在地から近いんだからすぐに行けるでしょ・・・』

イヤーマイクから紡ぎだされてくるその声は、同僚の、二階堂ゆかりからのものだった。

「判ったわ、すぐ行く、そう急かさないで・・・」

ナオは、苛立った声を張り上げながら、イヤーマイクに向かってそう強くつぶやく。

そして、その通話が終わらぬよりも早く、オートバイクの車体を傾けると、目の前の道路を左折していた。

『ああ、それと追伸。くれぐれも言うておくけど、また変な問題は起こさないでね。でないと、また課長に大目玉よ！ その事はよろしく・・・』

その言葉を最後に、通話は「ピッ」という電子音を残して、途切れていた。

「わかってるって・・・」

彼女は、不敵な笑みを浮かべて苦笑いすると、一人そう呟いていた。

大震災がさって、復興した東京は、世界屈指の犯罪都市に変貌していた。

震災によって、壊滅的な打撃を受けた都市機能も回復され、今では東京の街全体が真新しい街並みをそこに再現し、今現在に至っている。

都内では、新しい幹線道路が無数にでき、そこを車が走っている。

街も、新しく構築されたのが大部分で、主要な場所以外、昔の面影を残す場は多少少なくなりつつあった。

公園では人が安らぎ、映画館では娯楽を堪能し、デパートでショッピングやランチをする光景は昔と何ら変わらない。

しかしその裏では、凶悪犯罪が蔓延し、その発生件数を鰻上りにあげ、年々の記録を大幅に更新する事態が日常茶飯事となっているのは、子供でも知っている事実であった。

表面上は、健やかな日々が続く都内でも、その裏では犯罪者が闊歩する。
そんな光景は、健全な社会であるとは、とても言えない事態だ。
街の裏通りでは、ごろつきまがいの若者がたむろし、ゲーセンには不良やチーマーが
入り浸る。

酒場では、殴り合いの喧嘩、路上では泥酔者が警官にからんで、奇声を発する。

そんな中で、人々は疲れ、その精神は蝕まれていく。

異常な精神者が今の時代増え続けているのは、そういった世相も反映しているのは確
かだろう。だが、時刻は少し遡って、ここに、そういった精神異常者であるのかどうかと
いった事は解らないが、麻布の街の一角に店を構えるコンビニエンス・ストアでは、い
ま先程からその精神が錯乱しているとかとても思えない無法の輩が、一人、その手に
銃を構えて雄叫びをあげていた。

「おい！ 金を出せって言ってんだ、コノヤロー！ 俺に逆らうのか！？」

髪は茶ばつ、顎にちょび髭を生やした痩せ形の男が、淀んだ虚ろな目をしばたかせな
がら、一人の女性を脅している。

脅されている女性———彼女は、縦縞の服と帽子をかぶった、コンビニエンス・ス
トアの店員だ。

眼がくりりとした、笑顔の似合うアルバイトの学生だったが、今は、その笑顔も見ら
れず、硬く青ざめたその顔が目の前で銃を振りかざす男に煽られて、小刻みに引き攣っ
ていた。

その横では、もう一人のアルバイト要員が、ぶるぶると震えて怯えている。

それは、気の弱そうな、青白い顔のでっぷりとした男性であった。

彼もどうやら、十七八くらいの学生のように、胸に括り付けられたネームプレートに
は、`室田、という文字が垣間見えていた。

店内には、銃を構える男と、二人の店員以外だれも居ない。

幸いにも、他に客はおらず、店はガラんとした静けさに包まれていた。

「それで、いくら欲しいのですか・・・？」

そんな中、恐怖を押し殺した声で、女性店員が要求金額を問いただす。

だが、

「おまえは馬鹿か、有り金全部だ早くしろ！！」

そう言うと、茶ばつの男は、店の天上に向けて銃を乱射していた。

彼が手にしているのは、マシンガンだ。

それが `バリバリバリ、という音を立てて、今、コンビニエンス・ストア内の天上を、
無惨にも破壊している。

その影響で、店内の蛍光灯が割れ、破片が床に降り注ぎ飛び散るが、男は、そんな事
はおかまいなしに銃を乱射する。

それを見て、二人の店員は、更に顔を強ばらせ耳を塞いでいる。

下手に逆らえば、何をされるか分からない。

彼は、強盗なのだ。

しかも、それは、客のいないコンビニエンス・ストアを狙った、犯行である。

その為、二人は、この場を穏便に済ませるため、その銃を振りかざす男の要求を受け

入れ、素直にレジから壱万円札を数枚掴み取ると、それを震える手で差し出していた。

しかしその頃、店の裏側では、このコンビニエンス・ストアの店主が、受話器を片手に110番通報をしている真っ最中であった。

この店の店主は、四十代くらいの男性で、彼はいま、店の奥で店内の様子をのぞき見ながら警察に事情を説明している。

そして、『分かりました、すぐ警察の者をそちらに急行させます・・・』という、所轄の通信担当係の言葉を最後に、その受話器を置き、恐る恐る店内に足を踏み入れていた。

店の店内では、今、女性のアルバイト学生が、男に脅されて、店内に常備されている買い物カゴに、大量のお菓子類とかなどを詰め込んでいた。

銃を持つ男は、先程、金を受け取ると、それをジャンパーのポケットへと無造作につっこみ、その後、なにを思ったか、買い物カゴにお菓子を入れろと店員に要求を出していたのだ。

それを受けて店員は、おかしな顔をしたが、今チョコバーやスナック菓子、それにチューイング・ガム等を適当に選び、買い物カゴに投げ入れているところだ。

そして、一通り、カゴがいっぱいになるまで詰めおわると、それを男にさしだして軽くお辞儀をしていた。

男はそれを受け取ると、満揚げにうなずき、その場に座り込む。

そして、買い物カゴから、一つのお菓子を選び手に取ると、そのまま真新しい包装を破り、それをムシャムシャと食べだしている様子だった。

「あのう、あなたは強盗ですよね？」

そこへ、店の奥から現れた店主が、男の挙動を怪訝に思い、声をかける。

「そうだ俺は強盗だ、なにか文句があるか！」

すると、そう言って男は、また手元のお菓子にかぶりつく。

「でもあなたは、逃げないのですか？ 強盗なんでしょう？」

だが、店の店主はその時、バカな質問をしたと思っていた。

普通、強盗なら、金を奪えばすぐ逃げ出すと思っていた。

しかし、この男は、どうやらその気がないらしい。

男は、手元のお菓子をあつという間にたいらげると、今度は、チョコバーを手にとってそれにもむしゃぶりつく。

そして、おもむろに立ちだすと、今度は、店内に置かれている週刊誌や漫画雑誌、エロ本などをつぎつぎと手に取り、何事もないように立ち読みを始めていた。

そうして、十五分くらいが経過しただろうか？

店の外では、何やら、慌ただしさが増している様子だった。

警官だ。

店の表通りには、サイレンをけたたましく鳴らしたパトカーやワゴン車が数台停車すると、そこから武装した警官隊が姿を現していた。

そして、警官隊は、外からコンビニエンスの店内を確認すると、ずらりと横に並ぶ形で、アルミ合金製の盾を前面に押し出し整列していた。

「警部、どうやら、男が銃を持って店内に立て籠もっている模様です。どういたしますか?!」

紺色の制服を着た一人の警官が、長い灰色のロングコートを羽織った一人の私服警官に向かって、状況報告をする。

「判った・・・」

すると、その報告を受けたその私服警官は、それに頷くと、片手にハンドスピーカーを手に取り、警官隊の前に進みでておもむろに口を開く。

『そこに立て籠もっている君、店は我々警察が包囲した、武器を捨てて出てきなさい!!』

どうやら、店に居る銃を持った男に、説得を試みるようだ。

『私の声が聞こえているかね? 聞こえているのなら、返事をしてくれ給え・・・』

だがその頃、店の中では、男がまるで狂乱したかのように、三人の店員に対して、罵声を浴びせていた。

「てめえら、警察に通報しやがったな、ただじゃおかねえぞ!!」

そう言って男は、また手持ちのマシンガンを、天上に向けて乱射する。

それを見て、店主と女性店員、男性店員は、顔を青ざめさせぶるぶると震えていた。

そこへ、

『銃を発砲している君、今すぐその銃を捨てて我々に投降しなさい。でないと、君の罪は重くなるよ!』

そう言って私服警官は、ハンドスピーカーを片手に、声を張り上げる。

だが、

「うるせーんだよ、てめえら! 黙りやがれ!!」

ババババババ・・・

男は、店の中から外に向かってマシンガンを乱射すると、店のウインドウを粉々に破壊し、絶叫を張り上げていた。

しかし、それを見て、警官隊は怯みを見せる。

相手は武器を持っている、それもマシンガンだ。

それを、どこで手に入れたかは判らないが、相手は明らかに錯乱している。

だからこれには、さすがの警察も手が出せず、職務も忘れて、おろおろとすることしか他に方法がなかった。

「警部、どうしますか? 相手は、マシンガンを持っています。このままでは、怪我人がでるかも知れません。こちら拳銃で応戦しますか?」

一人の警官が、私服警官に、確認の旨を入れる。

だが、

「いや、しょうがない、ここは特務機関の到着を待とう」

そう言って警部は、言葉を濁す。

それから、五分が経過した。

するとそこへ、一台のバイクがけたたましい爆音を響かせながら、警官隊のいる店の表通りの路肩へ侵入し減速してきた。そしてパトカーの停めてある近くに停車すると、そこから一人の女性が、バイクから身を躍らせ降りてくる。

その女性は、左肩と背中に特務機関E X X Pの鷹のロゴが縫い付けられた白いジャン

パーを身につけ、靴はショートブーツ、太股の半ばあたりまでの丈しかないぴっちりとした皮製のミニスカートををはき、背中まで達するロングヘアーをなびかせながら警官隊の方へ近付いてくる。

そして、その手には軍用の特殊マシンガンMPR-32を持ち、その場の責任者である先程の私服警官の目の前にまで来ると、その歩みをびたりと止め、腰に左手を当てて仁王立ちしていた。だからその時、私服警官は、突然、何の前触れもなく現れたその女性を目の前に一瞥すると、一瞬、気圧された様にして身を退き緊張する。

そして、次には、恐る恐るその女性の顔を見据えて、確かめるように言葉を発していた。

「君・・・君は、特務機関の者かい？」

すると、

「そうよ、私は《ハード・ガン》特務一課、第二班の高崎ナオ。それより、今の現状はどうなっているの？ その事を手短かに話してくれない・・・」

高崎ナオと名乗ったその女性は、現場の責任者である私服警官に詰め寄ると、有無を言わさぬ口調で、現況を聞く。

それを受けると、その私服警官は、目の前の女性に気圧されつつも、今の現況を強要されたかのようにそそくさと語っていた。

「実はね、先程からこの店の店内に、銃を持った男が一人立て籠もっているんだ。警察への通報によると、その男は、ここのコンビニエンス・ストアに強盗に入ったらしいんだが、つい今しがた投降を呼び掛けたら、銃を乱射してね、さすがに我々も手がだせず、君達、特務機関の到着を待っていたんだ」

私服警官は、そこまで言うと、口をつぐむ。

そして、ナオの反応を、怪訝な表情をその顔に浮かべて、覗ってきていた。

「そう？」

それを受けると、ナオは、一言そう言って、ニヤッとその顔に不敵な笑いを浮かべる。

そして、

「ちょっと、それ貸して」

ナオは、私服警官が手にしていた、ハンドスピーカーをひったくっていた。

「ああ、駄目だよ君。それは、俺の商売道具なんだ・・・」

ハンドスピーカーを奪われて、慌てて取り返そうとする私服警官、

しかし、その声を見殺しにして、ナオはツカツカと警官隊の前に進み出ると、そのハンドスピーカーを口元に運び、拡声のボリュームを最大にして叫んでいた。

『そこにいる男、聞きなさい！ 私は特務機関の高崎ナオよ。今すぐ銃を捨てて出てきなさい、そうすれば手荒な真似はしなくてすむわ。言うことを聞かないと、こちらから踏み込むわよ・・・』

その声を受けて、店内に閉じこもっていた男は、外の様子を窺うと、店の女性店員に銃を突き付けて、彼女を盾にし、ストアの入り口付近にまで出てきて外に顔を出していた。

するとその直後、彼は、怒声を張り上げて、次のような言葉を叫んでいる。

「うるせーって言ってんだよテメー！！ こっちには人質がいるんだ、やれるもんならやってみろ！ 特務機関だろうがなんだろうが恐くねーぜ！」

「さあ、観念しなさい。手に持っているマシンガンを手放すことね。でないと、あなたの頭が吹き飛ぶわよ！」

「何を小癪な！ 俺が、女ごときに、負けるわけねーだろ！」

そう言うと、男は、咄嗟的に立ち上がって、銃を突き付けるナオに躍り掛かっていた。

男は、手持ちのマシンガンを撃たずに、それを鈍器のように振りかぶると、ナオに有無を言わず殴りかかる。

ドカッ・・・

しかし、それは、一瞬の出来事だ。

ナオに躍り掛かってきた男が、マシンガンを手放し、それを床に落とすと、次の瞬間、身を屈めてそのまま両手で股間を押さえて飛び跳ねる。

「ちきしょう！！ よくもテメー、俺の大事な所をつぶしやがったな！」

ナオの一蹴りは、狙い違わず、男のキン○マをとらえていた。

さすがにその一蹴りが命中した瞬間「キン」という音はしなかったが、どうやら男は、男性特有の痛みに悶絶し、目を白黒させている様子だった。

だが、ナオはそれでも飽き足らず、股間を押さえて飛び跳ねている男に、更に次の一撃をお見舞いする。

それは、強烈な、回し蹴りであった。

彼女は、体をひねって無造作に反転させると、振り向きざまに男の側頭部へそのしなやかな長い脚を滑らせる。

ベキ・・・

嫌に鈍い音がして、男が横に吹っ飛ぶと、そのまま彼は商品棚に激突し、その棚に陳列されていたいわしの缶詰やレトルトカレーとともに床へと横転して、そのまま白目を剥いていた。

それでこの強盗立て籠もり事件は、解決したのである。

その後男は、駆け付けてきた警察官に、取り押さえられていた。

というよりも、そのまま気を失って、近くの病院へ搬送されたのだった。

ナオの一蹴りは、完全に錯乱していた男を、沈黙させていた。

しかし、男が警察に逮捕され、彼が手にしていたマシンガンが押収されても、その後の店の事後処理は惨憺たるものだった。

ナオの無差別的なマシンガンの乱射によって、店の中は壊滅し、その床には粉碎された商品の山で埋めつくされ足の踏み場もないほどに荒れ果てていた。

これでは店の受けた損害は、相当なものになるだろう。

この店の店主も、それを見ると、頭を抱えて苦悶の表情を浮かべている様子だ。

だが、そんな中ナオは、そのコンビニエンス・ストアの表駐車場に現れると、両手を組んでそれを上にあげ、体をグーンとストレッチする様に大きな背伸びをしていた。

彼女は、一仕事を終えてご機嫌な様子で、鼻唄を歌っている。

コンビニエンス・ストアの表通りには、先程から応援に駆け付けた新たな警察官や、連絡によって出動要請を受けた、特務機関の車輛が少々遅ればせながら到着を見せている様だった。

それに前後して、事件を聞き付けて集まった大勢の野次馬や、テレビニュースの取材陣やらも姿を見せ、警察が張った現場保持の為の黄色いテープの外側から事件現場の様子に興味津々の態で覗き込んでいる。

遅れて到着した特務機関の隊員たちは、手にライフルやマシンガンなどを装備して現れていたが、ナオ一人の活躍で事件は迅速に解決したことを知ると、少々気抜けしたように引き上げの態勢を見せていた。

「あのちょっと、あなた、特務機関の高崎ナオさんですよ？」

そんな折り、ナオは、一人の色の白い厚化粧をした女報道局員に呼び止められて、その踵を返していた。

「ええ、そうよ。何か用？」

ナオは、ひどくぶっきら棒にそう答えると、その女報道局員に目を向ける。
「聞いたところによりますと、あなたが、この強盗立て籠もり事件を解決したということですが、それは本当のことなのですね？」

「ええ、そう云うことになるわね」

ナオは不機嫌に、そう答える。

「でもあなたは、人質が居るのに銃を乱射して店内に乗り込んだということですが、それは警察組織における人命最優先の絶対原則を極端に逸脱した行為ではないのですか？」

女報道局員は、まるでナオを非難するような口調でそう言うと、疑問気なまなざしを向けてきていた。

「そんな原則ってあったかしら？」

ナオは、それを受けると、そ知らぬ顔をしてそっぽを向く。

しかし、

「あなた『そんな原則があったかしら？』って、それはないでしょう。仮にもあなたは、特務機関に所属する国家公務員でしょう。そのあなたが、そんな事言うなんて、おかしいとは思いませんか？」

「……………」

ナオは、それを受けて黙り込む。

だが、それは女報道局員の言葉につまんで、口籠もったわけではなかった。

「高崎ナオさん、その点に関してあなたの意見はどうなのですか？ わたしたち報道局の者としても、その事をお伺いしたいのですが？」

「ちょっとあなた黙ってて、黙らないとその舌をちょん切るわよ！」

すると、ナオは、即座にそう言って、ぴしゃりと女報道局員の言葉をさえぎっていた。

そして、先程から賑わいを見せていた野次馬たちの方に目を向けると、その中に紛れて事件現場のコンビニエンス・ストアの方を覗き込んでいた、一人の男に注意を向ける。

その男は、古くさい汚いコートに、茶色のニット帽をかぶった、まだ若い学生風の男であった。

ナオは、その男に不審なものを感じて、その様子を覗っていると、次の瞬間その男と不用意に目が合い、数瞬の間見つめ合ってしまった。

しかしその後、男は、少しビクリと驚いたような態度を示すと、ナオからその視線を逸らし、そそくさとしてその場から身を退くように逃げ出そうとしていた。

それを見てナオは、その男を追いかけてようとする。

だが、

「ナオさん、ちょっと私たちの話を聞いてもらえますか？ あのですね？」

と言って、先程の女報道局員に呼び止められていた。

「あなた、さっきから煩いわよ！」

ベキッ！

すると、突然ナオの右フックが、女報道局員の左頬に炸裂する。

「きゃ～、きゃ～、この人、私のことを殴ったわよ。だれか警察の人を呼んで！ 国家公務員が私に暴力をふるったわ！」

殴られた女報道局員は、驚愕の目でナオを見据えると、次には甲高い金切り声のような悲鳴を発して、周囲の人垣に良く聞こえるような声でわめき散らしていた。

「うるさい！」

ベキャ・・・

しかし、今度は顔面中央、女報道局員の鼻梁にそって、ナオのストレートが炸裂する。

それで彼女は、一瞬のうちに気を失って仰向けに倒れ、そのままアスファルトの藻屑と消えていた。

そうこうしている内に、ナオが先程目を付けた若いニット帽をかぶった男は、人込みに紛れてどこへともなく姿を消してしまっていた。

『チッ！』

ナオは、軽く舌打ちする。

彼女の嗅覚からすると、先程の若い男は何やら犯罪の臭いがする。

それも奥深い、何か重要な組織だった犯罪のような・・・

陰湿で、切れ長のその目を直視したとき、ナオは直観的にそう思っていた。

しかし、逃げられてしまっは、仕方がない。

ナオは、その事をあっさり諦めると、踵を返して、自分の愛車、特務マシンRH-2000オートバイクへと向かう。

そして、その単車のシートに跨がると、キーを解放してエンジンをかけていた。

ナオは、二三度、アクセルを開いて空ぶかしをすると、クラッチを噛ませて車体を軽々と操り、まだ夜の暗やみの都内に爆音を轟かせながら消えていった。

そしてその後、その事件現場を、速やかに後にするのである。

第一章 謹慎と減俸、そして人探し

第一節

「お前は一体、何をやっているんだ！！」

煙草の煙が蔓延し、書類が山積みになった一室———ドアが開け放たれた角部屋の中で、今現在、特務機関・特務一課、本部課長、佐渡一が声に怒気を孕んだ口調でそうまくしたてると、彼の目の前でふてぶてしい態度をとり続ける一人の特務隊員に向かって、叱責の言葉がぶつけられていた。

佐渡一課長の、目の前に立っているのは、女性だ。

色は黒髪のロングヘアー、癖のないさらりとした髪質のストレートで、玲瓏とした潤んだ目に、赤く血色のいい唇、白く透けいるように澄んだくすみの色一つない健康的な肌を持ち、身長は165cm、スリーサイズは上からB84・W56・H85、雑誌のグラビアから抜け出たようなその姿態は、トップモデルすら顔負けのスレンダーなスタイルと美貌を持つとっていい。

手足には無駄な肉はなく、細くすらりとのびているが、痩せぎすではない。

だが、バランスのとれたその気の強そうな面貌は、今、不機嫌さを丸出しにして軽くしかめっ面する様に歪められ、二重だが、ほんの少し鋭く釣り上がった目が、不満げな色をたたえて頻りにしばたかっていた。

彼女は、高崎ナオ二十四歳———特務機関・特務一課、第二班に現役として所属する、ハード・ガンのメンバーだ。

しかし彼女が、何故、上司である佐渡一本部課長に、叱られているのかというと、それは警察や、報道局側から苦情の電話が相次いで殺到していたからだ。

その電話の内容は、こうだ。

まず麻布警察署、朝霧保警部から・・・

『まったく、おたくの指導方針はどうなっているのですか。人質がいるのに、銃を乱射して店内に踏み込むなんて、危険で軽率にも程があります。それに犯人は、股間をつぶされ膀胱破裂、頭部側面を骨折し、全治三週間の怪我です。これはもう、過剰行為の何ものでもないでしょう。いくら相手が銃を所持していたとはいえ、やはりやり過ぎです。過剰な暴力により犯人を捕らえるやり方は、我々警察側としても横暴として認識するしか他にいいようがありませんよ！』

また報道局・報道員、島川悦子から・・・

『冗談じゃないわよ。特務機関の面々は、暴力を誇示する無法者の集団なのかしら？』

私は二度も殴られたのよ、右フックそれにストレート。天下の国家公務員が、一般の市

民を殴るなんて、前代未聞だわ。これじゃ懲戒免職処分も免れないわよ。それに私は、鼻の軟骨を骨折してしまったんですからね。鼻曲げられて、黙ってはいられないわ。高崎ナオを電話口に出しなさい！』

それから、麻布のコンビニエンス・ストアの主人、滝泰之から・・・

『本当に困りますよ。私は会社を辞め、脱サラして今の店を始めたのですが、お宅の高崎ナオという人のおかげで、店は壊滅し、損害は目も当てられないほど酷いものです。店を一個潰してくれたんですよ。この状況をどうしてくれるのですか？ これじゃもう、店をたたむしか他に方法がありませんよ。私は弁護士を雇って、損害賠償の件を、あなたがた特務機関にふっかけますからね、その事をよろしく・・・』

苦情の電話、そのどれもが、ナオの横暴な立ち振る舞いに関する、不満と怒りの言葉で終始していた。

その電話を受けて、佐渡一本部課長は、天を見上げて神に嘆いたのは言うまでもない。前々から、ナオの横暴ぶりは、目に余るものがあった。

特務機関・特務一課、第二班に所属しているとはいえ、彼女は単独行動を好み、なかなか集団行動をとらない。それに時々、今回のような問題を起こしては、本部課長の立場を危うくさせてくれるのだ。

佐渡一も、その事に関してはほとんどまいつている様子で、今そのナオを目の前にして、きつい御灸を据えているという真っ最中であつた。

「本当にお前はもう、自分の立場をわきまえて行動しているのか？！ 仮にもお前は、特務機関という国家公務員の一人なんだぞ。それを忘れて暴走するなんて、何事だ！ 世の中にはな、やっていい事と悪い事があるんだ。その分別もつけず、闇雲に事を起こすなんていう行為は、組織の一人として失格なんだぞ！」

「しかし課長、事件はすみやかに解決したんだから、いいじゃない。あのまま警察に任せていたら、二時間経っても三時間経っても解決がつかず、次の日の朝まで長引いたかもしれないわ。それを考えると、私のとつた行動は称賛に値するのではない？」

「そういう問題じゃない。ただ迅速に対応すれば、それで万事OKというわけじゃないんだ」

そう言うと佐渡課長は、デスクの上に山積みされている書類を、バンと力強く叩く。

そして、深いため息とともに、強い落胆の色を見せていた。

その彼の態度からして、ナオにはもう、ほとんど愛想が尽き果てたという感じが覗い知れる。

「とにかくお前にはな、常識という言葉が書けているんだ。他の特務隊員を見習え、そうすればお前の横暴ぶりも、少しは良くなるだろうから・・・」

そして佐渡一課長の小言は、それからかれこれ一時間にわたって続けられていた。

その間、それを聞いているナオは、少しの反省の色も見せず、ただふてくされて臍を曲げているだけだった。

「とにかくお前の処分は、今後、上層部の連中と会議して決めるから、それまでおとなしくしている。くれぐれも言うておくが、また問題なんか起こすなよ・・・これ以上されたら、俺は幾つ首があつても足りはしないからな・・・」

その言葉を最後に、佐渡課長のナオに対するお叱りは終止していた。

ナオが課長の執務室をでて、特務一課のデスクが並ぶ一室に姿を現すと、直ぐ様一人の女性隊員が彼女の傍近くに擦り寄るように駆けよって来て、彼女に声をかけてきていた。「ナオ先輩、ナオ先輩、どうでしたか課長？ ずいぶん怒っていたでしょう？ あの分だと、また上層部に呼びだされるんじゃないですかね？」

「さあ？ 私には関係ないわ」

ナオは、ぶっきら棒に、一言そう言う。

「でも、またまたやってくれましたね、先輩。今度は、報道局員の女性を殴り倒したんでしょ？ 私、見てみたかったな～。だってその報道局員で、嫌味な辛口トークで知られる、あの島川悦子なんでしょ？」

「そうね、そんな名前だったかしら？」

ナオはまたもや、素っ気ない態度をとる。

「あ～あ、私も現場に行けば良かった。だってその島川悦子って、なにかと特務機関を目の仇にして、批判している人なんでしょう？ 特務機関は、この東京の街に必要なない機関だって・・・だからその人が、ナオ先輩の鉄拳でのびるところを、この目で見てみたかったですよ、も～」

今、話し掛けているのは、ナオにとって後輩の柏木モモだ。

彼女はデスク付きの事務処理担当員で、何かとナオに親しく接する、ちょっと頭の配線がズレた変わり者である。

顔はぽっちゃりとして可愛らしいといった印象がつよく、愛敬があるので皆からは、モーちゃん、モーちゃん、と呼ばれ親しまれている。髪は赤みがかった栗色をしており、幼稚体形のフェロモンを撒き散らす、憎めないアイドル的存在だ。

この特務機関内では、こと彼女には人気がある。

それは幼稚体形のわりには胸が大きく、ことさら特徴的なのは、いつも明るく屈託がないからかもしれない。

モモは自称、特務機関の看板娘をみんなに吹聴しているので、結構、言い寄ってくる男が、これだけで多いのだ。

そして彼女は、こよなく、りかちゃん人形、を愛する、乙女としても有名だ。自宅の自室には、その人形に関するあらゆるコレクションが、山積みになっているという。しかし、その自室に、人を誰も入れたことはない。

だが、そんな彼女が、ナオを慕っているということには訳がある。

これは、モモが勝手に言っていることではあるが、彼女の亡き姉が、ナオによく似ているということらしい。

柏木モモの姉は、三年前に病死しており、その病名は急性の白血病ということだ。

その為、姉の面影を残すナオは、彼女にとって本当の姉のような存在であった。

しかし顔は似ていても、性格はまるっきり違うということだ。

モモの姉は、優しくおしとやかな性格であったようだが、それに比べてナオは、無愛想で気が強く、そして手が早い。

もちろんそれは、男に対して手が早いということではない。

ナオは、気に食わない相手に面すると、その率直的な解決法として、鉄拳が即座に飛

ぶのだ。

そのナオの鉄拳を食らって、のされた者は数しれない。

だが、それでもモモは、ナオを慕っていた。

モモにとっては、その性格はどうあれ、ナオは親近感を覚える身内のような存在であることは間違えない。

しかし、ナオは、そのモモの気持ちを知ってか知らずか、その対応はいつも素っ気なかった。

「ところでモモ、ゆかりはどこ？」

ナオは、そんなモモに、同僚の二階堂ゆかりの所在を問いただす。

「ゆかり先輩ですか？ 彼女ならさっき、コンピュータールームへ行きましたけど、なにか用事があるのですかぁ？」

「ええ、ちょっとね」

そう言うとナオは、足早に室内をでて、コンピュータールームへ足を向ける。

「ああ、ちょっと待ってください、私も行きま〜す」

その直後、モモは間延びするような声を残すと、ステップする様にナオの後に続いて室内を出ていた。

特務機関が使用している建物は、警視庁の真ん前、目と鼻の先にある。

建物は鉄筋コンクリートの五階建てで、まだ建築されてまもなく、薄汚れた感じは見受けられない。外から建物の様子を覗くと、屋上付近の頂上には、警察の《桜の代紋》ならぬ特務機関E X X Pのマークが踊っていた。

簡略化された鷹のマークに、でかでかと《E X X P》の文字が印されてある。

それが、特務機関の隊員が持つ、身分証明カードにも刻印されている、《E X X P》の所属を表すマークであった。

そんな中、ナオとモモがめざすコンピュータールームは、その建物の三階に位置している。

そこは、数百台のコンピュータ端末がおかれている部屋で、特務機関の職務に必要不可欠な、ありとあらゆる詳細なデータファイルがモニターを通して閲覧できる場所である。

だがナオは、そこに用事があった。

彼女は、特務機関の建物内を足早に歩いて、コンピュータールームの側まで来ると、その室内の前に立ち止まり、入り口付近から中の様子を覗き込む。

するとそこで、一人の女性と目があっていた。

「あらナオ、意外と早く解放されたのね。課長カンカンだったでしょ？ でも、少しは反省したかしら？ ひどい、怒り様だったものね・・・」

ナオとモモがコンピュータールームの室内に入るなり、いきなり声を掛けてきたのは、一人の女性隊員であった。

彼女は、名を二階堂ゆかりといい、やはりナオと同様、特務機関・特務一課、第二班に所属する現役の《ハード・ガン》メンバーだ。

髪はショートカットで、目と同じ茶色味がかった様な黄褐色をしているが、体格は少

しやせ型で、なかなかスタイルはいい。しかしナオと比べると、少し見劣りするが、それでも普通の標準よりははるかにそのスタイルは目を見張っていた。

身長は、ナオと丁度同じくらい。

胸は小さめだが、形はよく、特務隊員の制服を、淡いほのかな膨らみで満たしている。ゆかりは一見すると、どこかのお嬢様のように見える。

そんな事から、モモにはよく「ゆかり嬢」と呼ばれることもある。

だが、その言い方は、本人は気にしていない様子だった。

しかし、それは兎も角、ゆかりはナオとモモが室内に入ってくると、コンピュータを操作している手を休めながら、二人の方に向き直りナオに対してさっそく詰問するかのよう話し掛けてきていた。

「ナオあのね、さっきあなたが言っていた、ニット帽をかぶった学生風の男だけど、それらしき男のファイルが五人見つかったわ。この中に、あなたが見た男はいる？」

すると彼女は、パソコンからプリントアウトしたと思われる犯罪者データファイルを手にとって、それをナオに徐に差し出してきていた。

ナオは、それを無言で受け取る。

そして彼女は、一枚、また一枚と、その手渡された犯罪者データファイルをめくって、鋭い目付きで確認を始めていた。

しかし、そのデータファイルを一通り見終わると、ナオは、ピシャッとファイルを閉じ、それをゆかりに突き返す。

そして一言、「無いわ」と、無愛想にそう言っていた。

「そう、それじゃ、別のファイルを検索してみるわね。さっき警察の方から、新しい犯罪者リストが届いたのよ。その中に、もしかしたらあるかもしれないから、ちょっと待ってて」

ゆかりは、ナオの言葉を受けると、黒いカバンをおもむろに手に取って、そこから一枚のCDを取り出し、それをコンピュータの挿入口に差し入れてセットしていた。

すると、即座にモニタの映像画面が切り替わり、『新規犯罪者リスト』の文字が浮かび上がる。

ゆかりは、マウスを巧みに操り、メニューコマンドからリスト閲覧の項目をクリックする。

そして、それが起動するまでの数秒間、じっと耐えて待っていた。

しかし先程から、ナオとゆかりが捜しているファイルとは、一体なんのファイルであるのか？

それは、ある男に関する、素性が書き記されたファイルであった。

その男とは、ナオが数時間前、あの強盗事件があった麻布のコンビニエンス・ストアの駐車場で野次馬に紛れて見かけたという、若いニット帽をかぶった学生風の男であった。

ナオは、その男を見かけたときから、彼には犯罪の臭いがするということを直観的に嗅ぎ分けていて、なんとなく気になっていたのだから、今現在、その男が犯罪者リストに顔を出しているかどうかということゆかりに調べてもらっていたのだ。

「はいはい、二人とも、熱いコーヒーが入りましたよ。冷めないうちに飲んじゃって下さい」

だがそんな折り、モモが銀色のトレーに、三つほどの紙コップを乗せて現れていた。彼女は先ほど、コーヒーを煎れてくるといって、室内を出ていっていた。そして帰ってくると、嬉しそうに、そのコーヒーをナオとゆかりに手渡していた。しかしその間、リストの検索は続いている。

ゆかりがコンピュータを操作して、次々にリストを画面に投影させると、顔写真と犯罪者の経歴や罪状を明記したファイルをつぶさに確認していく。

ナオも、モモが持ってきたコーヒーをすすりながら、じっとモニタ画面を見つめて、閲覧している様子だった。

「あっちょっと、そこで止めて」

だがその時、ナオとゆかりが百人程度のリストを閲覧し終えた頃、次の瞬間、あらわれたリストにナオは注意を奪われていた。

「ええー、どうしたんですかナオ先輩。この男に、興味があるんですか？　もしかして、この男は、ナオ先輩の好みのタイプだったりして？」

ごん・・・！

次の瞬間、モモの頭部に、銀色のトレーが見事に命中していた。

「い、痛いじゃないですか、ナオ先輩。ちょっと冗談を言ってみただけじゃないですか。それなのに、それで殴ることはないでしょ。あ～あ、コーヒーこぼしてしまいましたよ・・・」

そう言うとモモは、ハンカチで胸元辺りにこぼした、コーヒーの染みを拭いている。

しかし、

「私は冗談が嫌いな、あなたのおふざけに、付き合っではられないわ」

ナオはそう言って、半分本気で怒っていた。

彼女は、男の話題になると、極端に不機嫌になる。

要するに、男性潔癖症なのだ。

彼女は、ありとあらゆる男を、敬遠し嫌っている。

二十四の歳になっても、ナオに彼氏がいないのはその為だ。

「それで、この男に見覚えがあるの、ナオ？」

だがそんな中、ゆかりだけは二人でやりあうナオとモモをよそに、冷静に画面に映し出されている男の顔をじっと見て、ナオにそう問いたです。

「ええ、多分この男だと思う。あの時は、薄暗くてよくわからなかったけど、その男目の特徴だけはよく覚えている。陰湿で人を見下したような、悪意に満ちた目だった」

そう言うとナオも、改めてそのファイルに目を通す。

そのファイルには、こう書かれていた。

米川克彦・東都大学二年、(二十歳)

銃の密売と製造に関与。

また都内連続銃撃殺傷事件の容疑者。

現在、保釈中に逃亡して失踪、その所在はつかめていない。

このファイルは、警察が即席で作ったファイルなので、正式なものではない。

その為、詳細についての内容は、まだ書き込まれていない様子だが、これでも大体のあらましは解るだろう。

「ああ、この男そう言えば、最近、事件を起こして警察に捕まった男ですよ」

だが、モモもナオと同じように、画面上に映し出されるリストファイルを見ると、次には思い出したかのようにそう口走っていた。

「モモ、あなたこの男の事、知っているの？」

そこへ、二階堂ゆかりが、問いたです。

「ええ、何でもモデルガンを改造して実包を撃てる銃を作り、それを売り捌いて金儲けをしていたり。このファイルの文面にあるように、銃密売組織とかかかわっていたって言うことですよ。この男は、東都大の理工学部に在席していたそうですが、頭もよく無類のガンマニアで、人を実際に撃つてみたくて、何度もビルの屋上から通行人を狙って狙撃し、七人の一般市民を殺しているということです。」

それで警察におわれ、最近、逮捕されたけど、起訴拘留後に保証金を払って保釈になり、その後、姿を晦まして逃げ回っているというろくでもない奴です。それに、まだ学生ですけど《黒峰会》という闇組織と深いつながりがあり、麻薬を大学のキャンパスに持ち込んで、それも売り捌いていたという根っからのワルです」

「黒峰会？」

その言葉を聞いて、その時、ナオの目の色が変わっていた。

「モモ、確かにこの男は、黒峰会と関係があるのね！？」

「どうしたんですかぁナオ先輩、いきなり力んじやって。子供でも産まれたりして？」

バコッ・・・！！

またモモは、トレイの直撃を受けていた。

「やだなーもう、痛いじゃないですかー。そんなにぼこぼこ叩かないで下さ〜い。私それほど頭良くないんですから、これ以上、悪くなったらどうするんですか？」

「おだまり！」

ナオの一喝でモモは、きゃ〜、きゃ〜、きゃ〜と悲鳴を上げて、室内を逃げ回っていた。

その後を、ナオが追う。

それは、ほとんど遊んでいるようにしか見えなかったが、そんな光景にゆかりは口元をほころばせて、親しみのある笑みをもらしていた。

第二節

都内某所、あるアパートの一室、女性の一人暮らしの部屋にしてはひどく散らかった六畳間で、ナオはその日、今時、赤く光る電気ゴタツの中に身をすっぽりと入れ、猫のように丸まって暖を取っていた。

部屋には、コタツ以外の暖房器具はない。

その為、田舎から送られてきた絆纏を羽織り、14インチの小型テレビから流れているワイドショーを見て、ナオはかた焼きの醤油煎餅をかじっている。

テレビのワイドショーの内容は、昨日の麻布で起きた、コンビニエンス強盗の話題で持ちきりだった。ワイドショーの報道内容によると、無職の麻薬常習者、池崎健次という男が、コンビニエンスに立て籠もり、警官隊を相手に銃を乱射したということだ。

ナオにとって、それはすでに当たり前のように知っている報道内容だったが、その次の話題が問題であった。

【以下の報道内容】

『皆さん聞いてください、男はコンビニエンス・ストア内に立て籠もり人質をとりましたが、そこへ一人の女性が現れたのです。彼女は、特務機関E X X Pの隊員で特務一課・第二班に所属する女隊員でした。しかし彼女は何を思ったか、男が立て籠もっているコンビニエンス・ストアの店内に、無惨にも手持ちのマシンガンで発砲を始めたのです。彼女は、約二十秒間にわたってマシンガンを乱射すると、その後、店内に乱入、そして池崎健次という男を捕らえるのですが、彼はその隊員の暴挙により膀胱破裂、頭蓋骨骨折で全治三週間の怪我を負ったのです。それにはさすがの警察もびっくりし、人命尊重を尊ばれる今の時代には、けっしてそぐわない横暴な対応が目についたのです。

彼女はその後、取材に駆け付けた一人の報道局員にも暴力をふるい、その女性に鼻の軟骨を骨折させる怪我を負わせて、夜の都内に消えていったそうですが、はたしてこの様な横暴が許されているのでしょうか？ これは後日談になるのですが、今現在その特務隊員は一ヶ月の減俸と三日間の自宅謹慎を言い渡され、処分が決定しているということです。しかしある関係者の筋からの意見では、それでは処分が軽すぎるという意向的見解も出ているということです。

そこでですが、特務機関という組織は、一体、その事をどう受けとめているのでしょうか？ 仮にも彼らは、街の安全をはかる国家公務員です。しかしその様な立場にある者が、今回のような不祥事を起こしていいと思われるのでしょうか？ 我々取材陣も、その事が疑問であってならないのです・・・』

【報道内容・終了】

その報道には、名前こそ出はこなかったが、明らかにそれはナオの行動を非難する内容であった。一人の若い男の取材員が、昨日の強盗立て籠もりの現場に立ち、放送局のスタジオに生中継している番組であったが、ナオを非難する言葉は随所にあり、しいては特務機関全体を非難しているようにも聞こえていた。

しかしナオは、それを見ても意に介さず、まるで他人ごとのように、朝の八時半からそのワイドショーを食い入るよう見つめていた。

先程の報道内容にもあったように、今、彼女が自宅のアパートで出勤もせずコタツに身をまるめているのは、三日間の自宅謹慎を課長より言い渡されていたからであった。

その為ナオは、今朝八時に起き、これから食事をとるところである。

だが食事といっても、トースターでこんがり焼いた厚切りの食パンに、バターを塗っただけの質素な食事だ。

ナオは、いつも今日に限らず、朝は食パン一枚に熱いコーヒーを一杯飲んで、特務機関に出勤していく、それがいつもの生活のパターンなのだ。

その生活のパターンは、ナオが特務機関の隊員になってから、ずっと変わらず続けられているいわば癖といってもいい。

そんなこともあり、ナオはワイドショーの強盗事件の話題が終了すると同時に、コタツから抜け出すと、台所に立って朝食の準備に勤しむのであった。

ナオが朝食を終えると、十時を過ぎていた。

三日前からだいぶ洗濯物がたまっていたので、ナオは、その汚れ物を洗おうと立ちだそうとしたところ、そこへおもむろに電話が掛かってくる。

テュルルルルル・・・テュルルルルル・・・

「はい、高崎です。あなたはどなた？」

ナオは受話器を取ると、矢継ぎ早に問いただしていた。

『私よナオ、ゆかり。貴女のことが気になって、いま電話掛けてみたんだけど、どう？ちゃんと、自宅謹慎しているでしょうね？』

それは、同僚の二階堂ゆかりからの、ものだった。

しかし、

「あっ、そう」

そう言うとナオは、電話の受話器をガチャンと置いて、通話を切ってしまっていた。

テュルルルルル・・・テュルルルルル・・・テュルルルルル・・・

そこへまたおもむろに、電話が掛かってくる。

「はい、ナオです」

ナオは受話器を取ると、少しきつい口調で、電話口に出ていた。

『ちょっと、どうして電話をすぐに切るのよ！ 貴女のこと、心配してかけてあげたんじゃない、こっちだって忙しいのよ』

ゆかりは怒って、ナオに抗議している。

「それで用件は、何？」

『あのね、貴女どうしてそう無愛想なの？ おはようの一言ぐらい、言ってもいいんじゃないかしら？』

すると、

「・・・おはよ」

ナオは嫌々ながらも、ゆかりにおはようの挨拶をする。

『まったく、やれば出来るじゃない。もう大人なんだから、挨拶ぐらいはきちんとしなさいよね・・・』

「だから用件はなに？　用事がないのなら、切るわよ」

ナオはそう言うと、また受話器を置こうとする。

『あ～あっ、ちょっといいの？　私は、貴女に昨日の事件のことについて、報告しようと思って電話したのよ。あれから池崎健次という男の取り調べが進んで、新しい進展があったのよ。それを貴女に知らせたいと思ったんだけど、いいのその話を聞かなくて？』

・・・・・・・・・・

「・・判ったわ、話して」

ナオは、数秒間の間合いをおくと、ゆかりの話に耳を傾けていた。

ゆかりの話は、こういうものだった。

昨日のコンビニエンス強盗事件の容疑者、池崎健次という男は麻薬常習者で、事件を起こすきっかけは、その麻薬によって精神が錯乱した結果らしい。

彼は、自宅でカーテンを閉め切って、麻薬を常用する中で、日に日にどこかのコンビニエンス・ストアに入って、強盗をしてみたいという欲求をつのらせていたらしい。

そこで彼は、銃を手に入れるため、いつもヤクを買っている売人に、銃が手に入られる密売ルートがないかという事を聞いたところ、ある一人の男を紹介されて、その男から事件に使われたマシンガンを、安価に手に入れたということだった。

池崎健次の自供によると、その銃を売り付けた男は、米川克彦とって、まだ若い学生風の男だったということだ。

「米川克彦？」

『そうよナオ、貴女も知っているでしょ。昨日、あなたが現場で見たという学生風の男は、米川克彦でしょ？　昨日、犯罪者リストと一緒に調べて見付けた男よ。その男が、池崎健次に銃を売り捌ていたらしいの』

「それで？」

ナオは、その表情を一つも変えず、ゆかりに問いたです。

『それでね、その米川克彦って言う男は、保釈中に姿をくらましているって言うことだけど、警察が聞き込みして調べたところによると、まだ都内のどこかに潜伏しているって言うことらしいわ。とくに、池袋辺りの界隈にときたま出没して、やはり銃を闇で密売しているらしいの。ナオあなたは、その男を捕まえて黒峰会についての情報を聞きだしたいんでしょ？　だから、その事を、あなたの耳に入れておいたほうがいいと思って、電話してみたのよ』

そう言うとゆかりは、口をつぐんでいた。

ナオの次の反応を、待っている様子だ。

「そう判ったわ、池袋ね？」

そう言うとナオは、口元に、不敵な笑みを浮かべていた。

それは、残酷な笑いではなかったが、ひどく冷徹な笑いの一つだった。

『あのねナオ、これは課長には内緒よ。どうせあなたの事だから、一人でその男の事を探そうと思っているんですけど、この手の逃亡犯に関する捜索は警察の管轄だから、私たち特務機関は手がだせないけど、くれぐれもまた問題は起こさないでね。でないと今度は、もっと重い処分を言い渡されるかもしれないから、その事をよく念頭に置いて行動してよ』

「判ってるわ、でもありがと」

そう言うとナオは、受話器を電話機本体に戻して、通話を切っていた。

それから彼女は、思い立ったように、部屋中の電気を消していく。

といっても、テレビにコタツだけだが、彼女はその後、服をそそくさと着替え外行きの格好をしだしていた。

まず黄色い花柄のパジャマを脱いで、それをベッドの上に放り投げ、白いブラとパンツだけの格好になると、部屋のクローゼットからハイネックのセーターとインナー、丈の短いスカートを取り出す。

そして、それをおもむろに身につけると、今度は黒のストッキングをはき、ダウンコートを上から羽織り、着替えを即座に完了していた。

その後、手鏡とブラシを使って髪を梳かし、マフラーと手袋を持って、アパートの自分の部屋を後にする。

ナオが出かけた先は、結局、上野公園であった。

彼女は、電車を使って上野駅までくると、公園口の改札を通過して駅からでる。

そこから上野公園は、目と鼻の先だ。

ナオは、東京文化会館の前を通過して公園内に入ると、正門近くにある大噴水の近くまで足を運んで、そこに腰掛けていた。

今現在、時計の針は、十一時五十分をさしている。

約束の時間は、過ぎていない。

ナオは、腕時計を見ながらその事を確認すると、噴水近くに降り立っている鳩の群れを観察して、時間がすぎるのを待っていた。

彼女がここまで足を運んだ理由は、ある男に会うためだ。

永田慶一、彼は、闇の情報を売買する情報屋だ。

その男と、ここで会う、約束を取り付けている。

昨日、ゆかりとモモの二人と一緒に検索した犯罪者リストに、黒峰会という裏組織とつながりのあった、米川克彦という男のファイルがあった。

ナオは、その男の所在を突きとめるために、昨日のうちに、電話で情報屋に対し情報提供を依頼していたのだ。

その情報屋の永田慶一という男は、数々の犯罪者の裏事情に詳しく、たいいていの事なら何でも知っている、情報通としてその名を知られている。

もちろん名が知れているといっても、それは裏社会においての事情だが、ナオは、彼の本名までは知らない。

永田慶一という名は偽名であり、その男が裏社会で情報屋として商売をしていくには、偽名を使ったほうが、なにかと都合がいいからであるということだ。

しかし、ナオにとって、その男の本名はどうでもいいことであった。

ただ欲しい情報が得られれば、その男が一体何者で、他にどんな商売を手懸けているかなんて、気にする価値もない。

ナオの推測によると、その男は、情報屋以外にも、あくどい商売を手懸けていると見

ている。

それも、法にギリギリ触れるようなことだ。

だがナオは、警察ではないので、その事をあえて不問にしている。

そういった一個人的、ちっさな不法行為を摘発するのは、特務機関の仕事ではないからなのだ。

そうこうしている内に、その永田慶一という男が、ナオの前に姿を現していた。

時計の針は十二時半をさしている、時間ぴったりだ。

彼は、黄土色のコートを羽織り、頭にハンティング帽をかぶっている。

歳は四十過ぎのように見えるが、辛辣な目付きと、目尻の皺が特徴的だった。

「やあ、ナオちゃん、久しぶりだね・・・」

男は、気やすい態度でナオに話し掛けると、靴を地面のアスファルトにすり付ける様にして、近付いてきていた。

そして、頻りに人目を気にしている。

「ここじゃなんだから、まあ、歩きながら話そうか？」

そう言うと男は、ナオを引き連れて歩きだす。

「それで、情報はどうなの？」

歩きながらナオは、その永田慶一という男に、さっそく問いただす。

「まあまあ、そう焦らないでくれ。情報は提供するけど、でも高いよ。米川克彦って言う男は、今、警察も血眼になって捜している男だ、それを考えると五万はかたいね」

「一万にして・・・」

ナオは即座にそう言うと、鋭い視線をおくって、情報屋の男を睨み付ける。

「参ったな、君にそういう目で見られると俺も困るよ。でもナオちゃんは綺麗だから、しょうがないけど、一万にまけておくか・・・」

そう言うと永田は、歩きながら手を出して、金の催促をしていた。

ナオは、コートのポケットから一万円札を取り出すと、それをクシャクシャのまま、永田に手渡す。

財布から取り出さず、あらかじめコートのポケットに、一万円札を入れて用意していたとなると、始めからナオはそれだけしか払う気が無かったようだ。

ナオは、抜け目がない。

しかし永田は、その万札を受け取ると、至極、嬉しそうに目を細めて、お札のすかしの部分を確認している。

偽札かどうか判断しているようだ。

どうやら、永田も抜け目がない。

彼は、手触りや、札の角に偽造防止のホログラフのような光沢のある印字箇所を確認すると、納得したかのように、それを無造作にポケットへとしまっていた。

そして脇の下に挟んでいた、茶色の封筒をナオに差し出し、おもむろに手渡す。

「その中には、米川克彦と連んでいる飯田正紀っていう男の、住所と電話番号、それに地図が描いてある書類が入っているんだ。その男に、米川の居場所を聞けば、一発で分かると思うから、行ってみるといいよ」

「ちょっと待って、私が頼んだのは飯田正紀って男の事じゃないわ。米川克彦の居場所

が、どこか聞いたのよ」

「それがねー、米川って男は相当用心深い奴でね、頻繁に居場所を変えているらしいんだ。だから、さすがの俺でも、その所在までは突き止められなくてね。でも、その飯田正紀を捕まえて、はかせれば、きっとその米川って奴の居場所が分かるだろうから、それで勘弁してくれよ」

「そう、でもその飯田正紀って男は、米川の所在を本当に知っているの？ がせネタだったら、ただじゃおかないわよ！」

ナオはそう言うと、また眼光鋭く永田を睨んでいた。

「それは間違いないさ、俺を誰だと思っているんだい？ 人からは、赤いハイエナと呼ばれているんだぜ。情報は、信憑性のあるしっかりとしたものさ。俺は、がせネタは、客に売り付けたりしないから、安心してくれよ」

永田は、それだけ言うと「じゃあ、また」といって、その場から立ち去ろうとしていた。

ナオは、立ち止まって、それを見送っている。

彼は、上野動物園の入場口付近から南に曲がると、そのまま不忍の池方面に向かって姿を消していた。

それを確認すると、ナオは、その場で封筒の封をきり、中の書類をだして目を通していった。

そこには、永田が言ったように、飯田正紀という男の顔写真一枚と、ご丁寧にワープロかパソコンかなにかで印字した、住所と電話番号、それに生年月日と年齢が、つぶさに書き記されてあった。

そしておまけに、一枚の地図が二つ折りになった形で、添えられている。

地図には、赤いペンで丸印が記されており、どうやらそこが飯田正紀という男が住んでいるアパートらしかった。

ナオは、一通り書類に目を通すと、おもむろに顔をあげ、書類を封筒にしまい歩きだしていた。そしてまた、上野駅方面へと足を向け、人々の雑踏のなかへ消えて行くのである。

第三節

ところ変わってここは葛飾区、亀有にある飯田正紀のアパート前、

この辺は、都心から離れていたこともあり、十三年前の大震災により、たいした被害を受けることもなく、その街並みは昔ながらのたたずまいを残した場所であった。

ナオは、永田から得た情報をもとに、飯田正紀という男のアパートを訪れていた。

彼は、パチンコで生計をたてているらしく、午前十時と午後五時には、たいてい近くのパチンコ屋に入り浸っているということだ。

それ以外の時間は、女と遊ぶか、アパートの自室にこもって、何もせずに遊び惚けているということだ。

コンコン、コンコン

ナオは、その飯田のアパートの部屋の扉の前に立つと、呼び鈴も鳴らさずにノックして、在宅かどうかの確認をしていた。

すると、しばらくして、扉越しの奥から玄関先に、足音が聞こえてくる。

そして、部屋の扉が開いたかと思うと、一人の女性がぬっと顔を出していた。

「あなた誰？」

部屋の中から、玄関口に現れたその女は、不機嫌そうにそう言うと、ナオの顔を見て怪訝な表情を浮かべていた。

「私はナオ、この部屋に住む飯田正紀って男に会いたいので、出してくれる」

「正紀に？」

そう言うと女は、不審げな顔をしたが、不承不承、奥に声をかけて、正紀という男を玄関先に呼びだしていた。

「正紀、あなたにお客さんよー。ちょっとここまで来て・・・」

どうやら、男は在宅の様子だ。

「一体誰だよ、お客さんて・・・？」

そうぶつぶつ言いながら、部屋の奥から飯田正紀という男が顔を出す。

そして、ナオの顔を見るなり、胡乱気な表情で問いただしていた。

「あんた誰・・・？」と、

アパートから少し離れた小さな公園で、飯田正紀は、今、水の飲み場の近くの薄汚れたベンチに腰を下ろし、目の前に立っているすらりとしたスタイルの女性に、渋い表情を浮かべていた。この公園には、砂場やブランコ、それにジャングルジムやすべり台といった遊具しかない。

しかしこの時間帯、幼稚園から帰った近くに住む子供たちが、母親同伴で、遊びに来ている光景が目についていた。

そんな中で、ナオは、有無を言わせぬ口調ながら、率直に話の本題を切り出していた。「米川克彦という男は、今どこにいるの？ あなた、その男の居場所を知っているでしょ？ 下手な隠し事せずに、答えてもらいたいわ・・・」

「あんたサツなのか？ それを聞いて、どうするんだ？」

飯田正紀は、そんなナオの態度に、反発しながら問いただす。

「いいえ、私は警察じゃないわ。でも米川って男の所在を知りたいの。あなたなら、その男の居場所を知っているはずよ。答えないと、ただじゃ済まないわよ」

「しらねーな、俺は探偵じゃねーから、聞いても無駄だぜ！」

「そう？ それなら、あなたがその米川って男と連んで、闇で麻薬の売買を手懸けているということを、警察にたれこむわよ。それでもいいの？」

この情報は、先程の永田慶一からもらった書類に、つぶさに明記されていた、飯田正

紀の裏の顔であった。

普段はパチンコをしてぶらぶらしている男だが、米川克彦と出会って、彼は麻薬の売買に手を染めることとなり、闇市でそれをさばいているのである。

「おい、ちょっと待ってくれよ。そんなことされると俺は困るんだ。俺はもうすぐ結婚して、所帯を持つと思っているんだ。それなのに、そんなことされたら、務所に入るしかないじゃないか!？」

それを聞いて、飯田は焦る。

ナオの、本気の有無を言わせぬ言葉に、少々、面食らっている様子でもあった。

「それが嫌だったら、とぼけないで、米川の居所をはきなさい。そしたら、あなたが米川と連んで、麻薬の売買に手を染めているということは、不問にしてあげるわ」

「・・・・・・・・」

飯田は、その言葉を受けて、黙り込んでしまう。

話そうか話すまいか、躊躇しているようにも覗えていた。

「判ったよ、話せばいいんだろ。でも、これは俺が話したって事は、内緒にしてくれよな。そうじゃないと、俺の身が危うくなるからよ～」

「いいわ、でも話すんならさっさとして、私は気が短いの」

それを受けると、飯田は、渋々と米川克彦の所在を語りだしていた。

彼が言うには、こういうことだ。

米川克彦には、五人の恋人がいるという。

それは皆、大学やそのサークル活動、合コン等で知り合い、友人から発展した仲であるということだが、その五人の女の家をてんと渡り歩いて、身を隠しているということだった。

一人は早水真理・京葉大三年。一人は池沢京子・東都大二年。一人は長洲恵美・フリーター。一人は溝口洋子・OL。そして最後に福地咲子・フリーター。この五人の女性と深い関係にあり、米川は、匿われているということだった。

もちろんこの女たち五人に言えることは、横のつながり、つまり女同士五人の交友関係はなく、赤の他人という事だ。

彼女等は、米川がよもや、五人の女と異性関係を持っているということは、知らないという。

はっきり言ってしまうえば、米川にいいように利用されているといっても、言いすぎではないのだ。

飯田の話では、米川は其中でとくに溝口洋子というOLに、御注心であるという事だが、彼女のアパートには、頻繁に顔を出しているということだ。

ちなみに米川の女、五人に共通する点は、みな都内のアパートに、一人暮らしをしているという点だった。

ナオは、飯田から五人の女の住所を聞くと、それを手持ちのメモ帳に書き込んでいた。

そして一通り書き終わると、飯田の顔を睨んで一言いう。

「この情報に、間違えはないでしょうね？　嘘を言っているんだったら、後で痛い目にあうわよ・・・」

「そんなことねーよ、俺は正直に話したんだ。だから、サツにたれ込むのだけは、勘弁し

てくれよな」

飯田は、苦い顔をして、そう言っていた。

「ところであんた、一体、何者なんだ。サツじゃねえなら、米川の新しいこれか？」

そう言うと飯田は、右の小指を立ててナオの目の前に突き付ける。

「さあね、あなたの知ったことじゃないわ。余計な詮索はせずに、もう用はないから早く家に帰って、さっきの女といちゃついてなさい。くれぐれも米川には、私がここへ来たって事は内緒にしておいてよ」

ナオは、そう言うと、もう用なしとばかりに踵を返して、その場を立ち去ろうとしていた。

しかしそこへ、飯田が声をかける。

「あんた何者かはしらねーけど、米川って男には気を付けたほうがいいぜ。あいつは頭がいかれている、何をするか解らない奴だ。俺もあいつとは近々、縁を切ろうと思っていたんだ。だから不用意に近付かない方がいいぜ。あんた綺麗だから、米川の女にだけは決してならない方がいい。遊ばれるだけだからね・・・」

「そう？ その忠告、肝に銘じておくわ。でも大丈夫よ、わたし男嫌いだから・・・」

ナオは、長いロングヘアの髪をいらいながら、そう言っていた。

そして、その顔に、不敵な笑みを浮かべる。

それは、ナオの綺麗な硬質の美貌からは、不釣り合いな悪戯じみた笑いだったので、飯田はその時、身震いするようにその体を震わせると、立ち去っていくナオの後ろ姿をずっと見つめ返していた。

それから自分も、そそくさとしてベンチを立ちだすと、女が部屋で待つ古ぼけたアパートへと、とぼとぼと歩いて帰っていくのであった。

第四節

飯田正紀のアパートから帰った次の日、ナオはやはり八時過ぎにベットから抜け出し、新聞を広げて、少々遅目の朝食を摂っていた。

今日は、ナオが謹慎処分を言い渡されて、二日目の朝になる。

彼女が、特務機関に出勤せず丸一日が経っただけだが、それでも体が鈍ってしまうかのように思えて、ナオは頻りにストレッチ運動をしながら、新聞の見出しに目を向けていた。

すると、新聞の表一覧に、でかでかとした記事が載っている。

それは昨日、新宿区のあるデパートで、白虎隊というふざけた名を表明するグループ

が、手にマシンガンや手榴弾を持って武装し、そのデパート内で、大々的に暴れ回ったという記事であった。

そのグループとは、十人ぐらいの男たちで、みな緑と茶色の斑模様で彩られた、迷彩服を着込み、デパートの開店と同時に店の中に乱入すると、マシンガンを乱射して、店内のありとあらゆる商品に風穴を開け、終いには手榴弾を投げ込み、それを爆発させ、店の店員数名に重軽傷を負わせて、そのまま逃走したということだった。

逃げた男たちは、店のレジから金を奪うこともなく、ただ闇雲に店内をマシンガンによって一頻り荒らすと、大笑いをたてながら、逃走を図ったという事だけのことだった。

彼らは一体、何が目的でデパートに乱入し、店内を蜂の巣にしたかは謎のままだが、その後、警官隊と特務機関の面々が駆け付けた頃には、その武装グループの男たちは、蜂の子を散らすように、逃走した後であるということだ。

警察は、事件後の会見では、それらの武装グループは、質の悪い愉快犯で衝動的に襲撃を行ったと断定したようだが、デパート側には、重軽傷者が出ているということで、血眼になって、その武装グループの行方を追っているということであった。

その新聞の記事によると、事件後デパート内には、その武装グループが書き置きしたであろうと思われる、貼り紙が残されており、その文面には、警察や特務機関に対する挑戦状ともとれる言葉の内容が、書き記されていたということであった。

ナオは、その新聞の記事を見て、眉を顰める。

自分が謹慎処分を受けている間に、凶悪犯による事件が起こっていたのだ。

それを思うと、ナオの血潮は、煮えたぎる熱湯のように騒いでいた。

彼女はもちろん、特務機関という組織に属している以上、そういった凶悪的悪劣な犯行という愉快犯的な事件には怒りを覚える。

それは、自分が特務機関に不在であった時に、起こった事件であるから尚更だ。

こう見えてもナオは、正義感に関しては、その気概が強いほどある。

この手の凶悪犯罪は、見逃すことのできない、憤慨する事件であるのだ。

しかしナオは、一通り新聞の記事に目を通し終わると、テレビの横のラックにそれを投げ入れて、そそくさと朝食を済ませてしまおうとしていた。

今日もナオの朝食は、一切れの食パンにコーヒーだ。

あいも変わらぬそのメニューに、飽きがかないかとも思えるが、ナオはそんなことは気にせず、こんがり焼いた香ばしい食パンを、コタツにあたりながら美味そうに食べていた。

食事が終われば、今日は、米川克彦の出入りしている、女の家をあたる予定だった。

まず最初に、フリーターをしているという、長洲恵美という女のアパートに張り込むつもりであった。ナオがそれを選んだのは、たいした理由はない。ただその長洲恵美という女のアパートが、ナオの住んでいるアパートから、一番近い場所に位置しているというだけの理由からだった。

ナオは、食事が済むと、さっそく外行きの服に着替えだしていた。

しかし、そんなところへ、慌ただしく電話がかかってくる。

テュルルルルル・・・テュルルルルル・・・

「はい、高崎です。あなた誰？」

ナオは、パンツ丸出しの姿で、呼び出しのベルが二回鳴ると同時に、その電話口に出
ていた。

『おお、ナオか？ 俺だ、課長の一だ。率直な話、お前には三日間の謹慎処分を言い渡
してあるが、それは撤回する。今から特務機関に出向いて出勤してこい、要するに特別
招集なんだ。事情は、こっちに来てから後で話す。今すぐ特務機関本部へ来るんだ、こ
れは課長命令だぞ、早くしろよ！』

そう言うと佐渡一本部課長は、ガチャンと通話を切ってしまっていた。

「特別招集？」

ナオは電話の後、一頻り怪訝な表情をする。

特別招集などということは、滅多にあるものではない。

年に、一二回程度だ。

それはなにか、重要な事態が起こったか、それに関連して付随するなにかが、発生し
たためであろう。

ナオは、それに少々面食らいながら、着替える手を早める。

彼女にとって、謹慎処分が一日で済んだということは、ラッキーなことであったが、当
初、予定しておいた、米川克彦の搜索は後回しにするしかなかった。

五分かけて、ナオは着替えを即座に済ませると、部屋の鍵をもって文京区・湯島にあ
る自分のアパートを、後にするのであった。

ナオが、特務機関に出勤すると、同僚の二階堂ゆかりと、後輩の柏木モモが待ってい
てくれていた。

佐渡課長は、先ほどから会議に出ているということで、デスクにはいない。

「一体、特別招集って、どういうこと？」

そんな中、ナオは、ゆかりとモモに顔を合わせるなり、開口一番、ことの次第を問
いただしていた。

「あのねナオ、今朝の新聞見た？ その第一面に、でかでかと白虎隊を名乗る武装グル
ープが、新宿のあるデパートを襲ったという事件があったでしょ。その男たちがまた、事
を起こそうとしているということらしいの。今朝早くにね、警視庁の方にその白虎隊と
いう武装グループから予告状が届いたわ。その予告状には、今日、渋谷のセンター街で
また急襲を仕掛けるという、犯行声明文まがいの事が書かれていたらしいの。彼らはデ
パートの店員に手榴弾を投げて、重軽傷を負わせた奴らよ。また何をしでかすか判らな
いから、警察とともに、特務機関もその渋谷センター街へ、治安維持のために出勤する
ことになったの。でも今は、ほとんどの特務隊員は要人警護で出払っているでしょ？」

そこで人手が足りなくて、特別招集をかけ、非番の者やあなたの様に、謹慎処分を受け
ている者を呼び出したのよ」

ゆかりが要人警護といったのは、今現在アメリカの国務長官が公に来日していて、東
京都内を特別に見学して回っているということで、その警護のために、特務機関の隊員
が多数ではらっているのだ。

その為に、隊員の人出が不足し、謹慎中の身でありながら、ナオが特務機関に呼び出

されたという次第であった。

「そう、それで、その武装グループは何者なの。今朝の新聞は見たけど、派手に事件を起こしたそうね？」

「それが、判らないんで～す。彼らは、白虎隊と名乗る以外、その素性は語らず皆目見当がつかませ～ん。でも、警察や特務機関に対して、挑戦しているようなんですよ～……」

モモは、相変わらず間の抜けたような口調で、ナオにその事を語っていた。

するとそこへ、佐渡本部課長が会議を終え、早々と姿を見せていた。

「おっ！ ナオ早かったな。どうだ一日謹慎して、ずいぶん反省しただろう。事情は二階堂から聞いたな、早くロッカーで着替えて、準備を整えてこい。もうすぐ出動するぞ」

そう言うと佐渡は、ナオのお尻を、ソフトタッチで軽くポンと叩いていた。

「ああっ、課長それはセクハラですよ～。特務機関の人間とあろう者が、女性隊員にセクハラするなんて卑猥で～す」

それを受けて佐渡一は、まったく意に介さず、その言葉を笑い飛ばしていた。

そんな中、ナオはツンとふてくされた様に、そっぽを向いて課長の一を無視する。

そして、更衣室へと、足早に去っていく。

そこへ、のこのこと柏木モモも、下らない話をべちゃくちゃ一人で喋りながら、ナオの後について来て離れようとはしなかった。

ナオは、更衣室でセーターと、その下に着ていた薄手のシャツを脱ぐと、ロッカーから有事の時に準備してある女性用の特殊防弾スーツを取り出して、それを身につけようとする。

「しかし、先輩っていつ見てもスタイルいいですよ～ね。とくにその形のいい胸なんか一級品ですよ～。これで性格さえ良ければ、男がわんさか寄ってくるのに、ホント勿体ないですよ～……」

そんな中、モモが、ナオの着替えを見ながら、勝手なことを口走っている。

「あなた、何しにここまでついてきたの？ 邪魔だから、あっちへ行行って」

そんなモモに対して、ナオは突き放したような、言い方をしていた。

「そんな一、連れない事言わないでくださいよ。わたしと先輩の仲じゃないですか～。仲良くしましょうよ～」

そう言うとモモは、ナオの素肌剥き出しの細腕に、猫のように頬擦りをして懐いてきていた。

「嫌ね、気持ち悪いから、あっちへ行行って！ ちょっと、やめなさいよ馬鹿、着替えられないじゃない……」

そんなこんなで、ナオの着替えは、モモに邪魔されながらも無事済んでいた。

ナオとモモが更衣室からデスクへと戻ってくると、特務一課の隊員たちが勢揃いし、出動の準備に余念はなかった。

「ナオ、はいこれ、防弾チョッキよ。今回は銃撃戦になるかもしれないから、これを上から身につけて……」

そう言ってゆかりから、茶色の防弾チョッキが、手渡されていた。

「いいか、みんな装備しながら良く聞け。我々は、これから渋谷センター街に出動する。白虎隊という、訳の判らぬふざけた武装グループが、そこへ急襲を仕掛けるという予告

状が届いたからだ。そこで我々も、警察とともにそいつらの急襲を、何としても阻止しなければならない。みんなも知っているように、今、特務機関の大半の者は、要人警護の為、都内に派遣されて残されているのは私たちだけだ。その為、多少人員に不足があるかもしれないが、その点はみんなのチームワークでカバーしてくれ。その白虎隊は、警察や特務機関に挑戦状を叩きつけた不埒な輩だ。ここは何としてもそいつらを一網打尽にして、街の安全を図らなければならない。皆、気を引き締めて、事にあたるように。いいか?！」

「はいっ!!」

佐渡一の話が終わると、そこに集まった特務隊員全員は、小気味のいい統制のとれた返事をして、その意気込みを表していた。

ここに集まっている隊員の数は、総勢十五名、

その中に、二階堂ゆかりと、ナオの数も含まれている。

皆は手に、マシンガンやショットガンを持って武装し、準備を終えていた。

「では出動だ! 全員、渋谷センター街に向かへ!!」

総勢十五名は、佐渡課長の出動の号令とともに、室内を抜け早足でその場を後にする。

そして、特務機関の建物の地下駐車場にまで走ると、次々に、特務車輛へと便乗していく。

ナオも愛車の特務マシンRH-2000にまたがると、アクセルを、二三度ふかしてそのエンジンを暖めていた。

全員が車輛に乗車すると、課長を乗せた車を先頭に、全車クラクションを鳴らしながら発進する。

そして、物々しい車輛の列を作りながら、特務機関本部の駐車場を後にしたのである。

第二章 センター街、急襲！

第一節

J R 渋谷駅近くハチ公像前、そこは若者がデートや遊びの待ち合わせの目印としてよく集う、とてもメジャーな場所である。駅には、山手線や埼京線、東急東横線などの複数の路線が乗り入れ過密度を増し、銀座線や半蔵門線なども駅と交錯している。またその周辺は、多くのビルが立ち並ぶ。渋谷、道玄坂、宇田川町、神南、桜丘町などは、すべてとっていい程ビルで埋めつくされている。

そして、駅の真上を、首都高3号渋谷線が通り、東西に続いている。

渋谷は、常に流行の、発信基地とされていた。

それは、センター街を始めとし、文化村通り、井の頭通り、公園通り、明治通り、道玄坂と、様々な遊びやショッピング、食事を楽しめるスポットが目白押しだからだ。

ここには、多くの若者が集い、深夜まで活気づく雑踏の絶えない場所であり、ウィークエンドにもなると、都内や全国から人が押し寄せ、その活気はピークに達するという。

そして、この街で目に付く建物といえば、渋谷109、マークシティ、Q-FRONT、東急プラザ、渋谷シネタワー等が代表的だろう。

これらは、渋谷の顔といっても、過言ではない。

そんな中、渋谷センター街は、文化村通りと井の頭通りに挟まれた位置にある。

ハチ公口を出て歩き、しぶちかショッピングロードの地下商店街の上を、横切ってすぐのところだ。

渋谷といえばやはり、センター街が有名・

ナオたち特務機関も、そのセンター街に、今回のところは用事があった。

特務機関の面々は、道玄坂の通りの側道に車輛を止めると、その交通整理は渋谷警察署の警官に任せ、ハチ公前広場に集結して点呼を取っていた。

彼らは皆、マシンガンやショットガン、それに腰と左胸にはハンドガンを装備している為、その物々しい空気から、街行く人々は怪訝な表情を浮かべて通り過ぎていく人がいたり、また物珍しそうに、点呼を取る特務機関の隊員達を眺め回したりしている。

特務機関、すなわちハード・ガンの面々は、それが終わると、さっそく早足で駆け渋谷センター街に足を踏み入れる。

そこは、平日とはいえ雑踏は多い。

さすがに、人が集まる有名スポットだけのことはあり、混雑は否めない様子だった。

昨日、新宿区のデパートを襲った白虎隊を名乗る武装グループは、その予告状に嘘偽りがなければ、今日このセンター街に現れるはずである。

彼らが、どこから現れ、何をするかは疑問が残るが、警備を厳重にしなければならない。

佐渡一は、センター街に到着すると、現場の状況を把握し、さっそく特務機関の隊員たちに指示して、彼らを各要所要所に配していく。

それと同時に、警視庁のほうから派遣されてきた、機動隊員達にも檄を飛ばし指示を出す。

どうやら、佐渡課長がこの場の全権を掌握し、特務機関と警視庁機動隊の指揮をとるようだ。

特務機関の仕事といえば、主に、警察の協力要請を受けて今回のように出動する場合がほとんどだが、一応、特務機関は警察の上部組織としての位置付けがある。

その為、いくら警視庁の機動隊といえど、特務機関を無視することは出来ない。

こういった武装襲撃の可能性がある状況の場合、警視庁も特務機関を前面に立てるしかない。

管轄の専門は、特務機関が主体となるからである。

課長の佐渡は、今現在、警視庁の責任者と話をしている。

その話は細かい確認と、この現場の警備方針を、どうするのかという事に及んでいるようだ。

そんな中、ナオとゆかりは後方支援を言い渡されて、センター街の入り口付近で待機中だった。ナオは、その事に対して、不満げな顔であったが、ゆかりになんとか宥められて、課長に対し文句を言うことは我慢しているようだ。

佐渡と警視庁の責任者の話し合いの後、警備の方針はセンター街に通じるすべての出入りに、機動隊員を配して、特務機関の面々が武装しながらその中を巡回することになった。

センター街に出入りする一般の人々には、火器やナイフ等などを所持していないかのボディチェックを欠かさないが、足並みの規制まではできない。

一々、その出入りを規制しては、一般客からの激しいクレームが来るだろう。

しかし、本当のところを言えば、センター街を閉鎖して、武装集団の襲撃に備えたいのは、山々だった。

時計の針は、いま、午後十二時三分を過ぎていた。

今は、食事時だ。

センター街に軒を連ねる飲食店には、人が集まりだしている。

焼き肉屋、ラーメン屋、ファーストフード・ショップ店、インド料理屋、お好み焼き屋など、他にも様々だ。

人々は、それらの飲食店で空腹を満たすと、またセンター街に繰り出してショッピングを楽しむことだろう。

その頃、特務隊員や機動隊員も、軽い食事をとっていた。

彼らは、持ち場を離れることもなく、ファーストフード店で、大量に購入したハンバーガーをばくついている。

特務機関の隊員や警視庁機動隊の面々は、職務があるため、飲食店に入ってくつろいで食事をとってられる立場ではないので、それだけでいか仕方がない。

しかし、少しばかりの空腹は、満たされるだろう。

そんな中、ナオとゆかりも課長からそのバーガーを手渡され、いま食べだしている最中であった。

「いいか、お前たち、食事中であっても気を怠りに配って、襲撃に備えているよ。奴らは、どこに潜んでいるか判らないからな」

課長の佐渡は、あつという間にバーガーを平らげると、その紙屑をごみ箱に投げ入れて、そう注意を呼び掛けていた。

「でも課長、本当に白虎隊という武装グループは、現れるのでしょうか？ 予告状は、ただの悪戯じゃないのですか？」

そんな折り、ナオの横でバーガーを半分近くまで平らげていたゆかりが、疑問の声を投げ掛ける。

「確かに、その可能性もないことはない。だが、たとえそれが悪戯であっても、一応、警備をせんことには、もしもの場合があるからな、だから気を引き締めろよ。特にナオ、お前は特務機関の問題児だ、今日は俺と一緒に、ここで待機するように。いいか判ったか？」

.....

(何で私が?)

と、口に出してこそ言わなかったが、ナオは佐渡課長の言葉を聞いて、更に臍を曲げている様子だった。

「ナオいいじゃない、後方支援だって。ある意味、謹慎処分は解けたことだし、それだけでもラッキーと思わなくっちゃ駄目よ」

ゆかりは、そんなナオの態度を見て、慰めるつもりなのか、そんな事を言っていた。

だがその反面、ゆかりは、ナオに対して、舌を出して笑いたい気分でもあった。

すぐ命令無視するようなナオのことだ、今回はある意味、いい薬になるだろうと思う。

今回は、武装集団らしきグループのセンター街襲撃だ。

それを捕らえる為には、隊員達のチームワークが肝心である。

しかし、そのチームワークを乱す様なナオには、反省の意味も兼ねて、佐渡課長が言うように、今回のところはここで後方支援をしていた方がいいように思える。

またナオが、他の隊員達と一緒に行動をとると、何かしらの問題を起こしかねない。

それを考えると、佐渡の判断は適切なのかもしれないと、ゆかりはかなり納得しているのが正直なところであった。

しかし、ナオはそれに不服なのか、不機嫌な顔をして課長を睨みつけている。

だからゆかりは、それを見て「しょうがないわね」と、自分の方に彼女をひっぱると、他の隊員と話をしている課長から、距離をもたせることにしていた。

そうしないと、今にも食って掛かりそうな顔をしていたので、世話がやけるのはひとしおだった。

ナオとゆかり、そして佐渡課長が居る、ここ西武百貨店角のセンター街入り口付近からは、その通りが奥まで見渡せる場所に位置している。

その為、特務隊員の動向が、悉さに把握できる。

今現在、特務隊の隊員達は、課長の佐渡に指示されたとおり、センター街内を二人一組となって往復巡回している。

彼らは、その目付きは真剣だ。

いつ襲撃があるか判らないので、緊張もしているのは確かだろう。

しかし、これは余談になるのだが、特務機関の隊員は、全てナオやゆかりと同年代の若い連中ばかりだ。

特務機関が正式に都市特殊機構隊として都内に設営されたのは、ごく最近になってのことなので、その為、隊員も二十代前半から後半にかけての若い者ばかりで構成されているのだ。

見方を変えると、危うい若輩者の集まりのようにも感じられることもあるが、隊員のほとんどは、厳しい訓練を積んできている猛者ばかりだ、その点は心配ない。

それに、難しい適性試験や国家試験もパスして、採用されたエリートでもある。

だから、状況判断や危機回避能力は常人よりもすぐれているはずで、そうでない以上、特務機関の隊員にはなれないのである。

しかし、そんな事はさておき、ナオたち特務機関が、この渋谷センター街に来て警備を始め、どれくらいの時間が経ったであろうか？

十一時二十分には、ハチ公前広場で点呼を取ったはずだから、かれこれ二時間は経過しているはずだ。予告状を警視庁に送り付けてきていた白虎隊というグループは、何時に襲撃を仕掛けるということは、明記していなかったようだ。

その為、このまま何事もなく時が過ぎていってくれば何も問題はないのだが、つぎつぎと行き交う人の波を見ていると、いたって平和な一時のようにさえ感じてくる。

ナオはそんな中、自分の目の前を通り過ぎていく人の群れをつぶさに観察して、目を光らせていた。

少しでも不審な点があれば、呼び止めて、警察ではないが、職務質問をしているところだ。

しかし、これといって不審な人間の、出入りは見られない。

今のセンター街は、やはりいたって平和な場所に見えていた。

だが、そんな折りである・・・

ドドーン！！

突然、この平和な渋谷の街に、一つの炸裂音が轟いていた。

「一体なんだ！！」

その時、入り口付近に待機していたナオ、ゆかり、佐渡の三人が、その音に驚いてセンター街の通りの奥を真剣な目で覗き込む。

すると、その通りにある、ある建物の一角から、火柱と濛々とした煙が立ち上がり始める。

「きゃーーっ！！」

「うわああああ！！」

その直後、甲高い誰とも知れぬ女の悲鳴や、男の慌てる声が響いたかと思うと、耳をつんざくような発砲音が、あちこちで鳴り響きだす。

バツ・・・バババババババ・・・バババババババ・・・ババババババババババ・・・

それは、銃の連続的発砲音だった。

三人がその音を聞き、目を懲らして通りの奥を見据えると、一体どこから現れたのか判らない迷彩服を着た見慣れぬ男たちが、その手にマシンガンを装備して、センター街を行き交う人の群れに向かって、発砲を繰り返している姿が目飛び込んできていた。

「くそうっ、襲撃か!？」

だからその時、佐渡は、発奮すると、手持ちの銃を構え、センター街奥の爆発があった建物の方を覗き込む。

すると、そこでは、何人もの一般客が悲鳴を上げて、今や逃げ惑っている姿が目映ったので、課長は即座にナオとゆかりを呼び寄せるとこう言う。

「おまえ達、ここで待機しているんだぞ」

そして課長は、ひどく憤慨したような表情をその顔に浮かべると、徐に手持ちのマシンガンを構えなおし、近くにいた別の隊員を二人呼び寄せて、何事か指示を出し始めていた。

そして、もう一度ナオとゆかりの方を振り向くと、特にナオに対して「いいか、ここで待っているよ!」と再び厳命し、そして更に踵を返し、課長は先ほど指示を出した二人の隊員を引き連れて、発砲現場に向かって行ってしまふのだった。

だからナオは、課長が走り去った後、その場で歯軋りするように地団駄を踏んでいた。なぜなら、課長は、自分を連れていってくれなかったからだ。

課長はおそらく、ナオを今回はどうしても、前衛には配しない心算らしい。

二度も待機していると厳命している以上、その本意とするとところが見え見えだ。

その為、ナオは、ひどく憤慨する。

折角、謹慎処分を解かれてここに来たのに、このままここで待機しているなんて、ナオには我慢がならない。

だからナオは、頻りに苛ついて、まるで檻の中のライオンの様に、その場を行ったり来たりし始める。

「まったく、冗談じゃないわよ・・・」

そして、隣で平然とすましているゆかりに、課長の悪口を臆面もなくまくしたてると、近くにあったごみ箱を、憎らしげに蹴飛ばしていた。

だから、それにはゆかりも癡々し、ナオに対して落ち着く様、頻りに「我慢しなさいよ、我慢・・・」と喋りながら宥めるが、ナオは余計ぶんぶんと怒りだすと、しまいにはそっぽを向いて一言も言葉を発しなくなってしまっていた。

それを見た限り、ナオは課長に待機していると厳命されたことが、相当、気に食わなかったらしい。

しかしこればかりは、仕方がないとゆかりは思う。

喩えナオの気持ちはどうあれ、これは課長命令なのだ。それを無視すれば、また何かしらの罰を受けるかもしれない。

それを考えると、ナオはここで、おとなしくしている方がいいと思う。

だが、ナオの性格上、それは酷な話だった。

ある意味、偏屈的な我が侘を持つ彼女には、今現在の心境を察すると、不満たらたらのなだろう。その不機嫌な顔を見ると、一目瞭然である。

こうなると、いつ暴走するか判らない。ナオは一度キレると、手が付けられないのだ。だからゆかりは、どうしようもないので、そのままナオを知らんぷりして、無視することしか出来なかった。

いくら怒っても、命令は命令なのだ、ということを、この際、解らせなければならない部分もある。

その為ゆかりは、その後、白々しくも鼻歌を唄うと、呑気そうにその場で片足のステップを踏み出してしまっていた。

ナオを無視するには、お気楽にふるまうのに限る、そうでないとやっていられない。

こんなすぐ怒る女を、まともに相手なんかしてられないのだ。

しかし、それがナオを、暴走させてしまうのである。

彼女は、ゆかりの鼻歌を耳にすると、見る見る青筋を立てて地団駄を踏む。

そして、至極、気に入らない顔で、キッとゆかりの顔を睨み付けてくると、その直後、何かを決意したかのように真顔になる。

そして、センター街の奥に位置する通りを憤然と睨み付けると、猛然とダッシュ———そのまま何も言わず、走りだしてしまうのだった。

「こ、こら、ナオ、どこへ行くのよ!!!」

その為、その時ゆかりは、焦ってナオを呼び止めていた。

しかし、ナオは、そんなことは聞いていない。

彼女は、一度ゆかりの方を振り向くと、「べー」と舌を出して憎らしげにあかんべをすると、そのまま脱兎のごとく走り去っていく。

だから、さすがにその時ゆかりは、ナオの事を止めることは出来ない。

ナオは、一度走りだしたら、止まらないのだ。

その性格を、よく知っている彼女だから、判るのだ。

ゆかりは、ナオの走りゆく様を見ながら天を見上げると、その時「あー、あの大馬鹿者のナオを、お救い下さい・・・」と、嘆いて、そう言うしか他に方法がなかった。

彼女には、それを見送ることしか、出来なかったのである。

あの猪突猛進的なバカを・・・

その頃、センター街の中程にある《カメラのさくらや》という店の店内では、やはり迷彩服を着た一人の男が、マシンガンを乱射して奇声をあげていた。

彼は、店内のありとあらゆる商品をその銃で粉碎すると、哄笑し、この乱射騒ぎを楽しんでいるかのように暴れていた。

だがそこへ、二人の特務隊員が駆け付け、店の外から店内に向かって銃を構える。

しかし、それに気付いた迷彩服の男が、店の外にいる特務隊員に向かって、手持ちのマシンガンを乱射していた。

バババツ・・・ババババババババ・・・

その影響で、店のショーウィンドウは粉碎し、飛び散ったガラスが凶器のように、特務機関の隊員たちに降り掛かる。

だから、特務機関の隊員は、その場に身を伏せて、どうにかその無茶苦茶な銃撃の乱射を、やり過ごすしかなかった。

「くそう、無茶しやがるぜ」

一人の隊員が、癖々したように呟く。

しかし、このまま身を伏せているばかりでは、どうにもならない。

だから二人の隊員は、目配せを交わすと、即座に行動に移していた。

「植木、お前は右の出入り口を固めろ、俺はここでおまえの援護をする。だからそっちに回って、奴をこの中に閉じこめるんだ！」

一人の隊員が、植木という隊員に対して、指示を出す。

すると、

「判った」といって、その植木が相槌を打つ。

そして彼は、相方の指示どおり店づたいに回って右へと移動すると、店の中で銃を構えている迷彩服の男の目を盗んで、そのまま前方を突っ切ろうとしていた。

だが、それを見た店の中の迷彩服の男は、それをすかさず察知し、容赦なく滅多矢鱈にマシンガンを発砲する。

だから、その狂乱的銃弾の雨を受けて、破碎したガラスが白い粉の幕のように飛散して、その場の視界を白一色のように悪くしていた。

店のなかにいる、迷彩服の男は目茶苦茶だ。

彼は、特務機関の隊員を、目の仇かのように思っているらしく、やたらにマシンガンをぶっ放すと、やはり哄笑し楽しんでいる。

だから、その被害は甚大なもので、そのカメラ店は見ても無残に崩壊し、割れたショーウィンドウのガラスや商品が、その辺に飛び散ると、まるで危険物の海のような様相をそこに呈している。

その為、植木という隊員は、右の出入り口を目指すのはいいが、なかなかそこに辿り着けず、四苦八苦ししていた。

しかし、なんとかその銃弾の嵐を掻い潜りながら、店の出入り口に辿り着くと、即座に身を乗り出して店の店内に発砲していた。

バババババババ・バババババババ・

その間にも、もう一人の隊員による牽制の銃撃はつづいていたが、店内にいる男は巧みに柱の影に隠れると、そこから顔を出して、また頻りに発砲を繰り返していた。

しかし、出入り口を固めてしまえば、こっちのものだ。

もう、迷彩服の男は、逃げられないだろう。

そう思うと、植木という隊員は、ほくそ笑んで苦笑いを一頻り洩らす。

しかし・・・

そこで、突然、苦鳴が聞こえるのである。

「グッ・・・！！」

それは、やけにつまった、短い苦鳴だった。

植木は、それに驚き、後を振り返る。

すると、店の反対側で左肩を押さえて膝を折っている、もう一人の隊員が目につく。

その為、植木は焦って、その隊員に向かって叫んでいた。

「お・おい久松！　大丈夫か！？　久松！」

すると、その久松と呼ばれた男は、苦悶の表情を浮かべながら顔を上げる。

しかし、その顔は青ざめて、血の気が失せている。

だから、もう一度、植木は久松という隊員に叫びを洩らすと、彼のもとに走りだそうとして立ち上がっていた。

だが、

「だ・・大丈夫だ、植木・・・それより、オレに構わず店内に突撃しろ・・オレは左肩を少し負傷しただけだ。それよりも俺が援護射撃するから、その隙に飛び込め！ 奴をこの際だから仕留めるんだ！」

その時、肩を撃たれた久松がそう言って健在ぶりを示すから、植木は一安心し店内の方に顔を向ける。

そして、「判った、それじゃ踏み込むぞ！」

そういうと、手持ちのマシンガンを構えて、突入の姿勢を見せるのである。

しかしその時、店の中から発砲があったので、植木は仕方なく一時退避して身を伏せる。

だが次の瞬間、久松が発砲を始めたので、植木は意を決して突入を開始——そのままだ店内に乱入して、銃を乱射する一人の迷彩服の男を目で捕捉していた。そして有無を言わず発砲——迷彩服の男は、銃弾の雨を受けると瞬時に射殺されていた。

それは無法な輩に対する、一番、適切な対処法だったのである。

そして、それと同時に、ナオは今現在、怒りにまかせて走っていた。

センター街入り口から、五十メートル付近だ。

その途中、何人もの倒れている一般の人を目撃したが、どうやら銃撃を受けてその弾が被弾し、一般客達が逃げ遅れて路上に殺到している様子だ。

ナオの前方では、課長と二人の特務隊員が、やはり二人の武装している迷彩服の男たちを追いかけている。

その迷彩服の男たちは、一頻り左右の建物や人に向けて銃を乱射すると、駆け付けた特務隊員を引き離すように、センター街の奥へ逃げていく。

そして彼らは、逃げながら振り向きざまにまた何度も銃を発砲すると、それでさらなる何の罪もない一般の人の犠牲者が増えていた。

そんな中、ナオは、走りながらある事を思う。

それは、こいつ等は、一体何の目的でここ渋谷センター街を襲ったのか、ということだ。

彼らは、白昼堂々、このセンター街に現れて、銃を発砲してきた。

しかし、これらの騒ぎを見ると、どうも腑に落ちない点がある。

それは、こんなことしても、何のメリットはないからだ。

警視庁による情報では、この襲撃を行った白虎隊という武装グループは、質の悪い愉快犯らしいということだが、ここまで被害がでているところを見ると、相当気が狂っているとか思えない。何かの使命をおびたテロリストならともかく、彼らはそんな大仰な使命は持ち合わせていそうにない連中だ。そこから考えると、質が悪すぎるにも程があると思う。

バババババ・・・

だが、そんなことを思いつつ、ナオが佐渡課長の後を追いかけて、センター街の通りを走りぬけると、そこで唐突に銃撃音が辺りに響く。

ナオの、右斜め後方でだ。

その為、ナオはそれに驚き、その音のする方を振り向く。

すると、そこではやはり迷彩服姿の一人の男が、今、銃を構えて向かいの商店に対して、しきりに発砲を繰り返している様が目に飛び込んでくる。

その男は、若い男で、軍人氣取りなのか、頭にはベレー帽をかぶっている。

そして、また頻りに手持ちのマシンガンが無差別的に乱射し、大笑いをあげて、見るも無惨に向かいの商店を蜂の巣にしていた。

「ハハ、壊れろ、壊れろ・・・！！」

バババババ・バババババ・バババババババ

「??・・・」

しかし、そこでナオは、あることに気付く。

それは、その銃を乱射している男は、どこかで見たことのある顔だと思えたのだ。

切れ長の目、そして薄い唇・・・

そう、そうだ米川！

ナオが昨日から丁度捜していた男、その米川なのである。

だが、その米川が、なぜこんなところに居るのか？

ナオは怪訝に思う。

彼は保釈中に逃亡して、姿を晦ましている男のはず。

それなのに、どうして・・・

しかしその時、ナオはそんな考えはともかく、これは奴をここで捕らえる絶好のチャンスだと閃いていた。

だから、米川を呼び止めるのである。

「あなた、米川でしょ？ 米川克彦よね?!」

すると、向かいの商店に銃を乱射していた男は、それで一瞬ビクリとナオの方を振り返ると、驚きを顕わにする。

そして、次には、憎らしげにナオに対し、銃を発砲してくるのだった。

「うるせー、テメーなんざ蜂の巣になれ!!」

バツ・バババババ・・・バババババ

「チッ！」

その直後、ナオは、右へ前転しその銃撃を避ける。

そして、前転した勢いで立ち上がると、即座に応戦、米川の肩口を狙って彼女も発砲していた。

バババ・バババ・・・

しかし、米川らしきその男は、それを難なく躲すと、そのままゆかりの居るセンター街入り口方面に向かって逃走――――

彼は、振り向き様にもう一度発砲すると、そのまま走り去ってしまった。

「米川、待ちなさい!!」

そこでナオも彼を追ひ、脱兎のごとく走りだす。

ナオは、米川を逃すまいとして駆けると、全速力で追走、彼の後方へびたりとついた。
このまま彼を、逃がすことは出来なかった。
捕まえて、黒峰会の事を吐かせてやる。
ナオは、その思いに後押しされ、躍起になっていた。
ナオが米川を追って少しすると、米川は、丁度目の前の角を左に曲がり、センター街から脱出を図ろうとしていた。
そこは、警視庁の機動隊が封鎖している出入り口で、その先は、センター街と並走する井の頭通りという隣の通りに至る路地である。
そこを、米川は突破しようとし、走りながら手持ちのマシンガンを構え発砲する。
「あっ！」
すると、次の瞬間、あろうことか、そこにいた機動隊員二人が、その銃弾を受けて卒倒していた。
「ハハハハハ、ざまーみろ・・・」
米川は、機動隊員を撃ち殺すと哄笑し、そのまま逃走、路地を走り抜け疾駆する。
「米川、許さないわよ！！」
それを目撃すると、ナオは、一度立ち止まり憤慨して発砲———しかしその弾は、米川に当たることなく路地の壁にあたって四散していた。
「クッ！」
だからナオは、また、全速力でそれを追いかけていた。
奴は、機動隊員を、撃ち殺している。
このままだと、また他に犠牲者がでないとも限らない。
そうなると事だ、奴を捕まえるしかない。
おそらく米川は、気が狂っているのだ。
機動隊員を撃ち殺し、哄笑するところを見ると、それは明らかである。
その為ナオは、路地を抜けると、米川の後を追って井の頭通りへと抜けていた。

井の頭通りは、センター街と並走する、賑やかな通りだ。
そこにはイタリア料理店、法律事務所、漫画喫茶、麻雀店、カラオケハウス等が、各種ビルの階上に店を開いている。
しかし、ナオはセンター街から井の頭通りに抜けて角を曲がると、次の瞬間、立ち止まって呆然としてしまっていた。
なぜなら、この通りに出た時から、米川を見失ってしまっていたからだ。
「クッ、奴はどこへ？」
ナオは、その井の頭通りを、首をめぐらしてみまわす。
しかし、彼の姿はない。
だが、なぜ彼は、消えてしまったのだろうか？
ナオは、女の身でありながら、着かず離れずの距離を保って追走してきた。
それなのに、見失ったのだ。
これはナオにしては、大きな失態である。
だがナオは、その時、怪訝に思う。

それは、突然、逃走していた人間が消えてしまうことなんて、あるのかと思ったからだ。

確かにナオは、米川の後ろ姿を捉えていた。

それなのに、見失ってしまったのだ。

その時のナオは、何か質の悪い神隠しにあったような気分、苛まれていた。

だが、このままでは、引き下がれない。

そこでナオは、米川が、井の頭通りに軒を連ねる建物内のどこかに逃げ込んだのではないかと思い、その通りを西の方へ順番に歩きながら覗いてみることにする。

手持ちのマシンガンは胸の前で構え、立ち並ぶ雑居ビルの入り口付近から、中の様子に覗きを立てる。

しかし、彼の姿は見つからない。

普通、銃を持った男が建物内に入れば、何かしらの騒ぎが起こるはずだ。

だが、そんな気配は、まったくないのだ。

だからナオは、仕方がないので、そのまま更に西へ西へと小走りにかけて、何度も建物内をしらべていた。

すると丁度その時、前方で銃撃の音が響いてくる。

それは、マシンガンを撃ち放つ独特の乱射音だったので、ナオはその時それが米川のものだと直覚し、そこへ一目散に駆けてみた。

するとそこでは、今、特務機関の隊員と二人の迷彩服を着込んだ男たちが、向かい合った形で銃撃戦を演じていたのである。

そして、そこには、佐渡課長の姿もあった。

どうやら課長達は、ナオ同様、迷彩服の男たちを追って、この通りまで追いかけてきたらしい。しかしよく見ると、課長等は、銃撃戦を演じる迷彩服の男たちに、苦戦を強いられている様子だった。

その為ナオは、先程までの米川のことなどついと忘れてしまい、その銃撃が演じられている現場まで走って、課長のそばに駆け寄っていた。

すると、

「なんだお前、ナオじゃないか？ 一体どうしてこんなところに居るんだ。お前はまた俺の命令を無視して持ち場を離れてきたな、今度という今度は、ただじゃおかんぞ！！」

と、いきなり課長の怒声が響いたので、ナオはその時ふてくされてそっぽを向くと、課長の言葉を無視していた。

すると佐渡課長は、その態度に癖々した様子で、しょうがないなという態度を示しながらも、次にはナオを近くにひっぱると、耳打ちしてこんなことを言っていた。

「いいかナオ、この際だからお前はあの迷彩服の男たちの右側に出て、ここに居る俺達の援護をしろ。いいかこれは課長命令だぞ、すぐ左を迂回して、あいつ等を足止めするんだ。これは重要な任務だからな、真面目にやれよ」

その為ナオは、それに頷き、ニッと不敵に笑うと、課長の言葉を了解していた。

ナオはその後、先程から特務機関の隊員たちに向かってマシンガンを乱射している迷彩服の男たちを見据えると、その隙を見付けて、課長に言われた通り左を迂回しようと、一度軽く発砲した後、身を屈めて準備を整えていた。

二人の迷彩服を着た男たちは、今、あるビルの前に立ち、特務隊員に向かって威嚇発砲を繰り返している。

そのビルは、古い建物で、おそらく改築中であるのだろう。ビルのまわりには、鉄パイプの資材で足場が組まれ、そのまわりに緑色のネットが張り巡らされている。

そして、そのビルの入り口付近側には、『工事中』の黄色い看板と、注意書きなどが書かれた札がかかっており、一見すると巨大な廃屋のような殺伐とした雰囲気を出していた。

だが、ナオはそれを一瞥すると、先程から散発的に威嚇発砲を繰り返しているそんな男たちの目を盗んで、課長に言われたとおり男たちの右側へと慎重に移動していた。

ナオが左側を迂回して近付いていく様は、男達には気付かれていない。

彼らは、佐渡課長や他の特務隊員との銃撃に夢中になっている為、気付かないからだ。だからナオは、その隙に、素早く身を滑らせると、彼らの丁度死角になる場所に移動することに成功する。

そして、課長の命令どおり、即座に応戦を開始する。

ナオは、手持ちのマシンガンを構えると、ビルの前に立つ男たちの足元を狙って発砲、彼女が手にしているのは、特務機関特注の軍用マシンガンである為、その連射スピードは驚異的だった。

その素晴らしくなめらかな連射速度を駆り、ナオの放った弾丸は、狙い違わず迷彩服の男たちの足元のアスファルトを削っていく。

その為、迷彩服の男たちは、それに慌て、一時、発砲を躊躇する。

そこへ課長ら、他二人の特務隊員が、速攻を仕掛けていた。

バババババ・・・バツ・バババババ・・

ババババババ・バババババ・バツ・バツ

速攻を仕掛けた、課長等の放った弾丸は、迷彩服の男たちの肩をかすめ後の壁へと抜けていく。

すると、それに焦った迷彩服の男たちは、一度闇雲にマシンガンをぶっ放すと、その後、何を思ったか改築中の雑居ビルに逃げ込み始めた。

彼らは、どうやら不利を悟ったらしく、ビルの前にかかっていた『工事中』の看板を踏み倒すと、そのまま古くさいビルのなかに逃げ込んでいく。

だからそれを見て、課長と他の二人の隊員は啞然とし、迷彩服の男たちがビルのなかに消えた後、そのビルの外壁を見上げて踏鞴を踏む。

まさか、改築中のビルなどに、逃げ込むとは思っても見なかったからだ。

「いいか、奴らはこのビルのなかに逃げ込んだ、だから俺達も武器をマシンガンからハンドガンに切り替えて、この中に踏み込むぞ。おそらくこのビルの中は狭い、それに奴らはどこに潜んでいるかわからんから、気を引き締めて事に対処しろよ！」

「はい！！」

改築中のビルの前で今、課長の佐渡が二人の特務隊員、そしてナオを集め、頻りに注意を促している最中であった。

二人の迷彩服の男たちが、改築中の雑居ビルに逃げ込んで、その後を追うために、四

人の特務隊員はビルの前で集結していたのだ。

その為、この後、意を決して雑居ビルのなかに、踏み込まなければならない。

その準備に隊員たちは、腰からハンドガンを引きぬくと、それを構え、その雑居ビルの中に向かっていった。

佐渡等が雑居ビルのなかに入ると、そこは閑散とした空の部屋が点在しているということが、いち早く判っていた。改築中のビルだけあり、中には何も無い。まあそれは当然だろう、工事の邪魔になるため、このビルの中にあつた荷物は、全て外に運びだされている様子だった。

そんな中、まず一階は、広いフロアーになっている。

そんな場所を、ナオと課長、それに他の二人の隊員は一緒になって調べてみている。

そこはおそらく、その間取りからすると、なにかの事務所であつたのだろう。床には机の足の跡と覚しき名残が無数にあり、それらしい痕跡を示している。

その室内に入って見た限りでは、先程の迷彩服を着た男達は居ない。

おそらく、この一階からそれ以上の階、つまり二階や三階、もしくはそれより上の階に逃げ込み潜んでいる可能性があるということだ。

そう思うと四人は、その一階のフロアをざっと一頻り覗いてから、上の階に向かっていった。

二階にあがると、先程の一階のフロアとはうって変わって、こぢんまりとした部屋がいくつも並ぶ、雑居ビルの中の雑居部屋みたいな所に来ていた。

寄せ集められるように、四つ並んだ各部屋は、扉のすでに取り外された出入口でつながっていて、行儀よく並んでいる。

しかし二階に来て一同が気付いたのは、一階に比べこの階は薄暗く、光があまり差し込んで来ないという事だ。

おそらく、このビルのまわりに張り巡らされている、防護用の緑色のネットのせいであつたのだろう。

ビルの外壁に面した窓は、全て閉まっている。

各部屋の床は、工事が進んで引き剥がされており、埃臭い匂いとその空間には漂っていた。

壁ぎわには、グリーンペンキの缶が六個と、乾いてカチカチになったハケやローラーが無造作におかれていた。そして室内の所々には、ビニールシートがかけられている場所があり、どうやらペンキが飛び散らないように保護されているらしかった。

その中を佐渡等の四人は、細心の注意を払って中に男達が潜んでいないかを確認するため、ハンドガンを胸の前に構えながら、壁伝いにくまなく調べてみた。

しかし、誰もいる気配はない。

やはり、この階には居ないようだ。

だから仕方ないので、今度も、それから更に三階にあがって探してみることにしていた。

しかし三階、四階と見ても、やっぱり男たちの姿はない。

彼らは、おそらく最上階の六階に潜んでいる可能性が高く、その為、これから更に慎重に行動しなければならなくなっていた。

「課長、わたし先にいって、六階の方を見てくるわ」

そんな中、ナオはまた焦れたように課長にそう言うと、自分は一人六階に向かって足を踏み出そうと走りかける。

「ちょっと待て！」

すると課長は、それを制し、少し怒った顔をしてナオの顔を睨み付ける。

そして、ナオの首根っこを掴むと、無理矢理自分の方へ引き寄せていた。

「いいかナオ、これはお遊びじゃないんだぞ。お前はすぐ一人で勝手な行動をとろうとする。だがな、特務機関の人間としては、チームを無視しての行動は許されてはいないんだ。だから一人突っ走った行動は控えろ。俺達と一緒に行動するんだ！」

佐渡に怒られて、またふてくされるナオ、しかし彼女もそれは仕方ないと思ったらしく、その後、渋々課長の言うことに従うと、その後が続いていた。

その後、佐渡等は、四階から次の階に至る階段を上り、五階の踊り場へと来ていた。

そこはやはり、薄暗い小ぢんまりとした部屋が二つあるところで、人の居る気配はほとんどない。

しかし、一応その階も調べてみなければならず、四人は室内の入り口に足を踏み出しかける。

するとそこで、何かの音が聞こえてきていた。

それは、カラン、カラン、カランという何かの音が転がる音で、丁度六階へ至る階段の方から聞こえてくるのだ。

その為、不審に思った一同が、その音のする方に顔を向けて様子を見ようと目を凝らす。

すると、そこに何かの音が、転がってきた。

それは、拳大ぐらいの鉄の塊で、胴の辺りが黒光りしている。

だが、それを見たとき、ナオは一早く叫んでいた。

「手榴弾！！ 課長、早く逃げて！！」

ナオはそう叫ぶと、他の三人を五階の階上の室内に突き飛ばし、自分は四階の階段付近に飛び降りてそのまま身を伏せる。

すると、

ドドーン！！

次の瞬間、五階の階段付近は、猛烈な爆風と炎で満たされ、破碎した粉塵が濛々と建物内を一蹴し、立ち籠めるきな臭い匂いとともには壁は黒焦げになっていた。

ゲホッ、ゲホッ、ゲホッ・・・

「みんな、大丈夫か？！」

手榴弾の爆発の後、五階の室内で身を伏せていた佐渡は、煙で目がしみる中立ち上がると、他の隊員の安否を心配して声をかける。

だが、返事はない。

その為、課長は蔓延する煙が落ち着くのを待ち、もう一度声を掛ける。

「おい、大丈夫なのか？！」

「だ・大丈夫です・・・」

すると、一人の隊員から声が帰ってきた。

佐渡は、それに安心すると、ふとその時、爆発のあった階段付近に目を向けていた。
だが、その時である。

「課長、わたし先にいくわ！！」

一人の女性が、今や血相を変えて煙が立ち籠める五階の踊り場を駆け抜け、六階へと通じる階段を駆けのぼっていく姿が目につく。

ナオだ。

その為、その時、佐渡は、それを制止して呼び止める声をかけていた。

「おい待て！！ ナオ、一人で行動するな！！」

だが遅かった。

ナオは、その顔に怒りの表情を浮かべると、そのまま六階へと走り去ってしまう。

そして彼女は、六階へ至ると、即座に銃を握って身構えていた。

バババババ・・・バババババ・・・ババババババババ・・・

ナオが六階にくと、すぐにその階上の室内から発砲があった。

銃弾が、彼女の体をかすめ、後へと抜けていく。

しかし、その時、ナオは焦らなかった。

彼女は銃撃があった後、六階の室内の入り口付近にすかさず身を隠すと、壁ぎわを背にしハンドガンを右手で構える。

そして、その室内を覗き込んでいた。

するとそこには、二人の迷彩服の男の姿が目につく。

先程、逃げた男たちだ。

しかし彼らは、ナオに発砲をした後、何か言い合いをしているらしく、ナオが室内を覗いても、それに気付かないでいた。

そこでナオは、そのまま突入して彼らを一網打尽にしようかと、その時考えていた。

しかし、それでは、あまりにも軽率すぎる。

入った瞬間、撃たれてはバカだ。

そこでナオはまた考えて、近くに転がっていた鉄パイプを手に取り、それを室内に投げ入れることにしていた。

そうすることによって、男たちの気をそらし、隙を作ることができると思ったからだ。

ナオは、鉄パイプを手にとると、それを徐に投げ入れる。

カラン、コロン・・・

.....

バツ・・・バババババ・・・バババババ・・・バババババババ

バババババババ・・・

すると案の定、室内からの発砲が相次いだ。

しかしそこで、唐突に銃撃が止む、そしてその代わり聞こえてきたのは「チッ、弾切れだ！！」という二人の舌打ちの声だった。

(してやったり・・・)

ナオはそこで一瞬ほくそ笑むと、その後、躊躇せず意を決して室内に乱入していた。

入ってすぐ、一人の男が驚いて頻りに弾切れのマシンガンが発砲しようと、引き金を

引いている姿が目飛び込んでくる。

しかしナオは、それを瞬時的に見て取ると、嘲笑って二発の銃弾を発砲、
バーン、バーン

するとその弾は、見事、男の足を射抜いてそのまま即倒させる。

「畜生テメー！！」

だがその時、もう一人いた迷彩服の男が殴りかかってきたので、ナオは咄嗟的に身を沈めると、その攻撃をやり過ごす。

そして、立ち上がりざまにハンドガンのグリップを拳代わりにして殴り付けると、襲いかかってきた男の側頭部へ強烈な打撃としそれを殴打、

ベキッ・・・

すると、妙に鈍い音がして殴られた男は、ふらふらとその場でヨタつく。

その直後ナオは、足を大きく振り上げて、そのまま男の脳天に踵落としをお見舞いする。

「ぐえっ・・・」

それで男は床にドサッと崩れ落ち、そのまま白い目を剥き意識を失う。

しかし、そのナオの踵落としは、強烈だった。

倒れた男はその後、口から泡を吹くとヒクヒク痙攣している。

だが、これでしばらく、立つことは出来ないだろう。

ある意味、これで決着はついたといい。

ナオに、その軍配は、あがったのである。

いざ銃撃戦が終わって、特務隊員と警視庁の機動隊が一堂に会し、集結してみると、五人の死傷者を含む三人の男たちが逮捕されていた。

特務隊員には、二人が銃弾を浴び肩と足を負傷し軽傷、しかし警視庁の機動隊には六人の死傷者が出ていた。

それに、銃の乱射騒ぎに巻き込まれて、一般の人々には二十五人の重軽傷者が出、その内の四人が死亡、取り逃がした男たちは五人に上った。

その逃げた男達の中に、ナオが追い掛けた米川克彦の数も含まれている。

「まったくこれじゃ、戦争と同じだな」

そんな中、井の頭通りからセンター街に戻ってきた佐渡課長は、先程から救急車へと次々に搬送されていく怪我人を見ながら、そうぼやいていた。

しかし、そう思っても、仕方がないだろう。

今回の銃撃で、この通りには多くの被害がでているのだ。

最初に爆弾が爆発したと思われる建物も、見るも無残に破壊され、迷彩服を着た白虎隊という武装グループによって銃撃を受けた他の建物は、惨憺たる被害だ。

それに、一般市民に、二十五人の重軽傷者、これでは何の冗談にもならない。

そして警視庁には、六人の死傷者がでている。

これでは戦争だとぼやくのも、うなずけるのである。

「でも、課長が無事でよかったです。特務一課は、課長あつてのチームですから、そのま
とめ役がいなくなっは一大事ですからね・・・」

しかしそんな時、二階堂ゆかりが少々ふざけてそんな事を口走る。
だから課長は破顔すると、その時、照れた笑いを浮かべていた。
ゆかりに評されたのが、恥ずかしかったのだろう。
彼は、顔に似合わず、照れ屋なのだ。
だが、その佐渡の笑いも、目の前で知らん顔しているナオの顔を見ると、次には厳しい表情にうって変わる。そして佐渡は、ゆかりをよそにナオを呼び付けると、こう言って叱り付けていたのだ。
「こらナオ、こっちへこい！！ おまえは今回もまた、俺の言い付けを無視して勝手に動いたな。しかしお前は どうして そうなんだ。いつもいつも命令を無視して、それでもおまえは特務機関の隊員か！ 今度ばかりは許さないからな、ここでみっちり特務機関の規律を仕込んでやる、覚悟しろよ」
そう言うと佐渡は、ナオの首根っ子をつかんで、そのまま建物の影に連れていき、ナオを地面に正座させていた。
そして、あれこれと五十ぐらいの教訓を垂れて、ナオを徹底的に再教育している。
だから、それを見てゆかりは、可笑しくてならなかった。
ゆかりからしてみれば、ナオがそうなるのは、自業自得といえる。
だが、そんなナオを相手にしなければならない課長の方も、気苦労は絶えないだろうと思う。
何せ、すぐふてくされる問題児なのだ、その女を調教するには一筋縄では行かないだろう。
しかし、それも仕方がない、この際だからナオは、課長に叱られたほうがいいのである。
すぐ命令無視し、暴走するのは今日に限ったことではない。
その為、誰かがそれを、諫めなければならないのだ。
まあ、課長の気苦労は絶えないだろうが、これでまた一つの薬になるだろう。
この後、課長の小言は、二十分間にも及び続いたのは言うまでもない。
その間ナオは、頬を膨らましふてくされ続けていた。
それを見て、ゆかりは、舌を出して笑っていたのである。

第二節

特務機関が捕らえて逮捕した、白虎隊という武装グループの三人の男達には、その後、警視庁の取調室で、特務機関が立ち会いのもと合同で尋問が行われていた。
「だから、米川って奴に、誘われてやったっていつてるだろ、聞こえねーのか！？」

取調室に響く怒声、それは逮捕された白虎隊のメンバーの一人、峰岸という男が発する声だ。

「お前そんなふてぶてしい態度をとっていいと思っているのか！？ おまえ等のおふぎけで、多くの人が傷ついて死傷者も出ているんだぞ。捕まえた以上、ただじゃおかないからな！！」

その男の怒声に負けじと、警視庁側の取調官が、有無を言わずやはり怒声を張り上げる。三人の男を逮捕して、取調室に順番に呼び出したのはいいが、彼らは警察を舐めたようにいきがると、しかめっ面をして尋問に応じている。

しかし、いきがっている割には、意外と口は軽かった。

警察側の『今回のセンター街襲撃事件の首謀格の男は誰か？』という質問に、男は米川克彦がそうだと応えている。

男の話によると、米川は戦争マニア十二人の男達を集めると、自分が主犯格となり人の集まる場所で、盛大な戦争ごっこをしようと襲撃を企て、話を持ち掛けたらしい。

集まった男たちは、皆、銃を実際に撃って快感を得たいという気の狂った精神異常者ばかりで、その話を持ち掛けられた時、皆、全員一致で、その申し出に賛同を示したという事だった。

その話を聞くと、さすがの警察も飽きれ、しばらく声も出ないほど絶句していた。

「それで、襲撃に使ったマシンガンは、どこで手に入れたんだ！？」

取調官が、また、きつい口調で問いただす。

「米川が全部用意したよ。俺達はただ銃をぶっ放しただけだ、他に何もしちゃいねーよ！」

男は悪怯れた様子でもなく、そう言い放つ。

「それじゃ、その米川って男がお前たちをそそのかし、すべての計画を企てていたんだな？」

「うるせーな、何度も言っているだろ、米川がリーダーだ。俺達はただ、そいつに従って襲撃を行っただけだ。捕まえるんなら、米川だけにしろよ！」

男は無責任にも、全ての責めは米川だけにあるような口振りで、取調官に応じている。「おまえ等、無関係な人を殺しておいて、その軽薄な態度はなんだ。自白したからって、罪が軽くなるとは思うなよ！！」

そんな男の態度に、立ち合っている特務機関の隊員は、胸ぐらに掴み掛からんばかりの勢いで、怒りを顕わにしていた。

「まあまあ、ここは抑えて。まず、取り調べが先決だ。まだ、色々と事情を聞かないと埒が明かないからね・・・」

一人の警視庁幹部が、怒りを顕わにする特務隊員を宥めて、これからまだ続く取り調べを、円滑に進めるための段取りをとっていた。

「おおお、怖い怖い。これだから特務隊員には、横暴な奴が出てくるんだ。俺、知っているんだぜ。特務機関には、コンビニに強盗に入った犯人を捕まえて、病院送りにする乱暴な女がいるそうじゃねーか。それを考えれば、俺達より特務機関の方が無法者の集まりなんじゃねーのか？ 見てたんだぜ、ワイドショーの報道を・・・」

「貴様！ 特務機関を馬鹿にするのか！！」

男が言った、なぶるような言葉に対し、特務機関の隊員は、更に顔を赤くして憤慨し

ていた。

おそらく乱暴な女とは、ナオのことだろう。

確かにナオは、他の特務隊員とは一線を画する変わり者だ。

しかし、武装して襲撃事件を起こすような男に、特務機関の悪口を言われては、我慢がならない。その取り調べに立ち合っている特務機関の隊員は、今や眼球が飛び出るぐらい目を大きく見開いて、激昂している。それをやはり警視庁側の幹部が宥めるが、その怒りはそう簡単にはおさまる気配は見せなかった。

ところ変わってここは、特務機関E X X P《ハード・ガン》の本部、警視庁の目の前にある建物の二階、特務一課のデスクフロアには、渋谷センター街から帰還した特務隊員たちが、その武装を解き、熱いコーヒーを一杯飲みながら、今は寛いでいる光景が目についていた。

「ナオ先輩、ナオ先輩、どうでしたか渋谷、人がいっぱいいたでしょう。私も行きたかったなー。だって渋谷といえばハチ公ですもの、私もそこで一度、素敵な男性と待ち合わせしてみた〜い・・・」

相変わらずわけの判らないことを口走るモモが、防弾チョッキを外しながら装備を解いている、ナオに対し、甘ったるい声を響かせて擦り寄ってきていた。

(この後輩はなぜ、私ばかりに近付いてくるのだろう?)

と、ナオは時々そんな事を思う。

何も、ナオはモモのことを嫌っている訳ではないが、時たま、うっとうしくなる時もあることは確かだ。

そんな事を知ってか、知らずか、またモモはくだらない話を持ち掛ける。

「わたしね、彼氏ができたら、一番最初に渋谷の街でデートしたいと思っているんです〜。ナオ先輩聞いてますか〜？　それが、わたしの夢なんですよ〜」

「そう？　だったらそうすれば、私には関係のない事よ・・・」

「やだ〜、つれないですね〜。ナオ先輩もいずれは彼氏つくるんでしょー？　そしたらやっぱり渋谷よ渋谷、ロマンチックにとはいかないけど、やっぱり渋谷よね。何と言っても渋谷、それしかな〜い」

「あなたうるさいわよ、さっきから渋谷、渋谷って。そんなにそこが好きなら、勝手に行けばいいでしょう」

「ひどーい、私に彼氏ができないのは、やっぱりナオ先輩の呪いが掛かっているからかも？　だって、先輩って、人を不幸にするオーラが漂っていますもの。そうですよね、ゆかりせんぱ〜い」

「そうかもね・・・」

それを受けてゆかりは、どう答えていいのかわからず、曖昧な返事を返していた。

しかしナオが、きつい目でゆかりを睨んでくる。

するとゆかりは、そ知らぬ顔をして自分のデスクに腰をかけると、日誌の記帳に精を出し、ナオを半ば無視してやり過ごしていた。

【ゆかりの日記】

今日、十二月十三日現在、我々、特務機関は渋谷センター街へと向かう。

白虎隊という武装グループによる、予告状が警視庁へと届いたからだ。

我ら特務機関は、十一時二十分にハチ公前広場で点呼を完了、そのままセンター街に直行し、警視庁機動隊とともに現場の警備にあたる。

点呼完了から約二時間後、午後一時二十分に、白虎隊を名乗る武装グループがセンター街の一角、ファーストフード・ショップを爆弾で爆破し急襲。

それを皮切りにして、武装グループがセンター街の各所で銃を大々的に乱射、多くの人々や商店を殺傷しまた破壊した。

武装グループの人員は、全部で十三名、みな迷彩服とマシンガンを所持し、その蛮行は目に余るものがあった。

特務機関は、その急襲を受けて応戦、センター街内で銃撃戦となり、二人の特務隊員が負傷した。しかし、奮闘の末、我々、特務機関は三人の身柄を確保、それ以外の武装グループの男たちは五人は射殺、残り五人は逃走する。

午後二時三十分には、その銃撃戦は終了、現場の事後処理は所轄の渋谷警察署の警官に任せ、特務機関と警視庁機動隊は、本部へと帰還する。

・・・・・・以上、今日の日記を記す。

記帳者：二階堂ゆかり

ゆかりは、日記をそこまで書き終わると、ペンを置いて冷めたコーヒーを一口、口に含んでいた。口の中には苦みが広がり、ゆかりは不味そうに顔をしかめる。

冷めたコーヒーは、いまいち美味くないの一言につきる。

「ところで先輩、聞きましたか？ 例の捕まった白虎隊を名乗る武装グループの三人は、警視庁の取り調べで、次々に自白をはじめたそうですよ。聞くところによると、その三人は、あの米川克彦という指名手配中の男と一緒に戦争ごっこをしてみたかったから、今回の事件を起こしたという事なんです。はっきり言って、あまりにもふざけていますよねー。結局、特務機関も戦争マニアのお遊びに、付き合わされたって言うことでしょう？ 馬鹿げていると思いませんか〜」

そんな時、モモが、めずらしく意外にまともな意見を、ゆかりに話しはじめていた。「それですね〜、結局のところ今回の襲撃事件は、その米川克彦が主犯格となって起こされた事件と認識され、逃げた米川と残りの四人の男の行方を追うために、特務機関と警視庁が合同で捜査本部を設けるそうですよ。米川って男は、ナオ先輩が捜している男でしょ？ 特務機関も出張って米川の捜索を公に行うとなると、ナオ先輩にとっても願ったりかなったりの事になるんじゃないですか〜？ 一人で、こそこそ、米川を捜すことに、ならずには済みますものね〜」

「それは本当？ 特務機関も、米川の捜索に参加するって？」

ナオがモモに対し、目の色を変えて問いただす。

「そうですよ～、ナオ先輩。これで合法的に、米川の捜索が出来るようになりますねー♥」

モモはそう言うと、またナオに擦り寄って、猫のように甘えてきていた。

ナオは、嫌々ながらも、そのモモの挙動を受け入れている。

だがその時、突然、課長の佐渡一が現れていた。

「おお、みんな寛いでいるな。しかし疲れているところ悪いんだが、俺の話聞いてくれ。楽な姿勢のままでもいいぞ・・・」

課長は、突然、特務一課のデスク内に現れると、思い思いの椅子に腰掛けてくつろいでいた隊員たちに向かって、そう言い渡していた。

課長は、徐に口を開く。

「いいか、さっき事件後の会議で俺達、特務機関・特務一課は、明日から今回の渋谷センター街襲撃事件の首謀格と見られる米川克彦という指名手配中の逃亡犯と、以下、四人の捜索をする事になった。そこでだ、特務一課・第一班から六班には手分けしてその男たちの捜索に乗り出してもらいたいと思っている。もちろん警視庁側の刑事特捜班との合同の捜査になると思うが、今から担当の内訳を言うぞ。まず第六班、第五班は、熱川啓介、横田紀一の捜索だ。この二人は今日の現場から逃走した五人のうちの二人だ。警視庁の取り調べで自供され、この二人の顔が割れた。それにあと二人、西尾光一と砂川雅人は第三班、第四班の担当とする。よくメモしておくように。そして主犯格の米川に関してだが、こいつは第二班と第一班が出張ってもらいたい」

そこまで言うと、佐渡は口をつぐみ、この場に集まった特務隊員を見渡して、意見はないかの確認をとっていた。

「やったじゃないですか、先輩。第二班は米川の捜索担当ですよ。ラッキー、ラッキー、またラッキーですよねー。私は捜索に関係ないけど、頑張ってくださいねー」

モモは、小声でナオに聞こえるように、その事を耳打ちしていた。

それを受けて、ナオはにやりと笑う。

「いいか、捜索開始時刻は明日の午前十時からだ。その前に警視庁の刑事特捜班と打ち合わせをしてから、色々な段取りを行う。くれぐれも出勤は遅れることのないよう、よく言っておくぞ。それじゃ今日のご苦労だった、用のないものは、夜勤の者と交代して帰っていい。明日は、絶対、遅刻するなよ、警視庁の連中に笑われるからな・・・解散！」

その言葉を最後に、特務一課の面々は、帰りの身仕度に取り掛かりだしていた。

報告書を書く者や、書類を整理しなければならない事務員は数人残るが、これから夜勤の連中と職務を引き継いで交代となる。

ナオも、日誌を書き終えたゆかりとモモとともに、更衣室へと向かっていく。

その中で、モモがゆかりとナオに対して、ある提案をおこなっていた。

「ナオ先輩、ゆかり先輩、今日はなんとか事件も無難に乗り越えたことだし、ここはパーッと、ナオ先輩のアパートで飲み明かしましょう。コンビニでビールとおつまみを買って、三人でテレビを見て、色々語り合しましょうよ～」

「ええっ？ 今日、これから？」

ゆかりが、モモの発言を受けて、少し渋い顔をする。

「そうですよ、ゆかり先輩。久しぶりに三人で、汚いナオ先輩のアパートで飲み明かすなんておつまみですよ。ねえ、いいでしょ、ナオ先輩、どうせ一人で家に帰ったって、つ

まらないですよ」

「汚いのは余計よ。でも私は、お金は出さないわよ」

ナオは、そう言いながらも、その申し出を断ったりはしなかった。

「しょうがないわね、それじゃ少しだけよ。明日の事もあるし、程々になら飲んでもいいわ」

「やったー、それじゃ決まり。さっそくこれからコンビニに、買い出しにいきましょう」

モモはそう言うと、一人子供のように喜んではいきまわっていた。

そんなこんなで、三人は、ナオのアパートへ足を運ぶことになる。

電車を乗り継いで、ナオのアパートへ向かう途中、コンビニでビールとおつまみを調達する。

ナオは、アルコール類が駄目なので、烏龍茶と弁当、それにおでんを買う。

モモとゆかりも弁当は欠かさず買ったが、それ以外に、イカの燻製やスナック菓子、コアラのマーチにポッキーなどを大量に買い込んでいる。

そして、女性もののファッション雑誌を退屈しのぎに数冊レジに出し、料金をゆかりとモモの割り勘で支払っていた。

モモとゆかりは、ナオのアパートまで来ると、さっそく上がり込んで勝手にコタツの電気をつけ、寒さしのぎの為に暖を取りはじめていた。

そして、テレビのリモコンをいじると、スイッチを入れ、コタツの上に弁当を広げだす。

テレビからは、慌ただしく、ニュースのオープニングが流れだしていた。

六時半から始まる、《ニュース6：30速報》という番組だ。

おそらくそのニュース番組では、今日のセンター街急襲事件が、第一番で放送されることになると思われる。

番組のオープニングの終了と同時に、女性のニュースキャスターが大写しにされ、こんばんはの挨拶で、ニュース番組が始まりをむかえていた。

しかしその頃ナオといえば、一人アパート近くのビデオレンタルショップで、映画のタイトル選びに没頭していた。今晚、三人で映画を見る為に、ここまで足を運んでいたのだ。

ナオは、よくこのビデオレンタルショップを利用するため、主要な映画のタイトルはほとんど見尽くしている。

その為、タイトルの選びには、少々苦勞していた。

やはり、せっかく借りるのなら、面白い映画がいい。

だが、いくら探しても、それらしいものは見つからなかった。

仕方がないのでナオは、この店で一押しの映画はないかと、店の店員に聞いてみる。

すると、その店の店員は、一つのビデオテープを取り出して、これがウチのお薦めの映画ですよ、見応え抜群です、とってそれを差し出して来ていた。

ナオは、あまりにもその店員がこれは面白いと力説するので、そのビデオを借りる事にする。

「借りて来たわよ、ビデオ」

ナオが、ビデオレンタルショップから帰ってくると、ゆかりとモモの二人は、すでにコンビニで買った弁当を平らげ、コタツの上にビールとおつまみを広げて、酒宴の準備を整えているところだった。

「一体どんなビデオを借りてきたんですか、先輩。私に見せて」

そう言うとモモは、ナオからビデオテープを受け取る。

そして、そのテープのタイトルを見て、文句を言いだしていた。

「何ですかこれ、《爆裂ハンター・サキ》って？ はっきり言ってこれ、子供が見る特撮映画かなんかじゃないんですか～、先輩、趣味悪いですよー」

「そんな事言っても、しょうがないでしょ。それしかなかったのよ。私がお金出したんだから文句言わないで！」

ナオは、少々ふてくされて、モモの言葉に応じた。

「でもいいか、たまにはこんな映画も、意外と面白かったりして？」

モモは一転して、浮き浮き気分になる。

それは、あたかも、げてももの料理と知らずに食事を食う前の、境遇のようだ。

「ナオ、私たちもう弁当済ませちゃったわよ・・・あなたも早くちゃっちゃと食べちゃって、その後、飲みあかしましょう」

そんな中、ゆかりがナオを急かすように、そう言って来ていた。

「判ったわ、早く食べればいいでしょ」

そう言った反面、ナオは、ゆかりの言葉に反発し、ゆうに一時間はかけて弁当を食べだしていた。

それからナオが食事を終えたのは、八時十分前になってからの事だった。

その間、モモとゆかりは待ち切れずに、宴会をはじめてしまっていた。

ナオとしては、自分は飲めないの、それは別に構わなかったが、ビールを美味そうに飲んでいる二人に対してちょっとした不満を感じ、ささやかな抵抗としておつまみを盗み取りしてやっていた。

「ああ、駄目じゃないですか、それ私のコアラのマーチ。先輩はお金出さなかったんだから、食べちゃ駄目ですよ！」

そんなナオに対し、モモが非難の言葉をぶつける。

「いいじゃない、全部食べるわけじゃないんだから。そんなに一人で食べると太るわよ」

そう言われて、モモはドキッと、自分のお腹の肉を掴まんでいる。

「それはそれとして、そろそろ見ましょうか《爆裂ハンター・サキ》、ちょっと気が進まないけど、せっかくお金を出して借りてきたんだから、勿体ないでしょう？」

そう言うとゆかりは、ナオ愛用のビデオデッキに、借りてきたテープをセットしていた。

「楽しみですね。一体どんな映画なんでしょう？」

最初は不満をもらしていたモモであったが、今はビデオの内容がはたしてどういうものなのかが気になって、わくわく気分を隠しきれない。

ゆかりがビデオのリモコンを操作して、再生のボタンを押す。

もちろんその前に、テレビの音量を少し上げておくのを忘れない。

映画には臨場感が大切だ、そうすることによって迫力が、いくぶんかは増すことだ

ろう。

ビデオデッキは、小気味の良い再生音を発しながら、テレビ画面に映像を映し出す。

すると、ある映像が大写しになった。

『ああ～、ああ～、ああ～っ、ああーっ』

三人が居るアパートの一室に、突然、女性のおえぎ声が響きだす。

そこには、裸の女性二人が抱き合っ絡み合う、姿が大写しにされていた。

「「・・・・・・・・」」

ナオ、モモ、ゆかり、三人の表情が一瞬硬直する。

ブーッ！

「なんですか、これ～っ、エロビデオでしょっ！　こんなの見てどうするんです！」

モモが、口にしたビールを吹き出しながら、速攻でナオに突っ込みを入れていた。

『ああ～、ああ～、うん、うーっ♥』

その間にも、テレビからは、女性の激しいおえぎ声が聞こえてくる。

「もう信じられないです～。で、でも、すごい・・・・・・・・」

そう言いつつしかしてモモは、テレビの画面に釘づけになっていた。

ゆかりは顔を赤面させて、何も言わずにやはり画面を凝視している。

しかしナオは、無表情のまま知らんぷりして、烏龍茶とおでんを頬張っていた。

ビデオは続く。

そのビデオの内容は、こういうものだった。

主人公のサキというエージェントが、さまざまなエッチ体験をしながらアメリカンクラッカーを片手に、悪の闇組織に立ち向かっていくという、無茶苦茶な世界設定をもつ映画だ。

その話の途中、性技戦隊サドレンジャーという五人組のコスプレ隊が登場するが、主人公のサキというエージェントは、それらも手玉にとり悪の組織を壊滅させていくというハラハラドキドキの映画活劇だ。話の最後には、やはりエッチして気持ち良く昇天して終わる、というストーリーを持つ異色作だが、これが意外に面白い。

モモとゆかりは、いつしかその話に引き込まれ、時間が経つのも忘れて見入っていたようである。

しかしナオといえば、自分で借りてきた映画のタイトルといえども、ゆかりとモモがコンビニで購入した女性もののファッション誌に目を落として、半分以上も、そのビデオの内容は見てはいなかったのだ。

約二時間が経って、ようやくビデオが終了すると、モモは、「ふう～」と一頻り息を吐いて、その余興さめやらぬ興奮を抑えていた。

「ナオ先輩、これ傑作じゃないですか。こんな映画よく見付けてきましたね～。前言撤回しますよ、これおもしろーい」

モモはしきりに称賛している。

「ねーねー、ゆかり先輩はどうでしたか？　わたし興奮しちゃったー・・・・・・・・」

「そうね、ちょっと度が過ぎるけど、おもしろいんじゃない？」

どうやらゆかりも、この作品のすばらしさを実感している様子だ。

その後、三人はくだらない話で、時間をつぶす。

そんな中、モモがある話題をナオにふる。

「ねえ、ナオ先輩。そういえばどうして先輩は、黒峰会という闇組織を追って米川っていう男を捜しているんですか？ その黒峰会とナオ先輩の関係ってどうなっているの？」

それは唐突な質問だ。

「あなたには関係ないわ、その話は聞かないで！」

そんなモモに、ナオは、突き放した言い方をしていた。

少し怒っている様にも感じとれる。

「えーっ、それってどう言うことなんです？ そう言われると、ますます聞きたくなりますよね、ゆかり先輩？」

「それはナオの問題なんだから、いいんじゃない？ そっとしてあげなさいよモモ」

「えー、でも、気になるじゃないですかー。私たち三人の間に隠し事はなしですよ」

そう言ってモモが、不満の声をぶつけていた。

「わたし、何もしゃべらないわよ。余計な詮索はして欲しくないわ」

ナオがこう言うと、もう二人にはお手上げだった。

彼女は、異常なまでに頑だ。

一度機嫌をそこねると、一週間近くは口をかたく結んで、モモとゆかりにさえ口をきかず無言の抵抗を試みるほどだ。

だから、これ以上モモがナオに黒峰会の事を問いただしても、ある意味、無意味だった。

仕方がないので、モモもその話題は避け、ビールを飲むペースを上げながらそれ以後、別の話でその場を盛り上げさせることに終始する。

そう、そしてその後ナオに、黒峰会の事は一切聞かなかったのである。

第三節

次の日の朝、三人は、ナオのアパートの一室で目覚めていた。

モモが眠い目をこすりながら、コタツから這い出してくる。

結局のところ、モモとゆかりの二人は、昨日、酒を飲みすぎて酔いつぶれ、終電にも間に合わず、ここで一夜を過ごすことになっていた。

昨晚、二人はナオに毛布を二枚借りると、コタツで就寝していたのだ。

コタツで寝るのは少し肌寒かったが、文句は言っていられず、しかし熟睡したのは確かであった。

その頃、コトコトと、お湯が煮たつ音がゆかりとモモの耳に聞こえてくる。

そして、かぐわしい味噌の香まで、匂い立ってきていた。

ゆかりとモモの二人が起きだして台所の方を覗くと、ナオが一人エプロンをして、大根を切っていた。

「あらナオ、もしかして朝食作ってくれているの？」

ゆかりが意外なナオの姿を見て、怪訝に問いただす。

「やだー、ナオ先輩、料理できるんだ。わたしチョットいがーい。この前、朝食はパンとコーヒーだけだって言っていたじゃないですかー」

「嫌だったら食べなくていいのよ・・・」

ナオのぶっきら棒な言い方、でもそれはいつもの事だった。

「いーえ、そんなコトないです。食べます、食べますよー。それで味噌汁の他にメニューはなんなんですか？」

「目玉焼き・・・」

ナオは、当たり前のように、一言そう言っていた。

それは、超オーソドックスな朝の定番メニューだ。

三十分後、三人はコタツに座り込むと、さっそくナオお手製の食事に手をつけ始める。

ナオは、味噌汁を作る際、煮たったお湯に味噌を溶かしてから大根を入れたので、せっかくの味噌の風味が飛んでしまった一品が出来上がっていた。

それに目玉焼きは少し焦げて、はっこの方がぱりぱりになっている。

しかしそれでも、食えないことはない。

ゆかりは目玉焼きに醤油をかけ、モモはソースをかけている。

お好みは色々だ。

しかしナオはといえば、塩をふりかけて食べている。

それを目撃したモモに、それじゃ《ゆでたまご》と同じじゃないですか、と言われたが、ナオは気にしたきらいもなく平然としていた。

朝食も終わり、三人は特務機関本部へ出勤する準備を済ませていた。

ナオはまたパジャマから外行きの私服に着替えている。

モモとゆかりは、昨日の服のままだ。

二人は一晚、家に帰らず、ナオのアパートへ泊まり込んだのだからしょうがない。

二日連ちゃんと同じ服を着ていても、女性だから匂い立つことはそれ程ないだろう。

そんな訳で三人は、ナオのアパートを後にすると、慌ただしく特務機関に出勤していくのであった。

三人が特務機関に到着すると、もう既にほとんどの隊員たちが顔をそろえて、佐渡課長がデスクに現れるのを待機して待っている様子だった。

他の隊員たちの出勤は早い。

別に、ナオとゆかりとモモの三人が遅刻したわけではないが、出勤時間ぎりぎりだったのは事実だ。三人は更衣室で即座に特務機関の制服に着替えると、そそくさとして特務一課のデスクに入る。するとそれと時を同じくして、丁度、佐渡一課長が姿を現したところだった。

「おお、ナオ、遅刻はしなかったようだな、今朝も元気で何よりだ。しかし相変わらずス

タイトルいいお前は、」

そう言うと佐渡は、ナオのお尻をポンと叩く。

どうやらそれは、朝の挨拶のつもりのようなのだ。

「やだ、またセクハラしてますよ課長ったら。子持ちのくせに、まったくエロじいね」

モモは、その佐渡の行いを見て、ゆかりにそっと話し掛けていた。

「仕方ないわよ、ああ見えても課長はナオのこと可愛がっているんだから、あれでスキンシップをとっているつもりなんでしょ・・・」

ゆかりは冷静に見て、佐渡の思惑をモモに語っていた。

「でも、あれは明らかにセクハラですよ。よくナオ先輩は怒らないですね？ 私ならビシッと一つくらい喰らわせてやりますけどね、実際」

ゆかりとモモがこそこそ話をしている間に、ナオといえば佐渡の後ろ姿に向かって、右の中指を立てて挑発的な態度を示していた。

それを見てゆかりとモモは、口を押さえながらプププと笑っている。

しかし、それに気付かず佐渡は、自分のデスクにつくと、おもむろに皆に向かって話し始めていた。

「いいかみんな、今日は昨日いっておいたように、白虎隊というグループの逃げた男たちの捜索を行うことになっている。もう既に警視庁の刑事特捜班は、特務機関の三階の会議室に集まっている。さっそくだが、そこで俺達も今日の捜索方針を聞くことになる。だから今から会議室に行くぞ」

そういう終わると佐渡は、特務一課の隊員を引き連れて、三階へと足を運んでいた。

特務一課の隊員が、三階の会議室へ入ると、そこには佐渡が言ったように警視庁のお偉い方と、その部下である特捜班の面々が顔をそろえていた。

彼らは大分くつろいでいる様子で、先程から仲間内で色々な雑談を交わしている様子だった。

しかし特務一課の隊員が、その会議室の室内に足を踏み入れると、特捜班の連中は椅子に座ったまま姿勢を正して雑談を止めていた。

さすがに警視庁のメンバーだけあって、規律がしっかりしている。

ナオもゆかりと共に室内に入り、空いている席を探そうとして辺りを見渡していた。

すると一人の男が目につく。

「やあ、ナオちゃん久しぶりだね。俺だよオレ、池沢元だ。君とはもう何年も会っていないけど、元気だったかい？」

ナオに対し警視庁の特捜班の一人が、人の良さそうな気さくな態度で声をかけてきていた。

「あっ元さん？ 久しぶり、三年ぶりかしら？」

そんな男に、ナオは少し驚いて挨拶を交わしていた。

「いやー、だいぶ君も大人になったね。ますます死んだお母さんにそっくりだ。美人だったんだよ、君のお母さんが若い頃は・・・」

「そう？ それより元さんは今回の捜索に参加するの？ ここに居るって事はそうなん

でしょ？」

ナオは、その池沢元という男に、そう質問をしていた。

「そうだよ、オレは今回、そらそこの警視殿、木谷律子氏が陣頭指揮を執る中、特に米川って言う男を捜査する事を含めて、その全ての捜査員のまとめ役をするんだ。特捜班の連中を率いてチーム分けを組ませてね・・・」

「それは本当？ あなたが米川を捜査するって？」

「本当さ、オレは刑事特捜班の捜査主任だ。警視庁の上層部からその役を任命されてね、だから今日ここ特務機関に伺ったっていう訳さ。ナオちゃん君も今回の捜索に参加するんだろ？ それで君はだれの捜索担当になったんだい？」

「米川・・・」

「ええ、それは本当かい？ 奇遇だね。それじゃオレと一緒に合同捜査するって事か。いやうれしいよ、高崎警視の娘さんと仕事できるなんて思いもよらないからね・・・」

「ぐずッ、ヴん、あのちょっと池沢元警部補、今から捜査方針の説明会を始めたいと思いますから、少し私語は慎んでもらえますか？」

そんな時、嬉しそうにナオに対して話し掛けていた池沢元警部補に、警視庁側の女性警官から制止の声が掛かっていた。

「ああ、これはどうも失敬。今、席に着きます。それじゃナオちゃんまた後でね。合同捜査、期待しているよ！」

それを受けて、池沢元警部補は、罰の悪そうに自分の席に腰掛け姿勢を正していた。

そんなこんなで、特務機関と警視庁の、合同捜査方針説明会が始まりを迎えていた。

会の冒頭には、警視庁側のお偉い方から挨拶が続く。

約十五分位だったろう、その後いよいよ捜査方針の本題に入る。

「えー、皆さんも知ってのとおり、昨日、渋谷センター街で、白虎隊を名乗る武装グループの急襲がありました。その事件は特務機関と警視庁機動隊の活躍でなんとか収拾がつかしましたが、結局、武装グループのメンバーと見られる内の五人の男たちを取り逃がしてしまいましたということです。彼らは、皆、街中でマシンガンを乱射して、一般市民に傷を負わせた無法の輩です。それに、特務機関や警視庁に、挑戦状ともとれる文章も送り付けてきました。その為、逃走以後、彼らはまた今回のような襲撃事件を起こす可能性がないとは限りません。ですから早急に逃げた五人の男たちを捜査し、その身柄を拘束しなければならないでしょう。そこでです、今回、我々は、特務機関と警視庁刑事特捜班で、合同捜査本部を設けることになりました。特務機関が今回の捜索に参加するのは、まだ逃げた男たちが銃火器を所持している可能性があるからです。私たち警視庁の者としなくても、その可能性がある以上、特務機関に協力を請うのは当然のことです。ですから今後、特務機関・特務一課の面々と、警視庁刑事特捜班の捜査員たちとで、ともに協力して逃げた五人の男の行方を追うことにしましょう。それに関してお集まりの皆さんには、不満の点はありませんね？ それがなければ、これ以後、話の本題に入りたいと思います。では捜査方針の内容は、池沢捜査主任から伺いたいと思います。池沢主任、前へどうぞ・・・」

先程、池沢警部補を制止した女性警官が、よどみのない澄んだ声で今回の捜査本部発足の経緯を語っていた。

そんな中、特務一課の隊員たちと特捜班の連中は、謹聴してその話にうかがいを立てている。

ナオもその話を先程から真剣な顔をして聞いていた。

「ねえねえ、ナオ、あの人誰なの？ あなたの知り合い？ さっき話していたでしょ。人のいい優しい人ね？ 男嫌いなあなたにしては、あんな知り合いがいるなんて意外だわ」

そんな折り、ゆかりがナオに椅子に腰掛けながら、小声で話し掛けてきていた。

「池沢警部補よ——私の昔からの知り合い。名前は元、もと父の部下だった人……」

「へえー、高崎警視の部下ね？ それで有能な人なの？ 捜査主任に抜擢されるぐらいだから、仕事の出来る人なんでしょう？」

「さあ？ でも噂できいたけど、やっと警部補に昇進したそうよ」

ナオはそう言うと、会議室の前に備え付けられている壇上に登壇していく、池沢元警部補捜査主任の顔を覗いていた。

池沢は人よりも少し小柄で、前にこごまった猫背の体格をしている。

歳は四十五過ぎだが、脂ぎった中年の観はしない。強いて言えばこざっぱりとしたその顔立ちに、なんとと言うかお茶と醤油煎餅でも似合いそうな気のいいおじさんといったところだろう。

下町の江戸っ子かたぎでもなく、気質は温厚な人だ。ある意味ではさえない中年のサラリーマンのような感じも受けるが、そこまでは錆びれた様子はない。

頭髮は短く刈られてはいるが、少しぼさぼさだ。

彼は警視庁の制服ではなく、薄汚れたよれよれの背広を着ている。

特捜班の若い捜査員のように、ピシッとスーツで決めている訳でもなく、少々貧乏くさい。

だが、彼の人の良さは、その顔ににじみ出ている。

池沢元は、壇上に登壇すると、手に持っていた厚手のファイルを広げそれに目を落とす。

そして少し躊躇するように、辺りを見渡していた。

「では皆さん、さっそく今回の捜査方針をお話ししましょう。もう既に皆さんの手元には、逃走した五人の男たちの素性を示す供述ファイルが配られていることでしょう。

そのファイルは、昨日、捕らえた三人の男たちの自供によって作成されたファイルです。まずはそれにざっと目を通していただけるでしょうか。そこには逃げた男の顔写真や目撃者、捕らえた男たちの供述によるモニタージュ写真が掲載されていると思います。それに経歴や余罪、年令に氏名、居住先の住所なども明記されています。それらの資料と共に、今後の捜索を行うこととなりますから、よく頭に焼き付けて事に対処してもらいたいと思います……」

池沢元警部補の捜査方針説明は、何の滞りもなく始まっていた。

そこに集った特務一課の面々や警視庁特捜班の面々も、その話を聞き漏らす事無く耳を傾けていた。

「さてでは、昨日センター街の現場から逃げた一人の男、熱川啓介の事について話しましょう。この男は現在無職、二十五歳、独身、半年前に製材所を辞めフリーターとして

生活、捕まった仲間の供述調書によると、時たま新橋の《らんらん亭》という飲み屋によく出没すると言います。まだこの男に関する身辺調査はしていませんから、捜査を担当する者は、まずこの男の交友関係を洗うことから始めてください。

そして横田紀一、彼は現在学生です。都内の三川短期大学に在席していますが、この男に関しては詳細な情報が判っています。彼は学生ですので世田谷に住むその両親とは同居しており、そこから短大へ通っていましたが、最近では家には帰らず友達の家を転々として生活しているということです。この横田には現在交際中の女性がおり、おそらくその女性のアパートか、その近辺に潜んでいると思われるので、張り込みをおこなう際はそこを重点的に調べてください……」

池沢の話は、それから四十分にもわたって続けられていた。

皆は、その捜査方針を聞きながら、重要な部分にメモを取って聞いている。

ナオとゆかりも、その話に頷きつつ、赤ペンで書類にマークをふり聞きいていた。

そして話の内容は、米川という男に及ぶ。

「それでは最後に米川克彦という男に関してですが、彼は今、保釈中に逃亡をしている指名手配犯です。都内の連続銃撃殺傷事件で七人の一般市民を殺している精神異常者といってもいいでしょう。ですがこの男に関しては様々な疑惑が付きまとっています。その一つが銃の密売に関わっているということです。彼が以前、逮捕されたときはその証拠がなく、立件は見送られましたが、余罪はそれだけではありません。それとは別に、黒峰会という大規模な闇組織との深い関わりがあると見られ、麻薬の売買にも手を染めているということです。

彼の素性について判っていることは、長野の実家から東京にでてきて、一人都内のアパートで暮らしていたということです。都内の連続銃撃殺傷事件疑惑で逮捕された時は、自宅のアパートにいるところを捜査員によって身柄を拘束されました。彼は二十歳を過ぎた学生ですが、仲のいい友達はおらず、いつも一人で改造拳銃の制作に没頭していたようです。だから彼に関しての交友関係は判っていません。交際している女性などはいるといふことなのですが、その具体的な部分までは調査は進んでいないというのが現状です。それに保釈中からの逃走以後、ときどき池袋辺りに出没すると言う目撃談もあります。おそらく銃の密売に深く絡んでの行動でしょう。

ですからこの米川に関しては注意が必要です。彼はなかなか足を見せない知能犯です。その逃走には、彼と深い関わりがある黒峰会という組織が援助しているという向きもあります。ですから米川に関する捜査は、身元の洗い直しと交友関係をもっと厳密に突き詰めてみてその潜伏先をつかんでいてもらいたいと思っています」

それ以後、池沢の話は、捜査担当の内訳に関する内容にかわっていた。

特捜班の捜査員の名前を呼び上げながら、担当となる指名手配犯の男たちと照らし合わされていく。ナオとゆかりの所属する特務一課、第二班は、昨日、佐渡が言ったように米川の捜索に参加する。

これでナオにとって、米川を合法的に捜す手筈が整ったということになるわけだ。

説明会が終了すると、会は一時散会になり、その間に休憩がもりこまれていた。

この後、十時からは、いよいよ本格的な捜査に入る。

捜査の基本はまず聞き込みからだ。

それは、特務機関にとって地味な職務内容になるわけだが、不満は言っていない。センター街を襲った武装グループは、今もおそらく都内に潜伏しているのだ。それを考えると早急に捜査が進まなければ、また事件が起こる可能性がないわけではない。

特務機関としても街の安全を守る国家公務員として、なるべくそうなることは避けたいのは事実だ。第三の事件を起こされては、彼らの威信にも関わってくる問題なのである。

その後、ようやく特務機関と、警視庁刑事特捜班の合同捜査は始まりを迎えていた。時間は十時きっかり。一同は、一時先程の会議室に集まりチームを組んでから、つぎつぎと都内各所に散っていく。

まずは、情報収集から始めなければならない。

逃げた武装グループの所在を突き止めるには、聞き込みが肝心なのだ。

ナオとゆかりも、池沢元警部補捜査主任のチームと、都内にくりだす準備をしていく。手始めは、米川の身元洗い直しと、交友関係の聞き込みだ。

以前、警察が米川を捕まえたときの資料を参考に、彼が住んでいたアパート近辺からの捜査を開始することになる。

その為、ナオとゆかりの所属する特務一課・第二班と、それに一班、警視庁刑事特捜班のチームをまじえて、米川のアパート都内大田区にある池上へ出動することになった。

ナオたちが米川のアパートに到着すると、さっそく捜査を開始する。

アパートの隣の部屋の住人や、近所の銭湯、コンビニ、スーパー、コインランドリー、喫茶店など、彼が行きそうな場所に足を運んでしらみつぶしに聞き込みをし、重要な目撃情報はないか、更にはその人間関係までも調べあげる。もちろんチームを割いて、米川が通っていた東都大にまで捜査員を派遣している。

そこで、どのような成果が得られるかは以前、銃撃殺傷事件の時の捜査で聞き込みは度重なり重複する情報も多いと思われるが、それはいか仕方ない。

でも、あらためて捜査を始めると、意外とひよんな事から新しい情報が得られる可能性があるのも、聞き込みを怠ることは出来なかった。

特捜班の捜査員は真剣だった。

もちろん特務機関の面々も、不真面目ではない。

しかし警視庁側は、センター街襲撃事件で、六人の機動隊員が死傷している。

その事を考えると、仲間の敵討ちではないが、特捜班の連中が躍起になるのは当然の事のように思える。ナオやゆかりも、その特捜班の連中と協力して、聞き込みを脚が棒になるくらいまで続けていた。

だが、その日の捜査を終えた時点では、聞き込みの成果は思わしくなかった。

午前十一時ごろから、午後の七時過ぎまで、約八時間近く聞き込みを行ったが、米川に関する重要な情報は得られない。

一同は、特務機関に設営された捜査本部に帰ると、深いため息と共に、今日の捜査経

過をお偉い方に報告していた。

「ナオちゃん、今日は残念だったね、米川の聞き込みがはかどらなくて。しかし聞いたよ、君の同僚の二階堂ゆかりって娘から。君は米川を追って黒峰会の情報を聞きだそうとしているって言うことじゃないか。それを聞いて俺は昔のことを思い出してしまったよ。君のお父さんのことをね……」

特務機関の建物内の一角、自動販売機がおかれている売店の前で、ナオと池沢元警部補は休憩用の長椅子に腰掛けて先程からコーヒーを片手に二人っきりで話をしていた。

「ゆかりの奴お喋りね、余計な事言わなくていいのに」

そんな中、ナオは少々気分を害して、池沢に対している。

「もしかして君は、七年前の事件をまだ忘れずに黒峰会の勅使河原洋二って言う男を捜しているのかい？ もしそうだとしたら大変だよ。黒峰会は警察でも手に負えない大規模な組織だ、それに彼らの活動内容は闇に包まれている。そんな連中を相手に一人で立ち向かうのだとすれば、やめた方がいい、君が身の危険にさらされるのは見たくないからね。お父さんの高崎警視のように……」

池沢はそう言うと、ナオの瞳を見つめ返していた。

その彼の顔には、ナオを気遣う父親のような眼差しがよぎる。

「でも父は黒峰会に殺されたのよ。それなのに警察は何もできなかった。だから私が一人であっても黒峰会の裏を暴いてみせるわ、危険は承知のことよ」

そう言うとナオは、怒りを顕わにし、感情的になる。

それは普段なかなか見せることのないナオの一側面であったので、彼女を知る者が見れば驚いたかもしれない。

「君の気持ちはわかるよ。お父さんは優秀な人だった。彼は先頭に立って黒峰会の裏の実態を暴こうと躍起になっていたのは覚えている。しかし、それが祟って黒峰会から目の敵にされ帰らぬ人になったんだよ。それにその時、警察は何もしなかったわけじゃない。君のお父さんの命を奪った可能性のある勅使河原洋二って男は、全国に重要容疑の可能性のある重要参考人手配者として手配されたが、彼はそれ以来姿をくらまして、その行方はようとして知れなかったんだ。当時、おれもその捜索には参加したけど、勅使河原洋二は組織のこねをつたって逃げ回り続け、七年経った今現在もその所在はつかめずにいるんだ。オレは君に親父さんを殺した犯人を捕まえるのをあきらめろとは言わない。でも危険なんだ、黒峰会に関わるとろくな事はない。はっきり言って一人で行動しても、逆に報復がくるかもしれないからね……」

池沢は、そこまで言うと、深いため息をはく。

彼としては、ナオに単独で黒峰会を探ることは、控えさせたいのが山々だったからだ。しかしナオは、それを聞いても、そこに心境の変化は見られそうになかった。

そして、次のような言葉を語りだす。

「元さん、あなたの言いたいことは判るわ。でも、どうしても許せない。父が死んで母は気落ちし、それがもとで病気になり、三年前に他界したわ。母は息を引き取る間際、私にこう言った、`父を殺した男が許せない、って。だから私は決心したわ、父を殺した犯人

を絶対捕まえてやると。それがいけない事なのかしら？ 私たち家族は、父を失ったとき以来、暗く荒んでしまったのよ。母がその事を忘れようとして、毎晩酒を飲んでいても覚えているわ。その時、私は何も母にしてやれなかった。でも今なら出来る、父を殺した筈の勅使河原洋二って言う男を捕まえて、罪を償わせることよ……」

「そうか、君の決心は判った。でも気を付けなよ、親父さんの二の舞にはならないようにね。俺は君が心配なんだ。君の父、高崎警視には色々とお世話になり、面倒も見てもらっていたからね。君の家には何度も遊びにいったら？ 小さい頃、ナオちゃんをあやした事もあるんだ。だから君は俺の身内みたいなものなんだ。それを思うと君の今後の心配なんだよ……」

「そう？ ありがとう。でも心配しないで、私だって全てを一人で解決できるなんて思っていないわ。何のために特務機関があるのか、良くわきまえているもの。黒峰会の実態が判れば特務機関だって黙ってはいない筈よ。ある意味、そこに望みを託している部分もあるわ。米川を捕まえて黒峰会との関係を自白させたいのもその為よ。だから元さんが思っているほど、私は世間知らずじゃないわ。そんなに危惧しないで……」

「それは本当かい？ 俺はてっきり、君一人で黒峰会を相手に立ち回るんじゃないかと思っていたが、そういう考えなら俺もナオちゃんに協力するよ。困ったことがあったら言ってくれ、俺に出来ることなら喜んでするからね」

池沢元は、それを聞いて喜びを隠しきれなかった。

ナオを良く知っている者の一人だから、てっきり何でも一人で解決を付けてしまおうとしているんじゃないのかと思っていた。

しかし、ナオの言葉を聞いて、納得がいていた。

どうやらナオも、馬鹿ではなかったようだ。

「元さん、それならさっそくだけど私の頼みを聞いてくれる？ 私、単独で調べて米川が付き合っていると思われる女の情報を握っているの。だから私が今から話すことは匿名のたれ込みとして処理して、今後の捜査に役立てて欲しいの。その願い聞いてくれるかしら？」

「なんだって？ ナオちゃんそれって本当かい？ その話、ぜひ聞きたいね。何せ君の知っているように、米川に関する交友関係は皆無と言っていいほど不足しているんだ。もし君が言うように米川に付き合っている女が居るとすれば、どんな情報でも歓迎できるよ。だから聞かせてくれ、その君が調べた情報を……」

第四節

日時は一夜明けて十二月の十五日、あのセンター街襲撃事件が起こって二日後の朝になる。

米川に関する捜索は、昨日の夜から急展開を見せていた。

ナオが池沢に、米川には五人の付き合っている女がいる、という情報を明かしていたからだ。

それはナオが飯田正紀に吐かせた情報であるが、米川を捕まえて黒峰会の事を聞きだしたい彼女にとって、苦肉の策であった。

それを聞いた池沢は、ナオの望みどおりその情報を一般の者からの匿名のたれ込みとして処理し、警視庁上層部へと報告していた。

それを受けて上層部は、米川担当の特捜班捜査員に、その五人の女のアパートの張り込みを敢行するように命じていた。

それは米川の捜査にとってまたとない転機だ。

米川が保釈中に逃走して以来、捜査を続けていた警察側であったが、彼には謎の部分が多く、その捜査はようとして進まなかった矢先、米川に五人もの女がいてその女たちのアパートに彼が出入りし潜伏している可能性があるのならば、これはある意味天から下された朗報であるという受け捉え方をした事だろう。

ナオから話を聞いた池沢元警部補も、それに驚き、その情報の重要性を確信していた。

逃走中の米川は逮捕前もそうだが、人との接点をあまり人に知られないような行動を心がけていたらしく、その人間関係はなかなかつかめず難航をきわめていたのが事実だった。

しかし、ナオの情報提供により、これで捜査が一步前進したことを意味している。

今朝はその為、ナオたち特務機関・第一班、第二班も私服勤務となり、五人の女のアパートを張り込むために、手分けして各持ち場に向かっているところであった。

ナオとゆかりの二人は池沢元警部補と共に、米川の女の一人、溝口洋子を張り込むことになり今その女のアパートの前で配置を完了しているところだった。

溝口洋子のアパート前には丁度三階建てのマンションがあり、その建物の物陰から隠れて米川の出入りを監視することにする。

もちろんマンションの住人や管理人には、事前に口止めして許可はとってある。

それをしないと、自分達が不審人物者として警察に通報されかねないからだ。

しかし、ともかく捜査員の配置も完了し、あとは気長に米川が現れるのを待つだけだった。

ナオたちが担当している溝口洋子のアパート他、早水真理、池沢京子、長洲恵美、福地咲子といった女のアパートにも捜査員は派遣され、張り込みは行われている。

ある意味、監視態勢は完璧とっていい。

警察側としては、どうしても米川の潜伏先を押さえたかったのだ。

「しかし、ナオちゃん、この情報をどこで手に入れたんだい？ 警察側としても血眼になって米川の女に関する情報を集めようとしていたんだ。でもそれは徒労に終わってほとんど参っていたところなのにすごいね、一人でこの情報を探り当てるなんて？」

溝口洋子のアパート前、そのマンションの物陰から、その時張り込みを行っていた池沢元警部補は、今ナオを目の前にして感心したようにそう言っていた。

「そうね、私にはちょっとした知り合いがいたの。その男から色々情報を聞いたわ」

そんな中ナオは、相変わらずそっけない答え方で池沢に対する。

しかしその目は親しい者に接する時の、当たり障りのない気を許しあった穏やかな目をしていたので、その時、池沢は安心して彼女を見据えていた。

「そうかい、でも情報の出所に関しては聞かないことにしておこう。どうやらその筋のプロに聞いたようだからね・・・？」

池沢はそう言うとナオに対して笑ってみせる。

彼はナオの立場を慮って、それ以上追求しない姿勢を明らかにしているのだ。

「そう？　そうしてもらえれば嬉しい。私としても情報の出所は話したくないもの」

するとナオは少しばかり拒絶の態度を示してみせると、池沢に対し同じように笑ってみせる。

それは情報の出所を追及されず、多少安堵しているようにも覗えたが、池沢が情報の出所を追及しなかったことはナオの態度を見ると正解だった。

ナオは明らかに追求されることを嫌っている。

その為、事を荒立てない方がいいのだ。

池沢にとっては、ナオを怒らせることは避けたいのである。

それは彼女をよく知っているからだろう。

「でもこの際、本当に現れるといいわね。今はまだ米川は女のアパートには居ないようだけど、これからが肝心だわ。奴が現れればすぐ捕まえる事ができる。ここに張り込んでいさえすればね・・・」

だがその時、隣でやはり張り込みに参加していた二階堂ゆかりが、そんな事を言って池沢とナオの会話に参加してきていた。

彼女は二人の顔を見据えると、ニコリと微笑むように挨拶代わりに笑ってみせていた。「確かにそうだね、ゆかりちゃん。米川は学生のくせに、何人もの人の命を奪っている凶悪犯といっていい。だからそいつを捕まえて罪を償わせないかぎり、事件は解決がつかないからここは気を入れなければいけないよ」

すると、

「やだ、元さん、まるで佐渡課長と同じことを言うのね。課長の口癖は、`気を引き締めろよ、ですもの」

そう言ってゆかりは池沢を見て、くすくすと笑っていた。

ゆかりは今回の特捜班との合同捜査で、池沢警部補とはすっかりうちとけて、冗談などを言い合う仲にまで発展していた。

それは友達づくりなどには長けたゆかりならではのことであるのだが、すぐに他人とうちとけてしまうゆかりに、ナオはある意味、驚きの一つを感じている。

ナオは性格上、自分はなかなか他人とうちとけることはできない。

しかしゆかりの場合、愛想がいい為か、それを自然と武器にして今のように歳の離れた池沢とも、旧知のようにうちとけられることは不思議でしかなかった。

まあ、それは人それぞれの特技だといってしまえばそれまでだが、ナオからすればゆかりの人当たりの良さは理解できない部分に位置しているといってもいいのだ。

だが、そんな事はさておき、アパート前の張り込みは続いていた。

彼女たちがいるこの辺は、簡素な住宅街が広がり、あまり人通りが激しい場所ではない。

その為、通りを歩くものは近所のおじちゃん、おばちゃんか、ガス、電気、水道の集金の人や郵便局員、それに主婦ぐらいなものだ。

その光景はいたって平和で、米川という凶悪犯がこの辺りに出沒するとはとても思えない。

それだけここは、平和そのものの空気が漂っているのだ。

しかし、そんな中、張り込みを始めてかれこれ三時間は経つ。

だが米川が現れる気配はまったくない。

張り込みの対象となっている溝口洋子という女性はOLなので、今は仕事でアパートには居ない。

その為、アパートはしんと静まりかえり、人の出入りはまったく見られなかった。

だが、おそらく彼女が帰宅する時が、米川が現れる絶好のタイミングかもしれない。

ナオが言うには、溝口洋子のアパートが、一番米川が現れる可能性が高いということだ。

もちろん他の女のもとに現れてもおかしくはないが、飯田正紀という男が語った内容によると溝口洋子が米川の本命らしい。

その点からしても、やはりこの現場の張り込みは重要になってくる。

特務機関にしても警察にしても、この場で米川を捕らえられる事が出来れば一番の理想だ。

また、襲撃事件などを起こされてはかなわない。

さすがに三度目は、勘弁してもらいたいからだ。

だがその日、けっきょく米川は姿を見せることはなかった。

溝口洋子という女は六時半ぐらいに帰宅してきたが、その後は自分のアパートから出ず、また次の日の朝を迎える事になっていた。

ナオ達と捜査員はもちろん徹夜だ。交代制で張り込みを続けながら、その合間に質素な食事をとる。今は十二月中旬でもあり夜の寒さはこたえる。

しかし、弱音は吐いてられない。

いつ何時、米川が姿を現すか判らないので、監視態勢は嚴重にするしかなかった。

「結局、米川は現れないわね元さん？　米川は本当に溝口洋子っていう女と、付き合っているのかしら？　私、何だか疑問に感じてきたわ。こういった捜査に不慣れだと、ちょっとこれからが大変に思う・・・」

昨日と同じアパートの前のマンションの物陰に立ち、二階堂ゆかりは池沢元警部補捜査主任に、今現在の正直な気持ちを吐露して語っていた。

「そう簡単にはいかないよ、ゆかりちゃん。張り込みは時間との勝負だ、まだまる一日経ったぐらいでそうは決着がつくとは限らないさ。気長に待つしかないよ、それが捜査員の仕事だからね」

それを受け池沢は、こういった張り込み慣れているせいか、その態度には余裕の表

情を浮かべゆかりの言葉に応じる。

「でもナオったら、本当に信憑性のある情報を提供したのかしら。これが、がせネタだったら、私たち馬鹿みたいね」

その時ゆかりは、多少冗談のつもりで、追加的にそんな事を言う。

「それは、大丈夫だろう。ナオちゃんは、ああ見えても嘘のつけない正直者さ。俺は彼女が小さい頃からの付き合いだったからね、ナオちゃんの性格は良く知っているよ……」

「ええ、そう？ でもそう言えば話は変わるけど、元さんてナオのお父さんの高崎警視の部下だったってことは本当なの？」

ゆかりが本当に唐突に話題を変えて、池沢元警部補に問いたです。

「ああ、そうだよ。高崎耕助警視は俺の恩師だ、彼は警視庁のエリートでね、若い頃から準キャリアコースまっしぐらだった人だ。俺がまだかけだしの刑事だった頃、彼には色々世話になりいろんな事を学んだことがある。だからナオちゃんは、俺にとって身内も同然なんだよ」

池沢は、淡々として語っていた。

彼の態度からすると、高崎警視には、相当、深い思い入れがあるらしく、感慨深げな顔をしている。

「でも、ナオって馬鹿よね。米川を捕まえて黒峰会の事を聞き出そうとしているという事だけど、一人で何が出来るのか判っているのかしら？」

「それに関しては心配ないさ。ナオちゃんは、ちゃんと一人で出来ることの限界をわきまえているはずだ。馬鹿なことはしないとと思うよ」

「でも、元さん。ナオがなぜ、黒峰会を追っているか知っている？ ナオったら私にも話してくれないのよね、その理由を……私を信頼していないのかしら？」

「そんなことないと思うよ。でもナオちゃんは、全てを一人で抱え込んでしまう癖があるから、しょうがないさ……」

それからゆかりは、池沢元警部補からナオがどうして黒峰会を追い掛けているのかの、真相を聞きだしていた。

「そう？ ナオのお父さんが、黒峰会の連中に殺されていたの？ だからナオったら黒峰会に執着していたのね？」

池沢から話を聞いたゆかりは、納得したかのように頻りに頷いている。

「はい、買ってきたわよジュース。これで良かったかしら？」

そんなところに、唐突にナオが姿を見せていた。

彼女は両手にコンビニの買い物袋を下げ、その中の缶ジュースを重そうに持っていた。

「あら、ナオ早いわね。一体どこまで行って買って来たのそれ？」

「近くのコンビニよ。他にどこへ行くっていうの？ でも重いんだから、あなたこっちの袋持って」

そう言うとナオは、左手に持っていたコンビニの買い物袋をゆかりに手渡す。

「嫌だこれ、本当に重いわね。あなた一体、何本買って来たのよ？ これじゃ余るわよ」

「いいじゃない、どうせ何度もコンビニへ買い出しに行くことないもの、余ったらまたあとで飲めばいいでしょ。ハイこれゆかり、あなたが頼んだ缶コーヒー、それに元さんは烏龍茶だったわね？」

ナオはそう言いつつ、つぎつぎと袋から缶ジュースを取り出し、池沢元を始め他の捜査員にもそれを配って歩いていた。

ピピッ、ピピッ……

だがそんな折り、突然、池沢が持つ無線器に通信が入る。

「ハイ、こちら池沢。用は何だ？」

通信を受けて池沢が、無線器に話し掛ける。

すると、

『やりました、現れましたよ、主任！ 米川です。今、路地を曲がったところですから、もうすぐそちらにいくと思いますよ……』

一人の特捜班の捜査員から、連絡があった。

「何、それは本当か？ 米川が現れたんだな？」

池沢は無線の相手側に対し、食い付くようにそう言っていた。

その池沢の声を聞いて、一同に緊張が走る。

『ええ、確かです。顔を双眼鏡で確認しましたから……しかし、一人の見慣れぬ男と一緒に。その男と二人で今歩いて……あっ、また角を曲がりました。そちらの溝口のアパートへ直行しています……』

「そうか、判った。それじゃお前たちは、米川が逃げられないように道を封鎖しろ。俺達は米川がアパート前に来た時、こちらでその身柄を拘束する」

そう言うと池沢は、無線器を切っていた。

「元さん、どういう事。米川が現れたの？」

その時、ゆかりが池沢に問いたです。

すると、

「ああ、そうらしい。もうすぐ溝口洋子のアパートへ来るそうだ。だからここで待って奴を捕らえるよ。いいかい？」

そう言ってゆかりの顔を見ていた。

それを受けて一同は更に緊張し、アパート前のマンションから向かい側の路地へと目を光らせて、ひたすら米川が現れるのを待っていた。

それから三分位が、経過しただろうか？

ナオやゆかり、池沢がいるマンションの物陰の辺りからすると、丁度西側の路地から、おそらく米川と思われる男ともう一人の長身の男が、二人歩いてくるのが目に付く。

その為、その時、誰かれの区別なく、そこに集った捜査員一同の心臓が高鳴っていた。

確かに米川だ。

ナオが今や溝口洋子のアパートの入り口へ入って行く途中の二人の男の顔を確認すると、一方は米川克彦、そしてもう一人は見知らぬ狡猾そうな顔ののっぺりとした男だった。

だからナオはそれを見ると、駆け出す準備をして今居るマンションの物陰から身を乗り出し、アパートのドアを開けようとしてポケットから鍵を取り出している米川の後ろ姿を凝視する。

そして池沢が発するであろう次の指示を、今か今かと焦れたように待っていた。

そして、

「今だ！ 全員米川を拘束しろ。取り逃がすなよ！」

その池沢の掛け声と共に、三人の捜査員、それにナオとゆかりがマンションの物陰から飛び出し、溝口洋子のアパートへと向かう。

米川は今、合鍵を使って一階にある女のアパートの扉を開こうとしているところだ。そこへ総勢六人が駆け付け、米川に接近する。

「米川克彦！！ 我々は警視庁の者だ。お前を指名手配犯として逮捕する。神妙にしろ！」

池沢警部補が、まるで時代劇の捕物帳に出てくるおかっぱきの様な口調でまくしたけると、ナオ、ゆかり、捜査員の三人と共に米川を含む二人の男を包囲していた。

「チッ！」

しかしそれを受けて米川は軽く舌打ちすると、その直後、何の前触れもなく着ているコートのポケットから一挺の銃を取り出すと、それを捜査員たちやナオ、ゆかりに向けて発砲してきていた。

パン、パン

二発の銃撃音が、閑静な住宅街の空に響く。

それに驚いて電線にとまっていた雀が、ばたばたと飛び立っていた。

次の瞬間、米川ともう一人の長身の男は、二人同時にその場から逃走を図る。

彼らは、アパートの周囲に張り巡らされていた一メートル足らずの外塀を乗り越えると、そこから二人別々の方向へ向かってこみ入った住宅街の間を抜け、脱兎のごとく走りだしていた。

だがそれを見たナオは躊躇せず、米川の後を追っていた。

「中島、北越、お前等はまだ一人の男を追ってくれ。俺は米川を捕まえる、逃がすなよ！」

ナオの後方で、池沢の捜査員に対する指示が飛んでいた。

しかしナオはその声を聞きながら、もう既に米川の後方へびたりと着いていた。

ここで米川を取り逃がすことはできない。

この機を逃したらまた当分、彼を捕らえることは出来ないからだ。

その為ナオは、自分の脚力を活かし、息急き切って住宅街を走り抜けていた。

そんな中、米川は先程のアパートから北に向かって走っていた。

彼は逃げ足が速い。

まるで俊足ランナーのように足を動かすと、目の前の路地を右へ曲がり、さらなる逃走を図る。だがその時ナオは、まるで小悪魔の様にほくそ笑んでいた。

ナオは溝口洋子のアパートを張り込む際、この地域一帯の路地の見取り図を頭にたたき込んであった。

その図からすると、いま米川が曲がったその先は袋小路だ。

ナオはその時、勝利を確信する。

米川を追い詰めたといって同然なのだ。

その為、彼女がその曲がり角を曲がって右折すると、案の定、米川が逃げ場を失いそこでおろおろと慌てている姿が目飛び込んで来ていた。

だから、

「観念なさい米川、もう逃げ場はないわ。おとなしく捕まることね」

ナオはそう言って、米川に迫る。

「うるせー、死ね！」

しかし米川はあきらめない。

自分が手にしている銃をナオに構えると、続け様に四発、銃弾を発砲していた。

銃弾がナオの体をかすめる。

しかしその弾は、ナオに当たる事はなく、後方へと突き抜けていた。

カチ、カチ

米川の銃が、残弾の空を示すように、乾いた音を立てる。

どうやら今の発砲で、全弾撃ち尽くしたようだ。

それを悟と米川は銃をナオに投げ付けて、そのまま突進し、右手こぶしを振り上げて殴りかかって来ていた。

ドッ・・・

だがその拳はナオに当たらず、その代わりナオの右ストレートが米川の顔面に炸裂していた。

「グウォオオオウ・・・」

米川が痛みの為か、意味不明な雄叫びをあげる。

そこへすかさずナオが脚を振り上げ、踵落としをお見舞いする。

それは狙い違わず米川の脳天を粉碎し、そのまま彼は気絶してその場に倒れていた。

「大した事ないわね、所詮あなたは負け犬よ・・・」

気絶して路上に倒れ伏す米川を前に、ナオは仁王立ちになり腰に手を当て勝ち名乗りを上げている。

これでようやく米川にも、引導が渡されたことになる。

その頃、やっとナオの後方からはゆかりと池沢警部の足音が耳朶に響くほど、大きく聞こえだしてきていた。

特務機関三階の会議室に設けられた捜査本部に急報が届いたのは、ナオが米川をノックアウトさせたときから十分後のことだった。

「米川を逮捕！」その報せを受けて、捜査本部で待機中の特捜班の面々は小躍りする。しかしそれと付随する形で、もう一人の男が逮捕されていた。

それは米川と一緒に、溝口洋子のアパートに現れた長身の男だ。

彼はやはり米川と同様銃を所持し、アパート前から逃走を図っていた。

おそらくその男には何かやましい事があったに違いない。

だが、結局その男は張り込んでいた別の捜査員の包囲網にかかり、あえなく逮捕、銃を所持していたことにより、銃刀法違反で拘束、そのまま捜査本部へ護送されることとなる。

「やりましたね池沢元警部補、米川をこんなに早く捕まえるなんてお手柄ですよ」

特務機関の三階の一室で、溝口洋子のアパートから帰ってきた捜査員や池沢元警部補捜査主任に対し、捜査本部の一人の刑事が満面の笑みでそう話し掛けてきていた。

「いやー、お手柄は俺じゃなくて、特務機関のナオちゃんだよ。彼女は銃を発砲する米川をものともせず、あっという間に捕まえたんだから大したもんだよ」

「へえ〜っ、高崎警視の娘さんがね？ それはすごいですね。聞いたところによると彼女は特務機関の問題児だそうですが、今回のところはその問題を起こさずに手際よく米川を捕まえたって言う訳ですか？」

「おいおい、それはひどい言い方だな。彼女は特務機関の人間なんだ。俺達、刑事には及びもつかないハードな訓練を積んで、任務に当たっているんだぞ。それを考えると大したものだよ。あの若さで一端の役に立つんだからね」

「そうでしたね。だから特務機関は《ハード・ガン》と呼ばれているんですっけ？」

若い刑事は罰の悪そうに自分でそう言うと、かなり納得していた。

「ところで君、捕まえた米川は目を覚ましたのかい？ かなりナオちゃんにこっ酷くやられた様だが、意識はあるのかい？」

「ええ、さすがに死んではいませんけど、脳震とうを起こしてまだ目が覚めない様子です。おそらく取り調べは、明日に持ち越されるのではないですかね？」

「そうか、それならいい。米川は重罪犯だ、多少、痛い目にあっても文句は言えないだろう」

そう言うとき池沢元警部補は座っていた椅子から立ちだすと、用をたしにトイレへと向かっていた。

その頃、特務機関・特務一課のデスクフロアでは、ナオが意気込んで擦り寄ってくる柏木モモの執拗な質問攻めの難に遭っていた。

「ねえ、先輩、先輩、どうでしたか？ 米川をノックアウトし、捕らえた時の感想は、それをお聞かせくださいーい」

「あなた、もしかしてどこかのアナウンサー？ インタビューするのはよして、気持ち悪いでしょ・・・」

ナオはそんなモモを「シッ、シッ」と言って手で追い払っている。

まるで野良犬でも扱うような態度だ。

しかし、

「またまた、照れないで下さいよ〜。教えてくださいどうでしたか〜？」

モモは懲りずに、またナオに対して質問攻めをしていた。

意外と仲のいいコンビである。

するとそこへ、「貴女たちいつも仲が良いわねー。女同士結婚でもしてみたら？ 意外と、なかなか上手く行くんじゃない？」

と、二階堂ゆかりが三人分のコーヒーを持って現れていた。

「ゆかり、冗談は言わないで、わたし怒るわよ！」

ナオが拳を振り上げる。

「あーら、そう？ 意外といい提案だと思ったけど、ナオにはちょっと酷すぎたようね」

そう言うときゆかりは戯けてみせていた。

「それはどういう意味ですか？ 私に何か問題があるような言い方、それって意味深」

「別に大した意味はないわよ。ナオが貴女とずっと一緒に居ると、精神的にダウンしかねないから、ただそれだけが言いたかったの」

ゆかりはそう言うと、知れっとする。

「何ですか？ それじゃまるで私が、ナオ先輩のストレスを促進させている存在と言っている様なものじゃないですか。それってひどーい」

だがその後、モモはめずらしくふてくされて、頬を膨らましてしまっていた。

「ところでゆかり、もう米川は目覚めたの？ 取り調べはまだなの？」

そんな中、ナオが今度はゆかりに問いたです。

「気が早いわねナオ、まだ米川は目を覚ましてはいないわよ。貴女に必殺の踵落としを食らったんですから、そう簡単には目覚めないわ。警視庁の刑事が言うには、取り調べは明日になるということだそうよ」

「そう？ それは残念ね」

ナオは心底落胆したように、深いため息を吐いていた。

「ナオ、あなた、そんなに米川から黒峰会のことを聞きだしたいの？ それほど焦らなくてもいいでしょう。米川は無事捕まったことだし、もう逃げられはしないわ。今日は特務機関の留置所へ拘留される予定だから、明日まで待ちなさいよ」

「いいじゃない、私、あなたと違って気が短いよ。明日まで待つなんて、豆腐が腐ってしまうわよ」

「やだ、何ですか、その豆腐が腐るって？ ナオ先輩の新しい語録？」

「そうよ、私にだけ解ればいいの！」

ナオはまた怒っている。

それを受けてモモはナオに対し「怒りんぼ一星人」と、わめき散らしていた。

「ところで先輩、今日は米川も捕まったことだし、またナオ先輩のアパートでパーティと飲みましょうよ。これはナオ先輩の活躍を祝してデス」

「ええっ？ またー？」

だが、そんなモモに、ゆかりは不満の声を上げる。

「いいじゃないですか。また、ビデオレンタルショップで面白いタイトルを借りて、映画鑑賞でもしましょうよ。おつなもんですよ」

「でもこの前、ナオのアパートに泊まったばかりじゃない。ナオだって嫌でしょ、何度もたびたび宴会を開かれるなんて？」

「私は、構わないわ。でもお金は出さないわよ」

ナオはそう言うと珍しく、にっこりと笑っていた。

どうやらご機嫌の様子だ。

「ほらー、ナオ先輩もそう言っていることだし、ゆかり先輩いきましょうよ。若いうちは遊ぶのが一番、どっかの偉い先生もそんな事いっていなかったっけ？」

「知らないわよ、そんなの。でもしょうがないわね、ちょっとだけよ。今日は必ず家に帰るからね、その心算でいて……」

だが、そんなこんなでナオたち三人は、今日の職務を終えると、その後、ナオのアパートへと繰り出していた。

第三章 モモの長い日記

第一節

青く晴れ渡った快清の空、東の地平からやや高くぽっかりと浮かぶ太陽の朝日に照らされながら、ナオ、ゆかり、モモの三人は、営団地下鉄千代田線・霞ヶ関駅を後にしていた。

そこから徒歩で桜田通をつたい、特務機関本部へと出勤していく。

その道すがらナオは別として、モモとゆかりの二人は、頻りに頭痛と吐き気を訴えていた。

「まったく、モモがいけないのよ。調子に乗って、ゆかりに酒を飲ませるから。こんなになるまで飲まなくてもいいでしょう？」

ゆかりが吐き気で路上に蹲る中、ナオはモモを非難する目で見てそう言っていた。

「そんな、私ばかり責めないで下さいよ・・・おえっ・・・私だって、ひどい二日酔いなんですから・・・」

モモがゆかり同様、やや青い顔をしてナオにそう訴えかける。

「そんなの自業自得、映画見て興奮するからそんな事になるのよ」

昨日の夜、ナオのアパートに再び繰りだしたモモとゆかりは、また結局のところそのナオのアパートで一夜を明かしていた。

それもこれも、皆、モモの提案でそうなったことだ。

モモは昨日、ナオのアパート近くのビデオレンタルショップで、ある映画のタイトルを借りてきて、それを三人で見ようと言い出していた。

その映画のタイトルは、《爆裂ハンター・サキ パート2》というものだ。

しかし、その映画にモモとゆかりは大爆笑、そして大興奮、モモはその勢いで微酔気分のゆかりに次から次に酒を勧めると、結局、缶ビール五本を飲み干して、そのまま酔いつぶれ朝まで爆睡することとあいなっていた。

だが、その時ナオといえば、一人漫画雑誌にうつつをぬかし、その映画のタイトルはほとんど見ていなかったのが幸いであったのは事実かもしれない。

そんな事で、今、ゆかりとモモは出勤中でありながら、ひどい二日酔いと格闘中だった。

この分だと今日の午前中いっぱい、なかなか仕事にも手が付かないだろう。

酒の飲めないナオにとって、二日酔いとはどういうものかいまいち解らなかったが、二人の様子を見てみると、ほんのちょっとばかり同情を示したりしてみる。

だが、こればかりはどうしようもない、勢いを駆って飲んだ本人が悪いのだ。

ナオは同情を示す反面、そんな二人に舌を出して内心笑っていた。

午前九時三十分、特務機関のやはり三階に位置する密閉された一室では、朝の清涼感漂う空気の中、慌ただしく米川の取り調べが始まりを迎えていた。

取調室の中には、池沢元警部補の他二人の取調官と、それに高崎ナオや二階堂ゆかりの姿もある。

二人は米川逮捕に功勞した特務機関側の人間として、この取り調べに立ち合うことにあいなっていたからだ。

そんな中、取調官がまず先日のセンター街襲撃事件や新宿区のデパート急襲事件に関する米川の関与を指摘して、話を切り出しているところだった。

「米川、貴様は戦争マニア十二人の男たちを誘って、センター街や新宿区のデパートに急襲を仕掛ける話を持ち掛けたのは、お前一人の考えからでた馬鹿げた計画だったんだな？ その事に対して一体どうなんだ？ もう既に先に捕まった男たちから、お前が今回の事件の首謀者で計画を練っていたということは判っているんだぞ。今更とぼけても無駄だからな！」

「そうだよ俺が全て計画してやったことだ、それがどうしたって言うんだ。警察にとっても特務機関にとっても、いいイベントになっただろ。たまにはこういった事がないと、あんた等は退屈だろうと思ってね、面白い計画だと思ってやったのさ」

取調官の問い掛けを受けて、米川は、椅子に腰掛けたままふんぞり返り、皮肉の意味もこめて悪かれた様子もない態度でそういつていた。

「なんだお前、事の重大さが判って言っているのか？ お前たちの質の悪い行いのおかげで、多くの人の命が奪われたんだぞ、その事をどう思っている！？」

取調官は、そんな米川の態度を見て怒りしんとうしたが、職務上、彼を殴ることもできず、その怒りを抑えそんな事を聞いて来ていた。

「そんな事、知るか！ 俺は俺のやりたいようにやったんだ。他人のことなんてどうでもいいんだよ！」

米川は、相変わらず不敵な態度で、辛辣な言葉をまくしたてていた。

どうやら彼は、まったく今回の事件に、罪悪感の一つも感じていない様子だった。

だが、それを見てナオが怒る。

「あなたもしかして、馬鹿？ これだけの事件を起こしておいて、面白かったじゃすまされないわよ！ 一度その頭の脳みそ開いて、自分で見てみたらいいんじゃない？

そうすればあなたがしでかした事の重大さが解ると思うわよ・・・そうしてみなさい」

「うるせー、馬鹿は余計だ、俺を誰だと思ってる。テメーみてーな女にそう言われる筋合いはねーよ！」

米川は、もう既に捕まって逃げる事が出来ない為か、その態度は開き直り、そうやすやすと罪を悔い改めようとする姿勢は、微塵だにも見せなかった。

「あなたね、そんな態度とっていいの？ このままだと死刑よ。学生だからってあなたはもう成人しているんだから、大人として裁かれる事を覚えておきなさい・・・言い訳なんかしても助からないんだからね！・・・おえっ」

そう言っていたのは、ゆかりだった。

彼女もナオ同様、辛辣かつ不敵な態度をとり続ける米川にカチンときたのか、冷たい

突き放した言い方で米川を軽蔑していた。

しかし、

「俺は死ぬのなんか恐くねーよ、テメー等なんぞの知ったことか！ そんな事言ってる
と犯すぞ、覚悟しろよ！」

そう言って米川は、下種な言葉を吐き、ナオとゆかりに猛獣のように突っ掛かってき
ていた。

だが、

「まあ、まあ、まあ、まあ、君たちそう熱くならずここは冷静にいこうよ。そうカリカ
リすると、取り調べが進まないじゃないか。ナオちゃんもゆかりちゃんも、気持ちを抑
えてくれ、米川は一応、事件の関与を認めているんだ。今はいがみ合っている場合じゃ
ないよ……」

池沢はそう言うと、興奮する米川、ナオ、ゆかりの三人を宥め落ち着かせ様として抑
えていた。

「それで米川、話は変わるが、君には余罪として黒峰会という闇組織との深い関わりがあ
るといことが少しだけ判っているんだ。その事に関して聞きたいんだが、君はその黒
峰会とどんなつながりがあるんだい？ まずはその事を伺いたいね……」

「黒峰会？ そんな組織、俺は知らねーな。なんかの間違いじゃないのか？ 俺は闇組
織なんかとつるんだ覚えはねーぜ。勝手に決め付けるなよ！」

「米川、お前とぼけても無駄だぞ、この際だから素直に吐け。警察だって馬鹿じゃないん
だ、お前が黒峰会と深い関係にあり、麻薬の売買に手を染めていたって言うことは判っ
ているんだぞ。お前は黒峰会の内部事情を詳しく知っているんだろ？ そのことを妙な
隠し立てせずに話せば、お前の罪が少しでも軽くなるように取り計らってやってもいい
んだぞ」

一人の取調官が、しらをきる米川をうまく諭しながら、そう言って話を持ち掛けて
いた。

だが、

「罪が軽くなる？ はっ、それがどうした、俺はどうせ死刑だろ。今更そんな事言われ
ても、カンケーねーよ。たとえ黒峰会の事について知っていたとしても、俺は素直に喋
る気はないね。黒峰会、黒峰会ってうざったいんだよ！！」

米川は、そう言ってまた不敵な態度をとり、取調官から目をそらしそっぽを向いて
いた。

そこへ、

「あなたねー、男だったら潔く吐きなさい。キンタマついているんでしょ？ 喋らない
とまた踵落としお見舞いするわよ！ 所詮あんたは負け犬なのよ！」

ナオは、またそう言って険悪な言葉で口を挟んで、米川を見下していた。

「なんだとテメー、俺と勝負するってのか？ いいだろ、やってやろーじゃねーか。今
度はこの前みたいにはいかねーぞ。テメーのあそこに、俺のキンタマねじ込んでやるぜ、
覚悟しろよ！」

米川は、ナオの言葉に興奮し、また下種な言葉を口ずさんで怒りを顕わにする。

この分だと、取り調べが乱闘に変わり、殴りあいの喧嘩にもなりかねない。

それを察すると、池沢は、苦心げに顔をしかめて次のような提案をしていた。「ぐうん、これじゃどうしようもないね、一時休憩にしようか？　米川、お前に十分の時間をやるから、その間に頭を冷やして自分のこれからの事について考えてみる。このままそんな態度をとり続けていると、ますますお前の罪は重くなる一方だぞ。そうならない為にも、深く反省して素直になるんだな。でないと母親が泣くぞ」

池沢元警部補は、そう言うと、一人の監視員を残して他の全員を取調室から退室させ、米川の頭を冷やさせる方策をこうじていた。

米川が興奮して、不敵な態度をとり続ければ、取り調べがうまく進まない。その為にも、ここはある程度の時間を置き、彼を反省させることが肝心だった。それでうまく、米川が心を入れ替えてくれれば儲け物だが、それ以外にうまく事をおし進める方法はない。

これはある意味、池沢のこれからの事を念頭に置いた、苦心の方術でもあった。

「元さん、どう思います？　米川は今後の取り調べに、素直に応じるでしょうか？」

特務機関内の建物の中にある小さな売店の前、休憩用の長椅子がおかれている一角で、今ゆかりはコーヒーに口をつけながら、これからの米川に関する疑問を池沢元警部補にふと語っていた。

「さあ、解らないね。米川は確かに頭がいかれているようだ。でもなんとか宥めて今後、黒峰会の事を聞き出すしかないだろ」

そんなゆかりに対し、池沢は、少々困ったようにそう言う。

「でもあんな奴、殴って痛めつけて、とっとと余罪を吐かせちゃえばいいのよ！」

そんな中、ナオは怒ってそう池沢に言い放つ。

「おいおいナオちゃん、そんなことしたら大変だよ。たとえ相手が重罪犯でも、暴力で自白を強要したとなると、俺は警視庁をクビになっちゃうよ。そんな物騒な事、言わないでくれ」

池沢は、ナオの強引な発言に、首を竦めて抗弁していた。

「しかし米川って男も、ある意味かわいそうな奴だね。彼があんな風な手の付けられない横暴な男になったのも、結局、父親に愛情を注がれて育たなかったからかね？」

「それってどう言うこと、元さん。米川に昔、何かあったの？」

ゆかりは、池沢の言葉を受けて、怪訝にそう問いただす。

「そうなんだよ。実は米川はね、小さい頃から父親に暴力を受けて虐待されながら育ったんだ。彼の父親は大酒飲みでね、事あるごとに酒を飲んで暴れて、米川に暴力をふるっていたそうだ。それで彼は精神がねじ曲がってしまったらしく、小さい頃から友達もできずいつも独りぼっちでいたらしいんだ。おそらくその繰り返しで、精神年齢が発達せず人の事などなんとも思わない人間になってしまったんだろ……」

それを聞いてゆかりは、少し神妙な顔をしていた。

親から虐待を受けて、精神に異常をきたしてしまう例はよくある事だ。

その観点からするとある意味、米川は、池沢元警部補が言うように、かわいそうな少年時代を歩んできたのだろう。ゆかりにしてもその話を聞くと、少し同情する気がないでもない。

しかし米川は、何人もの人間を殺しているのだ、それを考えると、その罪が軽くなる
とはとても思えなかった。

「あれー？ ゆかり先輩にナオ先輩、こんなところで何しているんですか？ 二人とも
米川の取り調べ中のはずでしょ。あれあれあれ？ どうして〜？」

ナオとゆかり、それに池沢が、三人、米川の話の口にしなから休憩中、そんな中、そ
こへ突然、柏木モモが場違いな声を響かせて姿を現していた。

彼女は、手元に持つコーヒーカップから茶色の液体をこぼしつつ、ゆかりとナオがい
る休憩所のところまで走ってくる。

「ねえ、どうして二人ともここで油を売っているんですか、米川の取り調べ中じゃなかつ
たのー？ お仕事しないんですか〜？」

「今は休憩中よ、これからまた米川の取り調べを行うの。でもあんたこそ、こんなところ
で何してるの？ 仕事しなさいよ！」

ナオは、そんなモモにそうびしゃりと言っていた。

「やだな、私も今は休憩なんですよ。あーでも聞きました？ 昨日、米川と一緒に捕まつ
た男いたでしょ。その男の素性が割れたんですって、ナオ先輩が追い掛けていた黒峰会
のメンバーだったそうですよー・・・」

「ええっ、それって本当！？ 黒峰会のメンバーなのあの男が」

そう言って驚いていたのは、ゆかりだった。

彼女は、モモと同じように手に持つコーヒーカップから茶色の液体をこぼすと、モモ
に向かって身を乗りだす様に問いただしていた。

「本当ですよ〜。さっきみんな騒いでいたのを聞きましたもの。嘘だと思ふのなら行って
みたらどうですか、第二取調室・・・」

それを聞いて、真っ先に駆け出していたのは、ナオだった。

彼女は、空のコーヒーカップをごみ箱に投げ捨てると、モモの脇を通り過ぎて、第二
取調室へと向かう。

直後、その後につられるようにして、ゆかりと池沢元警部補もナオの後につづいて
いた。

一人その場にとり残されてポツンとするモモ――――

しかし彼女も慌てて三人の後を追って、走りだしていた。

「いいか米川、昨日お前と一緒に逮捕された明石敏之って言う男が、お前が黒峰会に麻薬
の売り付け先である、ある組織を紹介して、近々大規模な麻薬取り引きが行われると白
状したぞ。その明確な日時と場所は一体どこなんだ。もうネタはあがっている、隠し立
てはできないぞ・・・」

やはり密閉された一室、特務機関の第一取調室では、今、米川に対する警視庁側の容
赦のない尋問が行われていた。

「・・・・・・・・・・」

米川は、それを受けて押し黙る。

どうやら言葉につまっている様子だ。

先程、モモの話で第二取調室に駆け付けたナオとゆかり、池沢の三人は、そこで昨日、

米川と一緒に逮捕された明石敏之という男の供述を、担当の取調官から聞き出していた。

その供述の内容はこうだった。

彼、明石敏之という男は、正確には黒峰会の準メンバーだったそうだ。

彼は最近、黒峰会に見習い入会して米川を手伝い、麻薬を池袋の裏界隈で売り捌く売人をつとめていたらしく、組織の末端の役割をしていたいわば下っばだった。

しかし昨日、彼が米川と一緒に溝口洋子のアパートに現れたのは、近いうちに黒峰会とある組織の間で大々的な麻薬の取り引きがあり、その二人だけの麻薬取り引き後の事後処理後始末の再確認の打ち合わせの為に米川と一緒につるんでいたということだった。

米川は、その麻薬取り引きに深く関わっており、黒峰会に麻薬の売買の得意先を手引きした張本人であるという。

その事が発覚し、米川に対する取り調べは、その近々行われるであろう黒峰会とある組織の大規模な麻薬取り引きに関することに、尋問の焦点が絞られ行われていた。

「米川どうなんだ？ その取り引きは一体どこで行われる。その事を言え、そうすればお前の罪も少しは軽くなるはずだ。これはまたとないチャンスだぞ！」

一人の取調官が、米川にそう言って尋問を続ける。

しかし、

「・・・・・・・・・・」

米川はすっと口を閉じて、先程の不敵な態度とはうってかわって沈黙を始めていた。

「米川、黙っていたんじゃないぞ。お前も一人の人間である以上、多少自分の罪について後悔の念に駆られることもあるだろう。ここは一つどうだ、その罪滅ぼしの為にその取り引きが行われる日時と場所を洗いざらい吐いては？」

「・・・・・・・・・・」

米川は、取調官の問い掛けに、相変わらず押し黙ったままだ。

それは、はたから見ると、無言の抵抗で取調官を困らせようとしているのか、それとも何か他に思うところがあるのかは解らないが、彼は少し先程よりはその態度に苦慮の色が浮かんでいるようにも感じられていた。

「・・オレ・・オレ、本当に、死刑なんかに、なっちまうんだろうかな？」

その時、突然、沈黙していた米川が、力のない声で言葉を発し始めていた。

「何だ米川、何が言いたい？」

それを受けて、取調官が問いただす。

すると米川は、弱々しい声で次の言葉を発する。

「オレ死にたくねーよ、死刑になんかしないでくれ。オレは本当は怖いんだ、死ぬのが怖いんだよ・・・・・・・・」

それはある意味、米川の弱い部分が暴露された瞬間でもあった。

先ほどあれだけ不敵な開き直った態度を見せていた米川であったが、今はうってかわって神妙な態度をとり、はっきり言って半泣き状態を呈している。

おそらくさすがの彼も、罪を犯して捕まり拘束されたことで、相当、神経がまいっていた様子で、今はいくぶん顔が青ざめているようにも感じられた。

だがそこへ、

「あなたね、今更そんな泣きごと言たって通用しないのよ。あなたが今までやってきた

罪の重さを見れば、死刑で当然よ……」

ナオの冷たく突き放した言い方が、米川に突きささる。

「……」

それを受けて米川は、また押し黙り、首をうな垂れて沈黙してしまっていた。

しかし……

しかし、そこへ池沢元警部補が、米川を諭すように話しかける。

「いいか米川、犯した罪は罪だ、それは償わなければならない。だが、ここでお前が黒峰会の麻薬裏取引の事についてその真相を暴露すれば、今まで明るみに出なかった黒峰会の足がつかめ奴らを摘発することができるんだ。考えようによってはお前にもまだ世間に対して罪滅ぼしができるんだぞ。ここは一つ黒峰会の麻薬取り引きの件について喋ったらどうだ。お前にだって多少、罪を償いたいという気持ちがあるんじゃないのか？」

そう言うと池沢は、米川の肩をぽんとたたいていた。

すると、

それを受けて米川は、一瞬ビクッと体を震わせ池沢の顔を見る。

「わ、判ったよ……話せばいいんだろ？　でも一つだけオレの頼みを聞いてくれないか？　洋子に、溝口洋子に会いたいんだ。その願いを聞いてくれるのなら黒峰会のことについて話すよ。頼むから、彼女をここに呼んでくれないか……？」

だがして米川は、そう言うと池沢に対して両手を机につき、頭を下げて心底として反省したかのように、一つの願いを頼み込んでいたのである。

第二節

十二月十七日午後、米川の取り調べが行われていた日の同日、三時三十分。特務機関・特務一課のデスクフロアに、慌ただしく急報が届いたのはその時だった。

テュルルルル、テュルルルル、テュルルルル……

「はい、こちら特務機関・特務一課、担当の渡辺です用件をどうぞ……」

『あっ、渡辺さん？　オレ第三班の福井です。あの課長はいますか？　緊急の用事なんです。今すぐ課長を電話口に出してもらえますか？』

渡辺という女性が電話口に出て、真っ先に聞こえてきた声は、まだ若い福井という隊員の声だった。

「福井くん？　判ったわ、今すぐ課長に電話を替わります。そのまましばらく待って……」

渡辺と名乗ったデスク付きの女性隊員は、福井という通話相手の男性にそう言うと、課長の佐渡の方を振り返り彼を呼びだす。

「佐渡課長、何か緊急の用事で福井くんから電話です。内線を繋ぎますから、そちらの机で電話をお取りください・・・」

「ああ、判った。今すぐ取る」

そう言うと佐渡は、自分のデスクに置かれた白い業務用電話の受話器を取り、それを耳元へと運ぶ。

「よう、なんだ福井、緊急の用事か？」

『あっ、課長ですか？ 俺です福井です、今、大変な事になっているんですよ。至急、第一班と第二班に、緊急出動要請を願いたいんですけど、それ出来ますか？』

「なに？ それは一体どう言うことだ、何があった！？」

『あのですね課長、第三班と特捜班で捜査していたセンター街襲撃事件の逃走犯の一人、西尾光一が、商店街で暴れているんですよ。それもマシンガンを持ってです。それにその他、素性不明の五人の男が、その西尾光一と一緒に銃を乱射しているんです。こちら第三班としましては、今日は張り込みの予定で重武装はしていません。その為、手が付けられないんです。だから第一班と第二班に至急応援を頼みたいんですが出来ますか？』

「何？ そうなのか、それじゃ判った。至急、第一班、第二班に出動を命じるから、下手に手出しせず応援が駆け付けるまで待て。それで場所はどこなんだ？」

『麴町です。麴町、背水館ビル前、ニコニコ商店街です。至急、応援よろしく頼みますよ！』

プツ！ ツー、ツー、ツー

その通話を最後に、福井という男は急いでいるのか、電話を切ってしまっていた。

それを受けて佐渡は、神妙な顔をして、特務一課デスクフロア内を見渡す。

「課長、なにかあったんですか？」

そんな折り、手元にコーヒーを持った二階堂ゆかりが、神妙な顔をした佐渡一課長にそう問いたです。

「そうだ、逃走中の西尾光一が、麴町で銃を持って暴れているらしい。その為、福井から第一班、第二班の出動要請が来た。だから今から出動するぞ。呑気にコーヒーを飲んでいる場合じゃない、みんなをここのデスクフロアに集めろ、今すぐにだ！」

十五分後、特務機関・特務一課のデスクフロアには、第一班、第二班の全ての隊員が勢揃いしていた。

胸元には茶色に輝く防弾チョッキを装着、手には軍用特殊マシンガン、通称MPR-32や強化ショットガン、腰にハンドガンを装備し出動の準備態勢は整っている。

あとは、佐渡課長の出動の掛け声を、待つばかりだった。

「いいかお前たち、ここに集まってもらったのは、先ほど第三班の福井から皆に出動要請がかかったからだ。福井の話によると、麴町のニコニコ商店街で現在逃走中の西尾光一という男と、それに、五人の男が銃を持って騒ぎを起こしているらしい。その為、第一班、第二班はこれからその麴町に急行する。だからみんな気を引き締めて行動するように・・・では出動！」

その声を合図に、特務一課・第一班、第二班の隊員たちは、すみやかに地下駐車場へと向かっていた。そして麴町ニコニコ商店街へと急行する。

麴町は特務機関本部からはすぐ近くだ、たいして時間を食う事なく、現場へと急行できるだろう。一同は全員特務車輛に乗車すると、その道すがら銃火器の再点検をすることに余念はなく、佐渡一課長が言うように気を引き締め事に対処することを忘れてはしなかった。

麴町は、特務機関本部の建物と同じ区内にある。

それと同時に、そこは十三年前の大震災で、その街並みは大きく様変わりした場所でもあった。

そんな中、特務機関・特務一課、第一班と第二班は、早々に麴町ニコニコ商店街へと到着を完了していた。

しかし、そこへ来てみると、ニコニコ商店街とはアーケードのない小規模な商店街であるということが判った。肉屋、魚屋、青果店にパン屋、ケーキ屋、ブックマート、雑貨店、ほかにもその他、様々な店が細々と立ち並ぶ庶民的な場所であった。

そこへ早々に到着した第一班、第二班の特務隊員たちが、手に銃火器を持って物々しく乗り込んでくる。

しかしそこにきて、一体どこでマシンガンを持った西尾光一等その他五人の男たちが暴れているのかということはすぐに判った。

ニコニコ商店街のほぼ中央、小さな時計店とその向かい側に店を開く薬局との間で、銃声音が頻繁に響いていたからだ。

応援に駆け付けた特務隊員の一同は、それを聞き付けると、そこへ迷う事なく向かっていた。

すると、

「お～い、こっちだ、早く来てくれ。待っていたんだぜ！」

一人の若い利発そうな男が、手を挙げて手招きし、駆け付けた特務隊員をしきりにこっちだと呼び叫んでいる声が届いていた。

彼は特務機関・特務一課、第三班に所属する福井だ。

今はジーンズに灰色のジャンパーを着込んで、はたから見ると一般のごくありふれた若者の様に見えるが、れっきとした特務機関の隊員である。

福井は到着した応援部隊を迎えると、銃武装をする彼らを前にして、先頭に立っていた佐渡課長に今現在の状況報告をしていた。

「課長、今現在、西尾光一は目の前の坂田時計店に立てこもっています。それにその他五人の男たちが整髪店、薬局、ブックマートを占拠。整髪店には二人、薬局には一人、ブックマートには二人がそれぞれいます。その為、特務一課、第三班は今のところその動向を見守っているところです。いかがいたしましょうか？」

「わかった福井、それじゃ第一班、第二班、お前等は今から実地で状況確認し、各店舗の包囲網を固めろ。第一班は結城、第二班は向田、お前たちが指揮をとれ。いいなみんなそれじゃこれからすぐに配置につけ。くれぐれも一般の人々には傷を付けさせるなよ」

佐渡はそう言う手と手にハンドスピーカーを持ち、福井が言った西尾光一の立てこもる坂田時計店の前へおもむろに進み出ている。

その間にも特務一課の隊員たちは、時計店、整髪店、薬局、ブックマートの店内を表から盗み見て、中に立てこもっている男たちの動向を確認すると、商店街の裏路地から迂回してそれぞれの各店舗を取り囲むように配置を完了し、佐渡課長の指示を仰ぎつつ待機の姿勢をとっていた。

『あー、聞こえるかね西尾光一。私は特務機関・特務一課の佐渡一だ。君をはじめ他の五人が立てこもっている商店は、みな、我々、特務機関が包囲した。君たちがどんな理由があつて銃を持ちここに居るのかは判らないが、今すぐ手持ちの銃を放棄して店の中から出てくるんだ。そうすればこちら側としても君たちの身柄の安全は保証しよう。これは警告だよ、もし今私が言う言葉に応じなければ、武力行使もやもうえない。十分だけ時間をやるからよく考えて今後の去就を決めてくれ。くれぐれも言うておくと、手持ちの銃は発砲しないように。いいかい判ったかね？』

佐渡一課長はハンドスピーカーに口をあててそうまくしたてると、坂田時計店を覗き込んで男たちの次の反応を待っていた。

時計店の中を佐渡一課長が覗き込むと、そこには西尾光一がマシンガンを片手に、店内をうろうろと行ったり来たりしている姿が目映っていた。

どうやら店内には彼一人のようだ、店の店主が人質などとして捕らえられている訳でもない。

それを確認すると佐渡は、近くにいたナオとゆかりに指で合図して、時計店の裏口から店内に乗り込む準備をするように指示を出し、その他の隊員たちにも同じ旨を言い渡していた。

「ところで福井、時計店以外の他の商店に立てこもっている男たちは、店の中に人質をとっているのか？ 人質がいると、少しやっかいなことになるがどうなんだ？」

「はい課長、自分がさっき第三班の隊員たちと確認をいれたところ、全員人質はとっていないようです。ただ銃を持って立てこもり、時々外に向かって銃を乱射するだけです。各商店の従業員や店主は早々と裏口から逃げて、今現在、店の中には立てこもっている男たち以外は誰もいません。それに第三班の隊員全員で、商店街に客が立ち入らないように取り計らっておきました。課長に応援を要請したあとに所轄の警察にも連絡し、至急応援を頼む旨をいってありますから、警察ももうそろそろ駆け付けてくる頃だと思います」

「そうか判った、しかしお前にしては手際がいいな。だいぶ状況判断力が備わってきている様じゃないか。さすがに第三班の班長だけのことはある。少し見なおしたぞ・・・」

「いいえ、オレなんかまだまだです。いまだに課長の指示に頼っているだけですからね」

佐渡と福井がそんな話題にうつつをぬかしていると、商店街の奥の方でマシンガンの発砲音が響いていた。

ババババ・・・ババババ

それに呼応して、商店の窓ガラスが割れる音がする。

どうやら整髪店のなかに立てこもっている男が、マシンガンを乱射しているようだった。

「くそう、オレの警告を無視しやがって、捕まえたらただじゃおかんぞ」

そんな中、佐渡は眉を顰めてそう言うと、銃声音が響く整髪店の方を見て、その前に

待機している第一班の隊員に中の様子を覗くように指示を出していた。

それからかれこれ五分が経過する。

しかし佐渡が警告を発したにもかかわらず、各商店に立てこもっている男たちは、銃を捨てて出てくる気配はない。

だが佐渡は、約束の十分間まで、立てこもる男たちの動向を見ながら待つことに決めていた。

その間、ブックマートや薬局に立てこもっている男たちも、単発的にマシンガンを乱射していたが、やはり一頻りマシンガンを乱射すると、しんと静まり返ったように沈黙をまもっていた。

そんな折り、佐渡は第一班と第二班の指揮をとっている結城と向田を呼び出して、あれこれと指示を言い渡していた。

佐渡が結城と向田に出した指示はこういうものだった。

約束の十分が経ったら、佐渡がハンドスピーカーのサイレンを鳴らす。

そしたら各商店を包囲している隊員は、裏口と正面から同時に男たちへ急襲を仕掛け、そのまま身柄を拘束して捕らえる。

それはたいして芸のない作戦であったが、それ以外、他にいい方法が思い浮かばなかったからだ。

佐渡はその旨を結城と向田に言い渡すと、他の隊員にさっそく指示を出せと命じていた。

それを受け結城と向田は、隊員たちに課長の作戦をふれまわる。

この作戦がうまくいけば、西尾光一をはじめ、他の五人を一網打尽にすることができるはずだった。

その頃、坂田時計店の裏側では、やはり手にサブマシンガンを持ったナオとゆかりが、課長が鳴らすサイレンの音が響くのを、ただひたすら待って待機していた。

彼女たち二人がいる時計店の裏側には一つの非常口があり、そこを開けば店内に直ぐ様乱入できるはずだ。

「いいいナオ、課長の合図があったら、まず私が先に踏み込むわ。あなたは、その後につづいて」

サイレンの合図を今か今かと待つ中、ゆかりはナオにそう言って主導権を握る。

しかし、

「いやよ、私が先。あなたこそ私の後につづきなさい」

ナオはゆかりの言葉に反発し、そんな事を言っている。

「何言っているのよ、ここは私が先よ。あなたは問題児なんだからここは私に任せなさい」

「嫌だって言っているでしょ。あなたべちゃパイなんだから自己主張せずに黙ってて」

それはある意味、暴言だった。

ナオの発言にゆかりは怒る。

「なんですって？　べちゃパイとは何よ！　これだって80はあるのよ。あなたね私よりちょっとぐらい胸があるからってそう言う言い方は酷いんじゃない！？」

ウウー—ツ、ウウー—ツ、ウウー—ツ・・・

だが二人がそんな下らない会話をしているところへ、おもむろにサイレンが鳴り響いていた。

突入の合図だ。

「ほら、サイレンが鳴ったわ、踏み込むわよ！」

そう言うとゆかりは、時計店の裏の非常口を開けて中に踏み込もうとする。

しかしそこへナオが割って入り、ゆかりの肩をつかみ、グイッと後へ引き倒していた。

「キャッ！」

ゆかりはその勢いで地面にしりもちをつき、軽い悲鳴を上げていた。

「何するのよナオ！ 酷いじゃない！！」

ゆかりがナオに非難の言葉を浴びせる。

だが、

「あなたはあとから来なさい、私の活躍を見せてあげるから」

ナオはそう言って、非常口の鋼鉄製のドアを開けて中に踏み込んでいた。

バババババ・・・ババババババババババ

中へ入るといきなり、マシンガンの乱射音が突然、響いてきていた。

それは多分、商店の表側から店内に踏み込む予定の他の隊員が、牽制の為に発砲しているのだろう。

ババババババババ・・・ババババババババ

それに続き今度は、時計店の店内からマシンガンの発砲音がナオの耳朶に響く。

どうやら西尾光一という男が、特務隊員に対して応戦している様子だ。

ナオはそれを察すると、非常口から店の店内へと通じる通用口をつたって小走りに駆け、壁と柱の間から顔を出して時計店店内の様子を覗いていた。

居る！

すると店の店内では今、西尾光一という男が、やはり外の特務隊員に向かってマシンガンをきちがいの様に乱射している姿が目飛び込んでくる。

彼はかなり狂乱している様子で、銃を発砲しつつ雄叫びをあげている。

それを確認するとナオは、数秒間の間合いをはかりタイミングをとる。

そして意を決して、店内に身を踊らしていた。

「西尾光一、私は特務機関のナオよ、銃をすてて投降しなさい！！」

ナオは、ちょうど西尾光一の死角になる位置から店内に乱入すると、彼に手持ちのサブマシンガンに向けてそう叫んでいた。

「・・・！」

それに驚き、西尾光一が振り向く。

だが振り向きざまに彼はいきなり発砲———

バババツ・バババツ・バババツ

次の瞬間、ナオの頭上すれすれを、弾丸が通り過ぎていた。

ナオはその危機を察知して、ショーケースの裏に隠れ身を伏せる。

危機一髪、ナオは危うく脳天を撃ち抜かれ、死ぬところだった。

だが意外にもナオは冷静だ。

彼女は身を伏せながら、店内で銃を乱射する西尾の動向を探っていた。

その間にも店内では、様々なものが破壊され、粉碎し、飛び散る音が否応無しに聞こえてきていた。

「テメー、一体どこから入ってきた！」

ババババババババババ・・・

そんな中、西尾光一は、ショーケースの裏に伏せるナオに向かって、頻りに銃を乱射する。

その発砲でガラスが粉微塵に打ち砕かれ、ナオの体に降り注いでいた。

「チッ」

ナオは軽く舌打ちする。

このままでは体勢が不利だ。

この状況を打開するには、相手の銃をたたき落とすしかない。

しかしそれは無理というもの、不用意に立ち上がれば蜂の巣にされる。

その為、さすがのナオにも、この状況をどう切り抜ければいいのか途方に暮れていた。

「西尾光一、銃を捨てなさい！！」

ババババババ・・・ババババババ・・・

だがそこへ天の助けが来た。

ゆかりだ。

彼女は少々ナオに遅れるかたちで店内に裏口から乱入すると、西尾光一に向かって手持ちのサブマシンガンを威嚇発砲していた。

それによって西尾は不意を突かれた格好になり、一瞬、怯みを見せる。

ナオはその瞬間を見逃さない。

彼女は咄嗟的に床から身を起こすと、その勢いを駆り、腰のハンドガンを引きぬきそれを西尾に構える。そしてたて続けて発砲———

バン、バン、バン

その銃弾は見事、西尾の両足を捉えていた。

「ひいっ」

彼は短い悲鳴を発すると、そのまま床に崩れるかたちで倒れこむ。

そこへゆかりとナオが駆け付け、西尾の頭に銃を突き付け拘束していた。

夕暮れに近づく商店街の一角で、先程から二人の女性が険悪な顔を突き合わせて口論していた。

「あんたね、私をさしおいて先に踏み込むなんて一体どういう了見よ！　ただじゃおかないからね」

「うるさいわよ。あなたこそぺちやパイのくせに自己主張して、リーダー面するからいけないでしょ。自分の立場をわきまえなさいよ！」

「何その言い草、ぺちやパイぺちやパイってうるさいわね。何度も言ってるように私は80あるのよ。これでも立派なBカップよ、Bカップ、あんたにとにかく言われる筋合いはないわ！」

怒声を張り上げる二人、ナオとゆかりは今や鬭争心剥き出しにしてお互いを罵倒し

合っていた。

「なんだなんだお前たち、一体何をいがみ合っている。こんなところで二人して大声出してみっともないぞ」

そこへ現れたのは佐渡であった。

彼は殴り合いこそはしないが、その顔に不満の色を浮かべて向かい合うナオとゆかりの間に割って入ると、渋い顔をしてそう言っている。

「課長、聞いてください、ナオったら私の言うこと聞かないんですよ。私を引き倒して一人で現場に突入したんですから、何か言ってやってください」

「まあまあまあ、落ち着け二階堂。ナオが問題を起こすのは今日に限ったことじゃないだろ、そんなに怒るな。しかし無事、西尾を捕まえられたことだし、ここは万々歳だ。そうカリカリするな」

佐渡は、ナオを養護し二階堂をたしなめる。

「そんな、課長はナオの味方するんですか？ そんなにナオのことばかり可愛がっていると、あとで痛い目を見ますよ。だってナオったら、恩を仇で返すような女ですよきつと・・・」

ゆかりはナオを横目で見ながら、意地悪くそう言っていた。

そんなゆかりにナオは、ふんと横を向いて無視を決め込んでいる。

「いいか二階堂、オレは別にナオの味方をしているわけじゃない。頭の良いお前なら判るだろ。ナオには何を言っても通用しないんだ。今ここはお前が先にその矛先を引くべきだ。多少不満があっても我慢しろ」

(何よエロじい。本当はナオの事が可愛いくせに。まったく甘いわね・・・)

ゆかりは佐渡に聞こえない小声でそう言うと、不満を顕わにする。

「何か言ったか、二階堂？」

「いいえ、何も言ってませーん」

そうしてナオとゆかりの口論の行方は、お開きになっていた。

しかし商店街に立てこもっていた男たちは、その後どうなっていたか？

それは無事、特務機関の活躍で解決がついていた。

ナオとゆかりが時計店の裏口から店内に乱入し西尾光一という男を拘束した頃と時を同じくして、他の整髪店や薬局、ブックマートに立てこもっていた男たちも、店の表玄関や裏口から突入し速攻を仕掛けた特務隊員の面々により、見事それらの男たちを取り押さえることが出来ていた。

商店内に立てこもっていた男たちは、特務隊員たちが踏み込んでくるとマシンガンで乱射して抵抗していた。しかし特務隊員は実戦のプロだ、抵抗する男たちの銃弾の隙をうまく掻い潜ると、音響炸裂弾などを使った後、彼らに重傷を負わせる事を避けながら急所を外して発砲し相手を射止めていた。

ナオが西尾光一の足を銃撃して沈黙させた要領と同じ事だ。

それによって男たちは、足や肩に傷を負い、先程、救急車で運ばれていったばかりだった。

しかし特務機関側に、死傷者は一人も出ていない。

それは、普段からの訓練の賜物があるからかもしれない。

「しかし奴らは一体なんの為に、この商店街に銃を持って立てこもっていたんだ？ 福井その事についてお前は何か知っているのか？」

「それなんですがね、課長。我々第三班と特捜班は、この商店街に西尾光一がよく頻繁に顔を出すとある筋から聞いて張り込んでいたんですが、どうやら西尾光一は我々がここで張り込んでいるという事を知っていて自ら銃を持って現れたのだと思われています。彼は、多分、米川同様、気の狂った愉快犯なんでしょう。西尾光一と他の五人はこの商店街に銃を持って現れると、頻りに特務機関を挑発するような発言をして銃を乱射していたんです。張り込んでいた俺達に姿を見せろといってね。おそらく彼は特務機関と一戦交えたかったようなんですよ。また銃を乱射して一暴れし、快感を得たかったんでしょう。それはある意味、自分から逮捕されることを望んでいたかのような行いですが、この手の何を考えているか判らない連中を相手にするとほんと困りますよね、課長」

福井は、そう言う困った表情をし、おどけてみせていた。

「そうか、だが誰も死傷者が出なくてよかったな。今後こんな事件が起きるのはもう勘弁してもらいたい。気の狂った馬鹿な連中には、付き合っていられんからな・・・」

そう言って佐渡は苦笑していた。

そして自分の左腕にしている腕時計を見る。

時計の針は五時十分を回っていた。

「さあ、俺達も、そろそろ引き上げるか」

佐渡はそう言う足早にその場を去り、特務機関の面々をひきいて帰路についていた。

そして蛇足だが、その後、ニコニコ商店街はしばらくの間、封鎖され、店を休業する商店が相次いでいたのは言うまでもない。

第三節

休日といえば何をするだろう？

まず思い浮かぶのはデートだ。

いやいや、これは、彼氏彼女がいなければ成立しない、一つのシチュエーションだ。

それでは他に何がある？

家のベッドで午前中の十時過ぎまで寝ていてそれから起きだし、寝巻き姿のままテレビを見て夜まで過ごす、これもなかなかおつなもの。

でもやっぱり、それは、ちょっと折角の休みを無駄に過ごすようで却下する。

では他に何が？

わたしはあれこれ考える。

そこで閃いた！

そう、やっぱりここは友達を連れて、銀座辺りなどに繰り出してショッピングでしよう。

そこで私は思い立つ。

私にも幸い友達といえる二人の先輩が居る。

その名は高崎ナオ、そして二階堂ゆかり。

この二人を誘ってショッピングに繰り出せば、きっと楽しいこと間違いなし。

多分、二人も今日に限って、デートなんて言うことはあるまい。

知性派のゆかり先輩はともかく、武闘派のナオという怒りんぼうは、今日も一人、男にも縁はなくアパートで寝ているはず。

それで思い立ったが吉日、私こと柏木モモはそんな二人を誘って今日は楽しいショッピングを計画したのだ。

てなことで私は早速、ゆかりというちょっとぺちやパイな知性派の先輩へと電話で連絡をとることにする。今は午前九時半、几帳面なゆかり先輩のことだおそらく起きていることだろう。

私は家の電話の受話器をとると、二階堂ゆかりの自宅へと電話を掛けていた。

テュルルルル、テュルルルル・・・ガチャ

電話の呼び出し音が二回鳴ると同時に、目的の彼女が電話口にでる。

『はい、二階堂です。どちら様ですか？』

麗らかな春風がそよぐような声、うむ、たしかにゆかり先輩本人だ。

わたしは開口一番、幼稚な声であいさつをする。

「おはようで～す、ゆかりせんぱーい。わたし柏木モモですよ。起きてましたかー？」

『あっ、なにモモ？ おはよー。こんな朝からなんの用？』

ゆかり先輩の反応は、ごく自然なものであった。

「あのですね、せんぱーい。今日ショッピングに行きましょうよ。銀座です銀座、どうせ暇なんでしょう？ ねえ行きましょー」

『ええっ？ ショッピング？ 銀座？ 今日行くの？ ちょっといきなりね・・・』

「そうですよ先輩、今日はナオ先輩も誘って、お優雅にショッピングと洒落こみましょう」

『えっ？ ナオも行くの？ それじゃわたしパス。あなたとナオの二人で行って』

つれないゆかり嬢の発言、その時、私こと柏木モモはあることを思い出していた。

「ああ、そうでした。ゆかり先輩とナオ先輩って、昨日から喧嘩していたんだっけ。ねえねえ、そうでしたよねー、ゆかり先輩？」

『そうよ、あんな奴の顔、二度と見たくないわ。だから銀座には二人で行って。わたしは行かないわ・・・それじゃね』

そう言うと、ゆかり先輩は、電話を切ろうとしていた。

「ああ、ちょっと待ってください、いいんですかー？ ここは仲直りのチャンスですよ。わたしが二人の仲を取り持ってあげますから、ねえ、行きましょうよ。いつまでも喧嘩していてもつまらないですよ」

『・・・・・・・・・・』

その時、ゆかり先輩は沈黙する。

多分、行くべきか行かざるべきか迷っている様子とわたしは見た。
 「ゆかりせんぱ〜い、大人げないですよー。この際だから、仲直りしちゃいましょう。待ち合わせの時間と場所は、十一時に有楽町マリオンのからくり時計の前ってことでどうです？ ナオ先輩だってゆかり先輩と、仲直りしたいと思っているに決まっていますよ。いいですか、十一時に有楽町マリオンですよ来てくださいねー」

わたしは半ば強引にゆかり先輩に待ち合わせの場所を告げていた。

これだけ言えば、おそらく、ゆかり先輩もOKすることだろう。

しかし、その目論みが案の定、当たったか、次にゆかり先輩は電話口からこんなことを言っていた。

『しょうがないわね。わたし気が進まないけど、ちょっとだけなら付き合ってあげてもいいわ。十一時に有楽町マリオンね。でも、くれぐれもナオには言っておいて、時間には遅れないようにって・・・』

素直じゃない奴、ホント言えば仲直りしたいくせに、プライドの高いゆかり先輩は渋々わたしの話を承諾する。

電話の用件がすむと、それから私とゆかり先輩は同時に電話を切っていた。

さてこれからが問題だ、次に連絡をとるのはあのナオ先輩、特務機関きっての問題児にどう誘いの言葉をかけるべきか少しの間、私は考える。

しかし私は、それほど気転が利く頭を、あいにく持ち合わせていない。

そこで普通に電話を掛けることにする。

私はまた家の電話の受話器をとると、ナオ先輩のアパートの電話番号をダイヤルする。

テュルルルル・・・テュルルルル・・・テュルルルル・・・テュルルルル・・・テュルルルル・・・
 テュルルルル・・・テュルルルル・・・テュルルルル・・・テュルルルル・・・

私は電話のベルが、九回鳴るまで呼び出してみた。

しかし、電話口にナオ先輩が出てくる気配はない。

やっぱり寝てやがるな！

折角の休みに、九時半まで寝ているなんてなんと不健全な。

テュルルルル・・・テュルルルル・・・テュルルルル・・・テュルルルル・・・テュルルルル・・・

さらに五回、私は呼び出しベルを鳴らしてみる。

ガチャ！

すると受話器をとる音が聞こえてきた。

『は〜い、高崎です。あなた誰・・・？』

相変わらず愛想のない声、やっと出たか寝ぼすけめ・・・

私はそんな事を思いつつ、また幼稚な声で先輩にあいさつをする。

「ヤッホー、わたし柏木モモ。ナオ先輩起きましたか〜？」

『あっそう？』

ガチャ・・・

そう一言残して、即座に電話が切れた。

コノー！ 折角の私からの電話を切るなんて、なんて不埒な奴め・・・

私は半分怒りつつも、いったん受話器を電話機本体に戻してまた電話をかけなおす。

テュルルルル・・・テュルルルル・・・テュルルルル・・・テュルルルル

ガチャ！

今度は、四回目でやっと出た。

『はい高崎です、あんた誰よ？』

「私ですよせんば〜い、モモです。どうしてすぐ電話切るんですか？ その癖やめてください〜い・・・」

私は一応、先輩に非難の声をぶつけてみる。

すると、

『なにモモ？ 私いま熟睡中、邪魔しないで！』

いやに不機嫌な言葉が返ってくる。

「何、言っているんですか、もう起きたんだから私の話、聞いてください。いいですか？

ショッピングですよショッピング、今日は一緒に銀座に繰り出しましょう」

『ショッピング？ それで一体誰と行くの、ゆかり？』

「そうですよ、ゆかり先輩と私とナオ先輩でショッピングです。へへー、おつなものでしょ？」

私こと柏木モモは、そう言って言葉を切っていた。

『もしかしてあなた、私にゆかりと一緒に銀座へ行けて言っているの？ それなら駄目よ。私これから用事があるの、だから二人で行って！』

「ええーっ、駄目ですよそんな事言っ。本当は用事なんか無いの判っていますよ。どうせアパートで一人、寝て過ごすつもりでしょ？ 今日はナオ先輩とゆかり先輩の仲直りもかねて、銀座に行きましょうよー。ねっ、いいでしょ〜！」

『・・・・・・・・』

ゆかり先輩同様、ナオ先輩も一時沈黙する。

そして次のような言葉を発していた。

『判ったわ、それで待ち合わせの場所はどこ？ 仕方ないから今日は付き合っあげる』
やりー！

そのナオ先輩の言葉を聞いて、私は、今回のショッピング計画が半ば成功したと確信していた。

「待ち合わせ場所はデスね〜、十一時に有楽町マリオンのからくり時計前です。いいですか、絶対遅れない様に来て下さいよ。またゆかり先輩が怒りますからね」

『判ったわ、それじゃこれから行くわ。極力遅れない様にする。それじゃ・・・』

ナオ先輩は、そう言って電話を切る。

やはりナオ先輩も素直じゃない。

私の推測では、彼女もやはりゆかり先輩と仲直りしたいに決まっている。

まったくこの二人には手を焼かされる。

しかし、これで今日は、楽しい一日になりそうな気分！

そんなことで私は着替えをすませると、有楽町マリオンに急いで自宅を後にしていた。

銀座といえばやはり、老舗やブランドブティックなどの店めぐり。

日本を代表するファッションタウンのここは、エレガントな大人の街だ。

私はいま約束の場所、有楽町マリオンのからくり時計の前でいち早く待ち合わせの時間待ちをしている。

意外と強情なゆかり先輩と、特務機関の問題児ナオ先輩の姿はない。

ちょっと早く来すぎたかな？

でも私はだいぶ浮き浮き気分。なんたって、銀座でショッピングするのは久しぶりのことだ。

本当の事言うと、素敵な彼氏と一緒に来たかったが、男日照りの続く私には少し縁遠かった。

ちょっと淋しい・・・

しかしあのゆかり先輩や、ナオ先輩にも彼氏は居ないのだ。

男嫌いなナオ先輩はともかく、あの頭のいいゆかり先輩にまで彼氏が居ないということは少し不思議な気がしないでもない。

これはおそらく、あのナオ先輩の呪いなのだと思います。

彼女には、男を寄せ付けない、不吉なオーラが漂っている。

その事を考えると、いつも身近に居るゆかり先輩と私に、その不吉なオーラがうつてもおかしくはない。

私はそう思いながら無理矢理、納得する。

だが、そんなところへ、徐にゆかり先輩が現れていた。

「ああ、待ったモモ？　でもここはいつ来ても混んでいるわね？　一体、何しに人が集まるのかしら？」

「やだなゆかり先輩、私たちもその人の群れの一人なんですよ。そんな事考えていると豆腐が腐っちゃいますよ・・・」

私は自分でも意味不明なナオ先輩の語録を引用して、そうゆかり先輩に言っていた。

「ちょっとやめて、それどういう意味なの？　最近あなたナオにかぶれてきてるわよ。気を付けなさい」

えっ、そんな、私がああのナオ先輩にかぶれている？

それはショック！

りかちゃん人形をこよなく愛するこの可愛らしい私が、乱暴で無愛想でスタイルはいいけどかなり問題ありのあの怒りんぼに似てきてしまうとなるとこれは一大事。

折角の私のイメージが、悪魔のようなあの女に毒されてしまえば、特務機関のアイドルとしての私の立場が危うい。

私は不吉な思いを打ち払うべく、一頻り身震いしていた。

「ところでモモ、まだあの女は来ていないようね？　ちゃんと時間に遅れない様になって言った？」

「ええ、もちろん言いましたよ。極力遅れない様に来るって事です」

今は十時四十分、いくら時間にルーズなナオ先輩でも、もうそろそろ現れてもいいはず。

しかし彼女が、結局、現れたのは、十一時を二十分も過ぎてからだった。

「あー、遅いですよナオ先輩！　一体、何時だと思っているんですか？　十一時二十分ですよ二十分、約束の時間を大幅に遅刻オーバーで～す」

やっと有楽町駅方面から現れたナオ先輩に向かって、私は非難の意味も込めてそう言っていた。

しかし、

「さっ、行きましょ。こんなところで時間をつぶしては折角の休み、もったいないわ」

そう言って遅刻してきたことなどまったく気にもとめず、いけしゃあしゃあとそんな事を口走ってきていた。

「ちょっとあなたねー、遅刻して私たちを待たせておいて、その言い草は何？　まずは謝りなさい、それが筋ってものよ」

ゆかり先輩はナオ先輩の飄々とした態度を見ると、いきなり怒りだしてきていた。

これはまずい。

ここでまたゆかり嬢と怒りんぼのナオが喧嘩してしまうと、折角の私の楽しいショッピング計画が台無しになってしまう。

ここはなんとか二人を宥めなければ……

だが、

「あ〜らそう？　それは悪かったわね、ごめんなさい。遅刻して本当にすいませんでしたね……」

多少ふてくされた物言いではあるが、意外とあっさりあのナオ先輩が謝っていた。

これは何かある、地球大異変かそれとも宇宙人の襲来予兆か……

しかしそれを耳にしたゆかり先輩も、ここはなんとか怒るのをやめ、多少不満を残しながらも納得している様子だった。

まずは一安心。

「さあー、それじゃ三人揃ったことだし、まずはランチをとる店を探しましょうか？」

私はそう言って二人を食事に誘っていた。

銀座でショッピングを楽しむこととそれに付随するかたちで、もうひとつ重要な楽しみがある。それはなんと言っても、この街のお洒落な店でランチをすることでしょう。

これが今日の私の第二の楽しみ。

豪勢にフランス料理や懐石料理とはいかないまでも、ちょっと洒落たお店で食事するのは私の夢。

何度も言うけど、本当は、彼氏と一緒に来たかったのは言うまでもない。

でも、この二人と一緒に、まあ楽しい一時を過ごせるだろう。

私こと柏木モモは、ナオ先輩とゆかり先輩をつれて、早速、有楽町マリオンを後にし、銀座の街へ乗り出していった。

銀座の街並みは、まるで碁盤の目のように道路が走っていることで有名だ。

その中で、メインストリートとなるのは、銀座通りと晴海通りだ。

これらの交錯する通りを中心として、銀座の街並みはある。

私たち三人はそんな中、ランチのとれる場所を探して、銀座の街中を歩いていた。

そんな折り、ある通りの一角に、私にしては燦然とした輝きを放つ店を目撃していた。

今、私たちがいる側道から、向かいにある黒塗りの店だ。

その名を《黒猫ミーシャ》という。

私は一目見てその店を気に入っていた。

店の外壁が全て黒一色で、金色のリボンらしき絵が描かれてある小さな店だ。

りかちゃん人形をこよなく愛する私であるからこそ、可愛いものには目がない。

だから私は二人の意見を聞かず速攻で決断する。

「ねえ先輩、先輩。あそこの店にしましょー、《黒猫ミーシャ》なんて可愛いお店かしら？」

しかし一人ではしゃぐ私に、なんと二人は、白い目を向ける。

「ちょっとモモ？ あんな錆びれた店がいいの？ 見たところ誰も入っていないわよ。

あなたのセンス疑うわ」

ゆかり嬢が冷たく言う。

あー、ちょっと心外。私としてはお洒落と思ったのに、何とも冷たいお言葉。

しかし、それに追い打ちをかけるように、ナオ先輩が・・・

「わたし嫌よ。あの店、子供じみてる！」

ガーン！

わたしのささやかな自尊心は、その一言で打ち砕かれていた。

酷い・・・酷すぎる・・・子供じみてると来たか？

だが私はめげなかった。

ナオの怒りんぼにそんな事言われても、絶対ここと決めたからにはあとにひかない。

「私、あの店じゃなければ嫌ですよー！ 絶対あそこ、あそこがいいー！ わたし泣いちゃうからー！」

そんな事で食事の場所は決まっていた。

《黒猫ミーシャ》、そこでランチを楽しむのだ！

私のだだっ子作戦で、ゆかり嬢と怒りんぼのナオは、渋々承諾していた。

こうなればしめたもの、私はさっそく二人を連れて通りを横断し、向かい側にあった愛しの《黒猫ミーシャ》へと、一目散に向かっていた。

中に入ってみると、そこは私の目算通り、お洒落な店の雰囲気醸し出していた。

店の奥には色とりどりの煉瓦で作られた暖炉が幅を利かせ、異国情緒漂わせる重厚なテーブルが五つと、窓にはセンスのいい花柄のカーテンが吊ってある。壁はイタリア風のモダンな模様がすり込まれた白塗り、そして店の天井には小さい店にしては大きめなシャンデリアが、淡いほのかな明かりを放っていた。

しかし、それとは別に驚くのは、この店が格安のイタリア料理店であるということだった。

黒猫とイタリア、その点に関しては、いまいちピンとこなかったが、《赤いイタリアの跳ね馬》とは異なり、私の趣味に至極合っているような気がする。

先程、センスが悪いというようなことを言っていたゆかり先輩も、中に入ってみてその考えを改めたようだ。

しかしナオ先輩は、何とも思っていない様子。

この女には、この店の良さが判らんのかーと、突っ込みを入れたいそんな気分になっ

だが、どうせ無趣味、無感動なナオ先輩のことだ、ここは事を荒立てずにそっとしておくことにしておいた。

店に入ってテーブルの席に私たち三人がつくと、早速メニューが運ばれてきていた。白いふりふりのエプロンとピンクのミニスカートをはいたウエイトレスが、メニューの他に水入りのグラスを持ってくる。

だがその姿を見て、私はなんて大胆な格好なんだと、ある意味、顔を赤くしていた。ウエイトレスのパンツが見えそう、ここはパンチラハウスかと、一瞬、疑ってしまうほど、そのスカートは異様に短かった。

佐渡課長なんかの、エロじじいが好みそうな格好だ。
あのエロじじいは、ナオ先輩のお尻ばかり触っている。
でもそれは仕方ない、ナオ先輩は性格は別としてスタイルがいい。
けど、私にはセクハラをしたことはない。

ちょっと、ある意味、不満。私が幼稚体形のせい？
ナオ先輩のように私は美人ではないけど、特務機関の隊員には人気があるはず。
その辺はちょっと、私、自負している。

ゆかり先輩はナオ先輩同様、ちょっと知的で近寄りたいたい部分もある意味あるけど、人当たりがいいので、他の隊員との仲はうまくいっている。

でも、このナオという問題児が、佐渡課長にばかり可愛がられるのは、少し問題がある。

だが、そんなこんなで私たち三人はオーダーをすませ、料理が運ばれてくるまでの間、ささやかな時間を待つことにしていた。

私が頼んだのはナポリタン。折角イタリア料理専門の店にきたのだから、もっとおつな物を頼めばいいといわれたが、私はこれが好きなのだ。それにチョコレートパフェを頼むことを忘れはしない。

ゆかり先輩はやはり、スパゲッティーのペペロンチーノを頼んでいる。私と大して変わりがいいではないか・・・

しかし問題のナオは、あさりのクリームスパゲッティー、一番メニューの中では高額だ。

意外にこの女は、金持ちである。
ナオ先輩は、あまりお金を使わないのが有名。
といっても、私とゆかり先輩の間で知られているだけの事だが、女性であるのに服にもあまりお金を掛けないので、金がたまっている様子。

私とゆかり先輩の場合は、お酒好きなので、意外と浪費してしまうのだ。

だが、ふと気付くと、そう言えば、先程からナオ先輩とゆかり先輩は一言も口をきいていない。

まあ喧嘩しているのだからそれは当然な気がするけど、これは私にとってはちょっとした大問題でもある。

二人が喧嘩している原因になったのは、昨日、麴町のニコニコ商店街で西尾光一という馬鹿な奴が、五人の仲間を引き連れて騒ぎを起こしたとき、二人はどちらが先に坂田時計店に踏み込むかということで口論となりそれがもとで未だに喧嘩しているという。

まあ言ってしまうと些細ないがみ合いだった。

でも、このまま二人が、喧嘩を続けていていいということではない。

私としては非常に困る。

特務機関のなかでは、この二人が私にとっての親友といっても過言じゃないからだ。

だから私は、二人が興味を示す共通の話題はないかと模索して、ある事を思いついていた。

そうだ、米川の話を話そう。

米川とは、最近やっと捕まった指名手配の犯人だ。

相当なワルだが、今はもう観念して、黒峰会のことに関する様々なことを自供しているという。

ナオ先輩もゆかり先輩も、黒峰会のことについては興味があるはずだ。

ゆかり先輩は、ナオ先輩が黒峰会を一人で追っているということを気にして心配していた節もあることだし、ここは一つその話題で二人に仲直りのきっかけを作ってやろうという名案が思い浮かんでいた。

そんな事で私は、突然、ナオ先輩に話を切り出す。

「でもそう言えばよかったですよねー、ナオ先輩。米川が黒峰会の事を自供して、クリスマス・イブの前の日に特務一課の面々と、警視庁の麻薬取り締まり班とで、合同の一斉摘発を行うんでしょう？　これでやっと黒峰会を取り締まる足掛かりが出来ましたねー？」

「そうね」

一言、素っ気ない答えが、返ってきていた。

「あれ〜？　嬉しくないんですか？　ナオ先輩は黒峰会に、何か因縁があるんじゃないかなって思いませんか？　ねえ、ゆかり先輩、そうですよね〜」

「……………」

それを受けて、ゆかり先輩は、私の言葉を無視していた。

これは、なかなか手強い。

ゆかり先輩は、これで意外と強情だ。でも、本当は、仲直りしたいということは判っている。

それは、ナオ先輩も同じ事のはず。だから私は話を続ける。

「でも、どうしてナオ先輩は、黒峰会を目の仇にしているんですか？　それが聞きたいですよ、ゆかり先輩？」

すると、

「そうね、その事に関してなら私もう知っているわ。ナオはね、お父さんの高崎警視の敵討ちをしようとしているのよ、お父さんを殺したと思われる、勅使河原洋二って言う男を捜してね……………」

「えーっ、それって本当なんですか？」

私は、そこで、意外なことを、聞いてしまっていた。

するとそこへ

「どうしてその事をあなたが知っているの？　私は、あなたに喋った覚えはないわよ！」
と言って、ナオ先輩が、少々怒った語り口調で聞いてきていた。

「池沢警部補から聞いたの。彼、心配していたわよ。ナオが自分の家族同然の存在だとも言っていたわ」

「そう、あの人、意外とおしゃべりね」

ナオ先輩はそう言うと、別な意味でふてくされてしまっていたようだ。

「はい、お待たせしました———」

と、そこへ、徐に、先程オーダーした料理が運ばれてきていた。

イタリア料理特有のパスタの匂いがたちこめる。

「きゃー、うまそー！」

私はそれを見て、さっきの黒峰会の事など忘れて、喜びを顕わにしていた。

まあ、それも仕方ない。

今はそんな話より食い気だ。

実を言うと、私は、朝飯は食べていない。

だから、お腹はペコペコなのだ。

その他にも、ペペロンチーノや、あさりのクリームスパゲッティーが運ばれてくる。

私は、はしたなくその二品目にも、目を奪われてしまっていた。

世間にはこんな人がいる。

友達とレストランに入って、二人、別々な料理を注文する。

しかし、自分が食べたくて注文した料理が目の前にあるのにもかかわらず、友達の料理も欲しがってしまうというそんな人だ。

私はある意味、そんな人の部類に入るのかもしれない。

ゆかり先輩が頼んだペペロンチーノも、ガーリックの香ばしい薫りが漂ってきてたまらない。

それと同時に、ナオ先輩のあさりのクリームスパゲッティーも捨てがたい。

私はそこで、こんな提案をしていた。

三人で、三品目を、仲良く順番に回す方法だ。

大体、それぞれが、自分の料理を三分の一ぐらい食して、残りを順番に食する。

そうすれば、一度に三つの味が堪能できるはず。

これはいい思い付きである。

しかし、私がそれを提唱すると、ゆかり先輩には断られてしまっていた。

彼女はある意味、ナオ先輩のような潔癖症なのだ。

人の手の着けた食事が食べられないという、あれ。

そこで、私は、仕方がないので、ペペロンチーノはあきらめ、ナオ先輩のあさりのクリームスパゲッティーに照準を絞っていた。

「ナオ先輩、半分食べたら私のと交換してね？」

私のその申し出に、ナオ先輩は、「判ったわ」といって、あっさり受け入れの姿勢を見せてくれていた。

やりー。

これで二品目の味が堪能できる。

そんなこんなで、食事は、私一人ご満悦で早々と終了していた。

食物なんて、腹に収まってしまえば早いものだ。

ほんの十分で、食事は終了を迎える。

しかし、私にはまだ、チョコレートパフェがあった。

パフェを食する私に、二人は白い目を向けてきていたが、そんな事はどうでもいい。

どうせまた私を、お子様だと思っているに違いない。

「これおいしーですよ。ナオ先輩、食べてみます？」

そんな中、私は、一応、ナオ先輩にチョコレートパフェをすすめてみた。

しかし、

「嫌よ、子供じみてる」

とって、私の好意を拒絶する。

ガチョーン・・・

また、そんな事言うか？

でも私はめげない。

一人で、黙々とパフェをほじくる。

二人も、私がパフェを食べている間、コーヒーを注文して、ようやく会話をしだしている様子だった。

これで、二人の仲は、良い方向へ歩みだしたようだ、よしよし。

本来、今日の目的は、私がショッピングをして楽しむのが本旨だが、ナオ先輩とゆかり先輩の仲も取り持つのも忘れない。

まあ、私が二人の仲を取り持つといっても、そう大した事じゃない。

どうせ、ナオ先輩とゆかり先輩は、二三日もすれば仲直りするのだ。

何も、二人が喧嘩するのは、今回に限ったことではない。

意外と二人は強情で、仕事上、衝突することがしばしばある。

私はそれを、少し早めてやればいいだけのこと、所詮、ナオ先輩は私とゆかり先輩以外、友達には居ないのだ。

それに、ゆかり先輩は、何だかんだ言ってもナオ先輩を親友だと思っている。

この二人は、ある意味、腐れ縁、切っても切れない関係なのである。

そんな事で私の第二の目的、ここ銀座でお洒落な食事をするという夢は満たされた。

この後は、そうショッピング。

銀座に来て、食事をしただけで帰る訳にはいかない。

これから第一の目的が待っているのだ！

私たちは食事を終えると、名残惜しそうに《黒猫ミーシャ》を後にしていた。

っていうか、名残惜しそうにしていたのは私だけだけど、そんな事はどうでもいい。

これから並木通りに、しゅっぱーつ！

そこは、ブランドブティックの聖地。

グッチ、シャネル、ルイ・ヴィトン、エルメスなどが、わんさかあるところだ。

最近では、リップ・スティックという日本製ブランドも流行っているという。

ナオ先輩は、柄にもなく、そのブランドがお気に入りということだ。

でも、私としては、やはりルイ・ヴィトン？

これがお気に入り。

だって、音感がいいでしょう。

しかし、何故、ルイ・ヴィトンの後に疑問符が付くのかということ、実はわたしあまりブランドのことは詳しくない。

これもよくある人の話で、雑誌で銀座のことを調べて並木通りに憧れている一庶民なのである。

だから銀座の中では、並木通りに行くのは今日が初めて。

その為、少し緊張気味。

わたしが高級ブランドを知らない田舎者であるということがバレてはまずい。

高級感漂う店に入るのには、それなりに覚悟がいる。

おそらくブティックの店員も、多分、エレガントな口調で接客してくることだろう。

これは、私の予想。

何せ商店街ではなく、`ブティック、という語源がどこなのか判らない横文字の響きを持っているのだ。これは曲者だ。

一体、どこの国の言葉であるのだろう。

私は、ふと考えてみる・・・

英語？ それともフランス語？ あっ判ったイタリア語だ、さっきイタリア料理店でナポリタン食べたもの。そんな事を考える、馬鹿な私。

だが、そんなこんなで私たち三人は、並木通りへと着いていた。

並木通りは、ガス灯風の街灯や、カラータイルの歩道がつづくまるでパリのようなお洒落なストリートだ。そこに、様々な、ブティックが軒を連ねている。

私たちは、まず、その並木通りを一通り歩いて、どこの店に入ればいいかと通りの表から頻りに覗きを立てて見る。

何せ、初めてのことであるのだから、ひたすら迷っていた。

だが、意を決して、その通りの中程にある、ある一つの店に入っていた。

そこはフランスの高級ブランド、エルメスの専門店だった。

店内にはブランド品の定番、バックなどや婦人服、紳士服、時計、その他、雑貨類までより取り見取り揃っている。しかしどれも高い、福沢諭吉のお札が、何枚も飛んでいきそうな値の張るものばかりだ。これではしががない特務隊員としての給料しか持ち合わせていない私には、なかなか割りに合わない。

しかし、ここまで来て、怯んではいけない。

「ねえモモ、そう言えばあなた何が欲しいわけ？ バックそれとも靴？」

そんな折り、ゆかり先輩が私に、そんな事を聞いてきていた。

「もちろんバックです。私、なるべく安くて質の高いバックが前から欲しかったんです。それに、機能性のすぐれたやつ・・・」

私は少し力んでそうゆかり先輩に答えていた。

「あなた、お金あるの？」

その時、ナオ先輩が突然そんな事を聞いてくる。

「失敬な！銀座で買い物するのに、無一文で来るはずないでしょ！」

私はやはり力んで、失礼なことをぬかす、このナオという女をにらんでいた。

私だってお金ぐらい持っている。

この日の為に、少しずつ貯めていたのだ。

「それじゃこれなんかどう？ これ機能性よさそうよ」

　　といってゆかり先輩が手に取ったのは、上品なショルダーバッグだった。

「どれどれ、見せてください」

　　私は、いつもの「でーす」、「まーす」という間延びした口調も忘れて、緊張してそのバッグを手にとりて見た。

　　なかなか良い、重さもそれほど重すぎない。

　　それに手触りが抜群だ。

　　しかし、私は値札を見て、ぎょっとする。

　　げげ、二十万。

　　普通こんな高いものをすすめるか？

　　私は、安くて質の高いやつと言ったはず、それなのにゆかり先輩は、一体どういう金銭感覚をしているのかそれを疑ってしまう。

「ねえモモ、こっちのはどう？」

　　そこへナオ先輩が口を挟む。

　　ナオ先輩が手に取ったのは、サドルバッグだ。

　　茶色の革製の可愛いやつ。

「わ～これいい。よく見付けましたねこんな可愛いなの？」

　　私は一目見てそれを気にいていた。

　　でも問題は値段だ。

　　この手の物は、高いと相場は決まっている。

　　私は恐る恐る値札を見してみる。

　　・・・4万5000

　　意外と、お手ごろな値段だ。

「いいですよナオ先輩これ。私、買っちゃおーかなー」

　　しかし私は、そこで思い止まる。

　　おっと危ない、衝動買いするところだった。

　　これは私のちょっと悪い癖。

　　気に入るとすぐ何でも買ってしまおう、そんなわたしって馬鹿ね。

　　そこで私は、他にもいい品がないかとあれこれ物色してみる。

　　しかし、それらしい品は、なかなか見つからない。

　　どれも洒落なシルエットをもつ一品らしいが、何せ私ばかりかちゃん人形を愛するよな女だ、可愛いと自分が思うのでなければ欲しいとは思わない。

　　そうなると、先ほどナオ先輩が意外にも発見した、サドルバッグが捨てがたくなってくる。

　　どうしよう、買ってしまおうか？ それとも他の店を探してみるか？ 二つに一つ、私は二者択一の問題に迫られることになっていた。

「ぐー、ぐー」

　　悩む私こと柏木モモ。そんな私を見て、ゆかり先輩は次にこんな事を言っていた。

「どうするモモ、他の店当たってみる？ 別にここだけで決めることないわよ」

　　ゆかり先輩ご尤も。

別に、真剣に悩むことではなかったようだ。
まだ時間はたっぷりある。
いろんな店を回ってあれこれと選ぶのも、ショッピングの醍醐味のはず。
私はそんな初歩的なことを忘れていた、自分を恥じた。
どうやら私って近視眼的みたい。
物事を広範囲に見て、判断が出来ないらしい。
ここで思わぬ自分の欠点に気が付く。
「それじゃ他の店、行きましょうか？」
ゆかり先輩の発言に力を得て、私たちはこの店を後にしていた。

私たち三人が次に入った店は、最初の店から右隣三件目の大きなブティックだった。
そこは、グッチ、ルイ・ヴィトン、クリスチャン・ディオール等の商品を複合的に扱う店で、これなら一度に色々なブランドの品々を手にとることができる。
私が目指すバックが置かれている場所は、その店の三階のフロアーにあった。
「ねえねえ、これなんかどうです。可愛いあたしに似合いませんか？」
すっと手に取ったのは、やはり茶色のバック。
バックといえばやはり茶色系の品がいい。
黒だと少し、おばさん臭いように感じてしまうからだ。
かといって、カラフルなもの私の趣味に合わない。
しかし、ここに来てやはり迷う。
「うーん、その色ちょっと変じゃないかしら？ 私は、こっちの方がいいと思うわよ」
ゆかり先輩は、私が選んだバックに少し難癖をつけると、今度は別のバックを手を持って私にかざしてきていた。
「えーっ、それって変わったデザインですよ？ 私に似合うかな」
それを見て、私は少し気圧されていた。
それはなんと豹柄、毛足がふさふさの毛皮のような代物だ。
しかし、折角ゆかり先輩に選んでもらったので、本当のところ言うと気に入っていないが、一応、手にとって品質や使い勝手を確かめてみる。
そして一言、「これって本当にいいと思います？」とあって、ゆかり先輩に問いただしてみた。
「いいわよ。たまにはそんな変わったバックを持ってもいいと思うわ。ね、ナオそう思わない？」
そう言ってゆかり先輩は、ナオ先輩に同意を求めている。
「いいんじゃない？ 選ぶのはモモよ、本人次第ね」
彼女は相変わらず、素っ気なく一言そう言う。
そこで、私は気が進まなかったが、ちょっと悪趣味のこの豹柄のバックの値段をしてみる。
ガピョーン・・・
よ、よ、よ、よ、よ・・・よん十万？
「駄目じゃないですか、ゆかり先輩。これ・・・これって、四十万ですよ四十万」

私は、少々声が裏返りながら、速攻でゆかり先輩に突っ込みを入れる。

すると、

「あら、そうだった？ 私はいいと思ったのに・・・そんなにするんじゃ駄目ね」

と、ゆかり先輩は、平気のへっちゃらで、そんな事をおどけながら口走ってきた。

むむむ、この女、私のことをからかっているな？

さっきから、高い値段のバックばかりをすすめてくる。

それは、お金を少ししか持っていない、私への当て付けか？

だからここにきて一つ、私には、はっきりした事があった。

それは、ゆかり先輩は、意外とあてにならないということだ。

この女、私が持ち合わせの万札が一桁だと知っていて、おそらく馬鹿にしているのだ。

こうなれば、彼女の意見を聞いている場合ではない。

私は自力で安く質のいいバックを探そうと、それから奔走しはじめていた。

まずは、手当たり次第に値札のチェック。

それからじっくりと、安いものだけを狙って品定めに入る。

そして私がお気に入りの品が、三つ見付かっていた。

「ねえナオ先輩、この三つの中でどれがいいと思いますか？」

私は、意外とゆかり先輩よりはこの手の品選びにはまともだと思われる、ナオ先輩に意見を聞いてみることにする。

すると彼女は、その一つ一つを手にとって、真剣に品定めし始めていた。

「うーん、この革製の奴は駄目ね、手入れが面倒だもの。それにこっちのエナメル製の奴は、あなたに似合わないわ、上品すぎる。結局これね」

彼女が選んだのは、やはりその三品の中で、私が一番いいと思っていたものと同じ一品であった。値段は7万5000と少し値が張るが、デザイン的にも機能性もしっかりとしたもので、私に一番合うのではないかと、自分なりに思っていたものだ。

ここにきてナオ先輩と意見があって、私は少しいい気分。

自分一人だけの意見では、少し不安であったからだ。

「でも先輩、これって少し高いんですよ？」

私はナオ先輩に、今の正直な気持ちを吐露してみる。

すると、

「それなら簡単よ、値切れればいいのよ」

と言ってナオ先輩は、突拍子もないことを口走りはじめていた。

「えーっ、ここブティックですよ！ 値切るなんて出来るわけないでしょう。何考えているんですか！」

私は、ナオ先輩が、あまりにも常識を逸脱したことを言ったので、声を張り上げて驚きを顕わにする。

「大丈夫よ、私に任せなさい」

「あー、ちょっとそれ持ってどこへ行くんですか。あーあー、駄目ですよ、値切るなんて出来るわけありませんて・・・」

そう言って私が、彼女を呼び止めても遅かった。

ナオ先輩は、この店の店員のところへつかつかと歩み寄ると、早速、無愛想な態度で

値引き交渉をはじめてしまっていた。

あー、なんて最悪なんだろう。

天下のブティックで値引き交渉をするなんて、恥ずかしいの一言につきる。

これでは、私がブランド品とは縁遠い、一庶民であることがあからさまに判ってしまうのではないか。

あの高崎ナオめ、一体何を考えているんだ、馬鹿たれめが！

それからかれこれ五分ぐらいいただろうか・・・？

恥知らずのナオ先輩が、おもむろに戻ってくる。

そして一言、私に言った。

「駄目だって・・・」

「当たり前でしょーが！　ここはブティックですよブティック。値引きなんてそんな事出来る訳ないでしょー！」

私こと柏木モモは、自分でもかなり不細工と思えるほど口を尖らせて、このナオという女に抗議していた。

「それでどうする？　この店で買うのやめる？」

そこへゆかり先輩がそんな事を聞いてくる。

「判りました出ましょう。この店にはもう居られません」

私はそう言うのと店の店員に、顔を見られないように、そそくさとその階上を後にしていた。

それから時間は二時三十分。

私たち三人は疲れを見せず、次から次に様々な店を見て回っていた。

だが、それで一つ、私にも判ったことがある。

それは各ブティックがいくらブランドの品を取り扱っているとはいえ、そうそう自分が気に入りそうな品が置いてあるとは限らないことだ。

ここ銀座の並木通りという場所に憧れていた私は、きっとそこには欲しい商品がずらずらと並んで売られているのではないかという幻想を持っていたらしい。

しかし、いざ店めぐりをしてみると、そう簡単にはいかない。

私が気に入りそうなものは、それほど多くないのだ。

もちろんブランド品だけあって、どの品もそれなりに品質はいい。

でも、好みに合わないのではどうしようもない。

その為、私にはだいたい迷いが生じていた。

今日の所は店めぐりだけにとどめておいて、バックを購入するのはやめようかと・・・

でも折角、銀座辺りまで出向いてきたのだ、ここで手ぶらで帰るわけにもいかないと思いはじめていた頃、ナオ先輩が突然ある提案をしてきていた。

「ねえ、リップ・スティックの店に行く？　そこならモモが気に入りそうな安いバックもあるかもしれないわよ」

その言葉に私は多少の迷いを見せる。

「リップ・スティックって日本製のブランドですよね？　本当にいい商品があると思

ます？」

私はどっちかという、海外のブランドに弱い。

ブランドといえば欧米の品が一番、と思っている節があるからだ。

そこで失礼と思いつつも、ナオ先輩にそう言って、疑問げな言葉を返してしまっていた。

「まず、行ってみれば判るわ。行くだけ行って、気に入らなければ何も買わなくてもいいんだから」

その言葉に私はうなずき、半信半疑でその場を後にしていた。

「いやー、すごいですねリップ・スティックって、宝の山の宝庫じゃないですかー。ナオ先輩って意外とセンスいい、わたし感心しましたよー」

そう言って嬉々とした声を張り上げていたのは、私こと柏木モモだ。

ナオ先輩に誘われてリップ・スティックというブランドの店を訪れて、わたしは極端に目を丸くしていた。

可愛い、そしてエレガント。

このお互い相容れそうにない、二つの要素を兼ね備えているこのブランドは、すごい一言につきる。

てなことで私たちは、今現在、日比谷公園のとあるベンチに座っていた。

当初の第一の目的、ショッピングも無事に済み、手には買い物袋が三つもぶらさがっている。

ナオ先輩お薦めのリップ・スティックの店で、わたしは、バック以外にも冬物の服を一着と、靴を買っていたからだ。

その店は、ブランド店にしても格安な値段で、そして品質やデザインも申し分なくよかった。

これは余禄だが、ゆかり先輩はやはり冬物のコートと、銀色に光るブレスレットを購入していた。

しかしナオ先輩は、何も買っていない。

相変わらず無欲な人だ。

でも私としては今はご機嫌。

むふふ・・・♥

家に帰って、箱から出してみるのが楽しみ・・・

「でも良かったで～す。今日はナオ先輩と一緒に来てもらって得しちゃった。わたし海外ブランドが一番と思っていたけど、日本製も馬鹿になりませんねー」

「そうね、気に入ってもらえて良かったわ」

「だけど、どうしてナオ先輩は何も買わなかったんですかー？ 金欠な訳じゃないんでしょう？」

「別にいいじゃない、私のことは。あなたの目的が達成できたんだから、文句ないでしょ？」

「それはそうですけどー」

ナオ先輩に、私はそう言われて納得してしまっていた。

まあいいだろ、私自身の今日の目的は程よく満たされたことだし、彼女だって何か他のことにお金を使うのかもしれない。

それを思うと、それ以上の詮索はしないことにしておいていた。

「それにしても、明日からまた仕事ですねー？」

そんな中、私は、少し当たり前のことを口走っていた。

「モモあなた、仕事するのが嫌なの？」

その言葉を発したのは、ゆかり先輩であった。

彼女は、私の顔を覗き込むと、何気なくその事を聞いてくる。

「別に嫌じゃありませんよ、生活の為ですからね。でもちょっと退屈なのは事実なんですよー。結局、事務の仕事って単調なんです。パソコンに向かってキーを叩いている、そんな毎日って少し実りがないなーって、そんな気がしません？」

私はゆかり先輩に、少し渋い顔をしてそう言っていた。

「まあそうね、変化がないって事は少しつらいかもね」

「ねー、そう思うでしょゆかり先輩。私はなんと言うかこう、謎めいた事に挑戦してみたいんですよー。探偵みたいな仕事とか」

「探偵？ あなたもしかしてミステリー小説とか好きなの？」

「えー判ります、そうなんです。私、本を読むことにこうじて、今では一冊のミステリー小説でも書いてみようかと思っているんですよ。そしてどっかの新人賞なんかに出して作家デビューしてみてもいいかなーなんて・・・」

「へー、そう、あなたが作家にね？ でもだいいちあなたに文章なんか書けるの？」

その問い掛けに、私は至極難しい顔をする。

「うーむ、そこが問題なんですよね・・・」

クンクン、クンクン・・・

と、私とゆかり先輩がそんな事を話しているところへ、突然、一匹の子犬がどこからともなく現れていた。

「あれ～、このイヌなにになに？ 一体どこから現れたの」

その子犬は毛並みが悪く、薄汚れて、痩せた犬だった。

私はそれを見て、一瞬、捨て犬ではないかと思ってしまっていた。

しかしその犬の首の所を見て、その考えを改める。

その犬は首に、真新しい首輪をしていた。

「きゃー、かわいい。この犬、人懐っこいですよ。私の指ぺろぺろなめてます、ほら見て見て、ナオ先輩もやってみたら？」

「そうね、さあドンこっちに来なさい・・・」

「あれ？ ナオ先輩、この犬の名前、知っているんですか？ 今ドンて言わなかった？」

「いいえ、知らないわよ。ただそう思っただけ」

「なんだ、勝手に名前付けちゃ駄目でしょ。しかもドンて、どっからそんな名前が出てくるんです？」

「いいじゃない、ドンでもジョンでも。そーよねシロ！」

「て言うか、また違う名前付けているじゃないですか。今度はシロですか？ でもこの犬茶色の柴犬ですよ・・・」

「細かいことはいいの、そーよねチャッピー？」

ナオ先輩は、そう言うと、子犬を抱えて高い高いをしていた。

すると、そんな光景を見ていたゆかり先輩が、おもむろに話し掛けてくる。

「ねえ、そろそろ帰りましょうか？　もう時間は四時よ、あと一時間もすると暗くなってくるわ」

彼女は、そう言うと、ベンチを立ちだす。

「そうですね、今日は無事ショッピングも終わったことだし、そうしましょうか？」

私ことモモも、そう言うと帰る素振りを見せ始めていた。

「さあナオ先輩、行きましょう。夜になると冷えますよ」

「そうね・・・」

そうして私たちは、とあるベンチを後にして歩きだしていた。

クンクンクン、クンクンクン～

しかしそこへ、何かが、あとについてくる気配が後の方でしていた。

それは、とても小さな気配であった。

私たち三人は、その気配に気づき、立ち止まって後を振り返ってみる。

するとそこには、さっきの小さな子犬が、人懐っこそうに尻尾を振っておすわりして愛敬を振りまいている姿が目飛び込んできた。

「あっ、駄目じゃないこの子犬、ついてきちゃいましたよ。シッ、シッ、駄目よほらあっちへ行きなさい・・・お家へ帰るのよ」

私こと柏木モモは、少し可哀想と思いつつも、その子犬を追い払っていた。

クーン、クーン

するとその子犬は、何やら淋しそうに鼻を鳴らして、私たちに何かを訴えかけているような素振りを見せ始めていた。

「この犬どうしたんでしょう、何か淋しそう・・・」

私はそこで深い同情を、その子犬に示してしまっていた。

「多分この犬、飼い主とはぐれたんじゃないかしら？　こんな子犬がこの辺でうろろうしているなんておかしいもの」

ナオ先輩が、突然、そんな事を言いだしてくる。

「ええっ?!　それじゃ迷い犬？　この犬の飼い主、探してあげなくちゃ駄目じゃないですか、きっと飼い主も探していると思いますよ」

そこで私は閃いていた。

これはまさしく、探偵的なお仕事ではないか。

本格ミステリーとはいかないまでも、この子犬には謎がつきまとう。

首輪をしているので捨て犬ではない、しかし迷い犬？

「迷い」と「謎」でこれはちょっとしたミステリー。

私は半ば強引にそうこじつげると、二人にこの犬の飼い主を見付けてあげることを提案し始めていた。

「ねえねえ、二人ともこの犬の飼い主、探してあげましょうよ。私の推理ではこの犬の飼い主がこの公園へ散歩にきて、鎖か何かが切れてこの子犬が逃げ迷子になってしまったと思うんです。そこでです、我々三人探偵団はその謎に挑み、見事この事件を解決するっ

てのはどうですか？ 今日一日の総仕上げとしては、なかなかおつなものですよ……」
「ちょっと待って、わたし達いつから探偵団になったのよ。それに事件なんか起きていないわよ。突然、変なこと言いださないで」

「えーっ、それじゃゆかり先輩は、この子犬の飼い主を見付けてあげることに反対なんですかー？」

「そうは言っていないわ。ただあなたの思考回路が、おかしいんじゃないかって思っただけよ」

「なんだそれじゃ何も問題ないじゃないですか……？ ってそれってどう言うことですか。わたしがまるで馬鹿って言われたようなものじゃないですか。ゆかり先輩ひど〜い」
てな事で私たち三人は、この子犬の飼い主を探してあげることにしていた。

わたしの推理ではさっきも言ったように、この子犬が散歩中に鎖が切れて逃げ出してしまったのではないかという事で、まずはこの公園ないを歩いて飼い主を探してみることにしていた。

わたしの推理が正しければ、この子犬の飼い主も、ここ日比谷公園内を探して歩いているのではないかと思ったからだ。

という事で私たちは、子犬を引き連れて広い公園内を歩いてみる。

「さあちょビー、あなたの飼い主探してあげるからこっちへ来なさい」

ナオ先輩の言葉に、子犬は嬉しそうに私たちの後に健気についてくる。

その歩き方は、子犬だけあってコミカルだ。

ちょちょこと歩く様は、愛らしいの一言につきる。

「でもこの子犬、一体、本当の名前はなんて言うんでしょうね？」

そんな中、私は誰とはなしにそんな疑問を口に出していた。

「多分、ロードスターっていう名前よ。この顔つきからするときとそうだわ」

ナオ先輩がそんな事を、おもむろに言い始める。

「駄目ですよナオ先輩、さっきからドンとかシロとかチャッピーとか、色んな名前付けてるじゃないですか。あなたの言うことは信じられません」

わたしはピシヤリとそう言うと、ナオ先輩に注言をする。

「そうかしら、私が呼ぶとすべての名前に反応するわよ。そうよねドナパルト？」

「だー、だからどっからそんな名前が出てくるんです。しかもドナパルトって、この犬は日本犬ですよ、西洋の犬じゃないんですからね……」

私は半ば呆れて、口をぱくぱくさせていた。

「しかし、それらしい人はいないわね。切れた鎖なんて、持って歩いている人はいないわよ」

私たち三人が、子犬の飼い主を探し始めて十分ぐらいが経過した頃、おもむろにゆかり先輩がそんな事を言いだしていた。

今、私たちは、日比谷公園の大噴水の前に来ていた。

辺りを見てみると、デートの最中のような男女のカップルや乳母車をおした若い妊婦などの姿しか見受けられない。子犬を探して呼び歩いているような素振りを見せる人は、どこにも見当たらなかった。

「でもこの犬、本当に迷い犬なのかしら。だいたい前からこの公園に住み着いている、野良

犬なんかじゃないの？ 飼い主を捜し出すだけ、無駄なような気もするわよ・・・」

ゆかり先輩はそう言って、早々とあきらめの姿勢を見せ始めていた。

すると、

「ようよう、ねえちゃん達、こんなところで何しているんだ。これから俺達と付き合いかねーか？ そーすれば、すげーいい思いなんかさせてやったりするぜ！」

そこへよく街の裏界隈で見かけるようなチンピラ風情の男たちが二人、肩で風を切るように私たちの目の前に現れていた。

「あなたたち、誰よ。とっとと失せなさい。私たちは、あなたたちに用はないわ」

そこへナオ先輩が、男たちを軽くあしらうように拒絶の姿勢を見せ始める。

「チェッ、つまんねー女だな、折角楽しいことしようと思ったのによ」

そう言う男たちは、その場を立ち去ろうとする。

しかし、

「おっ、なんだこの犬。きったねー犬だな。あっちへいけ！」

ドカッ！

男たちはそう言った瞬間、あろうことか子犬を蹴飛ばしていた。

キャイン、キャイン、キャイン・・・

子犬の悲鳴が、公園内に響き渡る。

「！！・・・、あんた達、ちょっと待ちなさい！」

その時ナオ先輩は、男たちの暴挙に一人顔を赤らめて憤慨していた。

「ちょっと、どうしてこの子犬を蹴飛ばすの？ 今すぐこの子犬に謝りなさい。でないとただじゃおかないわよ・・・！！」

「なんだとこのアマ！ 俺達に難癖付ける気か？ おもしれーやってみ・・・」

バコッ！

男の言葉が終わらぬよりも早く、ナオ先輩の鉄拳が一人の男の鼻面に飛んでいた。

これはまずい、乱闘騒ぎだ。

私こと柏木モモは、その瞬間を目撃すると、心臓の高鳴りを感じていた。

「な・・・なにしやがんだ、テメー。は・・・はなが折れちまったじゃねーか！」

二人のうちの殴られた一人の男は、情けない声を出してそう叫びをもらしていた。

「くそう、テメー、ぶつつぶしてやる！」

すると次の瞬間、もう一人の男がナオ先輩に右手のこぶしを振り上げて殴りかかってきていた。

しかし、ナオ先輩は自分の上体を低くして身を沈めると、そのまま殴りかかってきた男の右腕を咄嗟的につかんでひねり上げていた。

「あいてて、いてーよ、放せこのアマ・・・」

男は腕をひねり上げられ苦悶している。

どうやら相手が悪かったようだ。

相手は、あの特務機関の問題児、高崎ナオなのだ。

彼女は女だてらに柔道七段、合気道八段の有段者だ。その狂暴を絵に描いたような女に楯突くこと自体、間違っていたと言わざるおえない。

「わわわ、判った。いてーよ、放してくれ・・・謝る、謝るからやめてくれ、でないと腕

が折れちまう」

男はそう言うときやはり情けない声を出して、降参の色を見せてきていた。

するとナオ先輩は、ひねりあげていた腕を無造作に放す。

そして男たちの前に仁王立ちになって、次のようなことを口走る。

「さあ、謝りなさい。この犬はね、あなたたちのようなチンピラ風情よりもっと格が上なのよ。小さくても、健気に生きているのよ」

「悪かったよ。許してくれ。すいませんでした・・・」

そう言うとき男たちは、子犬に頭を下げ、脱兎の勢いでその場から逃げだしていた。

その途中、あわてふためいて、すっころんだりしている。

しかしナオ先輩を恐れて、そのまま公園の彼方へ消えていっていた。

それを確認するとナオ先輩は、子犬を抱き上げ怪我を負っていないか確かめている。

子犬は、頻りに、ナオ先輩の手を舐めて懐いてきていた。

「おお、ペルー、ペルー、こんな所にいたのか？ 探したんだぞ。おまえは一体どこをほっつき歩いてたんだ。心配かけちゃ駄目じゃないか」

すると、そんな所に一人の小父さんが姿を現していた。

彼は今、ナオ先輩が抱き上げている子犬を親しみのあるペルーという名でそう呼ぶと、私たち三人が居る方へ小走りに駆け寄ってきていた。

「もしかして、この犬の飼い主はあなた？」

そんな折り、ナオ先輩が、その小父さんにやはり無愛想にそう問いただしている。

「いやー、そうですそうです、その子犬は私の飼い犬でペルーっていうんです。もしかしてあなた方はこの子を保護してきてくれたんですか？ それだったらありがとうございます。ちょっとした不注意でどこへともなく逃げ出してしまって、困っていたところです」

五十代ぐらいとおぼしきその小父さんは、そう言うとき人のよさそうな顔つきで私たちに笑いかけてきていた。

だが、ところ変わってここは、日比谷公園の日比谷通に面した街道沿いの一角、《塩爺ちゃんのおでん屋》という、暖簾をかかげる小さな屋台で、私たち三人は、いま、熱々の湯気が立ち上る `雁擬き、を食べて、コップ一杯のお酒を飲んでいるところであった。「でも小父さん、本当にいいの奢って貰っちゃって。商売あがったりになんかならない？」

そんな中で言葉を発していたのは、ゆかり先輩であった。

彼女は、串に刺さった手元の `雁擬き、を頬張ると、おでん屋の主人にそんな事を言っていた。この屋台のおでん屋の主人は、先程の、子犬の飼い主であるあの小父さんであった。

彼は、何時も、この日比谷通でおでん屋の屋台を開いている、幸田塩蔵という五十三歳の男で、子犬のペルーと一緒に連れて商売に勤しんでいるという。

「いやー、あなた達が付いてくれていたお陰で、ペルーを探す手間が省けました。どうぞ遠慮せずに、腹一杯になるまで好きなものを食べて行って下さい。これは、ほんのお礼の積もりですよ」

幸田塩蔵という男は、そう言うと、ゆかり先輩と私のコップに日本酒を注ぎ足していた。

「だけど、この犬が小父さんの飼い犬だなんて、意外ですよ。結局、私の推理は、これで外れたって言うことですね。あ～あ、探偵として失格……」

「あれー？　そう言うとあんた達、三人は、探偵なのかい？　小父さんには、そうは見えないけどねー」

「いいえ違うんです。ちょっと私たちは、探偵気分がこのペルーの飼い主を捜しだそうと思っていただけで、そう言う訳じゃありません。あまり気にしないで・・・」

「へー、そうなのかい？　それで、あんたたちの職業は、本当のところ何なんだい？　どっかの企業に勤めるOLか何かかい？　制服が似合いそうだからね・・・」

「私たちの職業？　それはですね特務機関です。特務機関の特務一課に勤める隊員ですよ。OLじゃありません、小父さん」

「えっそう、特務機関の隊員ね？　道理で、そちらのお姉さんは強いはずだ。さっき見ていたよ、二人のチンピラを軽くあしらって追いとばしていただろう。それを見て只者じゃない、とオレは思ったね」

塩蔵という男は、そう言うとナオ先輩の顔をまじまじと見つめていた。

「そんなにジロジロ見ないで、私の顔が、何か変？」

そんな中、ナオ先輩は、少し顔を赤らめて小父さんにそう言っていた。

「いや～これは御免御免、つい、あんたが美人なんで、オレは見惚れちまったよ。こんな美人が特務機関の隊員だなんて、少しびっくりしてね。でも今日は、本当に良かったよ。ペルーはね、オレにとって大事な犬なんだ。こいつがオレのただ一人の身内だからね。だから、こいつが居なくなると、見付からなかったらどうしようかと思っていたんだ。でも君たちのおかげで無事で何よりだったよ、改めて礼を言うよ」

「へー、小父さんて家族がいないんですか？　それはちょっと淋しいですね。それじゃペルーは、小父さんの子供みたいなものなんですよ？　見つかって良かったですね・・・」

私こと柏木モモは、そう言うと、薙藪に辛子をつけてまた口に運んで頬張っていた。「そうなんだよ。この犬は公園に捨てられていて、オレがそれを見付けて拾ったんだ。それは寒い雨の日だった、ペルーは一人、公園内を腹をすかせてうろつき回っていてね。オレは、あまりにも可哀想なんで、タオルにくるんでウチに連れ帰ったのさ」

「えーっ、捨て犬だったんですか？　こんな可愛いのに？　捨てた飼い主の顔が見てみたいですね、ナオ先輩？」

「そうね・・・」

彼女は一言そう言うと、ジャガ芋を箸で細かく割って、それを掌にのせ自分の足元に座っている子犬のペルーに食べさせてやっていた。

「しかし今日はあんたたち三人は、買い物だったのかい？　並木通りにでも行ったんだろ。あの辺は、若い女性で賑わうところだからね」

「そ、そうですね判ります？　私、色んなもの買っちゃった。小父さん銀座っていい所ね」

「そう？　でも気を付けなよ。最近じゃ黒峰会って言う得体の知れない連中が、銀座界限で偽ブランド商品をさばいているって話だから、そんな連中に騙されない方がいい」

「ええっ、黒峰会？」

私は、その小父さんの言葉を聞いて、驚きを顕わにしていた。

「それってどう言うこと。黒峰会が経営している店が銀座にあるって言うことかしら？」

それを受けて、その話に興味をそそられていたのは、ナオ先輩であった。

彼女は、黒峰会がらみの話になると、目の色を変える。

ここにきて何の前触れもなく黒峰会の話がでていたので、ナオ先輩は、屋台のテーブルに身を乗り出すようにして、塩蔵という屋台の小父さんに詰め寄っていた。

「いやね、オレも噂で聞いただけなんだけど、何でもダシガワラとかクシガワラとかいう男が最近、日本に帰ってきて、その男が筆頭になって始めた商売らしいんだけど、相当ぼろ儲けをして金をごっそり手に入れているって言う話なんだよ。知らないかい？」

「ダシガワラ？ それってテシガワラの間違えじゃない。小父さん、もっと詳しくその事を話して、銀座の何処にその店があるの？」

「いや、ちょっと待ってくれ、オレも、それ以上の詳しい事は知らないんだ。この話は、この前、この屋台にチンピラ風情の三人が客として現れてね、その三人が、ヒソヒソと話をしているのをこっそり聞いて、今、思い出したから言ってみただけなんだけど、それが、どうかしたのかい？」

屋台の小父さんは、そう言うと、ナオ先輩の顔を怪訝そうに伺ってきていた。

「そう、それは残念ね。でも、その三人のチンピラ風情の男たちは、確かにダシガワラだかクシガワラだかという男が、日本に帰って来ているといていたのね？」

「ああ、そうだよ。多分、オレの記憶に間違いがなければ、そんな事を言っていたね。それは結構、最近の話だよ・・・二ヶ月ぐらい前からのことかな・・・」

そう言うと、屋台の小父さんは、頭をボリボリと掻いていた。

「ナオ、これって、あなたのお父さんを殺して逃げたかもしれない、勅使河原って言う男の情報じゃないかしら？ ダシガワラだかクシガワラだかって言う名前は、そうは居ないわよ」

ゆかり先輩はそう言うと、ナオ先輩同様、いくぶん興奮している。

「そうね、その可能性がない訳じゃないわ」

ナオ先輩はそう言うと、おもむろに椅子から立ちだして、帰る素振りを見せ始めていた。

「さあ、もう帰りましょう。時間は六時よ。何時までもここにのんびりしてられないわ」

「えーっ、もう帰っちゃうんですか？ もう少し、此処でのんびりしていても、いいんじゃないですか？」

私ことモモは、ナオ先輩の言葉にそう言ってみたが、彼女は、怒るふうでもなく、また笑うふうでもなく毅然とした態度をとると、つかつかと歩みだしてしまっていた。

「ああ、待ってくださいよナオ先輩。私たちを、置いていかないでくださ～い」

そんなこんなで、今日の楽しい一日は、終わりを迎えていた。

私たち三人は、おでん屋の小父さんにお礼を言うと、そのまま有楽町駅へと足を進めていた。

そして電車を乗り継いで、帰路に、就いたのである。

以上、柏木モモの長い長い日記より、

十二月十八日の休日的一幕をここに記す。

第四章 摘発の現場

第一節

薄汚れたコンクリートの壁が剥き出しになった寒々とした倉庫のような一室、様々な資材や段ボールが積み重なった薄暗い場所で、二人のスーツ姿の男が、丸い石油ストーブを間に挟んで、頻りに手をこすり合わせながら暖を取っていた。

一人は、貫禄のある髭をはやした男——一歳は四十代後半かそれとも五十代前半かもしれない。脂ぎったその顔は、歳相応の無数の皺が刻まれ、その辛辣そうな眼光が目の前に居るもう一人の男に向けられていた。

その眼光を受けて、椅子に腰掛けているもう一人の男は、三十代後半ぐらいの頭の切れそうな若い男であった。彼は、先程からタバコをふかしており、そのタバコから立ち上る煙が、その室内を霞み掛かった白一色に染め上げていた。

「ところで宮坂、店の経営の方は上手く行っているんだろうな。お前には、二つの店を任せているんだ、それを潰すような事があっては、上に顔向けがたたないぞ。その点に関してどうなんだ、利益は上がっているんだろうな・・・」

黒い脂ぎった髭を生やす男、この男は、茂満十次郎という黒峰会の幹部だ。麻薬の裏取引やそれに関連する様々な違法行為で、今現在の地位にまでのしあがってきた犯罪者だ。

そして、宮坂と呼ばれた男、彼は、宮坂義行といい、やはり黒峰会にその身を置く茂満の部下であった。

「ええ、茂満さん、経営の方は順調にっています。《銀座ブルーメント》の方は、毎月鰻登りに売り上げが伸びていますし、ストリップ劇場の方は、踊り子の数も二十三人に増えました。これもすべて、あなたのおかげですよ。売上金の一部は、しっかり上に上納いたしますから、何も心配はしないで下さい・・・」

そう言うと宮坂は、口から紫煙を吐き出し、椅子に深々と座りなおしていた。

「そうか、それならばいい。しかし、お前を店の経営者に抜擢してよかった。他の組織の人間では屑ばかりだからな、お前は、よく頭が切れる。経営破綻していたストリップ劇場を立て直したのもお前だし、あらたに経営を始めた銀座ブルーメントは、お前の発案から現実になった事業だ。オレは、お前に期待しているんだぞ、それを裏切るなよ」

「判っていますよ茂満さん、オレはあんたに借りがあるんだ。警察に追われる身のオレを海外にまで逃がしてくれて、ほとぼりが冷めるまで面倒を見てくれたんですから、その恩には必ず報います。ですが、本当に大丈夫なんでしょうね、オレが日本へ帰って来ているという事は、警察の方にはバレていないんでしょう？」

「その事か、それならば心配はない。警察の方にはオレの部下を、二三人張りつかせてある。その警察が、お前の足取りをつかんだと言う情報は、今のところない。だから安心しろ、当分の間は日本で活動ができる筈だ」

「そうですか、それならあっちの仕事の方も穏便に事が運べそうですね？」

そこで宮坂は、ニヤリという笑いを洩らしていた。

「そうだな、その件に関してもお前にすべて一任してあるんだ、しっかりやれよ。だが、近日中に港に船が入港するそうじゃないか、もう取り引きの品は揃っているのか？ 相当の上物でないと取引先も納得しないだろう、その辺はどうなっているんだ？」

茂満という男は、そう言うと、自分の口髭を手でしごいていた。

「ええ、それなんです、あと二人ほどなんとか調達したいと思っているところです。ウォンさんはあれでいて意外に好色ですから、品選びには慎重をきたしています」

コンコン・コンコンコン！

すると、そんな所へ、唐突に室内の鉄の扉が叩かれる。

「なんだ、入れ！」

茂満は、そう言うと、扉越しに声をかける。

ギィッ・・・

だがして、扉がおもむろに開かれた。

「あの島崎です・・・宮坂さんに電話なので、お話中すいませんが来てもらいたいのですが・・・」

そこへ現れたのは、どうやら下っぱの男であるようだった。

彼は、室内に入ってくると茂満に一礼し、その前に座っている宮坂に用向きを告げた。

「一体、誰から電話なんだ、徳永か？」

宮坂は、その島崎と名乗った男にそう言うと、手元のタバコを灰皿に押しつけて火を消していた。

「いいえ、織田信之介からです。どうも銀座の店の経営のことで話がしたいそうで、宮坂さんを電話口に出してくれと言ってきました。どうします？」

「判った、それじゃすぐに行く。織田に少し待てと伝えろ」

「はい、判りました」

島崎は、宮坂に小気味の良い返事をすると、室内から飛び出して駆けて行ってしまっていた。

「それじゃ茂満さん、オレはこれから織田と話をします。話の続きはまた後でしましょう。では失礼します」

そう言うと宮坂は、踵を返してその倉庫のような室内を後にし、先程、出ていった島崎の後を小走りで追い掛けていた。

だが、一人その室内にとり残されて凄然とする茂満———しかし彼は、その後、意味不明な笑いをもらすと、そして、次のような言葉を、独り言のように呟いていた。

『たいそうなご身分になったな宮坂・・・いや勅使河原洋二よ。今では五十人の部下を抱える準幹部か？ だが、そうやすやすと幹部の椅子には座らせんぞ・・・オレの目の黒いうちはな・・・』

そう言うと茂満は、宮坂という男がしていたように、タバコを胸元のポケットから取

り出すとそれに火を付け、深く息を吸いその煙を肺のなかに流し込んでいた。

ある意味、その男の目は、まだ若くして頭角をあらわした宮坂という男に対して、嫉妬の念を抱いているかのような目でもあった。

彼は、つけて間もないタバコの火を灰皿に押しつけると、徐にそれを消していた。

そして、自分も踵を返すと、その室内を後にして、どこへともなく姿を消していたのだ。

十二月二十三日、午前十時十五分、特務機関の三階にある会議室では、今現在、特務機関の面々と警視庁麻薬取り締まり班・麻薬取り締まり官の面々などが集まり、やはり合同での事前会議が始まりを迎えようとしていた。

本来、いま使われている会議室は、センター街襲撃事件の逃亡犯、米川克彦ほか、熱川啓介、横田紀一、西尾光一、砂川雅人等の捜査本部が置かれていた場所である。

しかし、今現在では、その捜査本部も撤去され、さしあたって様相は一変されていた。

センター街襲撃事件が発生した十三日から昨日の未明を以て、センター街襲撃事件の捜査は打ち切りとなっていた。

それは、米川の逮捕に始まり、西尾光一が麴町のニコニコ商店街で逮捕され、その後、続々と熱川啓介、横田紀一、砂川雅人の捜査が進み、彼らの身柄が拘束されたからだった。

それはひとえに、警視庁特捜班と特務機関の活躍があればこそその事であろう。

センター街襲撃事件の実行犯は、すべて逮捕されたのである。

これを以て事件は終局を迎えたが、今この三階の会議室で事前会議が行われているのには訳がある。

それは、米川が逮捕後に供述した、黒峰会とある組織の麻薬取り引きの日時と場所が判明していたからだ。

その報を受けたのは、米川が逮捕された次の日十七日、午後一時のことであった。

米川は、二人の取調官や池沢元警部補捜査主任やナオ、ゆかりの目の前で、自分が黒峰会の麻薬取り引きと深くかかわり、今日の午後八時より都内にある、とある中華料理店で大々的な麻薬取り引きが行われるという事を素直に供述していたのだ。

それを受けて今日、警視庁と特務機関は、五度目の事前会議を今現在この会議室で開いているという事である。

会議室室内に、女性の係官による冒頭挨拶が響いていた。

「皆さんもご承知のように、この事前会議は、米川克彦の供述にもとづき明るみに出た、黒峰会と中華系マフィア《黄河会》の大々的な麻薬取り引きの摘発に関する事案を話し合うために開かれた会議です。今回でこの事前会議も五度目を迎えるわけですが、ようやく今日、米川の供述が正しければ、都内某所の中華料理店で、この二つの闇組織による麻薬取り引きが行われることでしょう。そこでです、我々警視庁麻薬取り締まり班・麻薬取り締まり部の面々と、《ハード・ガン》否、特務機関・特務一課、第一班から第六班までの面々は、その取り引きを摘発するために乗り出さなければなりません。その為、こ

ここで改めてその摘発をこれからどう行い、二つの組織を麻薬取締法違反の罪で逮捕し一網打尽にするか、綿密に話し合わなければなりません。

黒峰会、それに黄河会は前々から我々警視庁の間では、摘発困難な闇組織として裏社会に君臨してきた二大組織です。しかし今回この二大組織の間で行われる麻薬取り引きの場所と日時が判明して、今まで困難と思われていた組織の摘発が可能となったのは言うまでもありません。これは、我々警視庁や特務機関にとってある意味ひよんな事から降って湧いたチャンスです。街の違法行為を取り締まる両機関の我々には、この機を逃すことは出来ません。

そこで今日の五度目の事前会議では、今日、行われる筈の麻薬取り引きの現場を摘発するべく、ここで改めてその摘発方針を最終的な確認の意味もこめて会議したいと思えます。お集まりの一同方はいいですね、それでは話の本題に入ります・・・」

警視庁付の係官は、そこまで言うと言葉を区切っていた。

彼女は、今回の五度目を迎える事前会議の趣旨をおもむろに語ると、静かに自分の割り当てられた席に着席して姿勢を正していた。

そして、次に会議室の正面に設置されている壇上には、警視庁側の警視、佐久間一文が登壇して、今日の摘発をどう行うのかの説明が行われ始めていた。

「えー、まずは、摘発の現場への出勤時間をあらかじめ確認しておきましょう。先日十六日に逮捕された米川の供述によりますと、黒峰会と黄河会の取り引き開始時刻は、今日の午後八時きっかりに行われるという事になっています。

そこでです、我々警視庁麻薬取り締まり官と特務機関の面々は、その八時より二時間前の午後六時には麻薬取り引きの行われる《高閣楼》という高級中華料理店に出張って、その辺一带に網を張っていなければなりません。

そこで我々は、五時には私服勤務で各覆面車輛に分乗し、警視庁本部と特務機関本部を出発。

そして、高閣楼へ到着したそうそう、張り込みを開始します。

その張り込みは、黒峰会の組織員や黄河会の組織員が、確かに高閣楼と言う中華料理店に現れるかの確認をとるためです。

その張り込みの成果で、確かに麻薬取り引きがその場で行われるという裏付けがとれた際は、特務機関が銃とショットガンの武装のもと、その現場に急襲を仕掛けるという手筈です。

ここまでのあらましはお分かりですね？

相手は米川の話によると、拳銃などの火器を携帯しているという話があります。

そこでここは特務機関に活躍してもらわなければならないでしょう。

警視庁麻薬取り締まり官の面々は、特務機関が麻薬取り引きの現場をおさえた際、それに付随する形で現場に乗り込んで頂きたい」

佐久間一文警視は、そこまで言うと、この会議室に集まった一同を見渡し、今語った方針に異論はないかの確認をとっていた。

ここに集まった一同は、やはり謹聴して、佐久間の話に聞き耳をたてている。

そんな中、今回の摘発に参加する、ナオとゆかりも緊張の色を隠せない。

佐久間一文警視の一言一句に頷きつつ、摘発の現場に参加する意気込みを高めていた。

十二時十三分、特務機関の三階で行われていた事前会議は、終了を迎えていた。

会議室からは、ぞろぞろと警視庁の面々や特務機関の隊員たちが退室してくる。

そんな中で柏木モモは、ナオとゆかりの姿を会議室の扉の前で探していた。

これからは昼食だ。

モモは早々と午前の事務の仕事を終え、ナオとゆかりと共に昼食をとるために待っていたのだ。

「あー、ナオ先輩、ナオ先輩、やっと会議が終わりましたねー。待っていたんですよー」

会議室から出てくるナオとゆかりを見るとモモは、一目散に二人のもとに駆け寄って、また甘ったれたような声を出して猫のように擦り寄って来ていた。

「あらモモ、待っていてくれたの？　先に食堂で食べていてもよかったのに、私たちと一緒に食事をするつもり？」

そう言葉を発していたのは、二階堂ゆかりであった。

「えー、そうですよ。いけませんでしたか、ゆかり先輩、一人で食事してもつまらないですもの、ここはやっぱり三人で食事にしましょう。今日のメニューは、私とんカツ定食がいいかな、さっそく食堂へ急行しましょう。ナオ先輩とゆかり先輩も今から食事するんでしょ？　さあ、行きましょ、行きましょ・・・」

そんなこんなで三人は、特務機関一階にある建物の食堂へと足を運んでいた。

三人が特務機関一階の食堂にまで来て中に入ると、そこは他の隊員たちで半ば埋め尽くされていた。

特務機関内でも、ここは昼時になると活気付く場所である。

ナオとゆかり、モモの三人は、食堂の入り口付近におかれた食券の自動販売機でメニューを選ぶと、それを食堂の調理場のカウンターに出して順番待ち用の番号札を渡されていた。

それを受け取ると三人は、空いている席をおもむろに探し、そこへ腰を落ち着ける。

モモが頼んだメニューは、やはりとんカツ定食、ナオはたぬきソバだ、そしてゆかりは天丼と油っぼいものを頼んでいた。

注文の品が出来るまで三人は、テーブルに腰掛け待つことにする。

その間、モモが、先程の会議の内容を、根掘り葉掘り聞いて来ていた。

「ねえねえねえ、先輩。ところで今日の摘発は何時から行われるんですか？　私、興味あるんですよね～。黒峰会がようやく摘発されるんですから、ある意味わくわくしちゃいます」

「そう？　でも摘発は夜の八時頃よ、今日は十一時までには帰れそうにないわ。だからモモは、今日一人で帰ってね。私とゆかりは時間が遅くなるから今日は一緒には帰れないわ」

「えーっ、そうなんですか？　でもホント言うと私も今日は残業なんですよ。最近書類がたまっちゃって、それを片付けなくちゃならないんですよ。やっぱり十一時ぐらいまでかかっちゃうかな？　だから多分一緒に帰れますよ。二人ともだいたい十一時位には任務を終えて特務機関本部へ帰ってくるんでしょ？　私それまで待っていますから、

今日も一緒に帰りましょうよ」

そう言ってモモは、ナオとゆかりの顔をしげしげと覗き込んで来ていた。

「モモ、残業ってあなた昼間ちゃんと仕事しているの？　いつもさぼってばかりいるから書類がたまってしまわないの？」

だが、ゆかりはモモに対して、そう言って口を挟んで来ていた。

「なんですか、私がまるで仕事していないような事言わないで下さい。私だって一生懸命仕事しているんですよ。そりゃーナオ先輩やゆかり先輩のようにハードな仕事じゃないですけど、事務の仕事もそれなりに疲れるんですよ。パソコンばかりいじっているから目が充血したり、肩が凝ったりするんです。だから休める時には休んで休憩を有効活用しなければやっていられません。だからさぼるだなんて心外な事言わないで下さいよー！」

「あら、御免なさい。だっていつもあなたは私たちのそばに寄って来るから、仕事をほっぽりだしていると思われてもしょうがないじゃない？　あなたが真剣に仕事に取り組んでいる姿って、なかなか想像できないもの、モモはのんきのマイペースだからね」

「やだな、ゆかり先輩は、私がうすのろとでも言いたいんですか？　私だって仕事はてきぱきとこなしますよ。普段の私の仕事する姿を見ていないんですか？　私はこれでも一応仕事の出来る女として通っているんですから、あまり変な事言わないで下さいよ」

柏木モモは、そう言う、ちょっとふてくされて頬を膨らましていた。

「はい、二十五番と二十六番、二十七番の番号札でお待ちの方、注文の品が出来ましたよ。こちらまで取りに来て下さ〜い！」

とそこへ、食堂のおばさんが声を張り上げて、注文の品が出来上がった事を告げていた。

「あっ、私たちの番号が呼ばれましたよ、とんカツ定食取りにいかなくちゃ」

モモはおばさんの声を聞くと直ぐ様立ち上がって、食堂の調理場のカウンターに向かって、小走りに駆け出していた。

ナオとゆかりもそれに少し遅れて、たぬきソバと天井を取りに向かう。

カウンターにつくと三人は順番待ちの番号札と引き替えに、それぞれ銀色のトレーに乗せられた、とんカツ定食やたぬきソバ、天井などを、各自、自分の手に持って先程のテーブルへ戻って来ていた。

そして、おもむろに食事を開始する。

「しかし今日は頑張ってくださいよ。相手はあの黒峰会ですからね、二人とも怪我しないで無事帰ってきて下さい。聞くところによると相手も武装しているんじゃないかって言うことですから、くれぐれも無理しないで事に対処してね。とくにナオ先輩は特務機関の問題児なんですから、命令無視しないように。じゃないと、また佐渡課長に叱られますからね」

モモは、とんカツ定食をもごもごと頬張りながら、まるでナオに教訓でも諭すようにそう言う、意味不明な笑いを投げ掛けて来ていた。

「なにモモ、私に指図する気！？　あなたにそんな事言われる謂われはないわ黙ってて！」

そんな中ナオは、モモの言葉に少し怒って、ぴしゃりとそう言ってやっていた。

「えー、ナオ先輩そんなに怒らないで下さいよ。私は一応ナオ先輩のことを慮って言った

だけなんですから・・・でも先輩がよく命令無視するのは事実でしょ。それを考えると課長も大変ですよ、こんなすぐ怒る部下を抱えているんだから・・・」

「あなた私がすぐ怒るとも言いたいのか？ 私はね、そんなに怒ってなんかいないわよ！

人の事とやかく言わないで欲しいわ！」

「あれー？ だって今、怒っているじゃないですか。怒ると皺が増えるって言いますよ。ナオ先輩も美容には気を付けた方がいいんじゃないですか？ もう二十四でしょ、学生あたりから見ればもうおばさんかも知れませんよ」

モモは意地悪くナオに対してそんな事を言い、またとんカツ定食を頬張っていた。

「まあまあ、ナオもモモも言い合いするのは止しなさい。今は食事時よ、ランチは優雅にすませましょう。二人ともあまりぺちゃくちゃ喋ると下品よ、私のように上品に食べなくちゃ駄目よ」

先程から二人の話を聞いていたゆかりは、口を小さく開くと、天井の大盛りをその後やはり口元へと運んでいた。

「ところで今回、黒峰会と麻薬取り引きするという中華系のマフィア黄河会って、やはり裏社会を牛耳る闇の組織なんですよ？ この前、捕まった米川克彦は、その黄河会からセンター街襲撃事件に使われたマシンガンや爆弾を大量に手に入れたって聞きますけど、それは本当なんですか？」

「なにモモ、もうそんな事まで知っているのか？ あなた意外に情報通ね。その事、誰に聞いたのよ？」

ゆかりはある意味、モモの耳の早さに驚きそう言っていた。

「やだな、警視庁の人から聞いたんですよ。私がちょっと色仕掛けで迫ったら、簡単に教えてくれましたよ。意外と警視庁の人ってお喋りなんですよ？ やっぱり私に魅力があるからかなー」

「「・・・・・・・・」」

ナオとゆかりは、一時沈黙する。

そして、モモを二人同時にして、白い目で見ていた。

「どうして二人ともそんな目で私を見るんですかー、私なんか変な事言いました？」

「変なことってねあなた、モモの色仕掛けで落ちる男なんているかしら？ 別な意味であなたに寄ってきそうな男は居そうだけど・・・・・・・・」

「別な意味でって一体どういう事ですゆかり先輩、まさか私が幼稚体形だからってアニメ好きの青白いオタクが寄って来るって言うんじゃないでしょうね・・・・・・・・」

「なんだ自分で判っているんじゃない。正解よ！ 大体あなたには超アニメアイドルのオタクが寄り付きそうなオーラが漂っているわ。ロリコン趣味の男たちって言えばいいかしら？ そんな連中がわんさか寄ってきそうよ、実際の話」

「えーっ、そんなー、私オタクなんか趣味じゃないですよ。私の理想はカッコ良くてスポーツマンで、頭が良くて私より背が高い人がいいんです。ロリコン趣味の男なんて嫌ですよー」

三人がそんな馬鹿な話をしていると、そこへおもむろに佐渡一課長が銀色のトレーに鍋焼きうどんを乗せて現れていた。

「よっ、お前たち相変わらず仲がいいな。一体なんの話しているんだ。ロリコンとかオ

タクってお前たちそういう男が趣味なのか？」

「えー、やだー、課長ったら女の話をごっそり立ち聞きしていたんですか？ それはある意味セクハラ的一种ですよ。私たちの話を聞いてどうしようっていうんですか、このエロじじい……！」

「なんだ柏木、エロじじいとは酷いな。俺はこれでも健全な子持ち中年だぞ、女性の話聞いてニヤけるような趣味はない。ここではきっぱりと否定しておくぞ、俺の名誉に関わるからな……」

「そうですかー？ だって課長はいつもナオ先輩のお尻ばかり触っているじゃないですか。それは立派なエロじじいの証拠ですよ。いくら上司の立場にあるからってお尻を触るのはどうかと思いますよ……？」

だが、ここにきてモモは、日頃の鬱憤を佐渡にぶつけていた。

この佐渡という男が、ナオばかりを可愛がる事に、少々不満があったからだ。

しかし当の佐渡は、やはり知れっとして、あまり気にもとめていない様子だった。

「そうだ二階堂、それにナオ、食事が終わったら特務一課のデスクでミーティングを行うぞ。だから下らない話にうつつをぬかしていないで、食事が終わったらデスクに行っているよ。俺もこの鍋焼きうどんを食ったらすぐ行くから待っているように、判ったか？」

そう言うと佐渡は、別のテーブルに座って、一人で鍋焼きうどんを食べ始めてしまっていた。

午後一時二十分、特務機関・特務一課のデスクフロア内では、佐渡の予告どおり特務一課全員を集めてのミーティングが行われていた。

デスクフロア内の中央には、四つの机がパズルのように寄せ集められ、その上でかたかとした縮尺1：2500位の大きな地図が置かれている。

その地図には、今日、摘発が行われる《高閣楼》という高級中華料理店と、その周辺の街並みが再現されている。

そして、その地図上には赤いマジックかなにかで、所々に無数の丸印が付けられていた。

「いいか、この丸印は、今日お前たちが配置につく張り込み位置だ。それにこのギザギザの線は、各担当の持ち場の範囲を表している。まずは良くこの地図で地理的な見取り図を頭のなかにたたき込んでおけよ、現場に行って迷っていたんじゃ恥ずかしいからな」

課長の佐渡は、先程から熱心に地図を指し示し、隊員たちに今回の張り込みの再確認を行って講釈しているところであった。

それを受けて隊員たちは、地図が置かれた机を取り囲みながら、納得したように頷いている。

このミーティングは、黒峰会と黄河会の麻薬取り引きを摘発するためには、欠かせない重要な再確認の場であった。

今回、この二つの組織の構成員を一挙に一網打尽にする為には、張り込みを成功させることが第一の要素だった。

用意周到な網を事前に張り巡らせることで、のこのこ麻薬取り引きの現場へ現れた奴

らを摘発することが出来るのだ。

その為、特務一課の隊員たちは、真剣な顔つきをして佐渡の言葉を聞いている。

このミーティングが、今回の摘発を成功させる鍵にもなるからである。

「それじゃ次は配置の担当の内訳を言うぞ。まず、第六班は高閣楼の北側ちょうど裏口となる場所に張り込みを行う。そして第五班と第四班は東と西の担当だ、そして第三班、第二班、第一班は高閣楼の正面南側の位置に陣取り守備を固める。だがここで一つ注意しておく、決して相手側に我々が張り込みを行っているということを悟られるなよ。バレた時点でこの摘発は失敗に終わることになる。そうならない為にも、街の住人としてその場にとけこめ、そうする以外他に方法はない、いいか？」

「はい！」

特務一課の隊員たちからは、覇気のある返事が返って来ていた。

どうやら今回の摘発劇に、みな意欲を燃やしている様子だ。

それからかれこれミーティングは、二時間にわたって続けられていた。

その間、ナオとゆかりも第二班の隊員として、高閣楼の南側の守備を言い渡され、そこでの張り込みがどう行われるべきか、佐渡にあれこれと質問しているところであった。「課長、第三班と二班、一班は、高閣楼の南側を担当するという事ですけど、黒峰会と黄河会が麻薬取り引きの現場に現れたことが確認された場合、やはり私たちがメインで高閣楼に急襲を仕掛けるという事なんですよ？」

ゆかりは、佐渡に向かって、物怖じしない態度でそう質問をしていた。

「そうだ、そう言うことになるな。第六班には高閣楼の裏口を固めさせ、第三班、二班、一班は正攻法で正面から高閣楼店内に乗り込む。高閣楼店内の見取り図はこれだ。これは警視庁の刑事が事前にその店へ客として入り、間取りなどを調べて来たものだ。店の裏側はどうなっているかは判らないが、踏み込む際には役に立つからよく覚えておけ。取り引きは店の裏側の倉庫で行われるらしい。だからオレたちは店内に乱入したら、その倉庫への出入り口を探して摘発を行う事になる」

佐渡はそう言うと、見取り図を指でなぞって、店の店内の主要な出入り口はどこかを指し示していた。

「でも課長は今回どこを担当するんですか？　やはり南側正面を担当する班の指揮をとるのでしょうか？　課長が指揮をとらないと駄目ですよのね」

「そう言う事になるな二階堂、オレは正面の指揮をとるが、第六班は苅田、第五班は後藤、第四班は智谷に任せようと思っている。この三班はもし取り逃しがあつた場合の布石だ、店の裏口と西と東に網を張らせて包囲網を敷いておく。そうすれば一人ももらさず摘発が成功するだろう……」

午後三時十五分、ナオとゆかりはミーティングを終えると、休憩所の売店の前に来ていた。

もちろんそこには、柏木モモの姿もある。

「でも今回の摘発は、大掛かりなものになりそうですね？　なんてったって裏社会を牛耳る二大組織の麻薬取り引きの現場を押さえるんですから、緊張は隠し切れませんね、

ゆかり先輩・・・」

「そうね、今まで黒峰会には摘発の手が及ばなかったのだから、これはここに来て重要な分起点になるかもしれないわ。これから先、今回の摘発の如何によっては黒峰会という組織を壊滅にまで追い込めるかもしれない重要な任務になってくるもの。だから私たちも気を引き締めないと課長に叱られてしまうのは事実よ」

彼女はそう言うと、手元のコーヒーを一口すすっていた。

ゆかりは、どうも、今回の摘発が最初の足掛かりとして黒峰会の連中が捕まえられれば、その組織の更に深部にまで、摘発の手が及んでいくと見ているような向きがある。

今回の摘発で、その麻薬取り引きに参加する黒峰会の構成員が一網打尽に出来れば、それらの構成員を取り調べて、黒峰会の実態を暴ける可能性があるからだ。

これはナオにとっても、勅使河原洋二という父を殺した可能性のある男が、今どこで一体何をしているかということにまで事の事態が進むかもしれないので、彼女にとってはまたとないチャンスでもあると言えるのだ。

それを思えば、今日行われる筈の麻薬取り引きは、どうしても特務機関の手によって押さえなければならない重要事項になってくるのだ。

「だけどナオ先輩は、さっきから無口ですよ？　まさか出動を目の前にして怖じ気づいた訳じゃないでしょ？　現場に向かうのは五時でしたよね。しっかりして下さいよ先輩・・・」

モモは、先程から何か考えに没頭しているナオの姿を見て、一応、勇気づける様なそんな事をそう口走っていた。

モモにしてみれば、ナオが無口なのは今に限った事ではないことは判っていたが、どうもいつもと様子がおかしいと思ったので、ちょっとゆすりを入れてみたのだ。

だが、

「判ってるわよ・・・」

と、そうナオの口から一言だけ、素っ気なく答えが返って来た。

「やだなー、ナオ先輩ったらどうしたんですか？　元気がないですね・・・いつもならうるさいわね！、とか言うと思ったのに、今回は怒らないんですか？　何だか調子狂っちゃうな、いつもの先輩らしくないですよ・・・」

「いいのよ！　私にはわたしなりの考えがあるんだから、あなたは黙ってて！　でないと、その口にあんパン一袋、詰め込むわよ！！」

「やだー、その調子ですよナオ先輩。高崎ナオはそう言う調子じゃないと何だかしっかり来ませんもの、その気構えで黒峰会をやっつけてきて下さい。わたし期待していますからねー」

モモは、ナオの口調がいつもの調子に戻ったので、自分の事のように喜びを顕わにしていた。

彼女にしてみれば、ナオが落ち込んでいるのだから悩んでいるのだからといった態度は、見てはられないのだ。

すぐ怒るナオであっても、いつものナオであるのならば、それの方がとてもいいのだ。

あまり自分の内に籠もってしまうようなナオは、余りナオらしくないのだと、そう思いたったからだ。

「だけど、そう言うけどモモ、でも仕事の方はもういいの？ たまっている書類があるんじゃないかったの？ こんなところで油を売っていると、今日の残業は十一時どころじゃ終わらないかもしれないわよ。だから、いつも私たちの後にばかりくっついて来ていないで仕事しなさいよ。あなた一応仕事の出来る女なんですよ。これは多分、自称的なものなのでしょうけど……」

「あーもう、判っていますよ、ゆかり先輩、仕事すればいいんですよ。このコーヒー飲んだら、早速デスクに戻って驚異的なスピードで仕事を終わらせますから、そう急かさないで下さーい！」

そう言うともモは、コーヒーカップを煽りながら、茶色の液体を完全に飲み干していた。

それからモモは空のカップをごみ箱に投げ捨てると、ばたばたと幼稚な足音をたてながら、その後、特務一課のデスクの方へと駆け足で戻って行ったのだ。

それは、ナオとゆかりが高級中華料理店《高閣楼》と言う飲食店へと完全に摘発に出勤する、約一時間半前の大まかな実際の出来事であったのだ。

.....

第二節

その日の午後、五時三十分、特務機関・特務一課、第一班から第六班の面々と警視庁麻薬取り締まり班・麻薬取り締まり官二十五名は、都内、世田谷区・三軒茶屋の一角、高級中華料理店《高閣楼》の周辺に来ていた。

高閣楼は、三軒茶屋の繁華街に軒をつらねる、一見、何の変哲もない飲食店である。

そしてその繁華街には、他の中華料理店などがやはり軒をつらね、一種の小さな中華街を形成している場所でもあった。

今日、麻薬取り締まりの摘発に参加する特務機関と警視庁のメンバーは、高閣楼という中華料理店を中心にして、その周辺半径一キロメートル以内の場所に分散して配置している。

これは事前の打ち合わせで、既に決められていた方針であった。

摘発に参加するメンバーは、特務機関や警視庁の麻薬取り締まり官を問わず、皆一律に私服勤務が言い渡されてある。その為、特務一課の隊員は、自前の動きやすい服装で、その下に薄手の防弾チョッキを着用していた。

その防弾チョッキは、小口径の銃弾ならやすやすと弾くだけの性能を持つものだが、大口径の弾までは計算に入っていない代物である。

特務機関の隊員に、その防弾チョッキの着用が義務付けられたのは、黒峰会ならびに黄河会が銃火器を持って武装しているという危険性があった為だ。

そんな中、今現在、特務機関・特務一課の面々は、所定の位置に配置を完了し、その中の数名の者が高閣楼へと通じるあらゆる道路を物陰から監視し、麻薬取り引きの現場に黒峰会ならびに黄河会の組織構成員が現れるかどうかの確認をとる為に、張り込みの任についているところであった。

これは余談だが、店の北側を担当する第六班のリーダー苅田や、東の第五班の後藤、西の第四班の智谷には、高性能トランシーバが渡されてある。

それを使って様々な指示のやりとりを、南担当の第一班から三班を含めた課長の佐渡等の間で行うのだ。

こういった各担当の分散した班同士の統制をとるためには、トランシーバは欠かせない武器の一つだ。

各班の配置状況や守備を確認する為には、一々、伝令を走らせていては、時間的面が無駄になる。

いつ不測の事態が起こるか、判らないのだ。

その為にも、各班同士の迅速な交信手段は、確保しておかなければならない。

またそれと同時に、各、道路を監視している隊員にも、トランシーバは渡されてある。

黒峰会のメンバーや黄河会のメンバーらしき人物の車輛が現れた際、即座に南側で急襲を仕掛ける筈の本体に連絡を取るためだ。

摘発を成功させるためには、麻薬取り引きに参加する両組織のメンバーの動向が判らなければ意味をなさない。

そうである以上、高閣楼に出入りする人の顔触れも、監視しなければならなかった。

ナオとゆかりは、今、高閣楼の南側、約六百メートル位、離れた場所の裏路地にいる。

その隣には、佐渡一課長の姿もあった。

「あー、こちら佐渡、こちら佐渡・・・第四班の伊丹、どうだ張り込みの対象は現れたか？　どうぞ・・・」

『えー、こちら伊丹。我々は高閣楼の西側の裏路地から店へと通じる主要道路を張り込みしていますが、今現在の現時点では特別怪しいと思われる人物や車輛は見かけられません。今は六時十分前ですから、まだまだ取り引きの現場には現れないのではないのでしょうか・・・』

「そうか判った、引き続き張り込みを続けるように・・・こちらはこちらで引き続き高閣楼の動向をうかがって守備を固める。くれぐれも失態のないように気を付けてくれ・・・」

『ハイこちら伊丹、課長の言葉を肝に銘じておきます。こちらに動きがあったらすぐ連絡を入れますので、ご心配のない様に、どうぞ・・・』

課長の佐渡と張り込み担当の伊丹という男は、短い会話を一言二言交わすと、おもむろにトランシーバを切っていた。

そんな折り、隣にいた二階堂ゆかりが、課長に次のような疑問を投げ掛ける。

「課長、でも今日は本当に黒峰会と黄河会との麻薬取り引きは行われるのでしょうか？」

私ある意味、疑問なんですよ？ 結局、米川が捕まって取り引きの日時が判りましたが、黒峰会は米川克彦が捕まって自供したことを知り、今回の麻薬取り引きを中止にするのではないかと危惧しているのですが、それについては課長はどう思っているのですか？」

「うーむ、確かにその可能性がないとは限らないだろう。しかし米川が逮捕されたことは警視庁と特務機関以外では極秘になっている。マスコミにもその事は知られていないんだ。だから、しばらくの間は黒峰会の連中にも米川が捕まっているという事は知られないと思うが、その辺に望みを託して、今日その組織が現れてくれる事を願うしかないな」
佐渡はそう言うと、複雑な顔をしていた。

ゆかりの疑問は、尤もであると思ったからかもしれない。

しかしそんなところへ、ナオがめずらしく口を挟んで来ていた。

「大丈夫よゆかり、今日は必ず黒峰会が現れると思うわ。これは私の勘よ。奴らが姿を見せたら手際よく一網打尽にしてみせるわ。だからそうウジウジと危惧するのはやめなさい。そんな事ばかり考えていると `猿に竹の子が生える、わよ……」

「ちょっとまってナオ、その `猿に竹の子が生える、って一体どういう意味よ。また変な言葉を造っているわね。私には全然意味が判らないわ、課長には判りますか？」

ゆかりはナオを直視しながら、それとなく佐渡一課長に話題をふっていた。

「さーな、それはどうだろう？ オレにもいまいち意味がわからんが、一々ナオの言葉を真に受けていたんじゃ、仕事に手がかんからな、オレはその意味を考えることを止めにして置く。二階堂もあまり深く考えるな、頭が腐ってしまうぞ」

「ふふふ、そうですね？ でもいいナオ、あまり変なことを口走らないでね。あなたの表現は余程とんちんかんですもの、一々、私たちの頭を悩ませないで頂戴」

「そうかしら？ 私の言葉が判らないなんて、とてもマイナーな頭しているのね。それはまるで `猿蟹合戦、よ、私の言葉には深い意味があるのよ……」

「やだナオ、また変な事言っているわね。もうよしなさいよ、本当に私の頭が腐ってしまうから……」

そう言うとゆかりと佐渡は、くすくすと笑いを洩らしていた。

しかしナオは、意外と真剣な顔をしていた。

二人に笑われた事が、一応、心外であったのかもしれない。

午後七時、ジャスト。やはり特務機関E X X P、通称《ハード・ガン》の面々は、高級中華料理店《高閣楼》を取り巻きながら、配置につき張り込みを続けていた。

今晚も冷える、隊員たちの吐く息は白く、身震いしそうな寒さであった。

だが、その頃、高閣楼の東に陣取った第五班の張り込み隊には、先程から慌ただしさが生じていた。

「おい篠井、あれ見てみろ。あれは奴らの車じゃないか？」

その時、電柱の影から表通りを監視していた、特務機関の朝津見という男が同僚の篠井という男に声をかけていた。

「どれどれ、でも今の時間帯じゃ、来るのが早すぎるんじゃないか？」

篠井は朝津見の脇から通りを覗き込むと、目を懲らして表通りを見つめていた。

「やっ！ 確かにそうかもしれない。朝津見、連絡だ、課長にすぐ連絡しよう」

篠井と朝津見の張り込み位置は、高閣楼から東に五百メートル少し離れた路地の一角に位置している。そこから西に向かって黒塗りのベンツが数台数珠つなぎになって、今、表通りを通り過ぎていく状況が確認されていた。

それを見た篠井は、同僚の朝津見に、課長へ連絡を取るよう言い渡していた。

ピピッ・・・ピピッ・・・

そんな折り、唐突に佐渡が携帯するトランシーバに連絡が入っていた。

「はい、こちら南側本体の佐渡、そちらは誰だ？」

『あっ、課長ですか？ こちら第五班の張り込み担当の朝津見です。唐突ですが課長、現れましたよ、黒塗りのベンツが六台です。今現在、我々の前を通り過ぎて高閣楼方面へ向かっている模様です。現時点では黒峰会か黄河会かの判断は出来ませんが、今日の麻薬取り引きに参加するために高閣楼へと向かっていると思われるのですが、早速、連絡を入れてみました。どうでしょう？ どうぞ・・・』

「なにっ！ そうか、確かに現れたんだな！ 判った、後はこちらで再確認する。お前たちは班長の後藤と連絡を取って、東から高閣楼付近へと近付き包囲網を縮めておけ。それ以外の指示はこちらが確認を取った上であらためて連絡する。それまで軽率な動きはするなよ・・・」

『はい、こちら朝津見、了解しました。これから後藤と連絡を取りたいと思います』

そう言うとトランシーバによる通話は切れていた。

その通話が終わると佐渡は、今度は高閣楼前の張り込みを担当する吉川に通信を入れていた。

『はい、こちら張り込みの吉川・・・』

「おおっ、吉川か？ こちら佐渡だ。今、第五班の朝津見から連絡が入り、そちらに黒塗りのベンツの車輛が六台向かっていると言うことだ。済まないがその確認をそちらでとってくれ。おそらくその連中は、今日の麻薬取り引きの現場に現れた黒峰会か黄河会のメンバーらしい。だから確認がとれ次第こちらまで連絡して欲しいんだ。判ったか吉川、どうぞ・・・」

『こちら吉川・・・判りました課長、今から通行人を装って高閣楼前に接近し、実地確認を行いたいと思います。それまでしばらく待っていただけますか？ 今現在は課長が言うベンツの車輛は見当たりませんので、こちらにそれが現れしだい確認をとりたいと思います。どうぞ・・・』

「えー、こちら佐渡、お前のいわんとするところは了解した。くれぐれも不審な行動はとらず確認を完了するように。それでは通話を切る、よろしく頼むぞ」

ピッ・・・

佐渡は、トランシーバの通話を切ると、それを腰のベルトに戻していた。

そして、そこに集まる第一班から第三班までの隊員の顔を見渡す。

「課長、今の通信は一体どういう事ですか？ 黒峰会の連中が現れたのですか？」

そこへおもむろに話し掛けていたのは、二階堂ゆかりであった。

彼女は、先程からの課長のトランシーバによる通話を聞きながら、疑問に思い、そう

佐渡に問いただす。

「ああ、まだ黒峰会か黄河会かの判断はできんが、それらしき車輛が第五班の張り込み場所を確認されたらしい。今、高閣楼方面に向かっているという事だ」

「そうですか、しかし早いですね。まだ今の時間は七時ですよ、米川の供述によると取り引きの開始時刻は約八時からという事になっていますが、時間が早まる訳ではありませんよね？」

「そうだな、取り引きの時刻がいつ何時に行われるという厳密な事はよくわからんが、その可能性がないという事でもないだろう。しかしもう一つさっき現れた車輛とは別の連中が現れる筈だ、どちらが黒峰会でどちらが黄河会かということは判断しにくいだが、気長に待つしかないな……しかし、そう言えば二階堂、さっきからナオの姿がみえんが、一体奴はどこへ行ったんだ？」

「ええっ、ナオですか？ ナオならここに、あら？ どこへ行ったんでしょう。ついさっきまで、私のそばに居たんですけど、確かに見当たりませんね……」

その頃ナオは、一人、高閣楼の南側前の張り込みを担当している、吉川のところに姿を現していた。

「あれ、高崎じゃないか？ 君は確か佐渡課長と本体で待機中の筈じゃなかったのか？ 一体何しに来たんだここへ。課長から俺達に何か言伝があるのかい？」

先程、佐渡からの通信を受けて、今まさにこちらに向かっているベンツの車輛の確認に動きだそうとしていた吉川が、ナオの姿を見付けて不審に思いそう問いただしていた。

「そんな事どうでもいいじゃない。それより黒峰会は現れたかしら？」

ナオは吉川の疑問をよそに、愛想のない言葉でそう確認を入れる。

「黒峰会？ その事ならまだ判らないよ。今、課長の指示で、その確認をとるところだ。だが、君はここに来ちゃ駄目じゃないか。もしかしてまた課長の命令を無視して一人で行動しているのなら、後で課長に大目玉食らっても知らないぞ……」

そう言うと吉川は踵を返して、表通りへと他の隊員とともに駆けだしていた。

その後にナオも続く。

するとそこへ、黒塗りのベンツが何の予告もなしに、東の方角から現れていた。

全部で六台。

その車輛は、方向指示器をだしながらゆっくりと高閣楼の前に侵入すると、表通りの路肩に停車してエンジンを止めていた。

そして、その車輛から、スーツ姿の男たちがドアを開けて降りてくる。

男たちは全部で二十七人程度、皆、眼光鋭い男たちである。

「現れたぞ、まずは西野お前が確認をとってこい。通行人を装って顔を確認してくるんだ。いかくれぐれも相手に気付かれるなよ。気付かれたら元も子もないからな……」

「ちょっと待って、私が行くわ。あなた達はここで待っていて。女が行ったほうが警戒されずに済むわ」

吉川が西野という隊員と話をしている際に、ナオが二人を制してさっさと駆け出してしまっていた。

「おい、ちょっと待てよ、高崎！　これは俺達の仕事なのにお前が行ってどうするんだ。こら待て！！」

しかし吉川がそう言ってみたが、当のナオはもう高閣楼の前に停車した黒塗りのベンツに近付いて行動を開始してしまっていた。

ナオは通行人を装い、しかも堂々とベンツの脇を通り過ぎて、そこにたむろっている男たちの顔をつぶさに確認する。

だが、当然のことなのだが、その男たちは、ナオが見たこともない連中であった。

しかし、その行動で、判った事が一つだけある。

それはその男たちが、みな左胸にバッジをつけているという点だった。

そのバッジは金色に光るバッジで、その中心には『黄』という文字が刻印されていた。(黄河会・・・?)

ナオはそのバッジを見て、一人心の中でそう呟いていた。

『この連中が黄河会の者だとすると、まだ黒峰会は現れていないという事ね・・・』

その確認をとるとナオは、急いで吉川のもとへ小走りで戻って来ていた。

「どうだった高崎？　奴らが黒峰会か黄河会のどちらかか判ったか？　どうなんだ・・・」

ナオが戻ってくる早々、吉川は、その彼女に質問をしていた。

「そう急かさないうで、でも、おそらく彼らは黄河会の者よ。彼らは皆、左胸にバッジを付けていたから確かだと思うわ」

ナオはそう言うのと吉川にニヤリと笑いかける。

それを受けて吉川は、少し気圧された複雑な表情をしていた。

どうやら彼は、ナオが苦手の様子だ。

別に吉川はナオの事を嫌っている訳ではないが、少し扱いにくい相手であるとは思っているらしく、その証拠にナオと話をする時の彼の顔は少々強ばっている様に見えた。

「それは確かなんだな高崎、判った、それじゃ課長に連絡をいれるから君は本体に戻れ。でないとまた怒られるぞ・・・」

そんな会話を交わしていると、その横で話を聞いていた西野という男が声をかけて来ていた。

「おい吉川、奴ら高閣楼に入って行くぞ。どうやらやはり今回の麻薬取り引きに来た連中らしい。早く佐渡課長へ連絡を入れるんだ！」

そう言いながら西野は、吉川の袖口をひっぱって催促をしていた。

ピピッ・・・ピピッ・・・

そんな折り、また佐渡の携帯するトランシーバに通信が入っていた。

「なんだこちら佐渡、張り込み隊の吉川か？」

『はい、そうです吉川です。ついさっき課長が言っていた車輛の確認がとれました。どうやら黄河会の連中のようです。彼らは、今、高閣楼のなかへ入っていきましたから、まず間違いはないでしょう。人員は全部で約二十七名、みな白のスーツ姿で統一した格好をしています。我々は引き続き黒峰会の張り込みも続けますから、これで連絡は終わります。どうぞ・・・』

「そうか判った、こちら佐渡、黒峰会が現れたらまた連絡を取るからそのまま待機してい

ろ。黄河会の連中が現れた以上、黒峰会もいずれ姿を見せるからな、緊張は解くなよ・・・」
『解ってます課長、了解しました！』

ピッ・・・

佐渡の持つトランシーバからは、通話の終了を示す電子音が一度鳴ると、そのまま会話は途切れていた。

だが、

ピピッ・・・ピピッ・・・ピピッ・・・

次の瞬間、またトランシーバの着信音が鳴り響く。

「はい、こちら佐渡、そちらは何班の誰だ・・・」

『あっ、課長、こちら第四班の張り込み隊の葛西です。今現在、我々は高閣楼の西地区の道路を張り込んでいる訳ですが、先程、連続して五台の車が通りました。その後しばらくしてまた三台いずれも黒塗りのベンツです。おそらくその車輦には今回の麻薬取り引きに参加するメンバーが乗車していると思われまますから、急いで課長に連絡を入れました。どうぞ・・・』

「そうか葛西、確かにそれらしい車輦を確認したんだな。今さっき吉川から連絡が入りもう既に黄河会らしきメンバーは高閣楼へ到着した様子だ。おそらくお前が見た車輦は黒峰会の連中が乗っている車輦だと思われる。もう張り込みの方はいいから、智谷と合流して高閣楼付近に急げ。いよいよ現場で取り引きが行われることになるぞ、判ったか？」
『はい、こちら葛西、これから張り込みをやめて、智谷さんと合流したいと思います。それじゃ・・・』

ピッ・・・

「課長、黒峰会が現れたとなればいよいよですね。私たちも高閣楼付近へ急いだほうがいいんじゃないやありません？ 本体が出遅れるとマズい事になりますよ」

佐渡の通話が終わると、突然、話し掛けて来ていたのはやはり二階堂ゆかりであった。彼女は、やや興奮気味に構えると、課長に注言する。

予期していたよりも早めに黒峰会が現れた事を知って、大分嬉しそうにしている。

なぜ彼女がこんなに嬉々としているのかは佐渡には判らなかつたが、一応ゆかりの言葉に頷き、次には第一班から第三班の隊員たちにおもむろに指示を出し始めていた。

「いいか第一班に第二班、そして第三班、俺達はこれから更に吉川が張り込みを行っている近くの少し離れた位置に移動する。その前にまずは武装の点検をしろ。急襲を仕掛ける際、不手際があつては仕方ないからな。それに防弾チョッキはしっかりと服の下に着用しておくように。何度も同じことを言わせるなよ、一度だけしか注意しないからな、そのつもりでいろ」

そう言うと佐渡は、しばらくの間黙って待っている様子だった。

それを受けて、それぞれの隊員たちは、武装の点検や防弾チョッキを再び着用しなおし、手際よく準備を調べているところであった。

それが終了すると、隊員全員は、佐渡が引率のもと場所移動を始めて、高閣楼から二百メートルぐらい離れた場所に足を運んでいた。

その場所は、もちろん住宅街の密集した路地裏だ。

今は日も落ちた事もあり、人通りは殆どないといって等しい。

そんな中、特務機関の隊員と警視庁麻薬取り締まり官の面々は、息をひそめて次の命令を待って待機している様子だった。

だが、そんなところへ、高閣楼方面から一人の女性がとぼとぼと歩いてくる。

ナオだ！

二階堂ゆかりは、それをいち早く確認すると、小声でナオに聞こえる様に呼び掛けている。

「ナオ、そこで一体何しているの？ 早くこっちに来なさいよ。駄目じゃない一人で持ち場を離れちゃ。一体どこで何をしていたのよ！」

だが、そこへ佐渡も口を挟んでくる。

「ナオ早くこっちへ来い！ お前はまた一人で行動を起こしたな、まったくしょうがない奴だな・・・」

それを聞き付けるとナオは、小走りで戻ってくる。

そして、何事もなかったように佐渡の前に来ると、次のようなことを口走っていた。「高崎ナオ、今、私は自主的に張り込みの吉川隊の様子を探ってきました。彼らは何も問題なく張り込みを続けている様子です。ですから何も心配することはありません、以上ナオの報告を終わります！！」

そう言うとナオは、警察がするように手のひらをピシッと叩いて頭の上にかかけると、敬礼をしていた。

「あー、もう判った。お前はいいからここでじっとしている。まったく手を焼かせるな、後でまた特務機関の規律をみっちり仕込んでやるからそのつもりでいろ！」

佐渡は、ナオの少しおどけた態度に癖々しながら、面倒臭そうにそう言っていた。

今ここで彼女を叱り付けても、意味がないと思ったからかもしれない。

ピピッ・・・ピピッ・・・ピピッ

だがそこへ、またおもむろに通信が入る。

「はい、こちら佐渡、お前は誰だ？」

『ああ、課長オレです吉川です。今こちらにまた八台の車輛が到着しました。おそらく奴らは黒峰会の者でしょう。彼らは今車輛を降りて高閣楼へ迷う事無く向かっています。あっ今先頭の男が店内に入っていました。その後にはぞくぞく続いて入店しています。これはもう間違いないでしょう、課長どうしますか？』

その言葉を受けて、佐渡が一人頷く。

「よし判った、今からお前と合流して他の隊にも指示を出す。それまで少しそこで待て！」

『判りました課長、それでは通話を切ります』

ピッ・・・

午後七時三十分。その頃、高級中華料理店《高閣楼》の店の裏側では、黄河会とおぼしき組織のメンバーと、黒峰会らしき組織の構成員が一同に顔を合わせて、麻薬取引の話合いが今にも始まりを迎えようとしていた。

黄河会のメンバーは、一様にみな赤のシャツに白いスーツを着込んでいる。

そして、黒峰会は黒のスーツだ。

これならば一目瞭然、どちらがどの組織に属しているかは見ただけで判るだろう。

そして、その室内の中央には大きな円卓がおかれ、今現在、両組織の代表幹部であると思われる二人の男が、そこに向かい合った形で腰を下ろしていた。

一人は小太りで頭の禿げ上がった五十代の男、左手には大粒の宝石をあしらった指輪が幾つも光り、首もとにも銀色のネックレスがギラギラと輝いていた。

彼は顎に髭を生やしており、その髭先がツンと下方向に尖っている。

その髭は、あまり立派なものではない。

強いて言えば、薄いちよび髭といったところであった。

だが彼は、黄河会のメンバーを率いる幹部だけあって、その構えに隙はない。

一見人の良さそうなおじさんにも見えそうだが、油断のならぬ雰囲気、その面貌からは醸し出されていた。

そして、その男の向かい側に座る男は、やはり髭面の男であった。

彼は、今は、その顔に満面の笑みを浮かべている。

しかし、その顔は脂ぎっており、無数の皺が刻まれている。

彼の名は茂満十次郎、やはり黒峰会の幹部だ。

今現在、この二人の代表が向かい合った形で、話がおしすすめられ様としていた。

「しかしリーさん、今日はこんな辺鄙な場所にお越し頂いて恐縮です。我々はもっと取り引きの場所にふさわしいところを用意しようと思ったのですが、あいにくと都合のいい場所が見当たらずここに決めたのですが、ご不満はおありですか？」

そんな折り、茂満は、目の前に深々と腰を下ろす男にそう言って伺いをたてていた。

どうやら茂満の向かいに座っている男は、その名をリーと言うらしい。

彼は、茂満が話し掛けると、鷹揚な態度を示し、次の言葉を語っていた。

「いや茂満さん、私は場所になどこだわりはしないよ。ただ今回の取り引きが成立できる場所であるのならどこでも構わない。場所より取り引きの方が重要事項だからね」

そう言うときリーは、懐のうちポケットから葉巻を取り出し、それに火を点けていた。

その室内に、もうもうとした紫煙が立ち上り始める。

「そこですな、今回の取り引きの件なのですが、あなたがた黄河会がここへ来たということは、取り引きに応じるという意志の証明なのでしょう？ 我々はぜひともあなた方との取り引きを成立させたい。そこで今回あなた方は初めてのお客になるのですから、原価の二十パーセント引きで取り引きを成立させるというのはどうです。何も商談は今回だけとは限りません、今後とも仲良くして頂ければこちらとしましても勉強はするつもりです。ですから今日はその言い値で取り引きを成立させましょう。いかがですか、リーさん？」

「いや、あなたの話は判ります。二十パーセント引きならこちらも文句はありませんよ。しかし現物は今日、持参しているのでしょうか。それを見ないかぎり納得はできません。まずはその現物を見せて頂こうか」

リーは、そう言うとき口から紫煙を吐き出して、灰皿に灰を落としていた。

「判りました、それでは現物をお見せしましょう」

その後、茂満は、後方に控えていた部下に指示を出すと、茶色の皮張りのケースを円卓の上に広げるように命じていた。

部下はそれを受けると、一度頭を下げてから円卓の上にケースをのせ、その蓋を開い

ていた。

中には塩化ビニールの袋に小分けして入れられた白い覚醒剤がびっしりと詰め込まれている。

おそらくそれは、末端価格にして一億円はくだらない量の精製された白い粉であった。「リーさん、いかがですか？　これは非常に純度の高い品です。末端価格では一億五千万はします。ですが今回は二十パーセント引きということで一億二千万でいかがですか？　こちらとしましても、ここまで値を下げるのは少し心苦しいのですが、何度も言いますようにあなた方とは最初の取り引きになるからこれでも大分考慮して値を下げた訳です」

「茂満さん話は判りました、では味見をしてみましょう。値段の交渉はそれからにして頂きたいですな……」

そう言うときリーは、ケースの中から白い粉入りの一つの袋を取り出すと、それを開いて中の粉末を唾で濡らした小指に付着させて舌で舐めとっていた。

「うーん、確かにこれは純度の非常に高い品のようです。よくこれだけの物をお持ちだ。やはり今回、黒峰会を取り引きの相手に選んだのは正解だったような気がします。これならば安心して上質のヤクを手に入れられるでしょう。ですがここでお願いがあります。私ども黄河会は組織の経営で資金繰りが危ういのです。ですからここは原価の四十パーセント引きで取り引きを成立させるという提案はどうでしょう。これらの品が純度の高い高品質な品であることは判っていますが、その提案を受け入れてくれては頂けませんか？」

リーはそう言うとき短い眉を動かして、ある意味、戯けた態度をとっていた。

それを受けて茂満は、いきなり渋い顔をする。

「これはまたリーさん、法外なことを言いなさいますな。まさか四十パーセント引きとなるとうちも困るのですよ。我々もあなた方と同じように収益がないと組織の経営に支障をきたしてきます。ですからせめて原価の二十五パーセント引き程度で手を打ってみてはどうですか？　こちらはそれ以上、譲歩することは困難です。いかがでしょう？」

茂満はそう言うとき、顔を少し引き攣らせていた。

本当のところは、相手があまりにも馬鹿なことを言っているという思いが、その表情に如実に表れて出てしまっている。

だが、それに相対するリーはその時、意味不明な笑いをもらして茂満の目を見つめていた。

それは、この商談をなにか成功に導く鍵を見いだしたような、狡猾な一人の男の目の輝きを宿した眼差しの様でもあった。

第三節

午後七時四十五分———今現在、ナオたち特務機関の面々は、中華料理店《高閣楼》を東西南北の四方から完全に包囲し、出入り口や道路封鎖を完璧なものとして配置にしていた。

第六班の苧田隊は店の北側裏口を封鎖、第五班の後藤、第四班の智谷隊は東と西を担当し、包囲網を完了。後は店の南側の急襲部隊、第一班から第三班までの準備が整うのを待つばかりであった。

黄河会と黒峰会が高閣楼に入店して、約三十分ぐらいが経過していた。

その間、佐渡はトランシーバで各隊に指示を出し、店の包囲網を完璧なものにしておいていた。まさか今日、麻薬取り引きに訪れた黒峰会や黄河会の面々は、外で特務機関が手ぐすね引いて待っているとはよもや思うまい。彼らに悟られる事無く、各隊の配置は完了したといっても過言ではなかった。しかし今は、高閣楼の南側正面で、第一班から第三班までの佐渡隊は、店内に突入する為の時間的タイミングを見計らって、緊張の度合いを強くしていた。

今回はどうしても、両組織の麻薬取り引きの現場を押さえなければならない。

その為にも、麻薬取り引きが始まりを迎え、両組織が今まさにブツや金の引き渡しを行っている場面を摘発できれば一番の理想である。

そうである以上、突入のタイミングは重要であったのだ。

「課長、もうそろそろがいい頃合いではないのでしょうか？　彼らが店内に入店して、かれこれ三十分近く経過しています。この手の麻薬取り引きですから、彼らは商談さえ成立すれば早々と引き上げてしまうのでありません？　取り引きが完了してからでは、手遅れになりますよ・・・」

高閣楼の南側に陣取って、先程からその店に睨みをきかせていた佐渡に対し、やはり二階堂ゆかりが少し焦れた態度をとりながら、注言を入れてみている。

「ああ、判っている。お前に言われなくても俺にだって考えはある。しかしな、米川の供述によると、黒峰会と黄河会の取り引きは、今日が初めてになるという事だ。その点から考えると、そうやすやす商談が成立して引き上げの姿勢を見せるとは思えんのだ。ここは後少し待ってみた方がいい。タイミングを計ることは重要だからな・・・」

ゆかりの言葉を受けて、佐渡は、今現在の正直な気持ちを語っていた。

「そうですか課長、そのようなお考えがあるのなら私は何も言いません。しかし、今回の摘発が無事成功すればいいですね。これだけ包囲網を嚴重にすれば、黄河会と黒峰会を一網打尽にすることも夢ではないでしょう。私も気長に待つことにします、焦ってもしょうがありませんものね・・・」

そう言うとゆかりは、佐渡に対し笑ってみせていた。
「しかし二階堂、今ナオは何している。まさかまた勝手な行動はとっていないだろうな。一応お前は、ナオのお目付役だ、命令無視しないようにちゃんと言っておけよ。特務機関は規律が大事だ、勝手な行動は控えるようにってな」

「大丈夫ですよ課長、ナオならほらあっちで一人ふてくされています。さっき課長に叱られて拗ねているみたいですけど、さすがにもう反省でもしているんじゃないですか？ ナオは意外とあれでも真面目な部分がありますからね、これ以上は、命令無視する事はないと思いますよ」

「そうか、それならばいい。しかしあいつにも困ったものだ、一人突っ走った行動して怪我などしなければいいんだが、気苦労がたえんな……」

「あら、課長はやっぱりナオのことが心配なんですか？ 課長はナオの事がお気にいりですものね。でもそんなにナオのことばかり可愛がると、その関係を他の隊員に疑われますよ。ナオは課長の愛人じゃないのかってね」

「おいおい、二階堂、それはないだろ。俺は別にナオをそんないやらしい目では見ていないんだぞ。あいつを見ていると、なんて言うかこう厳しく叱り付けてやらなければって思っているんだ。でないと何をやらかすか判らん女だからな……」

「ふふふ、そうですね。でもあまり過保護にするって言うのもどうかと思いますよ。ああ見えてもナオは、立派な大人なんですもの、何がいいか悪いかの判断ぐらい出来ると思いますけどね」

「確かにそうあって欲しいと思うな。俺だって課長の立場としては、あいつばかりに構ってられる訳にもいかんからな……」

佐渡はそう言うと、苦笑いをその表情に浮かべていた。

少しナオのことを何だかんだ言って、甘やかしすぎていると思ったからかもしれない。だがそこへ話の主役、ナオが姿を見せる。

「課長、まだ？ さっさと急襲を仕掛けましょう。相手が油断している隙に速攻で乗り込めば、かならず摘発は成功すると思うわ。もう待つのは沢山よ！」

「まあまあ、そう言わず黙って待機している。あともう少しだ。今回の摘発には乗り込むタイミングが重要になってくるんだぞ。お前のその短気をなおせ、これはいい機会だからな……」

「そうよナオ、課長の言う通りだわ。いくら相手が黒峰会だからって短気は駄目よ。別に殺し合いをする訳ではないんだから、あと少しぐらい我慢しなさいよ。トイレに行きたい訳ではないでしょ？ 子供じゃないんだから、大人しく待っていなさい」

ゆかりはナオに対してまるで姉のような口調でそう言うと、舌を出して戯けてみせていた。

「判ってるわよ、二人して卑怯ね……」

ナオは、そんな二人に、またふてくされて臍を曲げてしまっていた。

ゆかりが課長の味方をしているという事に、少々不満があったからかもしれない。

しかしそんな会話をしながら、かれこれ十分は経過していた。

その間にもナオは焦れて、檻の中のライオンの様に、その辺を行ったり来たりし始めてしまっていた。

かなり苛立っている様子だ。

だが、路地の物陰から高閣楼店内の様子をうかがっていた佐渡が、その時ようやく決断を下していた。

「よーし、もうそろそろいい頃だろう。それじゃみんないいか、いよいよ高閣楼に乗り込むぞ。まずは第一班、お前たちが先陣をきってそのあとに第二班、第三班がつづく。武装の方は準備が整っているだろうな、ヘタすると銃撃戦になるかもしれんから、踏み込む際は細心の注意を払えよ・・・」

そう言うと佐渡は、手で合図して、第一班に前へでるように指示を出していた。

佐渡はその後トランシーバを手にとって、第六班、第五班、第四班の各班長に今から急襲を仕掛けるという旨を通達する。

そしてトランシーバのスイッチを切ると、それを腰に戻し、目の前の隊員たちを見渡していた。

「いいか、これから摘発を行う訳だが、高閣楼の店内に踏み込んだら前々から打ち合わせしていた通り、まず店の裏に通じる出入り口を探して侵入ルートを確認しろ。もし相手が発砲したらこちらも相手を死なせない程度に応戦してかまわん。なるべく多くの連中を逮捕したいから、窮地に陥ったとき以外は射殺は禁じる。それともし負傷した場合は、即座に現場から離れ後続の隊員と入れ替われよ。足手まといになると他の隊員までが命を落とすこともあるから、それだけを言っておく。それじゃ整列だ、第一班を前衛として、そのあとに第二班、第三班が後衛につけ。その隊列を組んで一斉突入する、後れをとったりするなよ・・・」

佐渡は、隊員全員を鼓舞すると、その隊列のまま高閣楼という中華料理店の表玄関前三十メートル地点に移動し、配置を完了していた。

そして表から店の様子を覗き、数秒間、間合いを置くと、軽く深呼吸をしていた。

隊員たちも、その佐渡の挙動に呼応するかのように、緊張感を高めていた。

第一班から第三班までの隊員は、それぞれ手にショットガンやハンドガンを装備して佐渡の合図があがるのを息を飲んで待つ。

すると次の瞬間、佐渡は意を決したように急襲の号令を言い放っていた。

「行くぞ！！ 全員突入・・・！」

だがその頃、店の裏側では、黒峰会と黄河会の麻薬取り引きが、少し白けきった空気の中引き続きむさ苦しい室内で、淡々として行われていた。

「しかしリーさん、原価の四割引きとは少し酷いではありませんか？ 我々が今日、用意したのは厳選された品です。それをそこまで値切るとなると、我々の資金繰りは赤字になるといいでしょう。ここは一つお互いに歩み寄って、原価の二十五パーセントという事にしてはどうです。これでもあなた方に損はないでしょう？」

黒峰会の幹部、茂満十次郎は、今、黄河会の代表幹部リーという男を目の前にして少しその表情を引きつらせながら、苦渋の色をおさえてそう話し合いをすすめていた。

「うーむ、あなたの言い分は判りますよ茂満さん。あなた方は良心的な値を提示してくれています。しかしですな、ホント言うと我々はあなた方、黒峰会以外の別のルートでもヤクを購入する手段があるのですよ。ですがそのルートからヤクを買い付けると、その

品質が粗悪で中々、我々の利益につながらないのです。そこで今回のあなた方、黒峰会との取り引きが持ち上がって、高品質のヤクを手に入れられる手段を見いだしたといっても過言ではありません。だから正直に言いますとこれを契機に、今後、麻薬の買い付けは黒峰会の方に全面的に乗り換えようと思っているのです。ですからまず我々が今後あなた方と安全に末長く取り引きを続けられるような保障のようなものを私たちは欲しいのです。それは今回、あなた方が、私たちの言い値の四割引きで交渉を成立させて頂けるのなら、今後、我々は、あなた方を信用して引き続きヤクの取り引きを行う常連顧客になりたいのです。だからここは最初の取り引きとして、あなた方の私たち黄河会に対する誠意というようなものを見せて頂きたく思っています。ですからまずは手始めに、四割引きで交渉を成立されてもらってはいかがですか？ 今後のことを考えれば、決して損はないと思いますけどな・・・」

「・・・うーん？」

リーのその言葉を受けて、黒峰会の幹部、茂満は、固く腕組みをしてうなり声をもらっていた。

黄河会のリーが言いたかった事はこういう事だ。

黄河会は今日、黒峰会と麻薬の取り引きをするよりも以前に、別の闇ルートで麻薬を買い付けていたらしい。しかし今日を境に、麻薬の取り引きは今後一切黒峰会から買い付ける事にするというのだ。そこで売買ルートを変更するにあたり黄河会は、黒峰会にまず手始めに最初の取り引きは自分達の言い値でこの交渉を成立させようという目論みのようだった。

要するに今後、黄河会は黒峰会の提示する麻薬を買い付ける常連になるから、最初の取り引きは格安にしてもらいたいという事である。

今後の関係が、親密になるための誠意を見せろ、と・・・

だからそれを聞いた茂満は、少々不服な顔をしていたが、せっかくこれから黄河会が麻薬取り引きの常連になってくれるのであるから、それを無下に断れないという状況にもなって来ていた。

黒峰会としても、手持ちのヤクを大々的にさばいて利益を得たいと思っている以上、黄河会は恰好の顧客となる事だろう。

億単位のブツを買い取る顧客は、そう中々いるものではない。

そうである以上、今日の取り引きは黒峰会にとって何が何でも成功させたいのは山々の取り引きであった。

その為、それを思いながら茂満は、まだ唸りながら考えに没頭している様だ。

だがしばらくすると、その考えに結論が出たのか、次にこのような事を言って苦渋の選択をした。

「いやー、判りました。あなた方が今後、我々の顧客になって頂けるのならば、多少の損には目をつむりましょう。ここはあなた方が言うように原価の四割引きで手を打つことにしましょう。これは私どもとしましても苦渋の決断ですが、長い目で見れば我々の利益にもつながりますからな。これを機に、今後ともうちをご贖いにして頂ければ幸いです。我ら黒峰会とあなた方、黄河会が、良きパートナーになれば良いですな。期待していますよ・・・」

茂満はそう言うと、豪快な笑いをたててリーを見据えていた。
それを受けてリーも、満面の笑みをこぼす。
だが、そんなところへ、なんの予告もなしに慌ただしく一人の男が室内に飛び込んでくる。
それは黒のスーツを着た、黒峰会のメンバーの一人であった。
そして開口一番、次のようなことを口走っていた。
「茂満さん！ ま、まずいです！ サツ、いいえ多分、特務・・・特務機関が急襲を仕掛けて来ました。今、店の店内に乱入して、ショットガンで武装し、すぐにこの場所にも乗り込んで来るでしょう。おそらく我々の取り引きを嗅ぎ付けて、摘発に来たのかも知れません。早く逃げないと大変な事になりますよ！！」
「なに？！ それは本当か！？ 特務機関が乗り込んで来たんだ！？ これはマズい、今日の取り引きは中止だ！ 逃げるぞ、田端、カバンを持て！」
その時、一人の部下の報告を受けて、茂満はひどくあわてていた。
しかし、慌てていたのは茂満だけではない。
黒峰会のメンバーや黄河会のリーもその時、青い顔をして椅子を蹴倒して立ち上がった。
よもや今回の麻薬取り引きの現場に、特務機関が乗り込んで来るとは誰も思わなかった為である。
その為、その室内は、一時パニックになっていた。
特務機関がこの室内に乗り込んで来るまでに、逃走の経路を確保しようと躍起になっていたからである。

ここで時間は一分前にさかのぼる。
都内三軒茶屋の一角にある高閣楼という中華料理店に急襲を仕掛けた特務機関の面々は、その店内に乱入すると、まず佐渡が店の従業員やその場に居合わせた支配人らしき男に書状を突き付けて、次のような言葉を発していた。
「我々は、特務機関の者だ！ 今日この店で、麻薬取り引きが行われるという情報を我々は掴んだ。そこでこれからこの店で、麻薬取締法違反の摘発を行う。この書状は警視庁から委託された今回の摘発に関する法務省からの許可証だ。それを我々特務機関が代行して今回摘発に乗り出した。だからお前たち、そこを動かずじっとしている。今から店の奥を確認させてもらうからな！！」
そこまで言うと佐渡は、第一班の隊員に店の奥へ乗り込むように指示を出していた。
今は八時前という時間帯もあり、店内には夕食をとり訪れた客が満席に近く各テーブルの席について食事を堪能している姿が目についた。
その客達は、武装した特務機関が店内に入ってくると、早くもざわめきたて始めていたが、佐渡をはじめ他の隊員たちはそれを無視する。
そんな事よりも、摘発を完了させるのが先決だ。
隊員は、店の中を見渡して、その間取りを確認する。
それで判ったことが一つある。

それは、店の奥へと通じる出入り口は、二つあるという事だ。
 それを確認すると、第一班の隊員たちは、左の出入り口へ殺到していた。
 それに続き第二班、第三班は右の出入り口を選択し、店の奥へと向かっていた。
 第一班が選んだ左の店の奥へ通じる通路は、比較的長かった。
 どうやら二つ以上は部屋があるという事を、それが如実に物語っている。
 彼らはまず最初に発見した扉を蹴破り、その室内に踏み込んでいた。
 しかし誰もいない。
 仕方がないので、更に通路を進んで突き当たりを右に折れていた。
 するとその通路の先に、男たちが銃を持って構えている姿が目飛び込んで来ていた。
 バーン・・・バーン
 立て続けに二発の銃音がとどろく。
 黒いスーツを着込んだ男たちが、いきなり拳銃を発砲したのだ。
 それに呼応して銃撃戦が始まりを迎える。
 第一班の隊員は、突然、銃を発砲してきた黒いスーツの男たちに、ショットガンをお見舞いしていた。それは牽制の為だ、相手の出鼻を挫いて、突撃を仕掛けるつもりである。
 だが、男たちの銃撃は止まない。
 彼らはどうやら逃げ場を失い、奥の一室に立てこもっている様子だ。
 外への出入り口、つまり店の裏口は、今、第一班がいる通路の左にある。
 その為、黒峰会と黄河会のメンバーは裏口から外へと逃げ出すタイミングを見失ってしまったようだった。
 バーン、バーン、バーン・・・
 また立て続けに発砲音が鳴り響く。
 男たちは奥の一室から身を乗り出すと、特務隊員に向かって鉛の弾をお見舞いしていた。

だがその頃、ナオやゆかりの第二班、第三班は、高閣楼店内から右の通路を奥まで進むと、その突き当たりの場所で一つの鉄の扉を発見していた。

それは古く錆び付いた、今はほとんど使われていないであろうと思われる鉄の扉であった。

それを目の前にして先頭に立っていたナオが躊躇する。
 (こちらの通路はハズレであったか?)

やはり第一班が向かった通路でなければ、麻薬取り引きのおこなわれている一室には行けないのではないかと思ったその時、その鉄の扉ごしに中にいると思われる人の声が響いて来ていた。

それは一人の男が、何やら怒声を張り上げて、わめいているような声だった。
 どうやらこの扉の向こうに、黒峰会と黄河会がいて、その時ナオは直感していた。
 ナオはそう思うと、その扉のノブを回して引いてみる。
 しかし鍵がかかっているようで扉は開かなかった。
 そこでナオは扉の鍵穴に向かって銃を発砲し、無理矢理ロックを解除していた。

そしてその後、三人係でその鉄の扉をこじ開ける。
しかしその甲斐あってか、鉄の扉はギィという重苦しい軋みをあげて開かれていた。
だが、扉をあけてみたのはいいがその直後、目の前には埃をかぶった数々の段ボールが山積みになってナオ達の進路を絶ち阻んでいた。

「まったく邪魔な段ボールね！」

その時ナオは、苛立たしげに段ボールを蹴飛ばす。

すると、ドサ、ドサ、ドサという音を立てて段ボールの壁が崩壊する。

そして次の瞬間、現れた光景は、数人の男たちがナオたち第二班と第三班の隊員に向けて、銃を構えている姿であった。

バーン・・・バーン

いきなり発砲音が室内に響く。

「ヴッ・・・」

それを受けてその直後、小さなうめき声をあげて一人の隊員が床に蹲る。

ゆかりだ。

彼女は床に手を突くと、次には左手で胸元を押さえて苦しそうに荒い息をしていた。

「ゆかり、どうしたの！？ まさか・・・撃たれたの?!」

その時ナオはある意味、動揺を示していた。

どうやら先程の発砲で、その弾がゆかりの胸に命中したらしかった。

それを察するとナオは、直ぐ様ゆかりを抱き寄せて開かれた扉の横の壁ぎわに退避し、彼女に呼び掛けをおこなっていた。

「ゆかり！ ゆかり！ 大丈夫？ しっかりして・・・」

ナオに揺すられるゆかりの顔は蒼白であった。

だが、

「だ・・・大丈夫よ・ナオ・・・私も、一応、防弾チョッキ着ているから、体には貫通していないわ。そんなに心配しないで・・・」

だがして、ゆかりの少し息苦しそうなお返しが返って来ていた。

「それよりもナオ、早く奴らを捕まえなさい。ここで取り逃がしたらせっかくのチャンスが台無しよ。私の事はいいから早く突入しなさい。もたもたしていると他の隊員に後れをとるわよ・・・」

そう言うとゆかりは、ナオに気丈にも笑ってみせていた。

「本当に大丈夫なのね？ 判ったわ。それじゃ私は黒峰会を捕まえてくるから、ここで待ってなさい、動いちゃ駄目よ！」

ゆかりとナオのそんな会話が交わされていた中、他の第二班と第三班の隊員は先ほど開かれた鉄の扉ごしに構えて、中の連中と銃撃を交えていた。

だが、そこへナオも参戦してくる。

「高橋くん、それに遠藤さん、私が意を決して中へ突入するから、その援護をして。銃撃が一時止んだら飛び込むわ！」

「おいちょっと待ってくれ、一人で突入するのは危険だよ。相手は銃を持っているんだ。弾切れになるまで待った方が良く、でないと君も撃たれるぞ・・・」

そう言葉を発していたのは、高橋と呼ばれた隊員であった。

彼はナオを見据えると、『正気か?!』とでも言いたげな表情をして驚いている。

それに同調するように、遠藤と呼ばれた隊員も渋い顔をしていた。

「大丈夫よ、見たところ銃を持っているのは三人しかいないわ、速攻で決着を付けるから援護して・・・」

そう言うとナオは、いきなり何の前触れもなく飛び出して、突入を開始してしまっていた。

それを見た高橋と遠藤は、慌てて援護射撃を黒峰会と黄河会の連中がいる室内に向けて行っていた。その直後、他の隊員も勇気をふりしぼって怒涛のごとく室内に乱入していく。

ナオが室内に飛び込むと、一人の男がいきなり発砲してくる。

しかし、その弾はナオにあらず、壁にぶち当たって四散していた。

後方からは、仲間の隊員の援護射撃がつづく。

それを受けて黒峰会と黄河会のメンバーは壁ぎわの角に退避し、頭を抱えている様子だった。

その隙にナオは、銃を持っている三人の男を目測する。

すると、それと同時に素早い動作でその三人に狙いを付けると、立て続けに五発の銃弾をお見舞いしていた。

その直後、ナオの銃から放たれた弾丸は、もの見事にその三人の男の足にヒットしていた。

それは一瞬の出来事だ。

次の瞬間には、銃を持った三人は、その場に即倒していた。

「・・・・・・・・」

一時その室内はしんと静まり返る。

だがナオは、その静寂を破るかのように、次のような言葉を言い放っていた。

「さあ、これであなた達のお遊びの時間は終わりよ。私は特務機関・特務一課、第二班の高崎ナオよ！ もう観念してお縄に付きなさい。もう逃げ道はないわ!!」

そのナオの透き通るような声は、黒峰会ならびに黄河会の麻薬取り引きの現場の一室に、否応なく高々とした声となって、まるで勝利を宣言するかのように響いていた。

第四節

パトカーのサイレンが慌ただしく鳴り響いて来ていた。

中華料理店、高閣楼の周囲には、所轄の警察車輛や警視庁の覆面車輛が通りを占拠するように乗り付けられている。

特務機関の隊員が高閣楼店内に突入を開始して、あれから二十分が過ぎようとしていた。

今現在は、警視庁麻薬取り締まり官と、応援部隊の警官等で麻薬取り引きの現場の実地調査が行われている最中であった。

摘発が適切な法に基づいて正当に行われたか確認する為だ。

それと同時に、店の外には、病院の救急車輦が数台呼ばれてある。

その車輦の中に、二階堂ゆかりとナオの姿があった。

「ゆかり大丈夫なの？ 痛いところがあったら我慢せずに言うのよ。見せてみなさいあなたの胸、しかし相変わらず小さい胸ね、豊胸手術したほうが良いんじゃない？」

ゆかりを相手にして、馬鹿なことを口走っていたのは、ナオだった。

彼女は、当初ゆかりが銃撃を受けて倒れこんだ事を心配して、落ち着かない様子だったが、ゆかりが駆け付けた救急隊の検査を受けて何の異常もないと診断されたのを聞いてから、大分安心していた様子だった。

ゆかりの胸には銃弾の跡とおぼしき小指の先ぐらの痣が残っただけで、事なきを得ていた。

やはり、服の下に、防弾チョッキを着込んでいたのが、幸いであっただけ。

その為、今現在は、ナオが付き添いで、救急車輦の中で大事をとって休んでいるところだ。

「何、馬鹿な事言っているのよ、それより捕まえた黒峰会と黄河会のメンバーの処置はどうなったの？ 今日中に、警視庁の方で、取り調べが行われるのかしら？」

「それなら心配ないわ。適切な対処として足を撃ちぬいた男たちはともかく、両組織の代表幹部らしき男たちとそれ以外のメンバーは、ついさっき麻薬取り締まり官と一緒に警視庁の方へ護送されていったわ。課長の言っていた話だと、警視庁に護送され到着する早々取り調べが始まるそうよ。まさに一網打尽でとこね、私の活躍をあなたに見せてあげたかったわ」

ナオが高閣楼の麻薬取り引き現場の室内に突入を仕掛けたその後、その裏の建物内で商談の話し合いをしていた黒峰会と黄河会のメンバー一同は、特務機関の摘発によりあっけなく全員が逮捕されていた。

逮捕時、黒峰会の幹部、茂満という男は、末端価格にして一億五千万円相当の麻薬の現物が詰まったケースを抱え持っており、そのまま麻薬取締法違反の容疑で現行犯逮捕されていた。彼が抱え持っていた覚醒剤が動かぬ証拠となったからである。

「でもあなたってドジね。あんな何の訓練も受けていない黒峰会のメンバーが撃った球に胸を撃ちぬかれるなんて、不注意にも程があるわよ。幸い防弾チョッキのおかげで命に別状はなかったけれど、危うく死ぬところだったわよ・・・」

「何よ、悪かったわねドジで！ 私だって突然の事で動揺していたのよ。まさかあの状況で相手がいきなり撃って来るとは思わなかったんだから、仕方ないでしょ」

「おうおう、二人とも元気な様子だな、ところで二階堂、撃たれた胸はもうなんともないのか？ 俺は心配したんだぞ、慎重派のお前が奴らに撃たれたと聞いたときは驚いたよ」

ナオとゆかりが少々いつものように言い合いを始めたその頃、そこへ二人のそばに姿を見せて現れていたのは課長の佐渡一であった。

「しかし撃たれたのがナオでなくて二階堂だとは、少々意外な気もするな。ナオは命令無視の常習犯だから、てっきりまた一人で突っ走って怪我でもするんじゃないのかと思っていたが、あまり心配を掛けるんじゃないぞ。今回、防弾チョッキの着用を義務付けておいて良かった。うちの隊員に歳若くして死なれては俺の立場がないからな・・・」

彼、佐渡一は多少苦笑いもまじえて、二階堂ゆかりやその隣にいるナオに向かって、そんな事を口走っていた。

「あら、課長は、私が無鉄砲の単細胞とでも言いたいのか？　今回も私の活躍で突入に成功したんだから誉めてくれてもいいんじゃないかしら？　上層部から特別勲章なんかをもらってもいいくらいに思うわ・・・」

ナオは佐渡の言葉を受けて、それに反発するかのように自分を自画自賛していた。

「そうか？　お前はそんな事言っているが、さっき高橋と遠藤に話を聞いたところによると、ナオお前は特務機関の規律に反して銃弾が飛びかう取り引きの現場の室内に単身突入をしたという事じゃないか。たとえそれが相手を捕まえる行為の為になしたことで、特務機関は各班のメンバー同士の密な連携で行動するように義務付けられているんだ。それを軽視して先走った単独行動にうって出るというのはどうかと思うぞ。お前の勇氣はまあ誉めておこう。しかし勲章など貰える訳ないだろう。特務機関の問題児には、また反省文でも書く事のほうが似合っていると思うがな・・・」

だが佐渡にそう言われて、ナオは少し不機嫌に彼の顔を睨み付けてやっていた。

もちろんナオは勲章など貰えるとは思っていなかったが、事あるごとに特務機関の問題児と評されることには、少々抵抗があったからだった。

だが佐渡もナオの扱いに慣れている為か、彼女に睨み付けられても知れっとした態度でそっぽを向き、その攻撃をやり過ごしていた。

その二人のやりとりを見て、二階堂ゆかりは、プッと吹き出して笑いをもらしてしまっていた。そして次のようなことを佐渡に質問している。

「ところで課長、我々はもう特務機関本部へ引き上げるのですか？　摘発も無事完了したことだし、もうやる事はないでしょう？」

「そうだな、あとは警視庁の麻薬取り締まり官と警官たちに任せるのが無難だろ。オレ達の役目は麻薬取り引きの現場に急襲を仕掛けて、黒峰会と黄河会のメンバー全員を捕らえることだったからな、だからそれが無事済めば、あとの事後処理は警察にバトンを渡して本部へ帰還するのが常套だろう。だからあと十分もしたら点呼を取って本部へ帰るぞ。お前たちもいつまでも二人してここに居ないで、他の隊員のところに戻っているよ。俺はこれから警視庁の責任者のところに行って先に引き上げるための挨拶をしてから、それまで待っている。大体五分後ぐらいに戻ってくるからな・・・」

その佐渡の言葉を聞いて、ゆかりはハイと言う返事をして承服していた。

しかしナオは、その言葉を受けても、飄々として知らんぷりをおし通し、可愛げなくお澄ましを決め込んでいた。

午後九時三十分、その時刻、特務機関・特務一課のデスクフロアーでは、事務処理担当員こと柏木モモが、椅子の背もたれに寄り掛かり背中を海老反りにしたまま腕をのぼ

し、グーンとした伸びをして欠伸をもらしていた。

「あーあ、ところで渡辺さん、一課の隊員はまだ現場から戻ってこないんですかね？ 私待ちくたびれてもう気抜けしてしまいましたよ。早くナオ先輩、帰ってこないかなー」

モモが話し掛けたのは、彼女同様、事務処理兼電話番担当の渡辺良子という古株の隊員であった。

彼女は特務機関という組織がまだ正式に機能する前のテスト設営時代からこの特務一課につめていた隊員で、みんなからは「おつぼね様」と呼ばれている女性だった。

今現在では、佐渡一課長の代理秘書官としての役割も担っている。

そんな彼女に、モモは心底仕事はもう飽きましたというような態度をとり、気やすく話し掛けている。

それを聞いて、渡辺という隊員は、苦笑いしながらモモの話題に応じていた。

「あらモモちゃん、もう仕事に飽きてしまったの？ でもまだ一課の隊員は戻ってこないわよ。だけどモモちゃんは、相変わらず高崎さんの事が気になっているのね？ あなた達って本当に仲のいい姉妹の様だから、ある意味、羨ましく思うわ」

渡辺良子という女性はそう言うと、またモモに対して笑ってみせていた。

「えー、そうなんですよ。あのナオで言う先輩は、一応、私のお姉さんみたいな人なんですよね。ちょっと性格に問題ありって感じの人だけど、なぜだか気になってしまうんですよこれが、一体どうしてでしょう？」

「そう？ でもそれは高崎さんに、何かしらの魅力があるからじゃないかしら？ 彼女は無口でちょっと気が短いところがあるけれど、何となく硬質で純粋な透き通るような感性を持っていると思うわ。だからそんなところにあなたも惹かれているんじゃないの？ 彼女ああ見えて、女の私から見ても扇情的な魅力を醸し出している様な女性ですよのね……」

「えー、渡辺さんて、それって本気で言っているんですか？ あの男っ気のまったくないナオ先輩に、そんな魅力があると思います？ だって彼女一生結婚できそうにない素質じゅうぶんのそんな人ですよ。きっとあの人はお婆さんになっても独身で貫き通す、恋愛感覚まったくなしの女ですよきっと……」

そう言うと柏木モモは、ナオがその場に居ない事をいいことに、好き勝手なことを口走っていた。

だが、

「誰が一生結婚できないですってモモ、陰で私の悪口を言わないで欲しいわ。そんな事言っていると、あなたの口に焼き鳥五本詰め込むわよ……！」

とそんな時、突然、何の前触れもなく特務一課のデスクフロアーに、ナオが姿を現していた。

「あー、やだ、ナオ先輩いつの間にそこにいたんですか？ しかしずいぶんと早く帰ってきましたね。私待っていたんですよここでずーっと」

モモはナオの姿を見付けると、極端に甘い声をだし、彼女に飛び付いて来ていた。

そして猫のように擦り寄ると、子供のような態度でナオの腕に頬摺りを始める。

「ああ、ちょっとやめなさいよ。私の腕に擦り寄ってこないで、気持ち悪いでしょ」

そんな中、ナオは、モモのその行為に鳥肌をたたせて拒絶の姿勢を見せていた。

どうやらナオは、モモのその子供じみた行為に、癡々している様子だった。

しかし二人がそんな事をしていると、その後から続々と他の隊員や二階堂ゆかりが特務一課のデスクフロアーに姿を見せ始める。

「あら嫌だモモったら、またナオに甘えているの？ まったくいつまでたってもお子様なのね。これはやっぱり二人とも女同士で結婚でもしたほうがいいんじゃない？ かなり良い夫婦関係が築かれるかもしれないわよ・・・」

ゆかりは特務一課のデスクフロアーに入って来る早々、ナオとモモのいちゃつく光景を見て開口一番そんな事を言っていた。

「なんですか、ゆかり先輩。私とナオ先輩の関係を羨んでいるんですか？ ヘヘー、私たち仲がいいでしょう。やっぱり甘えるのはナオ先輩が一番いいのよね。こんな風な事も出来るんですよ」

そう言うとモモは、突然ナオの両胸を服の上から鷲掴みにして、揉みしだき始めていた。

「ちょっと何するのよ馬鹿！！ ああ、私の胸に触らないで！」

モモがナオの胸を揉みしだく中、ナオはそのモモの頭を平手打ちで、びしゃり、びしゃりと叩いて拒絶の姿勢を見せていた。

するとゆかりが二人に白い目を向けて、次のような言葉を口走っていた。

「あなた達・・・もしかして・・・レズ？」

しかし、その光景を見ていた他の男性隊員などは、そのゆかりの言葉にゴクリと生唾を飲み込んでいる。

彼らにしてみれば、ナオとモモがいちゃつく光景は、目の毒となったようであった。

だがその時、特務一課の課長佐渡一が、みなが集うデスクフロアーに現れて、先程からいちゃつくナオとモモを見ていい咎めていた。

「おう、お前等、何やっているんだ。相変わらず仲がいいのは良い事だが、ちょっと急な話があるから一度自分の席についてくれ。簡単な話だが、一応、特務一課の全員に報せておきたいからな・・・」

そう言うと佐渡は、自分のデスクについてフロアー内に集った隊員たちにむけて、次のようなことを語っていた。

「いいかみんな、急な話だが、先程、高閣楼に急襲を仕掛けて黄河会と黒峰会のメンバーを一網打尽にした訳だが、そのメンバーの中に居た二人の首領格的役割をしていた男たちの顔が、いま警視庁のほうから連絡があり早くも割れたそうさ。一人は黄河会の代表幹部、リー・チェンサイという男だ。この男は黄河会の六人委員会という上層部のメンバーの一人で、組織の間では「禿頭の虎」と呼ばれる大物幹部だった。今回、我々はその大物を捕らえた訳だが、問題となるのは次のもう一人の男のほうだ。その男とは黒峰会の幹部構成員、茂満十次郎という男らしい。警察の調べた情報によると、この茂満十次郎という男は、皆は知らないと思うが七年前の警視庁高崎耕助警視殺害の重要参考人手配者、勅使河原洋二の逃亡を手助けし、その容疑者を長い間かくまっていたという疑いのある男であったらしい。その為、彼、茂満十次郎という男は勅使河原洋二という警官殺しの容疑者の行方を知る超重要参考人として位置付けられたらしい。そこでだ、今回、警視庁の刑事部の面々は、高崎警視殺害事件の容疑者を逮捕するために、捜査本部

を新たに発足することに決めたらしい。高崎警視殺害事件は、七年前に発生して今現在ではその捜査の手が中々進まずほとんどお蔵入りしていた事件だ。だが茂満十次郎という男の逮捕で事態が急展開したようだ。そこでその茂満十次郎という男の供述次第では、今後、特務機関が高崎警視殺害事件の容疑者と目される勅使河原洋二の、再捜査に参加するかもしれないという状況が出てきている。もちろんこれは今後の茂満の取り調べしだいという事だが、その可能性があるという事だけを前もって皆に報せておこうと思い今話をしたという訳だ。皆判ったか？」

佐渡一課長は、そこまで言うと言をつぐんでいた。

そして横目でナオの顔に覗いを立ててくる。

だがその時、突然ゆかりが驚いたように、次のような質問をしだしてきていた。

「課長、それは本当のことなんですか？ 今日、捕まえた黒峰会のメンバーに、あの高崎警視殺害の事件の容疑者の行方を知るという超重要参考人がいたって？」

課長の話がおわって皆がそれに納得している中、ゆかりはそれが信じられないといった表情で佐渡に聞き返す。

「ああ、それは本当のことだ。警視庁が調べた情報だから、まず間違いはないだろう」

佐渡はそういうと、真面目な表情をして肯いていた。

しかしそこへ、ナオが口を挟んでくる。

「課長、それじゃ、特務機関は勅使河原洋二の再捜査に、なんらかの形で参加するかもしれないのね？」

ナオは少しいきりたって、食い付くように佐渡に問いたです。

「そうだなオ、しかしこれはあくまで可能性だ。必要性がない場合は、警視庁だけの単独捜査になるだろう。だがここで一つ注意しておくぞ、ナオ、七年前殺された高崎警視がお前の親父さんだということはオレもよく知っている。だがな、もし特務機関が勅使河原洋二の捜査に参加することになっても決して一人で突っ走るような事はするなよ。オレはお前が親父さんの仇を討とうとして、また軽率なことをしでかすんじゃないかと心配しているんだ。だからくれぐれも気をつけるようにしておくぞ。これはお前の為でもあるんだからな……」

「判っているわよ……」

その佐渡の言葉を聞いて、またナオは不機嫌に顔をそらしてそっぽを向いてしまっていた。

しかしその反面、彼女は、嬉しさを隠し切れないのか、口元を押さえてププッと笑いだしてしまっていた。

どうやらナオとしてみれば、父親を殺したかもしれない勅使河原洋二の消息を示す手がかりが思わぬところから転がり込んで来て、祝勝会でもあげたい気分であるらしい。

だが、そんなナオの態度を見て、佐渡一課長も苦笑いを隠し切れないでいた。

第五節

十二月二十三日、午後十一時二十分・・・ナオは今現在、二十四時間営業の百円ショップ《ワン・オー・オー》の店の店内に来ていた。店内の所狭しと並べられた商品を、均一すべて百円という安価な値段で売りだしている店だ。そこで今ナオはある品選別に没頭している。それは、明日はなんといってもクリスマス・イブ、ある意味、年に一度のお祭りの日、その為にナオのアパートの部屋にそれにふさわしい飾り付けをするために、数々あるクリスマスグッズの中から装飾品を選んで、めばしい物を捜し出しているところだ。

今はクリスマス・イブを明日に控え、クリスマス商戦は佳境を迎えている時期、この百円ショップもそれにもれず例外ではなく、クリスマスグッズは店内に山と陳列されていた。

「ねえナオ先輩、ナオ先輩、これなんかどうです？ これすごく可愛いと思いませんか？ 私これ気に入っちゃった、買っちゃおうかしら？」

ナオが真剣な顔をして部屋の飾り付けの装飾品を選んでいると、そこへ柏木モモが唐突に現れて一つの商品を彼女の目の前に突き付けて来ていた。

それはクリスマスツリーを模した小さなキャンドルである。

モモはそれをナオに見せると、子供のようにはしゃいで一人で喜んでいる。

だがそこへ二階堂ゆかりも、百円ショップのある品を手を持って、ナオのそばに現れる。

「ねえナオ、これなんかどう？ 明日ケーキを食べるときに使うお皿、こっちの紙のやつがいい？ それともこのプラスチックのやつ？」

そういうとゆかりは、モモ同様、ナオの目の前にその二つの品を提示して見せていた。「私は紙のやつの方が良いと思うわ。どうせ使い捨てになるんだから、プラスチックの皿だと後の扱いに困るわ・・・」

ナオはそれだけ言うと、また、品選びを始めてしまっている。

彼女たち三人は今なぜこの百円ショップにいるのかというと、明日ナオのアパートの部屋で急遽モモの提案で、ささやかなクリスマスパーティーを開こうとしているためだ。

今日はもう夜の十一時過ぎであるという時間帯にもかかわらず、三人は特務機関本部からの帰宅の途中この店に足を運んでいるという具合であった。

ゆかりと柏木モモの二人は、今日ナオのアパートに泊まり込んで明日のクリスマス・イブの為の準備をするつもりなのだ。

彼氏のいないこの三人にとっては、それがお互いの交友を深めるささやかなあるイベントだといってもいい。

その為、少しでも明日のイブの日を盛り上げる準備に、余念はないのだ。

それから三十分後、部屋の飾り付けに必要なクリスマスグッズも買い込み、三人はご機嫌の様子でナオのアパートへと向かっていた。

先程の百円ショップから、ナオのアパートは、すぐ近くに位置している。

ナオとゆかり、モモの三人は、アパートに到着すると、まず部屋の電気とコタツを点けてさっそく上がり込んでいた。

今現在、時間は十二時三分前だ。

普通の場合なら、すでに就寝していなければ明日の仕事にさしつかえるだろう。

しかし、今日の高閣楼における摘発の任務が、定時をこえて夜になるまで及んだため、明日は午前十時までに特務機関の方へ出勤していればいい事になっている。

明日は大体、十時半から通常の勤務が開始される予定なのだ。

だから今日は多少、夜更かしをしてもさして支障はない。

まあ、深夜の三時ぐらいまでには、部屋の飾り付けを終えて眠りにつけばちょうど良かった。

三人はナオの部屋に到着すると、しばらくコタツで暖を取ってから、部屋の飾り付けをおもむろに始めていた。

だが、飾り付けをおこなうといっても、そう大仰な事ではない。

ただキラキラ光る長い飾りを、四五本部屋の壁に張り巡らせるだけだ。

百円ショップで購入しただけあって、金をあまりかけずにクリスマス・イブを祝う、それが三人の経済観念が一致した目論みである。

だから飾り付けは、約二十分もすると、ほぼ簡単に終わってしまっていた。

その後ナオとゆかり、モモの三人は、深夜テレビを見ながら何気なくありふれた時間を過ごす。

今は、ナオが台所に立って紅茶を三人分、煎れて来てくれていたので、それを飲みながらコタツで他愛もない話にうつつをぬかしていた。

「しかしナオ先輩、本当、今回はラッキーでしたよね。まさか今日、逮捕した黒峰会のメンバーの中に、あのナオ先輩が捜している勅使河原洋二の重要参考人がいるなんて意外でしたね？ 私は課長の話聞いたとき、びっくりしてしまいましたよ。でもこれでお父さんの高崎警視を殺した犯人を捕まえるというナオ先輩の彼岸に、また一步近付いたといってもいいですねー？ これは何だか神懸かり的な感じがしますよ……」

そんな折り、モモが唐突にある話に話題をふっていた。

それはナオの父、高崎耕助に関する話題であった。

「でもホントそうね。黒峰会と深い関係にあった米川を追って、まさかこんなに早く勅使河原洋二の再捜査に辿り着くなんて、ある意味、奇跡だわ。これはなにか運命的な事態といってもいいかもしれないわね。ナオが早くお父さんを殺したかもしれない犯人を捕まえて、敵討ちすることを神様が手助けしているように思えるわ」

モモの話聞いて、紅茶を美味そうに飲んでいたゆかりも、それに同調してそんな事を口走っていた。

「だけどまだ二人とも気が早いわよ。まだ特務機関が勅使河原洋二の再捜査に参加するのは正式に決まっていないし、それに茂満十次郎の取り調べも深く進んでいない状況だわ。」

だから今後の状況次第よ・・・」

「あらナオ、あなたは今回、意外に慎重なのね。たしかに今後の取り調べ如何によるかもしれないけれど、多少は喜んでいいんじゃない？　こんなチャンス滅多に巡って来ないわよ」

「確かにそうね。でもホント言うと、出来れば今回の件は私一人で決着を付けたいのが正直なところなの、警視庁や特務機関の力を借りずにね・・・」

ナオはそう言うと、意味不明な笑いを一頻りもらしていた。

しかし、それを聞いたモモが驚きを示す。

「えーっ、ナオ先輩、それじゃ、今回の件を単独で解決つけようとも言うんですか？

それは無理ですよ。現に勅使河原洋二って言う男の所在を知っているであろう茂満十次郎は、警視庁で拘束されているんですから、どうやってその情報を引き出すんですか？

そんな事できるわけないでしょう」

モモはナオがあまりにも突飛なことを言うので、そう言って否定の姿勢を見せる。

「そんな事、判っているわ。だから出来ればの事って言ったでしょ。私もそんな事できる訳ないと思っているわよ。なるべくならそうしたいのが山々なのは確かだけどね・・・」

「なんだ私びっくりしちゃいましたよ。まさかナオ先輩は警視庁に乗り込んで茂満十次郎という男を拉致し、どこかに監禁して、勅使河原洋二の所在を吐かせるんじゃないかと思っちゃいました。やだなもう、脅かさなくて下さい」

それを聞いてモモは安心していた。

高崎ナオのことだから何をやりだすか判らないと思ったが、どうやら彼女も馬鹿ではないらしい。だがモモはナオの気持ちも判らないではない。

たった一人の父の命を奪ったヤツに、自ら引導を渡したいと思うのは正直理解できるのだ。

自分も三年前、姉を病気で亡くしてから、ひどく落ち込んだ事がある。

いつも一緒にいた身内が亡くなるということは、辛い事なのだ。

だから、モモには、ナオの気持ちに同情する事ができる。

境遇は違えど、なにか共通する部分が、二人にはあるように思うからだった。

しかし、ナオは、特務機関の隊員だ、小さな規律はともかくとして、警視庁や特務機関の大規模な規律を逸脱した行為にうって出るのはいかにもマズい。

その点から考えると、やはり、通常の規則に則って、勅使河原洋二の捜査に参加できればそれだけでも儲け物といっていいはず。

だから一人で何でも解決をつけるというやり方は、ある意味、ナオの我が侏であるのだ。

「でもナオの気持ちも判るけど、特務機関が勅使河原洋二の捜査に参加できればこれでも十分あなたのお父さんの敵討ちになると思うわよ。だからナオ、あなた変な気は起こさないでね」

そんな中、そう言っていたのはゆかりであった。

彼女もナオの気持ちは判らないでもない、しかし単独で捜査するというのは特務機関の隊員としては如何にも個人の権限を逸脱しているような気がする。

だからゆかりにはナオに、そう言うしか他にいい言葉が思いつかなかった。

大規模な組織の中で活動している以上、一個人の力には限界というものがあるのだ。
しかしナオはそれを聞いて、自分なりに納得している様子だった。
彼女はそれ以降、モモとゆかりに反発の態度も示さず、笑顔をたたえてけろっとして
いた。

どうやら勅使河原を、どうしても一人で捕らえて解決をつけるという事に、それ程こ
だわりは持っていない様子だった。

それでモモとゆかりも、ある意味、納得を示す。

ナオが単独行動にうって出ない限り、安心出来るのだ。

だが、そんなこんなでナオ、ゆかり、モモの三人がそんな事を話していると、時間は
もう既に次の日の午前二時四十分にさしかかっていた。

もう、この頃合いは、就寝の時刻だ。

いくら明日が遅出であっても、今頃の時刻に就寝しなければさすがにマズい。

そこで三人はもう話も切り上げ、床に着く事になっていた。

しかし床に着くといってもナオはともかく、モモとゆかりの二人は、また、ナオに毛
布を二枚借りてコタツで寝るのだ。

コタツで寝ると、体が痛くなるが、文句は言えない。

ゆかりとモモは、もう、そんな事は慣れっ子だ。

事あるごとにナオのアパートを訪れて、そこで一夜を明かす事は今日に限ったことで
はない。

だから座布団を枕がわりにし、コタツに横になった頃には、ゆかりとモモはすぐ眠り
についてしまっていた。

どこでも寝られるという事は、ある意味、二人の特技になりつつある。

そんな二人を見てナオも、その日は、ベットの暖かい布団の中で眠りに就いていた。

そして、二十四日の朝を迎えるのである。

第五章 潜入捜査・開始

第一節

武装誘拐、武装強盗、武装テロ、特殊闇裏取引、等の犯罪が起きなければ、ある意味、特務機関の仕事などは暇な一日を過ごすことになる。

その暇な時間にやる事といえば、大抵、訓練かパトロールであった。

今日、十二月二十四日現在、昨日の麻薬取り引き現場の摘発の興奮も冷め、いたって平凡な一日が始まりを迎えていた。

特務機関の建物の裏にあるガランとしたただ広いグラウンドでは、今現在、十時二十分から始まりを迎えた特務訓練が、訓練官の指導のもと慌ただしく行われていた。

しかし、特務訓練といっても、今日は、体の慣らし程度の基礎体力訓練であった。

腕立て伏せに、腹筋、ストレッチ運動とそれにランニング、そしてその後、昨日の高閣楼における急襲の反省会もかねて軽い模擬訓練が行われていた。

模擬訓練とは、実際に現場の状況を再現し、シミュレーションして行われる訓練のことである。グラウンドには、建物を模した箱が並べられ、その箱を壁に見立てて銃撃戦の際どうやって身を隠しながら突入していくかの再確認が行われている。

特務機関は軍隊ではないが、こういった訓練は欠かせない。

都内では、凶悪犯罪が多発する中、銃を使った犯行が極端に増加の傾向にあるからだ。

銃が犯罪者たちの手にわたるのは、その裏で大規模な銃の横流しが行われている為である。

しかし、警察や特務機関といえど、それ等の違法行為を中々撲滅できないでいる。

犯罪者たちは、社会の裏に隠れ狡猾に立ち回るため、ある意味、そういった横流しの実態は闇に包まれている部分が多いからだ。

だが、少しでもそれらの犯罪を摘発する努力は、忘れてはしない。

努力を怠れば、たちまち巷は犯罪者の闊歩する無法の街になることだろう。

特務機関・特務一課の訓練はその後、早々と十二時には終了し、昼食になっていた。

ナオやゆかりも訓練を終えて一汗流し、建物内の女性隊員用シャワールームで流れ出た汗を落としているところであった。

それが終わると、さっそく昼食に入る。

ナオとゆかりは当たり前のようにモモを誘うと、食堂に向かっていた。

食堂ではまた、おしゃべりの柏木モモがくだらない話をして、ナオとゆかりに頻りに話し掛け話題は絶えなかった。

モモの話は、くだらないが面白い。

特務一課のある隊員が、最近、彼女にふられたあの、佐渡課長は、絶対、夫婦仲が悪いのだと、取るにたらない世間話を中心である。

しかし、それにゆかりは一々頷き、時には笑ったり、冗談を言ったりして談笑している。

だが、ナオは、あまりその話を聞いていない。

彼女にとって世間話は、いまいち興味の対象にはならないからだ。

ナオの興味は今のところ、家に帰って近くのビデオレンタルショップでB級ものの映画を借りてきて、ただ漠然と映画鑑賞するだけが唯一の楽しみだ。

それ以外に、これといって趣味はない。

ある意味、つまらない女といってしまうえばそれまでだが、ナオの無趣味を知っているモモに、この前、自分と同じようにりかちゃん人形のコレクションを始めてみたらとすすめられたが、それを渋い顔をして辞退していた。

いい歳して、りかちゃん人形はないだろう、とナオにはそう思えたからだ。

しかし、そんなナオに反して、ゆかりは多趣味だ。彼女は器用なので、手芸や編み物、それに意外にもガンダムのプラモデルを組み立てるのが唯一の楽しみらしい。

それに、一番の趣味はパソコンだ。

ゆかりは家に帰ると大概の場合、ノートブックのパソコンを弄っている。

今現在では、自分のホームページを開設しようと、参考書を片手に奮闘しているという話だった。

その他にも、ゆかりは、写真が趣味でもあった。

休みの日になると、どこかにふらっと出掛けて、ちょっとした風景写真や街角の情緒あふれる写真などを撮影してきて、それをコンピュータのなかに入れて画像編集もしているという。

ナオからして見れば、よくもまあそれだけ興味が湧いてくるものだと、ある意味、呆れるが、ゆかりは多趣味の方が人生にとって有意義である、と主張しているらしい。

確かに、そう言われてみれば、そんな気がしないでもない。

だが、ナオは、あまり考えることはしないタイプだ。

別に頭が悪い訳ではない、小学校の時などはそれなりに成績もよく、優等生の部類にいた事もある。しかし、興味がわいてこない以上、頭を使う場面もないのは確かであった。

そんな事で、三人は食事も終わり、食堂を後にしていた。

これからは、午後の職務を全うしなければならない。

しかし、今日のような場合、職務といってもどうせ街のパトロールに繰り出されるだけだ。

パトロールは警察の方でもしている職務であるが、特務機関の場合、都内の道路事情を実地でよく把握するための訓練も兼ねてそれを行っている。

都内の道路事情は複雑だ、道を知っておかなければ、特務機関員として恥ずかしいことでもある。

ナオ、ゆかり、モモの三人が昼食を終え、特務一課のデスクフロアに戻ってくると、案の定、ナオとゆかりには佐渡の方から都内のパトロールが言い渡されていた。

もちろん二人だけではない、他にも数名そのパトロールに参加する。

ナオは、パトロールが、嫌いではなかった。

都内の道路を走るのには、ある意味、気分転換にもなる。

別にスピード狂であるという訳ではないのだが、特務マシンのオートバイクにまたがり街中を疾走するのは、爽快さが感じられるから好きととってもいい。

たまにいやな気分の際は、パトロールに出るほうが気分が晴れるのだ。

だからナオは、佐渡にそれを命じられても、文句一つ言わずゆかりと共にマシンの置いてある地下駐車場へと向かっているところであった。

ナオは駐車場へ来て特務機関専用の特注で製造された特務マシン、RH-2000にまたがると、エンジンをおもむろにかけアイドルリングの調子を確認していた。クラッチを入れずに前輪のブレーキをかけ、空ぶかししてタコメーターの回転数も確認する。どうやらマシンの調子は良いようだ。

彼女の横では、今、ゆかりも同種のマシーンに跨がり、準備を調べているところであった。

そしてエンジンが温まったのを確認すると、二人はそれぞれ特務機関の駐車場を後にしていた。

巡回パトロールのコースは、大抵決まっている。

しかし、時たま隊員の自己判断で脇道にも逸れたりするので、ほとんどの場合、決められたコースは辿らない。

ナオなどがパトロールをする場合、よく裏道を通ったりする。

その為、コースどりは、メチャクチャだ。

だが、裏通りを走っていると、時たま、ちょっとした事件に遭遇する場合もあるのだ。人目に付かない通りは、ある意味、犯罪の発生率が高い。

主要な表通りと比べても、七八割の確率で、何かしらの事件が起きる可能性がある。

だからナオが裏道を通るのも、無駄ではないといえる。

今日のナオとゆかりの巡回コースは、都内の西地区、新宿方面第五十三エリア一帯が管轄だ。

二人は特務機関本部から三宅坂内堀通りを北西に向かい、そこから左に折れ、新宿通りを西に進んでいく。

その通りは新宿駅近くへと抜けており、そこへ到着すると、その辺一帯の街並みを網羅してパトロールを開始するのである。

先頭はナオ、その後にゆかりがつづく。

新宿方面の第五十三エリアといっても、その範囲は広い。

この街は、どこでも同じようだが、駅周辺が主に発展している。

人の集まる場所を重点的にパトロールするのは、一つの常識だ。

ナオとゆかりは、新宿駅付近で二手に分かれると、その周辺一帯を巡回すると決めていた。

ナオは駅の東側に位置する方面を、ゆかりはその西、のっぽビルが無数に立ち並ぶ西

新宿方面を担当する。

この巡回パトロールは、ただ特務機関の威勢を一般の人々に示す役割が殆どといっていい。

一般の人々が特務機関の車輛を見れば、街の安全は固く守られていると思えるだろう。

それに、巡回をすると防犯対策にもなるので、犯罪の発生率はいくらかだか下がるのも確かだ。特務機関が暇なときに行われる巡回パトロールといっても、まったく意味がないわけじゃない。だがそんな中、ナオは、新宿駅の東側一帯をマシンの速度を極力落として巡回に専念していた。

相変わらず街中というのは、車の通りが激しい。

機械技術が発達して、今や日本に限らず世界中で車が走っていることを考えると、少しゾッとしないでもない。

ナオは、環境問題には興味がないが、これだけの車が走り排気ガスを撒き散らしている以上、地球温暖化が危険視されてもおかしくはないと思ったりする。

何でも地球温暖化がこのまま進と、北極の氷が溶けだして海面の水位が上昇するとも言うではないか。そして、それに付随する形で、他にも様々な問題が発生するという。

ある意味これは、大問題かもしれない。

しかしナオは、そんなことを柄にもなく考えながら目の前の道路を何気なく右折すると、その通りの先である種の人だかりが出来ているのを発見していた。

(一体何?)

それをナオは怪訝に思い、その人だかりが出来ている付近までバイクを走らせ、路肩に停車して降りてみる。すると、そこでは人だかりに囲まれて、一人の女性が先程から苦しそうに路上に座り込んで、呻きに似た声をもらして喘いでる様子が目に映った。だが、ナオがその女性をよく見ると、彼女はお腹がパンパンに膨れていた。服装を見ると、マタニティードレスを着ている。

それを見ると一目瞭然、その女性は妊婦だと判った。

まさか、貧血かなにかで路上に倒れたのか?

そう思うとナオは、少し驚きながらその人だかりを掻き分けて、その妊婦に駆け寄っていた。

そして、声をかける。

「あなた大丈夫?! 私は特務機関の者よ。一体こんなところでどうしたの? 苦しいのは判るけど、事情を説明して!」

ナオはそう言うと、その妊婦の肩に手を回して支えてやっていた。

「う・産まれるの・救急車・救急車を早く呼んで・」

その妊婦は、ナオの顔を見ると、苦しそうな声でやっとそう言う。

「産まれる?」

しかしその時、ナオはまだ、その状況をよく理解できず、少し間抜けにぼかんとしていた。

だが次の瞬間、ハッとになって慌てたように、その妊婦に問いただす。

「産まれるって、もしかして子供が生まれるの?!」

「そうです・もう赤ちゃんの頭が半分出ているの。早く救急車を呼んでください。グーっ」

ナオの問い掛けを受けて、妊婦は、苦しそうにうめき声をもらすと、再び救急車を呼んでくれるように催促をしていた。

「わ・・・判ったわ。それじゃ少し待って。今すぐ電話して救急車に来てもらうから」

ナオはそう言うと、少し慌てて胸元から携帯電話をとり出すと、速攻で119番のダイヤルを押していた。

電話が数秒経って繋がると、即座に今いる場所の現在地を述べて、救急車の出動を要請していた。

そして、電話を切る。

電話の相手側の話によると、救急車は五分ぐらいで、ここに着くと言っていた。

それまでの間、この妊婦を勇気づけてあげなければなるまい。

ナオはそう思うと、立て膝をついてその妊婦のそばに屈み込むと、彼女の顔を見据えてこう言っていた。

「さあ大丈夫よ、今、救急車を呼んだから、もうすぐ来ると思うわ。だからそれまで頑張るね」

妊婦はその言葉を聞くと、苦しみなながらもウンと頷いていた。

そしてナオの手を握り、また苦しそうに唸り出す。

「ぐ～、ぐ～、ぐ～、あう、ぐ～、ぐ～、ぐ～」

彼女は、一種、酸欠状態から新鮮な空気を求めるかのように激しく息を吸い込むと、お腹を押さえて蹲る。

だが、その時ナオは、それを見て少し困っていた。

彼女は救急隊ではないので、こういった状況に不慣れだ。

その為、このような時の場合どう対処していいのか判らず、かなり焦りの色を見せる。先程からその妊婦を取り巻いて人垣を作っていた通りすがりの人々も、この状況が一体どうなるのか心配している様子だった。

ナオは仕方がないので、その妊婦に話し掛ける。

そうすれば、妊婦の気が紛れると思ったからだ。

「あなた名前はなんて言うの？ 私はナオって言うの。苦しいのは判るけど、それを教えてくれない」

「私・・・私は、シカツメ・・・シカツメアキっていいです。でもナオさん？ 私もう我慢できません。ここで・・・ここで産んじゃいます・・・」

鹿津目アキと名乗った妊婦は、そう言うと、また苦しそうに息を激しく吸い込みだしていた。

「ええっ！！ ここで産むの！？ ちょっと待って、どうしても我慢できないの？」

その言葉を聞くと、ナオは、めずらしく極端に動揺を示していた。

「ああ・・・ああっ・・・もう駄目です。出てきちゃいました・・・」

しかし、その直後ナオは、意を決して動いていた。

彼女は人垣に集まる通行人に声をかけると、十人ぐらいの女性に協力を訴え、妊婦のまわりに目隠しの意味も兼ねた壁を作らせていた。

そしてナオは、屈み込んで、妊婦の股下を覗き込み、今状況がどうなっているかの確認を行っている。

それをして判ったことは、先ほどのアキという妊婦が言ったように、赤ちゃんの頭がもう既に妊婦のからだから半分出てきているという事であった。

しょうがないのでナオは、腕まくりをすると、妊婦の股下に手を差し伸べて赤ちゃんの頭に手を添えていた。

そしてこう言う。

「判ったわ、アキさん。私が赤ちゃんを受けとめてあげるから、我慢できないのならここで産んじやいなさい。さあ少し力んでみて・・・」

鹿津目アキはその直後、ナオの言葉に頷くと、いきなり力み始めていた。

「ぐ〜っ、ぐーっ」

その力む声とともに、赤ちゃんの体が徐々に徐々におし出されてくるのが、ナオの手に感じ取れていた。

「その調子よ、でもあまり力み過ぎず陣痛にあわせて・・・」

ナオはそう言うのと、赤ちゃんの頭に軽く手を添えて丁寧に取り出そうとしていた。

それに呼応するように、妊婦も再び力みだす。

「ほらあと少しよ、頑張って！」

しかしその後、何度かバタバタと慌てながら同じ動作を繰り返すと、ようやく赤ちゃんは妊婦のからだから完全に姿を現していた。

どうやら、お産は成功したようだ。

オギャー、オギャー、オギャー

ナオが生まれ出たばかりのその赤ちゃんを腕に抱えると、その子は堰を切ったように泣き声を立て始めていた。

「やったわよ、産まれたわ。ほら見てアキさん、あなたの子供よ！！」

ナオは、柄にもなく喜びを顕わにすると、その赤ん坊を抱えて鹿津目アキにかざして見せてあげる。そして、今その子の母親になった妊婦も、笑顔でナオの言葉に答えていた。

だがその時、通りの奥では救急車のサイレンが、慌ただしく聞こえだして来ている。

どうやらタイミングよく、救急隊がかけつけてきた様子だった。

これで、心配はないだろう。

ナオは、赤ちゃんを抱えながら不器用にあやしつけると、その顔ににっこりと笑顔をのぞかせて笑っていた。

それはまるで、自分の子供を抱く母親のように・・・

今日、十二月二十四日クリスマス・イブの夜、普通の人々であるのなら一体何をするだろう？

イブといえばキリストの生誕を祝う日の前夜祭だ。

欧米ではともかく、日本では二十五日のクリスマスよりもイブの日の夜が、一年を通して盛り上がる貴重な日でもあった。

恋人たちは肩を寄せあい、その日の夜を甘く囁くかもしれない。

ある者は、ロマンチズムを求めて都内に繰り出し、夜景を見たりもするだろう。

この日の夜、恋人同士は、海辺のホテルなどでロマンチックに一夜を過ごす。

だが、ここにそれとはまったく縁のない男日照りの三人が顔を合わせ、独自のイブを

過ごす計画を実行に移していた。

午後七時過ぎ、特務機関の仕事も終えたナオ、ゆかり、モモの三人は、今現在ナオのアパートで、クリスマスケーキを見据え、シャンパンのグラスを片手に乾杯の音頭を取っていた。

「「メリー・クリスマス！！」」

ナオ、ゆかり、モモの三人は、そう声を発すると、それぞれが手に持つシャンパングラスを打ち合わせ、その日のイブをささやかに祝っていた。

三人は、シャンパングラスを口につけ、その中の液体を飲み干す。

彼女たちが今飲んでいるシャンパンは、五百円ものの安物だ。

よくスーパーやコンビニで、店頭に並んでいる品である。

高級という言葉にはよほど縁遠いこの三人には、たとえ安物のシャンパンであっても、それはささやかなイブの日の夜を盛り上げるための、一つのアイテムであった。

今ナオのアパートの部屋の小さな電気ゴタツの上には、所狭しとクリスマスケーキや鳥のもも肉、そして出前の特上寿司が並んでいた。

これが今宵、ナオたち三人が食する料理である。

「さあ、さっそくお寿司食べましょう。今日は特別に奮発して金寿司の特上寿司ですものね。新鮮なうちに食べるのが、一番です。さあ二人とも、食べて、食べて・・・」

真ん中にゴタツを置き、ナオの見た目から見て左側の位置に腰掛けていた柏木モモが、先程から嬉しそうに声を張り上げると、ナオとゆかりに食事を勧めていた。

ちなみに、モモが言った金寿司とは、ナオのアパートの近所にあるお寿司屋さんの事だ。

今日はクリスマス・イブということもあり、三人は意見を一致させ、そこからお寿司の出前を頼んでいたのだ。

特上寿司であるため、少々値がはったが、今日は特別。

別に食うに困るほど三人は金欠状態ではないので、たまにはこういうのも良いと思っていた。

「あー、このマグロの握りおいしいですね。ナオ先輩も食べてみたら、舌にとろけるですよ。さすが大トロですね、さあ早く食べてみて」

ナオとゆかりがお寿司に箸をすすめる中、モモは一人騒いでナオにあれこれと指示を出していた。

「まったく、うるさいわね。少しは落ち着いて食べなさいよ！ 私は今マグロより、このイカが食べたいの、喧しく口を挟まないで頂戴・・・」

ナオは箸でイカの握りを指し示しながら、そう言って、モモに抗弁をたれていた。

だが、

「えーっ、ナオ先輩、マグロ嫌いなんですか？ それは魚の中の王様ですよ。食べないなら私が食べてあげますよ。こっちに頂戴」

そう言ってモモはナオのお寿司に箸をのぼす。

「あっ、駄目よモモ。これは私のお寿司よ、勝手に手を付けなさい！」

そんなモモにナオは、その手をびしゃりと叩いて、マグロの握りを防衛していた。

「な～んだ、ケチ。それくれてもいいじゃないですか。私のタマゴと交換しましょうよ」

「いやよ、これは私が食べるの。あなたは、自分のお寿司を食べなさい。人のお寿司に手を出さないで！」

そんなこんなで三人のクリスマス・イブは、滞りなく行われていた。

ナオの汚いアパートの一室でナオ、ゆかり、モモの三人は、特上寿司を美味そうに食べる。

しかし、これはこれで三人にとっては、イブの夜を有意義に過ごす、唯一の楽しみであった。

どうせ、ゆかりとモモは、家に帰ってもつまらないだけだ。

この二人は、ナオと異なり両親と同居している。

だが、何だかんだ言ってこの三人は仲がよく、いつも一緒にいる。

それは、ごくありふれた友人関係であるが、ある意味、微笑ましい関係のようにも思えた。

「でも今日は大変だったですね、ナオ先輩。パトロール中に産気づいた妊婦さんのお産の手伝いをしたんでしょ？　ねえねえ、その時どんな心境でした。さぞかし慌てたでしょ」

そんな折り、お寿司を早々と食べ終えたモモが、片手に烏龍茶を持ちながらナオに唐突に質問をして来ていた。

「そうね、確かに最初は慌てたけど、意外とお産は安産で、すぐに赤ちゃんを取り出すことが出来ていたわ。中々お目にかかれない、貴重な体験をしたといってもいいわね」

そう言うと、ナオは、一頻り苦笑いを浮かべていた。

ナオは、今日の午後二時三十分ごろ、新宿の街をパトロール中に、お産の現場に立ち合っていたのだった。

あの後、路上で産気づいていた鹿津目アキという女性は、ナオの助けのかいあり救急車で近くの病院に搬送されていた。救急車がナオたちがいる場所へ到着した頃には、もう既に赤ん坊は生まれてしまった後であったが、その後、病院ではしっかりとした処置が行われ、赤ちゃんは、無事、保育器の中に入れられたという。

しかし、その事をなぜナオが知っているのかというと、あの後、鹿津目アキという女性から特務機関の方にお礼の電話が掛かって来ていたからだ。

その鹿津目アキという女性は、律儀な人で、電話口に出たナオに頻りにお礼の言葉を述べると、その電話の最後に赤ちゃんの名前が決まったと告げていたのだった。

どうやら産まれて間もなくすると、旦那さんと二人で考えて、そう決めていたという事であった。その赤ちゃんは、女の子で、名前はマキと付けたらしい。

ナオもその時、それに喜び、おめでとうの言葉をおくっていたのだった。

「でもクリスマス・イブの日に生まれた赤ちゃんだなんて、ある意味おめでたいですよ。しかも街中の路上で産声を上げたんですもの、さぞかし赤ちゃんの家族はその事を忘れないと思いますよ」

「確かにそうよね、でもナオの言うように安産であったのだからよかったわね。母子ともに無事で何よりよ・・・」

その時、先程から黙っていたゆかりも、ナオとモモの話に参加してそう言っていた。

彼女は、最後に残されたウニの軍艦巻きを口に運ぶと、にこりと笑っている。

だが、ゆかりはナオの顔を見ると、一人でニヤニヤと意味ありげに伺いをたてて来て

いた。

そして、ナオに箸を突き付けて、次のようなことを言う。

「でも、ナオが赤ちゃんを取り出そうとして、慌てふためいている姿なんか見たかったわよね。だって、意外な光景に思えるもの。不器用なナオが助産婦さんみたいな事するなんて、ある意味、奇妙といってもいいわね。そう思わないモモ？」

「ええ、ええ、私もそう思います。ナオ先輩が赤ちゃんを抱いたりする姿なんて、想像しただけでも笑えそう。ちょっとした異色の取り合わせですものね」

モモはそう言うと、ケラケラと笑いをたてて、ナオを馬鹿にしたように指で指し示していた。

「そんなに、可笑しいかしら？」

それを受けて、ナオは、少々膨れっ面をして、その言葉に応じている。

そして三十分後、三人はお寿司もすっかり食べ終え、少しの間合いをおいてからケーキに蠟燭を立て、三人の合唱でクリスマスソングを唄いだしていた。

その光景は、まるで幼稚園のお遊戯会の様相を呈したが、三人とも楽しんでいる様子だった。

それが終わると後は、クリスマスケーキを切り分けて三人の皿に盛る。

ケーキの皿に使われたのは、昨日、百円ショップでゆかりが選んだ、紙製のソーサーだった。

三人はケーキを食べながらテレビをつけて、クリスマスの特別番組を見ている。

だが、そんな風な中で、今度はゆかりがおもむろに口を開き、ナオに話題をふっていた。

「ねえ、でもこの話、知ってる？ 昨日、捕まった茂満十次郎が、少しずつだけナオのお父さんを殺したかもしれない勅使河原洋二の事について、語りだしているって？」

「えっ？ それは本当なの？ それで、その男は、どこまで勅使河原の事を話したの？ 彼の居所を吐いたのかしら？」

ナオはその時、ゆかりの話に誘われ、そう問いただしていた。

「ええ、それがね、勅使河原の居所はまだ吐いていないようだけど、その彼を匿っていた事は認めたって言うことよ。何でも茂満はナオのお父さんの事件があったその後、勅使河原を海外に逃がし、日本から金を送金して約七年間逃亡を助けていたって言うことだわ。勅使河原洋二は茂満の部下で、今では準幹部の地位にまで登りつめているという事らしいわよ」

そこまで言うとゆかりは、烏龍茶で喉を潤していた。

「えー、それってもしかして、その勅使河原って言う男は、ナオ先輩のお父さんの高崎警視を殺したかって事で、ある意味、出世したって言うことなんですか？」

「さあ？ それは判らないけど、その可能性がありそうな事は確かね」

ゆかりは、そう言うと、ナオの顔を見ていた。

ナオはその話を聞いて、少し不機嫌な顔をしている。

どうやら父が殺された時の事を、思い出しているのかもしれない。

だが、それを察するとゆかりは、次にこんな事を言っていた。

「あ、そうそう、それとね、課長の話では、特務機関が今回、勅使河原洋二の捜査に参加

する可能性は、濃厚になって来ていると言っていたわ。警視庁の方から、そういった通達があったという事よ」

「へー、それじゃナオ先輩、喜ばしい事じゃないですか。まだ正式じゃないですけど、警視庁が特務機関に協力を要請しているのなら、ラッキーですよ」

モモはそれを聞くと、自分の事のように喜びを表していた。

しかし、

「でも、それは、まだあくまで可能性でしょう？ 正式にじゃなければ、意味がないわ。それに、茂満という男が、今後、勅使河原の事について話すかどうかも判らないんだから、喜ぶのは少し早すぎると思うわ」

そう言うとナオは、いつしかこぶしをきつく握り締めていた。

「確かにそうね、ナオの言うとおりの、まだ正式に決まった訳ではないのだから、喜ぶのはちょっと早計かもしれない。でも茂満は、私の予想では必ず勅使河原の所在を吐くと思うわ。これは私の勘なんだけれど、きっとそうなる筈よ……」

三人がケーキを口にしながらそんな話をしていると、時間も刻一刻と過ぎていた。

ナオとゆかり、モモはその後、雑談をするのにも飽き、いつしか無言のまま黙々とテレビを見るだけになっていた。

たとえクリスマス・イブだといっても、ケーキを食べてしまった後は、ある意味する事もなく暇であった。

だが、そうして三人で静かにテレビを見ているのも、ちょっとした楽しみであると言っている。この仲のいい三人にとっては、それでも交友を温められる一つの幸福の形であると言っても良いのだ。

そんなこんなで、その日の夜は、そうして更けていった。

今日もまた、ゆかりとモモは、ナオのアパートに泊まり込みとなる。

しかし、三人でお寿司を食べて、テレビを見て、ちょっとした話に盛り上がる一時は、彼女たちだけのクリスマス・イブに、ふさわしいささやかなある日常的一幕であったのは言うまでもない。

二十四日の夜を終え、また明日から仕事だ。

でもこの日のパーティーは、三人の気持ちに活力を与える、そんな精力剤になったかも知れない……

多分……

第二節

あの日からずっと数えて、五日が過ぎていた。

あの日とは、何時の事かって？

それは高閣楼という中華料理店で、黒峰会と黄河会の麻薬取り引きが行われたその日である。あれから、茂満十次郎の取り調べは難航を極めたが、五日経った今日のこの日、とうとう彼はその重い口を開き、勅使河原洋二の行方について語りだしていた。

取り調べを担当していた警視庁側は、茂満十次郎が観念して諦めるまで根気強く待ちつづけ、ようやくその成果を得たのであった。

茂満十次郎が語った、勅使河原洋二に関する供述内容はこうだ。

彼、勅使河原洋二は、闇の大規模組織黒峰会の擁護のもと、都内に潜伏し、そのかわらストリップ劇場の経営を手掛けて、組織の資金源を調達する仕事に就いているということだ。

そのストリップ劇場は合法的な店で、ごく普通の客が出入りするありふれた店であるということだった。

勅使河原洋二は、その店に頻繁に出入りし、彼の部下と共にくせくしてそこを切り盛りしているという。

茂満十次郎が七年前に発生した高崎耕助警視殺害事件の嫌疑者、勅使河原洋二の所在に関する内容を供述——その報せを受けて、警視庁上層部は小躍りしたのは言うまでもない。

高崎警視は警視庁にとって、とても重要なポストにいた優秀な警察官であった。

その当時、警視庁側の面々は高崎警視を亡くし、彼の通夜の席で涙を流しながら必ず勅使河原洋二を捕らえるという事を、心から誓ったことを覚えている。

勅使河原洋二の逮捕は、七年前からの警視庁上層部の彼岸でもあったと言えるのだ。

しかし、茂満十次郎の供述で、その彼岸が報われる時が訪れようとしていたのである。このチャンスを、みすみす逃す手はなかった。

そこで警視庁は、勅使河原洋二を逮捕するため、特務機関に正式に協力要請をすることにしていった。

「ええーっ、私たちだけで、潜入捜査を行うんですか!？」

静寂がおしつむ特務機関・特務一課のデスクフロアで、いま驚きを隠せずそう言葉を発していたのは二階堂ゆかりであった。

いま、彼女の目の前には課長の佐渡一が、右手に煙草を挟み、紫煙を燻らしながらこっちを向いている。その佐渡が吐き出す煙草の煙に、ゆかりは少し目をしばたかせながら、言葉を忘れたかのように一時呆然としていた。

「そうだ、今回の任務は、お前とナオでなければ出来ない任務なんだ。二階堂、お前はともかく、ナオをこの件に抜擢するのは、オレとしても少し迷うところがある。だが、ウチの課には不幸なことに、女性隊員は二階堂とナオしか居ないんだ。そこで今回、お前たち二人が潜入捜査に適任と思い、人選されたという訳だ」

その、ゆかりの驚く表情を見ながら、佐渡一は、一人真面目な顔をしてそう言っていた。

「でも、それは突然な話なんですね。よりもよってストリップ劇場の潜入捜査だなんて、私、何だか気乗りしませんよ。ちょっとその話には身の危険を感じますよ、実際・・・」
ゆかりはそんな佐渡に対し、少し不満の色を示し、口答える。

しかし、

「何を言っている、別にお前たちに、裸になって踊れといっている訳ではないんだぞ。今回の任務はな、パートの清掃係として店に潜入し、捜査に参加しろと言っているんだ。その点を勘違いするなよ。なあナオ、お前はと思う、この任務は重要な任務であるんだぞ」

佐渡は、そう言うと、ゆかりの誤解を解くように、そうまくしたてて来ていた。

今現在、なぜナオとゆかりの二人に、潜入捜査の話が持ち上がっているのかというと、それは今日の午後過ぎに警視庁の方から、勅使河原洋二の捜査に関する協力要請が特務機関の方に正式に出されていたからであった。

警視庁の方では、茂満十次郎の供述を受け、勅使河原洋二が頻繁に都内某所にあるストリップ劇場に出入りしているという事が判っていた。

そこで警視庁は、そのストリップ劇場を張り込むことに決めたいらしい。

だが、そこに一つの問題があがっていた。

警視庁側は勅使河原洋二を、高崎警視殺害の可能性のある犯人として追っている。

しかし、勅使河原洋二には、高崎警視を殺害したという明確な証拠がないのだ。

七年前当時、警視庁にはあるタレ込みがあった、それは高崎警視を殺したのは、勅使河原洋二であるという、匿名のタレ込みであった。

警視庁は、そのタレ込みをもとに捜査を進めていると、やはり勅使河原洋二という男が怪しいと改めて目星を付け始めていた。

高崎警視は警視庁から帰宅途中、何者かによって銃で撃たれ死亡していた。

しかしその当時、その時間帯が夜の時刻にもかかわらず、その射殺事件の目撃談はあいついでいたのだ。その目撃談を総合すると、やはりタレ込みにあったように勅使河原洋二という男が、背格好とも人相が適合するということで、彼は要重要注意人物として警察側にマークされていた。

しかし、彼、勅使河原洋二は、警察側にマークされてから少しの間すると、突然どこへともなく姿を消し、行方を晦ましてしまうのだ。

その時、警視庁側は、勅使河原が姿を晦ましたことにより、逃げたと確信していた。

だが、その後、警視庁は、勅使河原の行方を追ったが、結局、判らずじまいで今現在

に至り、今回、茂満の自供で彼の出没する場所がようやく判ったのである。

しかし、そこで重要になってくるのは、今回、彼がなんらかの形で犯罪に手を染めているという事を、証明しなければならないという事だ。

彼には、高崎警視を殺したという証拠がない以上、逮捕は出来ない。

たとえ無理矢理、逮捕しても、証拠がなければ犯罪を立証し起訴させるのは難しいのが現状なのだ。

そこでここは、勅使河原が、黒峰会の一員として他の犯罪に手を染めているということを証明して逮捕し、取り調べで余罪追及をしてから彼が七年前の高崎警視殺害に関与していたことを認めさせる方法を探るしかないのである。

つまり今回の潜入捜査は、その勅使河原の余罪を探るために、彼が出入りして経営しているというストリップ劇場に乗り込むという事なのだ。

そんな訳で、その担当任務が、特務機関・第一課に所属するナオとゆかりに任じられたのであった。

「でも課長、潜入捜査といっても乗り込むのは私とナオの二人だけなのですか？　他の隊員は、どうするのです」

だが、ゆかりは今現在、ふと疑問に思ったことを口に出していた。

「それに関してだが二階堂、お前とナオ、そしてもう一人、第五班の関谷にストリップ劇場の用務員として潜入してもらい、任務をすすめていきたいと思っている。その他の連中は別動支援だ。警視庁の捜査員とともに、お前たちをバックアップする。どうだそれならば心配はないだろう。運のいいことに、勅使河原が経営しているというそのストリップ劇場では、今現在、女のパートの清掃員二名と用務員を求人募集している。しかし、詳しい話については、これから警視庁側と会議を行うから、そこで話し合いをする事となるだろう。どうだナオ、なにか不満はあるか？」

そう言うと、佐渡は、またナオに質問していた。

すると、

「いいえ、別に私には不満なんかないわ。私も一応、特務隊員の一員ですもの、課長が潜入捜査をしろというのなら喜んでやるわ。これは任務ですものね」

だがすると、ナオから、意外にまともな答えが返ってきたので、佐渡はその時ナオの顔を見て余計心配そうに覗き込んで来ていた。

「ナオ、お前がまともな事言うなんて珍しいな。いいか、この任務は、潜入捜査なんだぞ。また、お前が命令無視して、一人好き勝手な行動をしたら、全てが台無しになる可能性があるんだ。その事は、判っているんだろうな？　オレはその事が心配なんだ」

「あら、課長は、私が信頼できないの、私だって、やる時はやるわ。課長は一応わたし達、特務一課の上司の立場なんだから、部下を信頼できないなんて少し問題ありよ。もっと、わたしを信頼して欲しいわ、そうじゃなくて？」

「ハハッ、確かにお前の言うとおりでな。よし判った、今回の件に関しては、お前を信頼しよう。さあ、これからは会議だ、今回の件に関係のないものは残して、みな会議室にいくぞ。すぐに準備しろ！！」

特務機関の建物の三階にある第三会議室、ここはよく警視庁との合同の捜査を行う際、決まって使われている一室であった。室内には視聴覚設備が完備され、プロジェクターを使ったスクリーンの投影も可能になっている。そこで今現在は、警視庁の面々と特務機関が顔をあわせて設けられた席に着席していた。

「えー、皆さんもご承知のように、今回の会議は、七年前に発生した高崎耕助警視殺害事件の再捜査に関して設けられた会議です。そこでまずは、その七年前のこの顛末からお話ししましょう」

会議室の前面に設けられた壇上で、いま言葉を発しているのは、警視庁の係官、松永節子であった。彼女は、手元に持参した参考書類に目を落としながら、アナウンサーのような澁みのない澄んだ声を発すると、一堂に会した両機関の面々に向かって、更に次の話を進めていた。

「えー、この七年前に発生した高崎耕助警視殺害事件に関しては、おそらくこの場に居合わせる方々の中には知らないという人も多くいらっしゃいますでしょう。そこで、まず始めに、高崎警視がいかにして殺害されたのか、という事をお話します。皆さんいいでしょうか？ 唐突ですが、高崎警視は当時、警視庁刑事部の人間を統率して闇組織、黒峰会の裏事情、つまりその組織の実態を暴くために力を注ぎ尽力していた人でした。黒峰会は東京の裏社会に君臨し闇で活動を続けていた組織です。彼らは数々の犯罪に手を染め、法の網を逃れて今現在でも大規模に活動を続けているといわれています。しかし、その組織の摘発に、いち早く乗り出そうとしていたのが高崎警視でした。彼は数少ない情報から、黒峰会にまつわる関連した事件を悉さに調査し、捜査員を動員して黒峰会の本部の所在を突き止めるために躍起になっていました。しかし、そこに不測の事態が生じたのです。それは黒峰会からの報復でした。七年前、高崎警視が黒峰会の捜査をすすめるなか、警視庁にある一通の警告状が届いたのです。その内容はこうでした。このまま警視庁が黒峰会の捜査を続けるのであれば、警視庁の人間を殺すというような内容です。当時、その警告状は、質の悪い悪戯と処理され、大して問題にされなかったのです。しかし、そこに高崎警視を狙った銃撃事件が、発生したという訳です。その銃撃で高崎警視は心臓に二発、腹部に一発の銃弾を受け殺害されました。彼は夜、警視庁から自宅へと帰宅の途中、何者かによって銃撃されたのです。その事件が発生し、その当時、警視庁は慌てました。警視庁はその報を受け、急ぎよ高崎警視殺害の容疑者を追うため捜査本部を設けました。そこで、重要な容疑者として顔があがったのが、勅使河原洋二なのです。彼、勅使河原洋二は、当時、黒峰会の構成員メンバーとして活動をしていた、若者と目されていました。警視庁が捜査をすすめるなか、彼、勅使河原洋二が黒峰会の命を受け、高崎警視を殺害したということが濃厚となっていたのです。そこで、その当時、我々は、勅使河原洋二を要注意人物としてマークしますが、彼は突如、姿を消し逃亡を図ったのです。そしてそれ以後、勅使河原の捜査はお蔵入りし、今現在に至るわけですが、五日前、警視庁麻薬取り締まり班と特務機関・特務一課の合同摘発により急ぎよ逮捕された茂満十次郎という男の自供で、事態が急展開しました。彼、茂満十次郎という男は、勅使河原洋二の逃亡を助けた黒峰会の幹部と目されており、その男が語った内容によると勅使河原洋二は、七年前、高崎警視殺害事件が発生すると、茂満の手引きで海外に逃亡していたようです。そして約七年間、そこでほとぼりが冷めるまで滞在を続け、

今現在では日本に帰還し東京に潜伏してまた黒峰会の準幹部として活動を続けているということが発覚しました。そこで、今回の今日ここで行われる会議は、その勅使河原洋二の再捜査に関する内容を話し合うために、発足された会議なのです。皆さん誰彼ともお分かり頂けたでしょうか？」

そこまで言うと警視庁の係官、松永節子は、言葉を区切り一呼吸の間、時間を置いていた。

しかし警視庁の刑事部の捜査員と特務機関の人間は、その話を聞き納得してうなずいている姿が見受けられていた。その話の顛末に、少なからず衝撃を受けている者もいるようだった。

その後も話はつづく。

「えー、そこです。今回、警視庁が勅使河原洋二の再捜査に乗り出した訳ですが、ここに重要な問題があるのです。それは、高崎警視殺害の容疑者と目されている勅使河原洋二には、彼が高崎警視を殺して殺害したという明確な証拠が、無いという事なのです。彼、勅使河原洋二が高崎警視殺害の容疑者として注目されたのは、当時、警視庁の方に匿名のタレ込みがあってからです。それから警視庁は勅使河原を要注意人物としてマークするわけですが、証拠がない以上、彼の身柄を拘束して逮捕、起訴させることは出来ないというのが、現状とっていいでしょう。ですが皆さん、ここで聞き下さい。我々警視庁としては、勅使河原洋二を高崎警視殺害の容疑で起訴させたいのは山々なのですが、証拠がない以上それは出来ません。しかし我々はそこで別の手を考えることにしました。それは特務機関に協力を願い、勅使河原洋二が経営しているというストリップ劇場に潜入して、彼の余罪を立証させ逮捕し、その後、茂満十次郎の口を割らせ、勅使河原に高崎耕助警視の殺害容疑も認めさせるという方法です。

皆さんもご承知のように、特務機関は政府の特権を受け潜入捜査という今現在の警察には合法的に認められていない捜査方針を実行に移せる立場にある機関です。その為、警視庁は今回、勅使河原の再捜査を行うにあたり、特務機関に協力を請い、今後の捜査を円滑に進めるために、上層部の人間と話し合った結果、それを実行に移すことを決めました。今回、特務機関にこの件に関する協力を願えば、七年前からの彼岸であった高崎警視殺害事件の犯人を捕まえられるという可能性が大になってきました。そこで、これから我々両機関は、その潜入捜査をどのように行い、両機関がどう連携して捜査を進めていけばいいのかを、これから話し合いたいと思います」

その後、その会議は、佳境には入っていた。

警視庁の係官、松永節子の話が終わると、また別の警察官が壇上にあがり話を進めていく。

そんな中で、特務機関・特務一課の責任者である佐渡一も会議室前面に設けられた壇上で話をし、今後の展開について密にいった話し合いがされていた。

そして、一通り説明や話し合いが進み、捜査方針が決定すると、その会議は二時間半後に終了して散会になっていた。

「でもナオ、今回の潜入捜査についてどう思う。結局、あなたが望んでいたように警視庁

が勅使河原の捜査を特務機関へ正式に協力依頼して来たことだし、これであなたも安心したでしょう？　しかも、私たちが、勅使河原が経営している、ストリップ劇場に潜入捜査するのよ。これははっきり言って、願ったり適ったりの事じゃない？　ナオが考えていたように、あなた自身の手で勅使河原に引導を渡すということに、一歩近付いたのだから、ある意味ラッキーよね」

今現在、ゆかりとナオは会議の終了後、やはり特務機関の二階にある売店の前で、ある一人の男を交えながら、今回の会議の話の内容に触れて、そんなことを言っていた。「しかしそうだね。ナオちゃんが父親である高崎警視殺害の容疑者、勅使河原の捜査に潜入部隊としてストリップ劇場に乗り込むなんて、これはある意味、運命の巡り合わせを感じるよ」

そう言葉を発していたのは、この前、米川の捜査でナオと共に合同捜査を行った、あの池沢元警部補であった。

彼が今なぜ、ナオとゆかりと共に、この特務機関内の売店の前に居るのかというと、それはこう言うことだった。

彼、池沢元警部補は、今回の勅使河原洋二の潜入捜査にやはり警視庁側の責任者として参加するため、先程の会議に出席していたのだった。

どうやらまた今度は、ストリップ劇場に張り込みをする刑事のまとめ役として、捜査主任に任じられたようであった。

彼は、ナオが今回ストリップ劇場に清掃員として潜入するという事を知ると、色々話がしたくて、今こうして売店の前でゆかりも交えて顔を突き合わせているといった具合なのだ。

「だけど元さん、私、今回のことに関しては少し不安があるのよね。また勅使河原がどこかへ姿を晦まし逃走するんじゃないかって思っているわ。だって彼の逃亡を助けていたという茂満が警視庁に拘束されているんですもの、茂満が捕まったということを知って身の危険を感じ、そういう行動にうって出たりするとは思わない？」

ナオは、池沢の言葉を聞きながらも、今の正直な気持ちを彼に打ち明けてみている。「うーむ、それはどうかな、言われてみればその可能性もないことはないと思うけど。これは聞いた話だが、勅使河原洋二は黒峰会の中でも準幹部の地位に登りつめていて店の経営を任されているという事だから、そう簡単にその地位を蹴ってどこかに姿を晦ますという事はないんじゃないかと、オレとしてはそう思うよ……」

池沢元警部補はナオの言葉を受け、少し眉を曇らせて確信のない表情をその顔にのぞかせながらも、今現在の率直な意見としてそう言っていた。

彼としてみれば、勅使河原が警視庁の再捜査本部発足の事実を知り、また逃げ出すとは正直思えなかった。勅使河原が高崎警視を殺害して逃げたのが本当であるのならば、彼としてもまた姿を晦まし、どこかに潜伏して身を隠した生活をするのはそれなりに覚悟があることの様思う。逃亡生活は神経をすり減らし、かなりその人間に、焦燥的な負担を掛けるからである。

それに、勅使河原は茂満の話によると、やっと準幹部の地位にまで登りつめ、これから黒峰会の一員として頭角を現し始めた頃だという。その点を考えると、ナオが心配している事は、それほど深刻では無いような事のように、池沢には思っていた。

「でも元さん、勅使河原は本当にナオのお父さんを殺した犯人なのかしら？ 結局、七年前はその証拠があげられず、今現在に至っているという事なんでしょ？ 捕まった黒峰会の幹部の茂満という男は、勅使河原がその時の殺害実行犯だと自供しているの？

その点が私としては疑問なのよね」

そう言っていたのは、ゆかりであった。

彼女は、ナオと池沢の話を知ると、自分も今現在、疑問に思っている事をこの場で打ち明けてみたのだ。

だが、それに関して池沢は、次にこんな事を言っている。

「それについてはオレにも判らないね。捕まった茂満は勅使河原の所在は吐いたが、彼が高崎警視を殺した犯人だとは直接的には言っていない。でもね、彼、茂満十次郎はまだ取り調べで全てを吐いてはいないような気がするんだ。これはオレの勘だけどね。だから、今後まだ茂満を取り調べて深く追求すれば、もし勅使河原を逮捕できた時点で、その点に関して自供するんじゃないかと思えるけど、まず焦らない方がいいと思うよ。でも、明日からオレたち警視庁の面々と特務機関で合同捜査が始まるんだ、お互い頑張りうじゃないか。細かい事はいまは考えずにね」

池沢元警部補はそう言うと、ナオとゆかりに、にっこりと笑いかけていた。

彼、池沢元警部補にしてみれば、また特務機関のナオとゆかりと共に一緒に仕事が出来ると思うと、それが嬉しい様で、その笑顔は絶えない。

特に彼としては昔恩師だった高崎警視の実の娘、ナオには思い入れが強く、今回、彼女が潜入捜査に抜擢された事を知ると、それが上手く行くように応援しているかの様だった。

「しかし元さん唐突だけど、ナオのお父さんて一体どんな人だったの？ ナオはこの手の話に関しては私に語ろうとしないから、その事が知りたいのよね。ナオのお父さんて優しい人だったの、それとも怖い人であった？」

それは池沢にとって、本当に唐突な質問であった。

どうやらゆかりは、ナオの親父さんの事に関して興味があるらしく、少し目を輝かしながら池沢にそんな事を聞いて来ていた。

池沢はそれを受けると、少し考えてからこう言っていた。

「高崎警視はね、昔のオレから見ただけじゃ、とても厳しい人だったよ。厳しいといってもそれは自分自身に対してだけだね・・・彼は、いつも自分を自制して行動することを心がけていたらしく、はたから見ると至極堅い生真面目な感じのする人だったが、オレたち部下に接する時は、とても気さくで優しい人でもあったよ」

「へえー、そう？ それでその他には？」

「う～ん、そうだね。それに人望もかなりあったよ。彼は人付き合いもよく、それにオレたち部下の面倒見もよかったんだ。彼がまだ生きていた頃には、よく仕事の帰りに飲み屋に連れていってもらったことがあるしね。何かと部下の抱えている悩みの相談役などもかって出ていたから、みんなから慕われて尊敬されていたよ。これはナオちゃんがよく一番判っていると思うけど、家族に対してもそれは変わりなく夫婦仲はいつも円満だったようだよ。しかし今になっても思うけど、どうして七年前当時、高崎警視の殺害事件が無事に防げなかったのかと思うと今では悔やまれてならないね。あれは突然、降っ

て湧いた不測の事態とはいえ、もう少しなんとかならなかったらどうかと心底思うよ。七年前当時は、黒峰会と思われる組織から頻りに高崎警視を狙った犯行を仕掛けるという仄めかしの警告があった事は確かなんだ。しかしその時、警視庁は、その事の重大さをまだ強く認識できていなかったためか、何の対策もとらなかったことは事実だ。今も思うが、もう少し警視庁が事の重大さを認識していれば、高崎警視の殺害事件は未然に防げたとオレは思っているんだよ」

池沢は、そこまで言うと、深い悲しみの表情をその顔に浮かべていた。

ゆかりに言われて高崎警視のことを話し始めたのはいいが、その当時のことを深く思い出して、少し感情が高ぶって来ているようにも思えた。

それだけ池沢警部補は、高崎警視のことを尊敬できる上司として慕っていたのだという事が、その時、ゆかりには直接垣間見えた様に思っていた。

「でも、それはしょうがないと思うわ。警視庁だってみすみす父を見殺しにした訳ではない筈だし、責めるべきは父を殺した犯罪者の方よ。だって黒峰会は、父がその組織の摘発に力を注いでいたから、それを恐れてそういった犯行にうって出て来たんでしょ？

それはある意味、警察の捜査を妨害する黒峰会の謀略だったんでしょけど、それに関して私は許せないわ。父を失って一番悲しんだのは、私の母ですもの、だから今回の潜入捜査はなんとしても成功させたい、それが今私の一番の望みよ」

だがその時、ささやかな怒りをかみ殺し、そう口を挟んで来たのはナオであった。

彼女は、ゆかりや池沢を見据える訳でもなくただ虚空を見つめると、手を少し強く握り締めて、そんな事を口走っていた。

ナオとしてみれば、以前、警察を責めたようなことを口走った事もあったが、本当のところは彼女が一番怒りを感じているのは、正直なところ黒峰会に対してなのだ。

そしてもちろん、父の高崎警視を殺したと思われる勅使河原洋二に対しても、たとえ様のない怒りを感じているのである。

だからそのナオの生々しい言葉を聞くと、池沢もゆかりも、それに有無を言わず納得するしかなかった。殺された高崎警視の身内としての立場にある彼女が、一番つらい状況を背負っているのであるからだ。

「確かにそうだね、ナオちゃんの言う通りだよ。警視庁の対応の甘さも問題であったけど、本当に責められるべきは黒峰会だからね。それに、その犯行を直接行ったであろう犯人にも言い逃れできない大きな責めがあるのが事実だ。だから今回の捜査が上手くいき、七年前の事件が解決できれば、その時、高崎警視の無念も晴れるような気がするよ。オレとしてはなんとしても今回の捜査を成功させたい。しかし、そうなると、潜入捜査を言い渡された君たちには、この七年前からの事件の行方を左右するかもしれない重要な任務を授かったんだ。これはある意味、失敗は許されないから頑張りなよ。オレも今回の捜査に加わる一員として、応援しているからね」

そう言うと池沢は、ナオとゆかりの肩をポンと元気づけるように軽くたたいていた。

するとそれに二人は応えて、軽くうなずき、笑顔をのぞかせていた。

「あっ、池沢警部補こんなところに居たんですか、オレそこら中、探しちゃいましたよ。一体こんなところで何をしているんですか？」

しかし、池沢とナオ、ゆかりの三人がそんな話をしていると、そんなところへ一人の

男が現れて、池沢元警部補に近付いて来ていた。

その男は警視庁の人間の様で、ナオたちがいる売店の前にまでくると、池沢警部補と特務機関の制服を着たナオとゆかりを見て、怪訝な表情を浮かべる。

どうやらこの三人の取り合わせに、少し奇異を感じている様子だった。

だが、それを受けて池沢が、次のようなことを言う。

「なんだ三井、オレになにか用なのか？　今ちょっとした話をしていたところだ、お前もここに来てコーヒーの一杯でも飲んでいったらどうだ。どうせ暇なんだろう？」

池沢はそう言うと、手持ちの冷めたコーヒーを一口飲み干していた。

しかし、

「なに馬鹿な事言っているんですか、警部補、そんな事、言っている場合じゃないでしょう。もう我々は警視庁本部へ引き上げて、明日から始まる捜査のためにもう一度警視庁の面々だけを集めて打ち合わせをするって言うておいたでしょう。だから、こんなところで油を売っていないで帰りましょう。上層部が警部補のことを探していましたよ」

三井と呼ばれた男は、そう言って池沢を逆に窘めていた。

「あっ？　そうだったな、それは悪かった。つい話に夢中になってすっかりその事を忘れていたよ。失敬、失敬・・・」

そう言うと池沢元警部補は、休憩所の長椅子から急いで重い腰をあげ立ちだしていた。「それじゃ、ナオちゃん、ゆかりちゃん、オレはこれでこの場をお暇するよ。二人と少しでも話が出来て楽しかったよ。それじゃまた明日だね、合同捜査で会おう」

そして池沢は、最後にそう捨て台詞を残すと、警視庁の若い刑事とともに売店の前を後にして、警視庁本部へと帰っていったのだった。

第三節

潜入捜査の開始、当日、その日はあいにくの曇天、今朝の天気予報を見ると午後から雨が降るといっていた。どうやら昼すぎは傘が必要となってくるだろう。傘を持って出掛けなかった人々は、コンビニで透明のビニール傘を購入する割合が増えるかもしれない。それは四百円位で買える、耐久性がなくすぐ折れてしまいそうな代物だ。しかし、コンビニとは、何かと便利な店だ。大抵、必需品となっていそうな品物は、店頭揃えてある。パンツ、それに靴下、カメラのフィルム、そして乾電池など色々だ。

だが今は、ナオとゆかりには、そんな事はなんの関係もない話であった。

彼女たちは、今、都内某所にあるストリップ劇場の一室にいる。

小中学校などの体育館で学校行事の際によく見かける折り畳みの簡素な椅子に腰掛け、二人はいま目の前に三人の男を拝して極力緊張を装い面接の真っ只中であつた。

二人は、横に長いテーブルを挟んで面接官の向かいにいる訳だが、いま面接に使われている一室には何故だか、後の壁のところには日本の日の丸と中国の国旗が左右に相對する格好で飾られていた。

そして、その中国の国旗の下には、やはり漢字のずらりと並んだ中国語で何か文章のようなものが書かれた額縁と、一人の中年の男の顔写真がのった額縁も二枚対になったような形で飾られている。

そして部屋の隅にあるサイドボードの上には、グロテスクなデザインを持つおそらく中国製の高価な花瓶と、船の模型、意味不明のヴァルキリーのプラモデルがささやかに置かれていた。

だが、そんな事はさておき、ナオとゆかりが、今、面接に臨んでいる訳は、昨日も言ったように勅使河原が経営するここストリップ劇場へ、パートの清掃員として潜入するためだ。

場所が場所だけに、面接希望者は幸いのことナオとゆかりの二人しかいない。

いかがわしいストリップ劇場のパートの清掃員を選ぶ人は、そうざらにはいないであろう。

だが今二人は、この合同面接に際して、三人の面接官に至極、疑いの目で見据えられていた。

一人はモデル張りの美人、もう一人はお嬢様風の才女にも見えるこのナオとゆかりの二人からは、何かこのストリップ劇場という場所には不釣り合いな育ちのいい風格のようなものが漂っていたからだ。

「ところで赤越リエさん、それに黒川昌代さん、君たちは本当にこのストリップ劇場のパートの清掃員として勤めたいというんだね。まさか二人して冷やかに来たわけじゃないだろ？」

そう言う一人の面接官が、二人に疑いの目で尋ねてくる。

赤越リエと呼ばれた女とはナオの事だ、そしてゆかりが黒川昌代、二人とも今回ここに潜入捜査に乗り込むにあたり、あらかじめ用意しておいた偽名を使っている。

当然、面接官に提出した履歴書も、全てが偽装だ。

だが、それをしても殆どバレる様なことはないだろう。

たかがパートの清掃員志望の二人の素性を疑って、どこかに問い合わせするような事はまずすまい。

しかし、この二人からは、職に困っているというような匂いもしなければ、まさかストリップ劇場で働くようないかがわしい風体も感じられない、至って健全な、女性の観しかしなかった。そこでこの二人が、冷やかし半分で面接に来たのではないか、と疑われたのだろう。

「あのう、冷やかしだなんてとんでもありません。私たちは、ここで仕事がしたくて今日、伺ったのです。いけなかったでしょうか？」

黒川昌代こと二階堂ゆかりが、少し阿呆な少女を装って答弁していた。

ナオとゆかりはこの面接に際して、二人は仲の良い友達であるという事を事前に申し出ている。だから、ゆかりが面接官に向かって私たちといったのは、もちろん赤越リエことナオのことである。

「別に、いけないという事はないよ。だけどね、見たところ、二人ともどこかの事務所に所属しているモデルか、お嬢様かなにかじゃないのかい？ そんな感じが、こちらとしてはするんだけどね。本当に、ここで働く気があるのかい？」

また一人の面接官が、ナオとゆかりにそんなことを言っていた。

だが、それに答えてナオは、次にこんな事を言っている。

「私たち、遊びすぎてリボで借金しちゃったの。だから、働いて収入を得ないと、困ったことになるわ。それに、前々からこんなストリップ劇場で働いてみたかったから、私たちをパートの清掃員として雇ってくださいませんか？ しっかり、働くことを約束しますから。今日からでも、さっそく働けますよ」

ナオは、ゆかり同様、極力馬鹿な女を装って、そう面接官に申し出る。

その後、やはり馬鹿丸出しの様に、にこりと一つ笑ってみせていた。

それを受けて面接官は腕組みをし、何か考え事をしているようにも見えた。

そして、しばらくすると、

「まあいいだろう、この際だから仕方がない。幸いほかに清掃員志望もいないことだし、今回は、君たち二人に決めることにしよう。だけど、これは仕事だからね、遊びじゃないんだよ、しっかりやってくれ給え」

そう言うと、赤越リエことナオと、黒川昌代ことゆかりの採用は、先程の疑いの目をよそに、ここで意外とあっけなく、決定していたのだった。

どうやら、阿呆と馬鹿、作戦が、功をそうしたのかもしれない。

午前十時二十分、面接を終えた赤越リエと黒川昌代は、真新しい清掃員の制服に着替えて、さっそく仕事を始めていた。

まずは、便所掃除からだ。

だが、さっそく仕事を始めたのはいいが、ナオとゆかりは身につけた清掃用の制服に違和感を感じつつ、先程から脚をかたくひき絞めてお尻の辺りをしきりに気にしていた。

股のした辺りがスースーする、それは何故か？

それは、今、着ているその清掃員の制服に、大分問題があったからだ。

ナオとゆかりの今着ている制服は、二人にとってそれは赤面させるほどの、破廉恥な服装だった。制服の色は赤、それも胸元の胸の谷間がこぼれてしまうような程、襟元の極端に開けたやつ。そして、パンツが完全に露出して見えてしまうほどの、ミニスカート。それから極付けは、ひらひらのフリルのついた、白いエプロンをつけているということだ。それに、やはりひらひらの模様がついた、太ももの半ば辺りまでの丈の、白いストッキングをはいている。それをスカートの下に身につけた、ガードルでつづいているのだ。

ナオは更衣室で着替えをする際、その格好をするのを、極端に嫌ったのは言うまでもない。

これではまるで、どっかの金持ちの屋敷に勤めるメイドのコスプレではないかと思っただが、しかしこれは任務なのだと自分にいい聞かせ、その恥ずかしい制服を意外とちゃっかり着こなしている。

だが、それは本人の思いをよそに、スタイルの良いナオにはしっかりと嫌らしいほど、よく似合っていた。

それにゆかりも同じく、半ば半ベそ状態で、その恥ずかしい格好を渋々している。まさかゆかりにしてみれば、当初、ここまでは計算には入れていなかった。たかがパートの清掃員である以上、地味な格好で仕事にあたるも当たり前だと思っていた。いや、そうだと思い込んでいた節がある。

が、そこが曲者、ここはストリップ劇場なのだ。

ある意味、客に見せるのが商売といってもいい場所だった。

だから清掃員の制服も、こんなパンツがスカートからはみ出るような格好なのだ、二人はこの恥ずかしい制服に着替えた後、無理矢理、納得するしかなかった。

ゆかりとしては、決してこのような格好を親には見せられないと、一人そう思う。それをしたら、必ず親が泣くだろう。

しかしそんな中、二人は、デッキブラシを頻りに動かしながら、便所の床のタイルをせっせと磨いていた。

この便所掃除が終わったら、店のなかの他の場所をまた掃除しなければならない。

二人が、佐渡から言い渡された任務は、清掃員の仕事を続けながら勅使河原がこの店に姿を見せるまで待ち、そしてその動向を探るという事であった。

ナオとゆかりの他には、今日、特務一課・第五班の関谷莞爾という隊員も、用務員としてここのストリップ劇場に、入り込んでいる筈であった。

彼も先ほど面接をパスし、今日から仕事に就いている筈だ。

しかし、彼の姿は、今は見かけられない。

どこで何をしているのかは判らなかったが、今は時を待つために、せっせと清掃の仕事に精を出すしかなかった。

ナオとゆかりの二人は、便所で、せっせとタイル磨きにいそしむ。

だが、そんな二人がいるところへ、そこへ突然、一人の男が現れる。

「おお君たち、赤越くんに黒川さんだったかな？ 二人とも、もうここの掃除はいいから、店内の掃除をしてくれ。あっちは、しばらく清掃員がいなかったこともあり、結構、汚れているんだ。でも店内には、もうお客さんが入っているから、邪魔しない程度に頼むよ」

その男は、三十代ぐらいの背の高い男で、先程の面接の際、三人いた男の中の一人の面接官だった。

彼は、ナオとゆかりにそう言い渡すと、二人のお尻の辺りをじろじろと窺い、満足そうに頷いて、徐に去って行ってしまっていた。

だが、その男の意味ありげな視線を察したゆかりは、その男の言葉にハイと返事をしながらも、彼がいなくなった後、ナオにこんな事を言っていた。

「まったく男って、なんて馬鹿な生きものなのかしら。こういう破廉恥な格好をしていると、じろじろとスケベな目で見て、まったく嫌らしいわね」

ゆかりは短いスカートを、しきりに下へ極力下げようと試みながら、ある意味、怒って憤慨している様子だった。

しかしナオは、それを受けても、短く、しかも素っ気なく答えただけだった。

「確かにそうね・・・」

ナオとゆかりは、先ほど男に言われた言葉を守って、店の店内に、足を踏み入っていた。

そこは天井が高い、吹き抜けのホールになっており、そのホールの正面奥には、踊り子用の広い舞台が設置されていた。

二人が店内に入って辺りを見渡すと、開演を待つ気の早い客の姿が、ちらほらとあちこちに見受けられ、皆、椅子に腰掛けていた。

しかし、ゆかりはその客の顔触れを見ながら、一人白い目で軽蔑したような態度を見せている。

彼女にしてみれば、女性が裸踊りをする姿を見にくる客は、全て変態だと思っているのかもしれない。

真面目なゆかりからすると、これが潜入捜査の大事な任務であるという事がなければ、こんなところにいる事は、真っ平御免であった。

このようないかがわしい場所は、健全な社会には不釣り合いの様な気もする。

警察もこんな店、さっさと取り締まればいいと、そんな風に思えるが、しかしこの店は合法的に経営を許されている以上、それは望めることはなかった。

聞いた話によると、開演は、十一時からだそうだ。

あと二十分もすれば、舞台が、始まりを迎えるらしい。

その間、ナオとゆかりは、広い舞台の雑巾がけを行っていた。

だが、雑巾がけをする二人に、そんな中、客の視線が集まる。

それは何故かという、ナオとゆかりが雑巾をかける為に四つんばいになると、もろにパンツが見えてしまうからだ。

その時、ゆかりは、耐え難い屈辱を感じていた。

もうお嫁にいけないかもしれない、と、本気でそう思ったりもする。

だがナオは、そんな男たちの視線を感じながらも、意外と平気な顔をしていた。

どうせ今はいるパンツは見せパンだと、うまく割り切っているからかもしれない。

しかし、それでもゆかりにとっては、大問題であったことは確かだ。

早く任務を終えて、こんな店とはおさらばしたい、それが彼女の本音であった。

舞台の雑巾がけも終わると、二人は、店の男性店員に呼ばれていた。

そこで、次の仕事が言い渡される。

だが、その言い付けられた仕事は、二人の予想に反するものだった。

赤越リエ（ナオ）と黒川昌代（ゆかり）に、客の給仕をしろというのだ。

二人は、清掃員のパートとしてこの店に来た。

それなのに、どうしてスケベな客の給仕をしなければならないのか、と、ゆかりは内心不満を膨らましたが、表立ってそれは顔に表さず、渋々それを受け入っていた。

仕事の内容は、ストリップの開演中、客に飲み物やおつまみを出す仕事だ。

どうやら、店の従業員の人手が、不足しているらしい。

もっと従業員を雇えばいいと、ゆかりなどは思ったりもしたが、文句ばかりも言ってはられない。これは任務だ、任務なんだと自分に対していい聞かせ、しきりに納得させる。

だが、そんなことを考えていると、いよいよストリップが開演を迎えていた。

なにが、いよいよなのかはこの際おいておくことにして、舞台と客席は一時暗やみに包まれて、その後、淡いピンク色の照明が点灯する。

すると、店内はエロチックな雰囲気が醸し出され、お色気むんむんの演出がなされていた。

客は、満員御礼といった方がいいだろう。

正面の舞台を取り巻くように、客席が設置され、それと同時に、テーブルも置かれている。

その席に、客はぎっしり詰め入っていた。

しかし、こんな真っ昼間から仕事もせずに裸踊りを見にくる客というのは、一体どんな生活をしている人たちなのだろうかと思える。

しかも、今は、十二月二十九日の年末にさしかかっている時期だ、何かと世間は忙しはずである。

だが、ここに集う客は、よほど暇なのか、それとも金持ちなのか、開演を待ちわびて期待をするかのように店内はしんと静まり返っていた。

開演と同時に、音楽がおもむろに鳴り響き出す。

すると、舞台の隅には、蝶ネクタイにタキシードを着た男がマイクを持って現れると、まず最初に、これから踊る踊り子の紹介がおこなわれていた。

『さあ、これからいよいよ、この店のストリップショーが始まります。期待をもってお待ちいただいたお客さまには、まず当店の若手踊り子「篠乃木あかね」ちゃんの踊りから、堪能して下さい。さあ、それでは音楽スタート！』

そのあいさつが終わると、いきなり別の音楽が鳴り響き出していた。

客席から口笛を吹き鳴らす音や、歓声が聞こえたかと思うと、その音楽にあわせて、舞台中央の緞帳から一人の女性が現れていた。

羽衣のような薄絹をまとい、長い素足をのぞかせたその踊り子は、スタイルも良く顔はまだ幼さを残すように可愛らしかった。

彼女が現れると同時に、再び歓声が高まる。

すると、それに呼応するかのように、篠乃木あかねという踊り子が踊り出す。

今かかっている音楽は、曲調の緩やかな甘い音楽だ。

その音楽にぴたりと合うように、からだをくねらせ、時にはしならせて、脚を大きくあげ、手を突き上げて踊るその様は、優美でしかも妖艶であった。

店内に集った客達は、その踊りを食い入るように見つめている。

そしてそんな中、次第次第に曲のテンポがあがると、その踊りもエスカレートしていく。

やがては羽衣の様な透ける衣裳を勿体ぶるように少しずつ脱いでいくと、乳房を顕わにし、やはり優美にからだをしならせて、更にその踊りに拍車を掛けていた。

その踊りにあわせて、嫌らしいように胸元が揺れ、客の男たちの目が釘づけになる。

だが、そんな男たちを尻目に見ながら、今ナオとゆかりは破廉恥な清掃員としての制服を着て、客席に注文されたカクテルやナッツをせっせと運ぶことにいそしんでいた。

(まったくこの男達って、なんて嫌らしい人種なのかしら?)

ゆかりは、横目で何の恥じらいもなく踊る踊り子の姿を見据えながら、内心そんなこ

とを思っていた。

店に来ている客層を見ると、大部分がもう既に結婚して所帯を持っていてもおかしくない顔触ればかりだ。

きっと子供や奥さんがいる者も、中にはいるだろう。

それなのに男というものは馬鹿な生きもので、このようないかがわしい場所で他の女の裸踊りにうつつを抜かしているのは、ゆかりにとってまったく理解出来ない習性のように感じられる。男ってスケベという煩惱の固まりね、と、つくづくそう言いたくなる。

だがそう思う反面、ゆかりは不思議なことに、ある意味、そのストリップショーには圧倒される感覚も受けていた。

若い女性が肌を顕わにしライトアップされて踊る様は、何故だか判らないが、女であるゆかりでさえ少し興奮してくる様にも感じられている。

ゆかりは、その踊りを見て興奮している自分を認めたくはなかったが、どうしても舞台に目を向けて、その踊り子の踊る様をチラチラと盗み見していたのは確かだ。

彼女にとって、ストリップショーを生で見るのは、これが初めてであるのだから仕方のない部分もある。

しかし、こう体が火照って、うずうずして来るのは一体どういう事なのか？

踊り子が、体をくねらせ裸で舞い踊る様を見ながらも、自分はそれに少し興味をそそられているのだと、ゆかりは認識せざるおえなかった。

だがストリップショーが始まって、次から次に踊り子が交代し五人目の踊り子が踊り始めた頃、ゆかりがそんなことを考えている中、あのナオが客席の一人の男と一悶着起こしている様子だった。

ストリップの踊りの音楽が大音量で店内に響く中、一人の客とナオの怒鳴り声が、ゆかりの耳にも聞こえてくる。

それにゆかりは驚き、仕事を放り出して、ナオの近くに近寄ってみる。

すると、こんな会話が聞こえて来た。

ナオ：「あなたねー、今、私のお尻触ったでしょ。ただじゃおかないわよ。金だしなさい、金、私はあなたみたいな中年男に、ただでお尻を触らせるほど安っぽい女じゃないわ、金だしなさいよ！！」

客：「いいじゃねーか、そんなパンツはいていて、そんな良い体してんだ。少しぐらい触ってもバチはあたらないだろ。そんな格好している以上、少しは触って欲しいと思っている筈だろ。俺はこの店の客なんだ少しぐらいサービスしてくれよ」

ナオ：「なんですって、このスケベ男！ 私はそんな気、さらさらしないわよ。ただで触っておいてそんな開き直るのなら、あなたを豚の餌にして養豚場に放り込むわよ・・・！！」

客：「なに？！ 俺を養豚場に放りこむだと？ もう一度いってみろ。お前、客に向かってその口の利き方はなんなんだ。この店のオーナーを呼べ、お前をこの店から辞めさせてやる！」

ナオ：「上等じゃない。辞めさせるもんなら辞めさせて見なさいよ。そんなことしたら、あなたを魚のたたきの様にして食ってやるわ。たぶん食えるほどの物じゃないけど、食べられなかったらやっぱり豚の餌にしてやるから、そのつもりでいなさい！！」

これはマズい！

あのナオと一人の客が、お尻を触った事で今現在、喧嘩している。

ゆかりはそれを聞き付けると、顔をしかめて困った表情を徐に浮かべていた。

せっかく今日、無難に面接をすませ、このストリップ劇場にパートの清掃員として潜入したのに、ここで問題を起こしたらこの任務が台無しになる。

それと同時に、ナオは、このままだと言い争いしている客を殴り倒さないとも限らない。

あのナオのことだ、一步間違えれば、そんな事、易々とやってのけるだろう。

また客を殴り倒した後、仁王立ちして「あなたは負け犬なのよ！」と威張りこける様がふと頭をよぎる。

それを思うとゆかりは、仕事も忘れて速攻で、その二人の仲裁に入っていた。

「ちょっと、ちょっと、リエここは喧嘩をする場所じゃないわよ。二人とも言い争いをするのはやめて。それにお客さま、まずは気を静めて下さい、他のお客さまの手前もありますから、ここはどうか穏便をお願いします」

ゆかりは慌てて、客とナオの二人の間に割って入ると、二人の顔を交互に見ながら頭を下げつつそう言っていた。

しかし、ナオと言い争っていた客は、その言葉には納得せず、次にこう言っていた。

「駄目だ、この店のオーナーを呼べ。どうしてもこの女を、この店から追いだしてやる！」

客は、ゆかりの言葉に余計憤慨すると、ナオに指を突き付けて怒鳴っていた。

しかし、それを聞いて、更にナオも怒りだす。

「貴方ね、いい歳こいてもう子供もいるんでしょう？ それなのに、こんな所に来て女の裸見てよだれ垂らしているんじゃないわよ。偉そうな事言っていると、私の足なめさせるわよ！」

「ななな・・なに?! このアマ、よくもそんな事が言えるな。お前はこの店の店員だろ、俺がここへ来てストリップを見ては、駄目だと言いたいのか？ お前みたいな女に指図される謂われはない。やっぱりオーナーを呼べ、このままじゃ腹の虫がおさまらん、お前をギャフンと言わせてやる!!」

その後、結局、客の怒りはおさまらず、ゆかりは仕方がないので店のオーナーではなかったが、その代わりにこの店の責任者になっている支配人の男を男性店員に頼んで呼んでもらうと、この喧嘩の決着を、つけてもらう事になっていた。

ゆかりとしても、そうはしたくなかったが、どうしても客は怒りの矛先をおさめず、ナオを睨み付け憤慨し続けていたからだ。

ストリップショーは、その後、何の問題もなく終了していた。

総勢十八人の踊り子が舞台に上がり、一人一人が大体六分程度の踊りを披露して、時間は約百十分間で閉幕となっている。

今は、店の店内には、客はいない。

先程ショーの終了と同時に、早々と帰って行っていったからだった。

しかしその後、あのナオと彼女のお尻を触った客の喧嘩はどうなったのかというと、ゆかりが呼んだ店の責任者によってうまく仲裁されていた。

客は、しきりにナオをこの店から辞めさせろと、その責任者にまくしたてたが、責任者となっている新見川という男性は、ストリップショーの入場料をただにするから許してくれと客に頼んで一件落着いていた。

客の男は、怒っていたわりには金に執着していた様で、このショーがただで見られると思うと得だと割り切った様子だった。

それで、その後は客も怒りの矛先を鎮め、ストリップショーを最後まで堪能し、帰っていったのであった。

だが、今ナオとゆかりは店の裏にある、ある一室に呼ばれ、さっそくお叱りを受けていた。

「まったく君たち困るよ、今日仕事を始めて早々こういったトラブルを起こしてもらっちゃ、ウチとしては商売あがったりなんだよね」

赤越リエ（ナオ）と黒川昌代（ゆかり）を前にしながら、今現在、黒いスーツの男、新見川が、少し渋い顔をしてそう言っていた。

「でも赤越くんだったっけ？ 君は少しぐらいお尻を触られたぐらいで怒るなんて、ちょっと短気すぎるんじゃないかね。この店では、多少そういった事はよくあることなんだ。それを我慢できないようじゃ、この先この店で仕事していくなんて出来ないと思うよ。その点に関してどう思っているんだい？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

その問い掛けを受けて、赤越リエは、黙ってそっぽを向いてしまっていた。

どうやらリエ（ナオ）は、いつものように、ふてくされている様子だ。

だが、それを見て悟った昌代（ゆかり）は、これはマズいと思い、横から助け船を出す。「あのですね、新見川さん。ナオ・・・じゃなかった、リエは、すごく反省していると思います。だから、今日のところは、許してやって下さい。今日は、突然、お尻を触られたんで少し混乱している様なんです。いつものリエなら、お尻ぐらい触られたって何とも思わない筈なんです。だから、この店の仕事を、辞めさせるような事はしないで下さい。どうか、お願いします」

昌代ことゆかりは、新見川という男にそう言うと、深々と頭を下げて、ナオの代わりに謝っていた。

（まったく、ナオったら、世話がやけるんだから・・・）

ゆかりは頭を下げる反面、ナオに対して、そう悪態をつく。

いつもナオの尻拭いをするのは、自分のような気がしていたからだ。

しかしそれを見た新見川は、その後、意外にもこんなことを言っていた。

「いやね黒川くん、私はべつに、赤越くんを辞めさせようとは思っていないよ。君たちにも、色々事情があると思うからね。何せ、今日仕事に就いたばかりだ、なにかこの店のルールも判らない事もあるだろう。だから今後、気をつけてくれればそれでかまわない。君たちは上物・・・い、いやいや、この店の新人だからね。だから、それさえ判れば、もう下がっていいよ。引き続き、今日の仕事を続けてくれ給え」

新見川はそう言うと、その顔に意味不明なニヤ笑いを浮かべていた。

その笑いには、よく察すれば、なにかいかかわしい意図が含まれているようにも思える。

しかしその時、ゆかりは、この状況をどう当たり障りなく切り抜けようかということに執心していた為、その事には気付かず、リエ（ナオ）に無理矢理、頭を下げさせると、もう一度謝罪の言葉を述べてから、その一室をナオとともに後にしていた。

「一体あなた、何、考えているの！？　これは任務、任務なのよ。それなのに、仕事に就いてそうそう問題を起こして、首になったらどうするの。その事を考えて、あなた行動しているんでしょね！？」

先程、新見川に呼ばれて、入室した室内を後にしてゆかりは、人気のない通路の角までナオをさっそく引きずっていくと、今、彼女に対して、ありったけの不満の声をぶつけようとしてそう言っていた。

ナオは先程、ストリップの開演中に客の一人と一悶着を起こして喧嘩になった訳だが、その事についてゆかりはナオに対してある意味、彼女なりに御灸を据えているという状況にある。

「まったくあなたって、自分の立場をわかっているのかしら？　少しぐらいお尻を触られたからって、またここで問題を起こしたらせっかく面接をパスしてここに潜入できたのに、それを台無しにする気なの。まあ、運良く新見川っていう人は、それほど問題にもせず許してくれたけど、あなた少しは自分が任務でここに居るっていうことを、自覚しなさいよ！　気を揉んで、冷や冷やする私の立場も考えて！！」

ゆかりは、ナオを目の前にして腰に手を当てて立ちただかると、彼女の顔を複雑な表情で睨み付けていた。

それは、いまさら怒ってナオに言ってもしょうがないという思いがある反面、やっぱりこういう場合は、しっかりと怒っておかないと駄目だという思いが、ごっちゃになった表情である。

しかし、それを受けて、ナオは、膨れっ面して次のような事を言う。

「そう言うけどね、ゆかり、もしもあなたが客にお尻を嫌らしい手で触られたら、貴女ならどうするの？　まさか『イヤ～ん』なんて声を上げて『お客さまってエッチね♥』なんて言う訳じゃないでしょう？　実際に触られた私の身にもなってみて欲しいわ」

ナオはそう言うと、ぶんぶん鼻息を荒くしてそっぽを向いてしまっている。

どうやら、客にお尻を触られたことが、いくらナオでも相当嫌であるらしかった。

だが、それを受けてゆかりは、ナオの言葉に言いよどむ。

「た・・確かにそうかもしれないけど・・・、で・・でもね・・ここは重要な任務がかかっているんだから、それくらい我慢しないと特務隊員として失格だと思うわ。それにね、貴女に隙があるからお尻なんか触られるのよ。私のように、毅然としていれば、嫌な目に遭わなくてすむと思うわ。だから、私を少しは見習いなさい」

ゆかりはそう言うと、右の人差し指を立てて、そのままナオに対し突き付けていた。

しかし、それを聞くとナオは、また更に反発してこう言っていた。

「何言っているの、それはただあなたが魅力のない女だからじゃないの？　私にはあなたと違って、有り余るほどの魅力があるから、きっとこんな目にあっただわ。わたしって意外と罪な女なのね。自分でも困ってしまうわ・・」

だが、それを聞いたゆかりも、今度は怒りだす。

「ちょっと何その言い方、それじゃまるで私がまったく魅力のない女と言っているようなものじゃない。その言い方、あまりにも酷すぎるわ。そんな事言っていると、金輪際あなたとは絶交するわよ。その言葉は、失言もはなはだしいわ・・・」

「おいおい二人とも、こんなところで何言い争っているんだ。遠くの方まで声が筒抜けだぞ。ここは二人とも、気を静めて落ち着くんだ！」

と、そんなところへ二人が言い争っていると、一人の若い男がおもむろに現れて、ナオとゆかりにそんな事を言って来ていた。

突然、現れたその男——ゆかりがその声に驚きその男を見る。

するとその男は、ナオやゆかりと同じくしてこのストリップ劇場へ潜入したはずの、特務機関・特務一課、第五班に所属する関谷莞爾であった。

彼はどうやら仕事の途中、ナオとゆかりの言い争っている声を聞き付けて、慌ててここへ走って来たらしく、荒い息をしてゼイゼイいっている。

すると、ゆかりはそれを見て、まるでナオのように素っ気なく応じていた。

「あら関谷くんじゃない、こんなところで何してるのよ？」

それを受けて、関谷という男は、慌ててナオとゆかりにこう言っていた。

「二人とも何しているのじゃないよ、君たちが喧嘩している声は、何度も言うように店の方まで聞こえてくるんだからね。それをよく考えず軽率なことを喋っては、オレたちの正体がバレてしまうじゃないか。いいかい、ナオちゃんも二階堂も、気をつけてくれよ・・・」

関谷は唾み合う二人を見て、困ったように苦い顔をして小声で囁いていた。

だが・・・

そんな中、ナオはそれを馬耳東風のように知らん顔して聞き流すと、関谷という男に対して彼女も冷たい態度で応じる。

「関谷くんあんたね、これはゆかりが悪いのよ。私が女として身の危機にさらされたのに、それを我慢しろだなんて言うからいけないの。だから、あなたは首を突っ込まないでいて欲しいわ。ハッキリ言って邪魔よ、とっととあなたは仕事に戻りなさい！！」

ナオの、突っ放したような冷たいお言葉・・・

しかし関谷は、ナオにそう冷たくあしらわれても、冷静さを保ちながら、次にはナオを宥めようと懸命になっていた。

「判ったよ、ナオちゃん。君たちに何があったかは知らないけど、でもね、ここは気を静めて落ち着いてくれ。一体何があったんだ、この際だからその話を聞くよ。話してくれないか？ 二人が喧嘩していたんじゃ、オレとしても困るからね・・・」

その言葉を受けてナオは、ふてくされながらもこうなった事の詳細を関谷という男に、事細かに話して聞かせていた。

その話を聞き終えて、関谷は、ウーンと唸るように考え込む。

そして、納得したかのように口を開いていた。

「う～む、確かにナオちゃんが言うのにも一理あるな。ナオちゃんのお尻を触るなんて、けしからん奴もいたもんだ。でも、ある意味、ちょっと羨ましいかも・・・って、そんなことはないよね。アハハハ、俺は一体何言っているんだろ。オレって馬鹿だね、今は

聞かなかったことにしてくれ」

関谷は、そう言うと、慌ててその場を取り繕っている様子だった。

だが、それを聞いて、ゆかりが関谷に睨み付けるような眼差しを向けて来ていた。

おそらくこの男、関谷は、ナオに少なからず気があるなど思ったからだ。

それを察すると、ゆかりは目くじらを立てるように、次にこう言っている。

「あのね関谷くん、貴方まさかナオにその気があるわけじゃないでしょうね？ もしそうだとしたら、ナオに味方するようなら、課長に言い付けるわよ。ホントいうなら、この場合、ナオがもう少し我慢すれば済むことなのに、それを「一理あるな・・・」なんて言って、ナオに同意するなら、ただじゃおかないから。その事、ちゃんと判っているんでしょうね？」

「あっ、いや、オレはねただ、ナオちゃんの気持ちも判るなって思っただけで、そんな気はさらさらしないよ。と・・・ともかくここは二人とも喧嘩せずに仲良くやってくれ。オレとしても、二人が唾み合っている姿は、見たくないからね・・・」

関谷は、ゆかりの剣幕にあい、たじたじになりながらも、なんとかそう言ってその場をうまく誤魔化していた。

しかし、それを見ていたナオが、普段、男などに同情を示したことなどなかったのに、珍しくもそんな関谷を可哀相だと思っただけで、突然、話題を変えて彼に問いただし、助け船を出して来ていた。

「ところで関谷くん、問題の勅使河原はもうこの店に現れたかしら？ 私たちは仕事の都合上、その事を探れなかったんだけど貴方はどう？ 彼が現れた事の、確認はとれたの？」

それを受けて、関谷は、思い出したように口を開く。

「ああ、その事？ 実はね、それなんだけど、ここの店のオーナーは今日はこの店に来ないらしいよ。これは店の従業員が話しているのをこっそり聞いた話なんだけど、このストリップ劇場に現れるとすれば、明日か明後日になると言っていたよ。だから今日は、諦めるしかないと思うね。とにかく今日は、仕事に早く慣れる事を心がけた方が良くオレとしては思うよ・・・」

関谷はそう言って、ナオに微笑みかけていた。

しかし、そこへゆかりが口を挟む。

「関谷くん、その話は本当なの？ だとすると、今日はなんの成果も得られないって事になるわね。ナオ、仕方がないから今後は、真面目に仕事にいそしみましょう。だけど、また問題を起こさないようにしてね。くれぐれも、言っておくわよ」

関谷の話聞いたゆかりは、多少不服はあったが、その話に納得して後は仕事のことを考える事になっていた。

今日は、仕事始めの第一日目であり、これからどれくらいの期間この潜入捜査が続くのかは判らなかったが、関谷の言ったようにこの仕事に嫌々でも慣れておく必要があると思ひ、ナオに釘をさしておくしかなかった。

彼女にしてみれば、これ以後、またナオに問題を起こされてはかなわない。

できる事ならば、この潜入捜査が終了するまで、ナオにはもっと慎重な行動をとってもらいたかったのは確かだ。

そう思うとゆかりは、ナオのお目付役として、この先思いやられると覚悟して、気を引き締め直していたのは言うまでもなかったが、そんなこんなで今日の任務はそれから何事もなく終了したのは幸いであった。

第四節

特務一課のデスクフロアでは、今、夜勤の担当の隊員との職務引き継ぎも終え、時間は八時三十分を回っていた。

そんな中、ナオとゆかり、それに関谷莞爾は、課長の執務室に呼ばれ、今現在、潜入捜査の任務報告をしているところであった。

「それで今日は、何の問題もなく仕事は終了したんだな？」

そう三人に問いただしていたのは、佐渡だ。

彼は皮張りの回転椅子に腰掛け、机に頬杖を付きながらナオとゆかり、関谷の三人を見据えると、少し堅く強ばった顔をしてそう聞いてくる。

それを受けて関谷は、課長を前にして緊張しているのか、少し硬直気味に次のような事を言っていた。

「ええ、そうです。オレとナオちゃん、そして二階堂は、面接も無難にパスし、今日一日中言い付けられた慣れない仕事もよくこなしてストリップ劇場の従業員として、少しでもうまく現場にとけこもうとして努力はしました。オレの見たかぎりでは、店の者にはオレたちの正体はほとんど疑われずに、潜入できたと思っています」

「そうか」

その関谷の報告を聞くと、佐渡は、強ばったその表情をくしゃりと崩して、安心したかのように笑みをこぼしていた。

どうやら佐渡は、その報告を受けて潜入捜査の初日の任務が、無事、何の問題もなく済んで、ほっとしている様子だ。

その笑みをこぼした表情からは、その事が、強く覗い知れていた。

佐渡としては、ナオが潜入捜査の一員に加わっているため、この報告を受けるまでかなり気を揉んでいたのだろう。

またナオが何かの問題を起こし、この潜入捜査が台無しになったら、たまったものではない。

だから三人の報告を受けるまで、この捜査の安否を、気遣っていたといってもいいのだ。

だが、関谷はその時、課長の思惑に反して、少し嘘の報告をしていた。

本当は、何もなかった訳ではない。

ナオはストリップ劇場の客と一悶着起こして、店の責任者に呼び出しを食らっていたのだ。

それは大した事態にはならなかったが、ホント言うとナオは課長が危惧を示すかのように、少なからず問題を起こしていたのは事実だった。

しかし、その事をまた課長に報告すれば、ナオが叱られると思い、関谷はその事は報告の内容に入れなかった。ある意味、関谷はナオの同僚として彼女を養護したわけだが、とても彼の口からまたナオが問題を起こしたなどと、課長に面と向かって言えなかったのも確かだ。

だが、それを知ってか知らずか、課長は、先程からニコニコとして三人を見据えていた。

そして、また、関谷に質問してくる。

「それで、今日ストリップ劇場に潜入してみてもうどうだった。オレたちも、その店の外の張り込みに参加したが、勅使河原が現れて店の中に入っていった様子は覗えなかった。その点に関してはどうなんだ、奴は居たのか？」

佐渡は、関谷に対して、一番聞きたかったことをさっそく持ち出す。

それに答え関谷は、やはり真面目に応じていた。

「それに関してなんですがね課長、俺が聞いたかぎりでは、奴が店に現れるのは明日か明後日になるという事なんです。だから今日のところは、それほど潜入捜査の成果があったという訳ではありません。今後の奴の動向を待って、捜査するしかないと思いますよ」

それを受け佐渡は、腕組みをしてウーンとうなる。

そして、

「そうか、それは重要な情報かもしれんな。勅使河原が現れないかぎり、捜査は進まんからな。それじゃさっそく警視庁の方には、その事を、オレの方から伝えておくことにしよう。だから、今日はもう帰っていいぞ、また明日から、仕事が待っているんだからな」

そう言うと佐渡は、これからまた警視庁の面々との会議があるらしく、回転椅子を蹴っっておもむろに立ちだしていた。

十二月三十日、潜入捜査二日目、勅使河原が経営しているはずのストリップ劇場の近くでは、警視庁の私服捜査員や、やはり私服勤務を言い渡された特務隊員ら数人が、所定の位置に陣取り、朝早くの時間にもかかわらず、勅使河原の動向を探るべく張り込みが行われていた。

彼らの職務は、ただ店を見張って勅使河原洋二がそのストリップ劇場に出入りしているかの確認を行うだけなのだが、それ以外にも勅使河原があらわれて彼が本当に勅使河原洋二であるという確認がとれれば、その男の行動を厳重にマークし、ストリップ劇場以外の場所における彼の活動にも逐一尾行などを行ったりして柔軟な監視態勢をしなく心算である。

もちろん、それらの捜査方針は、潜入捜査当日の前日、すなわち十二月二十八日にはすでに決められた捜査方針であったが、それをよく踏襲する事を義務づけられ捜査員たちは職務についている。

今現在は九時十分前、ストリップ劇場の営業開始時間は十時であるから、あと七十分ぐらいの時間の余裕がある。だがその頃、ストリップ劇場から五百メートルぐらい離れた場所にある小さな空き地では、二台の車輛がその場所に止められ、その中であの特務機関の問題児ナオとゆかり、そして関谷莞爾に今日の潜入捜査に関する事前確認が行われていた。

「いいかいナオちゃん、ゆかりちゃん、それに関谷くん。これは、腕時計型の通信機だ。今日は、これを身につけて、潜入捜査の任に当たってくれ。昨日、君たちの報告内容を受けて警視庁側は、通信機によるストリップ劇場内と外の張り込み隊との意志の疎通をはかる必要性を感じて、この通信機を君たち三人が着用することに義務付けられたんだ。だからこれでオレたち張り込み隊と連絡がいつでもとれる仕組みになっているから、今日からもよろしく頼むよ。潜入捜査の成果を期待しているからね」

三つの腕時計型の通信機を三人に手渡ししながら、今、言葉を発していたのは、警視庁刑事部の捜査責任者、池沢元警部補である。

彼はその通信機を手渡すと、手早くその使い方を三人に説明して、それを腕に装着させていた。

これで、いつでも、通信が可能となるはずだ。

警視庁側がこの通信機の着用を義務付けたのは、昨日、関谷が課長の佐渡に今日か明日中には勅使河原がストリップ劇場に姿を現すのではないかという報告をし、その可能性が重視されたからであった。

この通信機の使用で、潜入部隊のナオ、ゆかり、関谷が状況報告をすれば、その三人の動向がよく把握できるし、バックアップもしやすくなる。それに、警視庁側としても、勅使河原の動向を逐一知りたいというのが、彼らの本音であったからだ。

「でも元さん、通信機なんか着けていても張り込み隊の方からわたしたちに通信がある場合は、どうすればいいの？ わたしたちに着信があった場合、この腕時計のアラームが鳴ったりするのかしら？」

そう池沢に、疑問を投げ掛けたのは、ナオであった。

ナオは、装着した腕時計についているボタンをいじくりながら、それに声を発し、その声は今その車の中にある受信機のスピーカーにしっかりと受信されるかどうかのテストを行いながら、その片手間に池沢にそう言っている。

しかし、その様子を見つめながら、池沢は、その疑問に対してこう答えていた。

「実はねナオちゃん、その通信機は最初の発信に関しては君たち三人の方からこちらに対してしか通信が出来ないようになっているんだ。もちろん、君たちからの通信がこちらにつながれば、このイヤホンを通してこちら側の声は君たちに聞こえるようになっている。だから、君たちが潜入捜査の状況に応じて、オレたち張り込み隊に逐一報告をしてくれればいいと思っているんだよ。この腕時計にはね、高感度マイクが仕込んであるから、小声で話してもこっちまでしっかりと声は受信されるから、だから、くれぐれも通信をしている現場をストリップ劇場の人間には悟られないようにその事をよろしく頼むよ」

そう言うと池沢は、また三つの小型イヤホンを三人に手渡していた。

「そう、判ったわ。その事に関してなら、極力注意するわ」

ナオはその小型イヤホンを受け取ると、それをさっそく右の耳に装着して警視庁の捜

査員と一緒に、その通話手段が正しく機能するかのテストを綿密に行っていた。

だが、そんな中、ゆかりが池沢に今自分が疑問に思ったことを、唐突に彼に対して切り出していた。

「ねえ、でも元さん。勅使河原がもしもストリップ劇場に現れた場合、張り込みを担当している警視庁の捜査員や特務機関の面々は、ただ彼の出入りを監視するだけなの？ それ以外に他に捜査の手段はないのかしら？」

ゆかりは、そう言うと、池沢の顔に伺いを立てる。

彼女にして見れば、勅使河原がもしもストリップ劇場に現れても、即逮捕出来ないことに少しもどかしさを感じているようだった。

「それに関してだけどね、ゆかりちゃん。オレたち張り込み隊は、勅使河原が現れれば彼の尾行も考えているんだよ。警視庁としても奴を逮捕することは、今のところ出来ないが、奴がストリップ劇場、以外のどこに潜伏しているのかということも、調べ上げなければならないと思っているんだ。それに張り込み以外の捜査の他にも、勅使河原が一体どこを根城にして姿を隠しているのかということも、オレたち以外の別動隊の捜査員によってその確認が行われる予定なんだ。だから君はただ、オレたちの捜査方針をそれほど気にする事無く、潜入捜査だけに集中してくれればそれでいいと思っているんだ。そんなに心配する程のことではないと、オレは思うよ」

「そう、それじゃやっぱり勅使河原が現れしだい、張り込み隊の仕事も忙しくなる可能性があるということなのね。勅使河原が現れてもすぐに逮捕出来ないということは、ある意味、残念だけど、私も潜入捜査を頑張って勅使河原の尻尾をつかんでみせるわ。だから元さんも、わたしたちのバックアップをよろしくね。さあ今日も仕事頑張らなくっちゃ、もうすぐ出勤の時間になるから、二人とももう行きましょうか・・・」

ゆかりはそう言うと、ナオや関谷を促し、ストリップ劇場に出勤する準備を整え始めていた。

今日から潜入捜査の二日目、ナオ、ゆかり、関谷の三人は、またストリップ劇場といういかがわしい場所で仕事をする事になる。

しかし、それはいまいち喜んで気乗りすることはなかったが、これも勅使河原を逮捕するための一環だと思えば、自然とやる気もわいてくるのは確かであり、これから出勤するにあたり気を引き締めなおしていたのは事実であった。

「でも三人とも、くれぐれも正体がバレないように気をつけてくれよ。もし正体がバレるようなことがあれば、この捜査は台無しになるからね。そこんところを、よろしく」

池沢は、車を降りてストリップ劇場へと向かいはじめた三人に対して、釘をさすようにそう言うと、人のよさそうな笑みを浮かべて微笑んでいた。

それからナオ、ゆかり、関谷の三人は、それにうなずくと、徒歩でテクテクとストリップ劇場まで歩いて出勤していくのであった。

第六章 余罪の行方・・・

第一節

時間は午後一時三十分、第二日目の潜入捜査に今日の午前十時から乗り出した、ナオとゆかり、そして関谷であったが、彼らが今現在なにをしているのか？

それは、誰しものが、疑問に思うことだろう。

それは実は、こう言う状況にあった。

用務員としてこのストリップ劇場で働くことになった、特務機関・特務一課の第五班に所属する関谷莞爾は、今、ストリップ劇場の敷地内にある外の焼却炉で、大量にたまっていた店内のゴミを燃やしているところである。

彼は十二月下旬も終わりにさしかかろうとしているこの季節であるのにもかかわらず、その額にはうっすらと汗をにじませ、火掻き棒を片手に焼却炉の中をかき回している。

焼却炉の中で、めらめらと燃えている、その炎が彼の顔を焼いているからだ。

しかし、その仕事は、特務機関の隊員の一員である関谷にとっては、とてもつまらない仕事であったはずだが、彼はその事に文句を一言も言う事無く、真面目に任務を全うしている様子だ。それに、あの特務機関の問題児、ナオとゆかりのコンビはといえば、こうだ。

二人は、今日もまた、あの破廉恥な清掃員の制服に着替えたまま、今のところ店の奥に位置する事務所内の掃除に、いそしんでいる。

ナオとゆかりは先程からモップを両手で持つと、それをバケツの水に浸して絞り、やはり真面目にせっせと床磨きに精をだしていた。

これもまた、単調な仕事である。

だが、彼女たちは、自分たちが清掃員として一生懸命働いている姿を、このストリップ劇場の人間に少なからず示しておく必要があるのでは、怠けている場合ではなかった。

自分たちが、仕事もせず不審な行動をとっては、これがまさか特務機関と警視庁が仕組んだ、潜入捜査であるということはバレないにしても、二人が何のためにこの店のパートの清掃員として働いているのかという事が、疑われる危険性があるからだ。

そうである以上、ここは無難に仕事をこなす以外、他にいい方法はない。

一体やる気があるのかと、店の従業員や責任者たちに疑われてしまえば、もともともないので、そうならない様にせっせと仕事に精を出すのが一番であることは確かなのだ。

しかし、この店の裏にあるこの事務所には、若い事務員の女性が二人と、経理担当のやはり若い男性がつめているだけで、その外には誰もいない。

今のところ、勅使河原らしき男が、このストリップ劇場に現れた様子もなかった。

そんな中で、一生懸命モップで床を磨きながら掃除にいそしんでいるナオは、その動作を機械的に反復してこなしながら、隣でやはりモップ掛けをしているゆかりに対し、その時、小声でヒソヒソと話し掛けてきていた。

「ねえゆかり、この仕事に関してはどうでもいいんだけど、まだ勅使河原は、この店に現れないかしら？ 本当に彼は、今日、ここに現れると思っている？」

ナオは、ゆかりに対し、少しその表情を顰めて焦れたような態度を示すと、その次には、なにか呆れたようにモップ掛けで前かがみになって曲げていた腰をグーンと伸ばすと、そう話を切り出してきていた。

それに対してゆかりは、こう答える。

「ナオあなたね、それ聞くの今日で三回目よ。何度も言っているように、この場合は、根気強く待たなければ駄目だって、さっきから言っているでしょ。そう何度も何度も同じ事を私に聞いていないで、さっさと、この仕事を終わらせてしましましょう」

ゆかりはそう言うと、またモップに水を濡らしてからよく絞って、今度は、別の場所をそれで研ぎ始めてしまっていた。

それを見るとナオは、つまらなそうに口を尖らせながらも、ゆかりと同じようにまた単調なモップ掛けを、彼女にしては意外に真面目な姿でこなし始めていた。

「しかし、掃除って、単調な仕事ね。こんな仕事ばかりしていると、体が鈍って、なまずになってしまうわ。どうにかならない、ゆかり？」

ナオは、一生懸命モップ掛けの仕事に精をだす中、また、ゆかりに対してそう話し掛ける。

どうやら彼女は、さすがに掃除ばかりしていることに、もう飽きだした様子で、モップ掛けをしている手は休めないまでも、気持ちとしてはもうこんな事やめたい気分になっているのだと、ゆかりにはそう推測することが出来ていた。

ある意味、それはナオらしいと、その時ゆかりは思う。

彼女は、このような単調な仕事を、極力、嫌う性格の女だと判っていたからだ。

だが、ゆかりは、そんなナオに理解を示す中でも、それに反して次には教えを諭す先生のような口調でこう言っていた。

「あのねナオ、大きい声じゃ言えないけど、これは任務なのよ。つまらない仕事なのは判るけど、そんな事ばかり言っていないで、もっとこの仕事を好きになってみたらどう？」

一応、これは仮の仕事だけれど、たまにはこういう経験もしておくのも大切な事かもしれないわよ」

しかし、そのゆかりの言葉に、ナオは答えず、それとは別のことを口走りはじめていた。

「だけどゆかり、なんだかこう単調な仕事がつづく、世の中ってつづく変化の乏しい世界に感じられるわね。潜入捜査というたいそうな任務でも、こう変化がないと体に活力というものが漲ってこないような気がするわ。それに、勅使河原も一向に現れないし、そろそろ私、我慢の限界に達して、叫びたくなる気分よ。判る？ その事があなたに・・・」

ナオは、そう言うと、気分転換にでもと思ったのか、「フンフン」と鼻歌を歌い始めてしまっていた。

それを見るとゆかりは、ナオに対し少々呆れたが、そのまま何も言わず掃除に没頭して、早めに今の仕事を終わらせてしまうことにしていた。

だが、そんな風に二人が掃除に精を出す中、それからかれこれ十分後には、ようやくナオとゆかりの望んでいるような変化が訪れていた。

それは、ナオとゆかりが事務所の掃除をしていると、そこへ突然一人の男が現れて、こう言っていたからだ。

「おお、赤越しゆくに黒川さん、こんなところに居たのか？ 二人とも、掃除の途中で悪いんだが、今からお茶の準備をしてくれないか。さっきね、この店のオーナーが来て、部屋でこれから話をするんだ。だから君たちに、そのお茶の準備をしてもらいたい。二人とも、判ったかね？」

そう言うと男は、ナオとゆかりに手で合図して、掃除を止めるように指示していた。

その男とは、この店の責任者、つまり支配人になっていた、あの新見川である。

彼は、ナオとゆかりが、突然お茶の準備をしてくれなどと言われて、キョトンとしている姿を見据えると、早く早くと手で促して催促してきていた。

しかし、それを聞いて、ナオが驚きを示す。

「あのオーナーが来ているって、その人はこの店の経営者のことなの新見川さん？ 私この店のオーナーに会ったことないから一体どんな人か判らないわ。名前は、なんて言うの？」

それは、いやに白々しい、ナオの質問であった。

彼女ナオはおそらく、そのオーナーとは勅使河原のことだと思っていたが、一応、昨日この店に入ったばかりの新人の従業員として、とぼけて知らない振りをしたのであった。

しかし、ナオがそう質問すると、新見川は、その予想に反することを言っていた。「オーナーの名前かい、それは宮坂義行って言うんだ。君たちが知らなくて当然だけど、しかし、これはいい機会だから、君たちを昨日この店に入った新人として、宮坂オーナーに紹介するから、すぐにお茶の用意をしてくれないか。その位できるだろ？」

だが、その新見川の言葉を聞いて、やはり驚いていたのは、黒川昌代こと二階堂ゆかりであった。

「宮坂義行？！ あのちょっと待ってください新見川さん。この店のオーナーの名前は、本当に宮坂義行って言うんですか？ てしがわ・・・いえそれに、オーナーにわたしたちを紹介するって、一体どういうことなんです。わたし達は、ただのパートの清掃員ですよ」

ゆかりは、そう言うと新見川に、意外な表情を顕わにしてそう問いただしていた。

すると新見川は、怪訝な表情をしてこう言う。

「なんだい君たちは、この店のオーナーが宮坂さんという名前では、何か問題があるのかい？ 君たち、なんかちょっと変だぞ・・・」

新見川は、先程から驚きを示す二人の顔をじっと見つめると、首を傾げて疑問の表情を呈してきていた。

「いいえ、別に私たちはただ、オーナーに紹介するだなんて言うから、何かかと思ってちょっとびっくりしただけです。他に何もたいした意味はありませんから、余り気にしないで下さい。私たちは、お茶の準備をすれば良いんですね。今すぐやりますから、待っ

ていていただけますか？」

ゆかりは新見川の言葉に少し慌てながらも、冷静さを装って、その場をうまく誤魔化していた。

「それじゃ頼むよ。お茶が入ったら応接室の方まで二人で持ってきてくれ。湯呑みとお湯はこの事務所のほらそこにあるから、呉々も頼んだよ。それじゃ」

新見川は、ナオとゆかりに給湯室の場所を手で指し示すと、そのまま急いでその事務所を後にしていた。

その後、二人その場にとり残されて、キョトンとするナオとゆかり。

彼女等は、新見川が去ったあと、二人顔を見合わせて、複雑な表情を呈していた。

そして、ナオが言う。

「ねえゆかり、この店のオーナーが勅使河原ではなく、宮坂義行という男だったってことを知っていた？ 茂満の供述では、確かにここは、勅使河原が経営する店の筈よね。それなのに一体どうなっているの？」

「確かにそうね・・・」

その言葉を聞き、ゆかりも同意見だった。

黒峰会と黄河会の麻薬取り引きの際、捕まえた茂満の供述は、確かなものであると思われるのだ。

しかし、ここにきて、この店の経営者の名前が違うとなるとこれは少々問題がある。

その時、ゆかりはある意味、警視庁が茂満に一杯食わされたのではないかと、思ってしまった。

茂満は、はじめから勅使河原の居場所をはく気などなく、供述内容を偽って警視庁の取調官に自白し、勅使河原がストリップ劇場の経営を手懸けているなどといって、警察をからかったのではないかと・・・

だから、ゆかりは、ナオにこう言っていた。

「とにかくナオ、さっそく元さんに報告してみましょう。外で張り込みをしていた警視庁の捜査員が、勅使河原だか宮坂だかが、この店に入ったことを確認しているかもしれないから。だから、こうしてはいられないわよ、すぐ連絡を取りましょう」

ゆかりは、そう言うとナオをつれて給湯室に入り、ドアを閉めて、さっそく張り込み隊の池沢元警部補に連絡を取っていた。

その頃、丁度ストリップ劇場から少し離れた小さな空き地では、池沢元警部補が、ナオやゆかりからの連絡がないかと、少々やきもきしながら待っている最中であった。

しかし、それはどうしてかと言うと、先ほどストリップ劇場前に張り込んでいた捜査員の一人から、見知らぬまだ若そうな男性が黒塗りのベンツで店に乗り付け、そのままストリップ劇場へと入店していったということが、判っていたからだった。

それを聞くと池沢は、その男が勅使河原であったかどうかということ、その報告をしてきた捜査員に聞いてみっていた。

だが、その捜査員は、その事は判らなかったという。

その捜査員は、双眼鏡を使ってその男の顔を確認しようと思ったが、結局、男の後ろ

姿しか映らず、確認は失敗に終わったということであった。

だから池沢は、店の中に潜入しているナオやゆかり、そして関谷が、その確認をもう既に行っているのではないかと思い、今、連絡を待っているのだ。

しかし、そんな所に、車内に設置された受信機に、突然、連絡が入る。

ピピッ、ピピッ、ピピッ

その時、小気味のいい電子音が三回鳴ると、その受信機からは女性の声が響いてきていた。

『えー、こちら潜入部隊の二階堂です。池沢警部補、聞こえていますか？ 聞こえているのなら、返事をしてください、どうぞ・・・』

その通信が入ると、池沢は、受信機のハンドマイクを無造作に手に取り、即座に応答を返していた。

「やあ、ゆかりちゃんかい？ オレだよ池沢だ。君の声はこちらにしっかり届いている。しかし、唐突なんだが、さっき店の中に男が入っていった様子なんだ。急ぎの用で悪いんだが、その確認、そっちではとれたかい？ どうなんだ、どうぞ・・・」

それを受けて、ゆかりが答える。

『あのですね、それなんです元さん。その事に関して、私たちにも疑問があるの。私たちは、今、新見川って言う支配人の男に指示されて、この店のオーナーらしき男にお茶の準備をしろって言われているの。でもですね、その新見川っていう男が言うには、このストリップ劇場のオーナーつまり経営者は、宮坂義行だって言うんです。茂満の供述だと、ストリップ劇場の経営者は宮坂ではなくて勅使河原のはずですよ。それなのに、どうして宮坂義行という男が、この店の経営者になっているんですか？ その点がどうも納得いかなくて、連絡を入れてみたんですけど、どう思います？』

それを聞いて池沢は、驚きを顕わにしていた。

「なんだって、そっちにやっぱり店のオーナーが、現れていたのか。それで、そのオーナーの名前は、確かに宮坂義行って言うんだね？ それは何かの間違いじゃないだろう？

ゆかりちゃんは、その男の顔を確認したのかい。その男の顔を見れば、その男が勅使河原か宮坂だって言うことは確認がとれるだろう？ その事についてはどうなんだい、確認はしたのかい？」

池沢元警部補はそう言うと、少々早口になりつつ、ゆかりにそう逆に問いただしていた。

『それなんです元さん。今、私たちはまだ、その店のオーナーに直接会って、顔の確認はしていないんです。だから直ぐ、これからそのオーナーに会ってみて、確認をとりたいと思っているんですが、一応、中間報告の心算で今そちらに連絡を入れてみた訳で、それに今後の指示を元さんにしてもらえると、こちらとしては有り難いんですけど、その点に関してはどうですか？ 何か指示はありますか？』

ゆかりはそう言うと、池沢の言葉を待っていた。

彼が今後、何らかの指示を出すと思ったからだ。

しかし、それに答えて池沢が言う。

「あー、話は判ったよ、ゆかりちゃん。それじゃねまず、その現れた店のオーナーの顔をよく確認してくれ。君たちは、この潜入捜査が行われる前の合同会議で、勅使河原の顔写

真をファイルを通して頭にたたき込んであるだろ。だからまずは、その店のオーナーが、勅使河原なのか、それとはまったく別人の宮坂義行って言う男なのかの確認をとってくれ。もうこちらの張り込み隊では、その確認が出来ないから、その事をよろしく頼むよ」

池沢は、ゆかりの言葉にそう指示を出すと、徐に口をつぐんでいた。

『判りました元さん。私たちは、これからその確認をしたいと思います。次の連絡は、いつになるか判りませんが、なるべく早く連絡したいと思います。それじゃ通信を切ります、よろしくどうぞ・・・』

その言葉を最後に、ピッと、その通信は途絶えていた。

それを聞くと池沢元警部補は、その後、腕組みをして、ウーと唸り考えに没頭している様子だった。

ナオとゆかりの今後の報告を待つしかない。

しかし、店のオーナーの名前が、宮坂というのは、どういう事なのだろうと、池沢には不思議に思えてならなかった。

コンコン・・・コンコン

ストリップ劇場の店の奥、応接室の扉の前では、今ナオとゆかりがお盆にふたつの湯呑み茶碗を乗せて、その室内の扉を徐にノックしている最中であつた。

彼女たちが、その応接室の扉をノックすると、先ほど現れた新見川支配人が顔を出し、ナオとゆかりの二人を手招きして室内に招き入れていた。

二人が、中に、おずおずとして入ると、そこには皮張りの長椅子に腰掛けた、一人の男が待っていた。見た目は三十代の壮年のように見える男——その男は、見たかぎりでは、頭の切れそうな、それでいて狡猾さのない——見ると紳士的な男性のように見える。

しかし、応接室の中に入室し、ナオとゆかりの二人がその男に面して、その顔を注意深くはっきりと覗いを立てると、そこにある疑念が浮かび上がっていた。

この男は、果たして、勅使河原洋二なのか？

ナオとゆかりに、同時にして、浮かんだ率直な疑問はそれだった。

二人が二十八日の合同捜査会議で見せられた勅使河原の顔写真と、どこか似ているような気もする。

しかしそう思えるが、逆に言えば似ていないようにも思える。

似ている様で似ていない、それとも似ていない様で似ている、これは一体どうしてなのであろうか？

その時、ナオとゆかりは、その判断に困ったことは言うまでもなかった。

だが室内に入る早々、ナオとゆかりにじろじろと見つめられて、その店のオーナーらしき男は怪訝に思ったのか、腕組みをしてやはり彼女たちの挙動を注意深く観察している様子だった。

ナオとゆかりの二人は室内に入ると、二人同時にして店のオーナーにお辞儀し、その後、黙ってこの応接室のテーブルに先程煎れたお茶をだして、またお辞儀していた。

すると、店のオーナーらしきその男が、徐に口を開いている。
「新見川支配人、君が言っていた新人のパートの清掃員とは、この二人のことなのかい？
ずいぶんと若く見えるが、よくこんな二人がうちで働く気になったね？」

そう言うとオーナーは、彼の近くで棒立ちしているナオとゆかりの足の爪先から頭のてっぺんまでを、舐めまわすような視線を向けて一通り見据えると、一つ小さく意味不明に笑って、支配人の新見川の方を向いてしまっていた。

その間にも、ナオとゆかりは、この宮坂という店のオーナーをしきりに覗き、その顔を一生懸命、頭に焼き付けている様子だった。

すると、そんな二人の挙動に気付かず、新見川は宮坂に答える。
「そうです宮坂オーナー、この二人は昨日この店に入ったばかりの新人です。パートの清掃員としてこの店で働くことになってもらいましたが、一応この二人をあなたに紹介しておきたくて、今ここに呼んだのです」

新見川はそう宮坂に告げると、ナオとゆかりの二人に、宮坂オーナーに対して挨拶をする様にと、指示し手で合図を送ってきていた。

すると二人は、おずおずと前に進みでて、宮坂の座る長椅子の脇に立つと、二人同時にまたお辞儀して挨拶を始めていた。

ゆかり：「あの宮坂オーナー、私は黒川昌代といいます。新見川さんが言いましたように、私は昨日このストリップ劇場のパートの清掃員として、ここで働くことになりました。まだ新人ですので、この店の規則には慣れてはいませんが、以後よろしく願います」

ナオ：「私は赤越リエ、宮坂さんお初にお目にかかります。ですが今日はすごく天気がいい日ですね、一応私は昌代の友達です。二人して仕事にいそしみますから、どうかお見知りおきください。オーナーの宮坂さんに初めてお会いして、私、感激しています。だから、以後よろしく願います」

黒川昌代ことゆかりと赤越リエことナオは、二人してそう言うと、恐縮した態度を装い、また最後に軽く会釈をして挨拶を終えていた。

それを聞くと宮坂は、頷きながらこう言っていた。
「ところで赤越くんに黒川さんだったかな？ 二人はこの店にパートとして入る以前には、一体どんな仕事をしていたんだい。見たところによると、二人とも美人で、仕事も一生懸命こなすということじゃないか。それなのに前の仕事を辞めてここへ来たということは、ちょっと不思議に思うんだけどね？ その事に関しては、一体どうなっているんだい。良ければ話してくれないかな？」

それを受けて、一瞬、ゆかりは言葉につまる。

これはどうやら、この宮坂という男は、自分たち二人を怪しんでいるのではないかと思ったからだ。だがゆかりは、ここは焦ってはいけないと思いつつ、冷静さを保って、宮坂に答えを返していた。

「あのですね宮坂オーナー、私たちは履歴書にも書いていたように、ある証券会社のOLとして働いていたんです。ですがその会社には『佐渡一』というスケベジジイがいて、その男に私とリエは頻繁にセクハラを受けていたんです。その男は、事あるごとに私たちの体に触って卑猥な言葉を囁いてくるんです。それに、胸を触ったりお尻を触ったりと、

やりたい放題で、だからわたし達はそれに堪えられなくなってその会社を辞め、また気分を一新して新境地を求め、新しい職場で働きたいと思い、このストリップ劇場のパートの清掃員募集の公告を見て、ここに伺ったという訳なんです」

そこまで言うと昌代（ゆかり）は、口をつぐんで宮坂を見据えていた。

それを受けて宮坂は、意外とあっさりなるほどと言うと、ゆかりの言葉に納得してしまっている様子だった。

「それじゃ君たちは、働く場所の新境地を求めてここへ来たというんだね。それなら私たちとしても、君たちを歓迎するよ。話は大いに解った、それじゃもう君たちは、清掃の仕事に戻ってくれていいよ。しっかりとこの店で働いてくれ」

宮坂はそう言うと、ナオとゆかりに退室を促していた。

それを受け、ナオとゆかりはハイと返事をする、そのままその室内を出て先程の事務所の一室へと、戻っていったのであった。

その後、宮坂と新見川は二人だけになると、二人同時にしてニヤツという笑いをその顔に浮かべていた。

それは卑猥な笑いではなかったが、何かの意図が多分に含まれている笑いであった。

その時、新見川が宮坂にこう言う。

「どうですか宮坂さん、あの二人の清掃員を見て・・・かなりの上物でしょう？ あの黒川昌代っていう女もそうですが、特に赤越という女の方は少し無愛想な面もありますが、最近そこいらでは見かけない掘り出し物だと思いますよ。あなたの意見ではどう思います？」

それに答えて、宮坂が言う。

「ああ、確かに見たかぎりではそうだな。しかし、よくもまあ、あんな二人がこのストリップ劇場のパートの清掃員として志望してきたものだ。さっきの話では、セクハラされて会社を辞めたようだが、それに関してはちょっと胡散臭い疑問に思う点もある。しかし、まあいいだろう、あれだけの上物だウォンさんに高く売り付ければ、組織の資金源を手際よく調達できるしな。今後あの二人をよく面倒見ておけよ、入ってそうそう、ここを辞められてしまってはもともこもない。金になる駒は、手元に置いておいた方がいいからな」

宮坂はそう言うと、ニツと不敵な笑みを新見川にこぼしていた。

それを受けて新見川は、

「それじゃ宮坂さん、あの二人をウォンさんに売り付けるんですか？ オレとしてはあの二人をウォンさんにあっさり渡すのは、少し勿体ないような気がします。彼女たちには、なんとか説得して、このストリップ劇場の踊り子として、ここで金を稼がせるほうが無難な選択肢と思っていたんですけど、それじゃ駄目なんですか？」

彼は、そう言うと、少々不満の色を示して、宮坂にそう言っていた。

しかし、

「確かにそれも一つの名案かもしれん。だが、オレはまだウォンさんに、あの二人を売り付けるとは決めていない。それは一つの可能性として言ったまでだ。だから、お前がこのストリップ劇場の踊り子にあの二人を推薦したいというのなら、オレもある意味、賛成できるが、もう少しあの二人の様子を見てからでないと、何とも言えないな」

宮坂は、そう言うと、胸元のポケットから煙草を取り出して、それに火をつけ徐に喫煙を始めてしまっていた。

そして、口に含んだ煙草のけむりを吐きだすと、すうっと美味そうに目を細めて新見川の顔を見据えていた。

第二節

「えーっ！ それ本当なんですか課長！？ 勅使河原と宮坂が同一人物だなんて・・・」

今、特務機関の二階に位置する特務一課のデスクフロアでは、課長の佐渡がナオや二階堂ゆかり、そして関谷莞爾を自分の目の前に呼び寄せると、つい先ほど判った勅使河原に関する重要情報をその三人に告げているところであった。

しかし、ゆかりが何故、佐渡の言葉を聞いて驚いたのかは、こう言うことだ。

今日、ナオとゆかりはストリップ劇場の支配人、新見川に店のオーナーが来ているから応接室までお茶を運んでくれといわれ、その席で彼女たちはそのオーナーと直接会ってその男が勅使河原洋二であるのかどうかの实地確認を行ったのだ。

そして、その確認を終えたあと、二人はさっそく仕事の合間に、店の外を張り込んでいる池沢元警部補に連絡をした。

その二人がした連絡内容は、こうだった。

つまりストリップ劇場のオーナーは勅使河原ではなく、彼と少し面影の似たまったく別人の宮坂という男なのではないかと・・・

ナオとゆかりがそう池沢に報告したのは、宮坂という男は勅使河原に似ているようでそうではないと思えたからだ。確かに彼女たちは、ストリップ劇場の応接室で宮坂という店のオーナーと実際に会い、その顔を間近で確認したが、その時は正直言ってその男が勅使河原なのかそうでないのかということに迷った。

それは、潜入捜査前に見た勅使河原の写真とは、瓜二つとは言えなかったからだ。

その為、ナオとゆかりは、宮坂という男の顔の確認後、二人して考えて答えをだした結果、宮坂とは勅使河原ではないのではないかと結論に達したからだ。

この結論は、ナオとゆかりの勘だけに頼った結論であった為、池沢元警部補は、一応その報告を聞くと頷いて納得した様子を一時は見せたが、どうも彼にはストリップ劇場の経営者が勅使河原ではなく宮坂義行であったということに、何か裏があるのではないかと独自の勘をはたらかせ、彼はその後、警視庁の方に茂満の再尋問を行わせたのであった。

その尋問とは、七日前、茂満が語ったストリップ劇場の経営者は勅使河原であるという供述に、彼が本当のことを言ったのかという確認の意味の再尋問であった。

警視庁はその池沢の連絡を受けると、さっそく茂満をまた取調室に呼んで、すみやかに再尋問を行っていた。

そして今日の五時過ぎに判った茂満の供述によると、ストリップ劇場の経営者は確かに勅使河原で間違いないということなのだ。そして、それに付随する形で、茂満は、勅使河原は宮坂義行という偽名を使って店の経営を行っているという新事実を白状し、それに一番問題だったのが、勅使河原は海外に逃亡中に整形手術を何度となく繰り返して、その顔を変えているのだということが新たに判ったのであった。

その報を受け警視庁は、その茂満の新たな供述内容をその日のうちに特務機関の佐渡にも電話で通達し、報せてきていたのだ。そして今、その事を課長の佐渡が潜入捜査から帰ってきたナオとゆかりそして関谷に、話しているといった具合だった。

だからその事を聞いて、ゆかりが驚きを顕わにしたのは、当然の反応であったといえる。

まさか、だれしも勅使河原が整形して顔を変え、しかも偽名を使っているとは思ってもよらなかったからだ。

しかし、それに関しては、ゆかりの隣でやはり佐渡の言葉を聞いていたナオも、驚きを隠せなかった様子で、彼女はキョトンとした表情で言葉を失っている様子だった。

「それじゃ課長、宮坂義行は勅使河原で間違いないって事になるということですか？

私たちは、このまま引き続き、潜入捜査を続行するって言うことですか？」

二階堂ゆかりは、目の前で三人を見据えている佐渡に向かってそう言うと、当然の事のようにそう彼に問いただしてきていた。

彼女としてみれば、宮坂という男と勅使河原が同一人物であるとは知らなかった為、ストリップ劇場のオーナーが勅使河原でなく宮坂だったということを知ったときから、この潜入捜査はもう失敗に終わったのではないかと半ば諦めていた矢先の話であるので、ゆかりは佐渡一課長にそう言って質問していたのであった。

それを受けて佐渡は、ゆかりの言葉にうんと頷くと、次にこう言って三人を叱咤していた。

「二階堂、宮坂義行という男が勅使河原と同一人物であるということが判った以上、この潜入捜査は何の滞りもなく引き続き敢行される予定だ。だからお前たちは、明日からもストリップ劇場のパートの清掃員、それに用務員として店に潜入してもらうことになるから、その心算でいてくれ。呉々も、気を抜くことのないよう言うておくぞ」

そう言うと佐渡は、腕組みをしながら三人を見据え、また警視庁側と責任者だけを集めた会議があるということで、そのままナオ、ゆかり、関谷をその場に残すと、三階の会議室に向かって徐に去って行ってしまふのであった。

「ああっ！ 先輩！ 先輩！ もう帰っていたんですか？ 私しばらく二人に会っていなかったから、寂しかったですよー。もう帰ってくるのが遅いでーす」

佐渡が会議室に去って、一二分が経ったその頃、その時ナオ、ゆかり、関谷のいるデスクフロアーに突然現れたのは、特務機関のアイドルこと柏木モモであった。

モモはナオとゆかりの姿を見付けると、フロアーの入り口付近から手を振りながら速

攻ですっ飛んで来ると、また猫の様な甘えた口調でナオとゆかりに擦り寄って来ていた。

そして、まるで一年以上も二人に会っていないような元気のない虚ろな表情をその顔に呈すると、ナオの腕を即座に手に取りその腕に頬摺りを始めてしまっていた。

しかし、そのモモの態度をみて、また喧しい女が来たと不意に思ったゆかりは、意地悪く突っ放すようにして次にはこう言って素っ気なく応じていた。

「あらモモ、あなたまだ帰っていなかったの？ もう仕事は終わったんだから早く家に帰らなさいよ。早く帰らないと、家のママに叱られるわよ」

だが、それを聞くと柏木モモは、少し不満げな顔をして言い返す。

「やだなーゆかり先輩。私二人としばらく会っていないから、今日はこうして先輩たちが帰ってくるまで待っていたんじゃないですかー。そんな冷たい言い方しなくてもいいでしょう。今日は三人一緒に帰りましょうよ。ねっ？ ねっ？ いいでしょ？」

それを聞いて、ゆかりが答える。

「あなたね、しばらく会っていないって、たかが一日や二日位のことじゃない。いい加減、私たちから乳離れしなさいよね。もう歳は二十二にもなるんでしょ。それにナオに甘えるのは止しなさい。ほらナオがさっきから嫌がっているじゃない」

そう言うのとゆかりは、先程からナオに対して頬摺りを続けていたモモの肩を掴んで、その二人を無理矢理引き離していた。

「ああ、何するんですか。ナオ先輩の腕に頬摺りすると、気持ちいいんですよ。ゆかり先輩もやってみたら？」

それを受けるとゆかりは、

「何言っているのレズビアンじゃあるまいし、そんな事できる訳ないでしょ」

といて、モモの頭をペシペシと叩いていた。

だが、それを見ていた関谷が、笑いだす。

「ははは、君たちホント仲がいいね。君たちなら特務機関の三馬鹿トリオになれるよ。漫才デビューでもしてみたらどうだい？ きっと面白い見せ物ができるんじゃないかな？」

関谷莞爾は、そう言うと、ナオ、ゆかり、モモの三人を見据えて、ケタケタと笑いをもたらしていた。

しかし、その後モモは、関谷の笑いにも気にも止めず、突然、思い出したかのように次のような事を言う。

「でも、そう言えばさっき聞いた話なんですけど、勅使河原って言う男は整形して顔を変えていたという事じゃないですか。私、それ聞いて、びっくりしてしまいましたよ。だって整形なんかしているというなら、自分の正体がばれるのを恐れているんだということの証拠になるじゃないですか。だから、勅使河原がナオ先輩のお父さんを殺したって言うことのある意味証明になるんじゃないですかね？ ナオ先輩は、その事、どう思っています。そう思いませんか？」

するとナオは、そのモモの率直な意見を聞いて、徐に口を開く。

「確かにその可能性がない訳じゃないわね。整形で顔を変えているのは、捜査の手を逃れるための様な気もするけど、でも勅使河原が顔を変えようがそれが七年前、彼が事件を起こしてその容疑者として逃走したのだということの明確な証拠にはならないわ。整形して身分を偽っているからって私の父を殺したと断定は出来ないもの。やっぱりここ

は潜入捜査を続けて彼の尻尾を掴むしか他に方法がないのは確かね。だから私は必ずその尻尾を掴んでみせるわ。必ずやってやるわよ！」

ナオはそう言うと、珍しく興奮している様子だった。

彼女にしてみれば、顔を変えているとはいえ、ようやく勅使河原が確実にストリップ劇場のオーナーであるという事が判ったので、かなり意気込んでいる様にも見える。

なぜなら今日、勅使河原と同一人物の宮坂義行という男に直接会って、話もしたからだ。

それはある意味、もう既に、父を殺した犯人であろうと思われている勅使河原に、かなりの度合いで接近できたという事を意味している。

もうナオの手の届くところに勅使河原がいると思うと、気が競るのは確かなのだ。

なにせ勅使河原は、七年間も行方をくらませていた、重要容疑者の可能性があるのだ。

しかし、彼の尻尾さえうまく掴めば、彼を逮捕することが出来るかもしれない。

それは警視庁の七年前からの彼岸であり、ナオにとっても重要な事であるのだ。

だから、先程、佐渡にも気を抜くなよと言われたが、ナオとしてみれば、そのやる気は十二分に有り余るほどあった。かならず勅使河原を捕まえて、七年前の事件を解決してやるんだという意気込みは萎えなかったのである。

そして次の日、潜入捜査は第三日目を迎えていた。

ナオとゆかり、そして関谷は、またやはり張り込み隊の池沢等と朝早くから綿密な打ち合わせや詳細な確認をしてから、十時前にはストリップ劇場に出勤をすませていた。

今日も相も変わらず、ナオとゆかりは店内の掃除をし、関谷は用務員の仕事にいそしむ。

店の従業員の話によると、昨日このストリップ劇場に現れた宮坂義行は、この店に泊まり込んで、今日も支配人の新見川と一緒に仕事をしているということであった。

これはある意味、潜入捜査を実行にうつしている三人にとっては、絶好の機会であった。

そしてこれも聞いた話なのだが、宮坂こと勅使河原は、約二週間近くこの店に泊まり込んでオーナーとして店の切り盛りをするという事だった。

彼、宮坂が、この店にしばらく逗留することになるのならば、三人にとっては願ったりかなったりだ。勅使河原の余罪を暴くためには、彼にこのストリップ劇場に居座ってもらわなければ、潜入捜査が進めづらい。その事を考えると、この時期が潜入捜査を進めるにあたり絶好のチャンスとなってくるのだ。

しかし今現在、ナオとゆかりは、また便所掃除をしていた。

ナオは、黙々とデッキブラシを使って、タイル磨きに精をだす。

だが、そんな中でナオは、昨日あれだけ潜入捜査に対する意気込みをもらしていたにもかかわらず、便所掃除を始めてから五分もすると、また仕事に飽きたようにあくびをもらしてゆかりにああだこうだと話し掛け始めていた。

「ねえゆかり、どうして私たちはこんな掃除ばかりしているのかしら？ いい加減もうこの仕事には飽きたわ。でも、こんなことばかりしていて、肝心の勅使河原に関する

情報収集は、どうするの？ これじゃ、潜入捜査の意味がないじゃない。はっきり言って、つまらないわね。どうにかならない？」

そのナオの言葉を聞くと、二階堂ゆかりは、呆れたようにこう言っていた。「あのねナオ、いくら潜入捜査って言ったって、すぐに勅使河原の余罪に関する情報を探り出すことなんて出来ないのよ。ここにパートの清掃員として潜入している以上、その仕事を真面目にこなしながら、その合間を見て勅使河原の身辺情報を探らなければならないんだから、少しは我慢しなさいよ。あなたも、一応、特務機関の隊員でしょう。欠伸なんかしていないで、もっとピシッとしなさい！」

ゆかりは、そう言うと、腰に手を当てて、怒った素振りをナオに見せていた。

だが、それを受けて、ナオは、「でもねゆかり、どうやったら勅使河原に関する情報を聞きだせると思うの？ 私思うんだけど、なかなかパートの清掃員じゃ彼に関する情報を聞きだすことって、ままならないような気がするのよね。まさか店の従業員に、勅使河原のことを聞いて回ることも出来ないでしょう？ そんなことしたら、疑われて不審に思われるのがオチだわ。でも、かといって聞き込みもしないでそう都合よく、情報が得られるとも思えないじゃない？」

その事に関して、どう思っているのあなたは？ そんなチャンスが、あると思っているの？」

ナオのいい分は、尤もであった。

いくらパートの清掃員として、このストリップ劇場へ潜入したところで、肝心の勅使河原に関する情報収集が出来なければ、意味をなさない。

その為、ナオがそうぼやくのも、ゆかりには痛い程判っていた。

しかし、ゆかりには、こう答えることしか出来なかった。

「ナオ、あのね、とにかくチャンスが巡ってくるまで、待つしかないわよ。ここは気長に構えて、地道に探りを入れていくしかないわ。あなたの意見も判るけど、ちょっとは我慢しなさい。これも任務のためなのよ！」

そう言うとゆかりは、ナオを無視して、便所掃除に熱中しはじめてしまっていた。

これ以上、話をして、余り意味がないと思ったからだ。

だが、二人はそんな話をしていたが、勅使河原の余罪に関する情報を聞き出すチャンスは、その後、意外なかたちでしかも直ぐ二人のもとに、訪れることになっていた。

それは、ナオとゆかりが便所掃除を終えて、今度は踊り子が楽屋の控え室として使っている一室の広い部屋を掃除していた頃、そこへストリップの開演を終えて戻ってきた踊り子達が入室してくると、徐にこんな話をはばかりもなく喋り始めたのだ。

みか：「ねえ、ねえ、知ってる。昨日から久しぶりに、オーナーの宮坂さんがこの店に来ているのよ。また私たちに靴とかバックとか腕時計とかをプレゼントしてくれるかしら？ 実を言うところの前、わたしシャネルのブレスレットもらっちゃったのよね。へー、いいでしょ？」

さくら：「えーっ、それ本当なの？ いいないいな、わたしも欲しかったな。それでそのブレスレットいくら位するものなの？ 高いやつ？ ねえ、教えて教えて」

みゆき：「止しなさいよ二人とも、どうせそのブレスレット偽物でしょ。また宮坂さんが銀座ブルーメントから売れ残った欠陥品を、あなた達にプレゼントしているだけじゃ

ない。そんなに、偽物のブランド品をもらって嬉しいの？」

みか：「いいじゃない偽物だって、聞いた話だと銀座ブルーメントで売られている品は、グッチとかシャネル、クリスチャン・ディオールの精巧な模造品だって言うことよ。本物に寸分違わぬように作ってある品ばかりらしいから、その店に来る客はみんな騙されて買っていくというらしいわ。でも宮坂さんすごい人よね、銀座の並木通りに、偽ブランド店をオープンして金儲けしているなんて、わたし宮坂さんの奥さんになりたいわ」

さくら：「そうよね。宮坂さんでお金相当持っているみたいだし、結構、顔もいいし、彼の奥さんになれば相当、楽な暮らしができるかもね」

みゆき：「えーっ、貴女たち、宮坂さんみたいな人がタイプなの？　ちょっと信じられない。彼って、相当、女癖悪いって話よ。奥さんになったら苦労するかもね」

さくら：「そんなのいいじゃない、彼だって男ですもの女の一人や二人いたって我慢できるわ。でも奥さんになれば、優雅な暮らしが約束されるかもしれないじゃない？　だから私、彼の恋人になってうまく誘惑しちゃおうかな・・・」

その会話は、よくあるおしゃべりな女たちがある一つの話に盛り上がって、わいわいと好き勝手なことを喋っている会話のように聞こえていた。

しかし、その何気ない会話の中に、その話を掃除をしながら聞き耳をたてて聞いていたナオとゆかりにとっては、とても重要な言葉の内容が含まれていたことは確かだった。

《銀座ブルーメント》、そして《偽ブランド商品》、それに《銀座並木通り》

どうやらこの踊り子達の話の総合すると、宮坂こと勅使河原は、銀座の並木通りに偽ブランド品の店を開いて、それを商売に相当な金儲けをしているのだということが、二人にははっきりと判っていた。

だが、その話を聞くとナオは、ゆかりに、こう言って疑問を投げ掛けていた。「ねえゆかり、あの三人の踊り子の話どう思う？　本当のこと言っていると思うかしら？」

勅使河原が銀座で偽ブランドをさばいているって初耳よね。これって元さんに直ぐ報告した方がいいかしら？　かなり重要な情報だと思うわよ」

「ええそうよね。でもナオ覚えている、この前十八日頃だったかしら？　モモと私たち二人、三人で銀座の並木通りに買い物にいったことがあるでしょ？　そして、その余った時間に日比谷公園にいて、そこで幸田塩蔵っていうおでん屋のおじさんに会ったじゃない。それでその塩蔵さんと話をした時、彼は銀座ではダシガワラだとかクシガワラという男が偽ブランド商品売り捌いているんだって言うことがあったわよね？」

それってやっぱり本当のことだったんじゃないの？　ダシガワラだとかクシガワラって言う男はやっぱり勅使河原洋二のことで、そのおじさんが言っていた店ってのは、銀座ブルーメントの事じゃないかしら？」

ゆかりはそこまで言うと、掃除の手を休めてナオの顔を覗いていた。

「そう言えばそうね？　確かに塩蔵さんて人はそんな事言っていたかしら。あの時はちょっと半信半疑だったけど、言われてみればやっぱりそうだったって事なのかもね。ゆかり、これは重要な情報だから、早く元さんに報告してみましょ。早いうちに報告しといた方がいいわ。そうすれば、捜査がすみやかに進かもしれないから・・・」

ナオとゆかりは、そう二人で一通り話をすると、店の従業員の目を盗んでそれから便所に駆け込んで、その場所から池沢元警部補に連絡を入れていた。

そして、今日も何事もなく、一つの収穫を残して、潜入捜査の任務を終えたのである。

第三節

一月一日元旦、この日は、都内でも初雪が降っていた。

曇天の空から、さらさらと舞い落ちる白い結晶は、粉雪となって東京の街を覆い尽くしていた。

正月の三箇日といえば、どこの商店でも休みだ。

特別な理由がある商店以外は、店を開かないはず。

その為、ナオとゆかりが任務のために勤めだしたストリップ劇場も、その例外にもれず新年早々の三日までは休み、潜入捜査の任務は一時中断しているのがあった。

しかし、何故だか、あまり休みのないはずの特務機関の隊員の仕事も、今回だけは都合よく三日までは、休みになるということだ。

今年は、特例で特別休暇が出、普段、忙しい特務機関の隊員達に骨休めをさせるらしかった。

そんな事で、三日間の休暇をもらったナオ、ゆかり、モモは、相変わらずその時間を有意義に過ごそうと、また三人一緒に顔をあわせて今現在ナオの汚いアパートに入り浸っていた。

「ねえナオ先輩、見て見て、よしきが餅まきしていますよ。よしきって、かっくいデスねー！」

いま、柏木モモが一人馬鹿みたく黄色い声をあげている訳は、今、テレビでモモが大ファンとなっているアイドルの太刀川よしきが大写しになって映っているからだ。

そのテレビは、ある有名な神社の境内から、参拝客に対して餅まきをしている情景を生中継している映像であるのだが、モモはそれに一人で興奮し、ナオに対してしきりに見ろ見ろと喧しく、まくしたててきていた。

しかし、ナオは、それを受けても、先程から重箱に詰められたおせち料理を頻りにばくついて、殆どモモの言葉など聞いてはいなかった。

どうやらアイドルよりも、食い気の方がナオにとっては重要らしい。

今、ナオが食べているおせち料理は、ゆかりの母が彼女に持たせてナオのアパートに差し入れられた料理であった。

料理の得意なゆかりの母が、気を使って作ってくれたのだ。

だからその味は、かなり美味しい。

聞いた話によると、ゆかりもおせち料理を作る際、手伝ったようだが、どうせゆかりは雑用がかりで料理そのものには手をかけていなかったとナオは見ている。

ゆかりは、多趣味なわりには料理が下手だ。もちろんナオも上手い方ではなかったが、ゆかりは味音痴でもあるため、彼女の作る料理は食べたものではない。

ナオは一度ゆかりの家にお邪魔して、彼女の手作り料理を食したことがあるが、その味は想像を絶する例え様もない味であったことを覚えている。

もし、ゆかりが作った料理が、道端に偶然落ちていて、それを拾い喰いした野良犬や野良猫がいたら、すぐ即死するのではないかという位に不味いのだ。

だからある意味、今ナオが食べているおせち料理をゆかりの母が作ったということは、不用意な食中毒を起こさずに、済んだということの意味しているといってもいい。

だが、ナオのそんな思いを、知ってか知らずか、ゆかりもその母が作ったおせちに手を出して、ナオ同様、美味そうにばくついている。

そして二人は、一人やたらと騒いでいるモモをよそに、徐にテレビに目を向けて、それを何気なく観賞し始めていた。

正月のテレビといえば、やはり特別番組のオンパレードだ。

漫オショーやバラエティートーク、戦国時代劇ドラマや歌番組、毎年毎年、相も変わらず似たような番組がずらずらと続く。

そして昨日は大晦日であったが、ナオ、ゆかり、モモの三人は一緒には過ごさなかった。

大晦日の日は、各自自分の家で過ごし、翌日の一日からゆかりとモモはナオのアパートにおしかけて、新春の挨拶を交わし、三人で盛り上がる計画をしていたからだ。

だからナオは、昨日一人寂しくコンビニで買った蕎麦セットを年越し蕎麦として代用し、それを食しながら、翌日となる午前零時から始まる《ゆく年くる年》をみて除夜の鐘を聞き、年を越したのである。

「ねえナオ先輩、ナオ先輩、見て見て。今度は、俳優の一臣壮一郎が、テレビに出てますよ！ これまたカッコイイデスね。私、憧れちゃう、ステキ〜！」

先程まで、テレビを見て、アイドルスターの太刀川よしきに興奮していたモモであったが、今度はそのテレビが終わると別の番組にチャンネルを回してお正月トーク番組にセットし、また別の男性俳優が喋っているシーンに興奮して、お熱を上げている様子だった。

モモはこう見えてもミーハーだ。

趣味のりかちゃん人形に限らず、芸能人の話題にはちょっとばかり深い造詣がある。

林家ペーではないが、モモは500人近くの俳優の誕生日を暗記しているという特技をもつ。

それを知っているナオは、俳優の誕生日など一々憶えていてそれが何の役に立つのかと疑問に思うのであるが、モモ曰く、俳優の誕生日を憶えておくと、もしもその俳優に直に会う機会がめぐってくれば、それを話のネタにして仲良くなれたりするのだと、いまいち意味の判らないことを主張しているのだ。

それを聞いた時、ナオは、このモモという女は、相当馬鹿なのだと疑うしかなかった。

なぜなら、どうしてモモは芸能人でもないのに俳優の誕生日を知っているからといって、その俳優たちと仲良くなれるのかが良く判らなかったからだ。

だけど、まあ、それはモモの勝手な思い込みであるので、それ以上は何とも言えない。

だが、今現在のナオの正直な気持ちとしては、このモモという女は、やたらと煩い女

なのだとあらためて実感していた。

「ねえナオ、そろそろ初詣にでも出掛けましょうか？　もう時間的にもいい頃合いじゃないかしら？」

しかしその時、先程からモモと一緒にテレビを見ていた二階堂ゆかりが、そう話を切り出すと、ナオとモモの二人にそう催促を始めて、誘いかけをしてきていた。

「ええ、そうですね、ゆかり先輩。でも、今頃の人出はどうですかね？　浅草すいてますかね？」

ゆかりの言葉を聞くとモモは、テレビにうつつを抜かしていたわりにはその話に即座に反応して返事をする。

そしてナオに、

「ねえナオ先輩、ナオ先輩、今日はいまから浅草雷門、浅草寺デスよ。初詣、初詣、早く行きましょう！」

といて、また一人ではしゃぎ始めていた。

今は時間は二時、浅草寺はナオの住む文京区・湯島のアパートからはそう遠くない。

営団地下鉄銀座線を使えば、乗りかえなしに直通で浅草駅にまで行ける。

ナオとゆかり、モモの三人が浅草寺に初詣をしようと計画したのは、あまり深い意味はない。

ただ三箇日が暇なので、せっかく三人集まっているのだから、初詣ぐらいしようというところに話が決まっていたからに他ならなかった。

だから、三人は今から、その浅草寺にお出かけするのだ。

ナオは一人ではしゃぐモモをよそに、徐に立ちだすと、出掛ける準備にいそしみだし、それからかれこれ十分後に自分のアパートのドアの鍵をしめて、外に繰りだしていた。

浅草は、江戸下町情緒あふれる街、庶民が集う粋な街でもある。

浅草駅の近くには隅田川が流れ、浅草寺はその駅を下りて西に向かうと直ぐのところにある。

浅草寺といえば雷門が有名だろう。

でっかい赤提灯に『雷門』の文字が躍る、それである。

その提灯の重さは約100kg、高さは約3メートルあるという。

そして聞くとところによると浅草寺は「観音さま」と呼ばれて親しまれている、都内最古の寺だそうだ。

何かと古いゆえ、由緒があるらしい。

浅草の雷門をくぐると、そこは仲見世通りだ。

石畳の浅草寺参道として『宝蔵門』まで続いている。

その通りの左右にはさまざまな店が軒を連ね、煎餅屋、人形焼き、芋ようかん屋、玩具店、象牙屋、洋傘屋、扇子屋、佃煮屋などが店を開いている。

ナオとゆかり、モモの三人は今、その仲見世通りを雷門から入り歩いていた。

初詣で賑わうその参道を歩きながら、実演販売を行っている店をのぞき見たり、人形屋で可愛い人形を手にとってみたりと、三人は至極その初詣を楽しんでいた。

三人つまりナオとゆかり、モモの服装は言い忘れていたが、二人までは普段着だ。
その二人とは、ナオとゆかりである。
そして残りの一人モモの服装といえば、なんと振り袖姿、足には足袋を穿き肉厚の草履をつっかけているといういでたちであった。
その為、モモは歩くのが遅い。
仲見世通りを歩くナオとゆかりに、おいていかれるのが暫しだった。
「あー、もう、二人ともそんなに速く歩かないで下さ〜い。私、振り袖着ているんですから歩くの遅いんですよー。ねえ、待ってくださいよー」
そんな中、先程からちょこちょこ小股であるいていたモモが、先を行くナオとゆかりに頬をぷうっと膨らましてそう言うと、不満げに文句を言いだしているところであった。「何しているのモモ、速く歩かないと置いていっちゃうわよ。ほら、さっさと歩きなさい。困るわね、足の遅いお子ちゃまは・・・」
そうふざけて、そう言っていたのはナオであった。
彼女は、必死で早歩きをしているモモの姿を振り返りながら見据えると、わざとその歩調を早めて先に行ってしまうていた。
それを見たモモは、
「あ〜、あ〜、ナオ先輩。そういう意地悪するんですかー。まったく根性曲がっていますね。いいですよ、私は地道に小股で歩いていきますから。そんな事すると天狗が出ますよ〜だ！」
と、まるでナオの様に意味不明なことを言って、やはり必死に二人に付いていこうと足を動かしていた。
しかし、そんなこんなで三人は、仲見世通りを抜けると宝蔵門をくぐり、ようやく浅草寺の敷地内に到着。
そこでまず最初に三人がした事は、おみくじを引くことであった。
おみくじの売店というか、それが置いてある建物は朱塗りの建物で、浅草寺の手前に立地している。
そこで、賽銭箱みたいな箱に、百円を投入して、好きなおみくじを引くのだ。
「ねえ、ねえ、ねえ、ナオ先輩はなんでしたか。大吉それとも凶、わたし中吉でしたよ、見て見て」
ナオにおみくじの紙を見せて喜ぶモモ。しかしナオが引いたおみくじは大凶であった。「やだナオ先輩、大凶じゃないですか。相当運が悪いんですね。きっと性格が意地悪でねじ曲がっているからそんなおみくじを引くんですよ。でも、ところで、ゆかり先輩はどうでしたか？　まさか、先輩も、大凶じゃないですよ？」
そう言うとモモは、ゆかりのおみくじを覗き込んでいた。
「何言っているの私は吉よ、まあまあ運勢ってところね」
すると、ゆかりは、モモにおみくじをかざして見せる。
そしてナオの顔を見て、意味ありげに笑ってみせていた。
「さあ二人ともさっさと拝んで、鳩にでも餌をやりましょう」
しかし、ナオは、ゆかりのその笑いを無視すると、その後はつつかと浅草寺の境内の方に徐に向かい始めていた。

浅草寺の境内には、参拝者用に賽銭箱が設置されている。
建物自体も大きいので、その賽銭箱もビッグサイズだ。
三人は参拝の順番待ちをしながら、財布から五百円玉を取り出して準備しておく。
そして自分たちの順番が回ってくると、迷わずその五百円玉を賽銭箱に投じて、天井からつってあるガラガラを鳴らし、神妙な顔をして手を合わせ拝んでいた。
初詣といっても、大抵の場合は、それほど手間のかかるものではない。
ただ寺社仏閣に来て拝むだけのこと、三分もあればあつという間に参拝は終了だ。
ナオとゆかりも、他の初詣客同様、新年の祈願を終えると階段をおり素早く境内を後にしていた。
しかし、一体、彼女たちは、それぞれ何を祈願したのであろうか？
それはこうだ。
モモは新年が明けて、今年こそ、素敵な彼氏が出来る様にと、神さまならびに仏様にお願ひし、ゆかりは無病息災を祈願、そしてナオは何も祈願しなかった。
ナオの場合、ただ形だけの初詣である為、願ひ事はないのだ。
別にご利益を信じていない訳ではないのだが、みんなが初詣をするので、自分もただそれを真似しているだけのことにすぎない。
願ひがかなおうが、かなうまいが、大して意味がない。
ナオにとっては、ただこうして三人で初詣気分を味わえる事の方が、よっぽど意味のあることだと言ってもいいかもしれなかった。

そして、いま三人は、浅草寺の西に位置する池の近くの敷地内の一角に立って、先程から鳩に餌をやっていた。
鳩の餌は、小汚い小さな売店で、一袋五百円のものを購入し、それをまいている。
この浅草寺に集まる鳩は、客が餌の売店前に立つだけで、その人のそばに寄り集まってくる程、非常に人間になれている鳩ばかりだ。
だから、餌をまく時は、大変である。
餌の袋を持っているだけで鳩達は、その餌をまこうとする人の腕に飛んできて、腕の上にとまると、速攻で餌の奪い合いを始めるのだ。
そして腕にたかるだけでなく、肩や頭の上にもまで止まり、始めてこの場所で餌をまこうとする人は、それに戸惑うのが暫しである。
そんな具合だから、今、鳩に餌をまいているナオやモモも、その鳩達の貪欲な食欲に圧倒されつつ、体中に鳩が群がったまま、モモなどは悲鳴を上げていた。
「きゃー、鳩が私の振り袖にウンチひっかけましたよー。ゆかり先輩どうにかしてー。やだ頭の上にたからないでー」
それを見ていたゆかりは、悲鳴をあげ続けるモモに、親しみの眼差しを向けるとフフと一人可笑しくて笑いたてている様子だった。
しかし、ゆかりは、見ているだけで餌を買っていない。だから、ゆかりのそばには、鳩は一匹も寄って来てこなかった。
意外と鳩という鳥は、お利口さんらしい。

そんな中、ナオといえば、今、彼女は、袋の中の餌を一掴みすると、それを豪快に庭にまいて、鳩がそれに応じて一斉に飛び立ち、また一斉に地面に降り立つ様を楽しんで観察していた。

鳩に餌をまいたことのない人には判らないと思うが、結構それは面白いのだ。

自分がまく餌に反応して、鳩も動く。

ある意味、鳥の動きを自分が操っているような感覚にひたれる。

だから、それが楽しくて、ナオは子供のように笑いながら、せっせと鳩の餌まきに精を出していた。

午後四時、三人は浅草寺での初詣も済ませ、鳩にも餌をやり楽しんだ後は、もう強いてやることもなくナオのアパートへと帰ってきていた。

ナオ、ゆかり、モモの三人は冷えきったナオのアパートに上がり込むと、テレビとコタツのスイッチをいれ暖を取りながら、また何気なくテレビ番組を見出す。

つまらない話なのだが、元旦といってもナオの場合は、別に実家がどこかの田舎にある訳でもなく、帰省する必要もないので、ゆかりとモモと一緒にごくありふれた正月を過ごすしかない。

聞くところによると、ゆかりとモモの場合は、明日か明後日には両親と一緒に田舎に帰り、御年始の挨拶に行くということだ。

ある意味、親戚が田舎にあるということは、頼れるバックボーンがあるということで、いいことだ。

しかしナオの場合は、父母を亡くして、それに母方の両親も今は亡くなっており、唯一の親類といえば父方の祖父、高崎源一しかいない。

父方の祖父、高崎源一は、もう八十五歳にもなる高齢の身だ。

彼は今、高崎耕助の兄、高崎義満とその妻、高崎恵と一緒に暮らしており、孫も三人いる。

その孫達は、当然ナオのいところになるわけだが、ナオは父と母が死んでからその父方の祖父の家には顔を出していないので、あまり親戚としての交流はなかった。

その為、ナオはいつもこのアパートで独りぼっちだ。

でも、ナオは、別に一人であっても淋しくはないので、親戚の家にはあまり顔を出すことはなかった。

だが最近ではたまに、祖父の家に顔を出すのもいいかもしれないと思っている。

昔から祖父の高崎源一は、ナオの事を可愛がってくれていたこともある。

だから正月は帰らないにしても、たまにはお爺ちゃんに会いに行くのもいいかもしれない。

「ねえ、ナオ先輩、ナオ先輩、ところで潜入捜査の進展具合はどうなっているんですか？」

聞くところによると昨日は、勅使河原の余罪に関する重要な情報が判ったということじゃないですか。警視庁には、その事をもう報告したんでしょ？」

ナオが、今、台所で三人分の紅茶を煎れ、コタツに戻って座ろうとした時、そんなところにモモが思い出したかのように、突然、質問をぶつけてきていた。

それに答えてナオは、
「ええそうよ、これはストリップ劇場の踊り子が話していたことなんだけど、勅使河原は何でも銀座に偽ブランド商品を扱ったブティックの店を開いているらしくて、その偽ブランド商品を売り捌いて金儲けしているってということだわ。だから私とゆかりはその事を元さんに報告して、その事に関する捜査を警視庁に依頼したばかりよ。今直ぐにその内容に関する真偽が判る訳ではないけど、警視庁は捜査員を動員してその銀座ブルームントという店を張り込むことになったわ。これはある意味、勅使河原の余罪を暴く絶好のチャンスが到来したととってもいいわね。もし銀座にその偽ブランドを扱った店があると判れば、いずれ摘発できるかもしれないから、勅使河原を逮捕するカウントダウンに入ったと言ってもいいかもしれないわね。そうよねゆかり？」

そう言うと彼女は、二階堂ゆかりに同意を求めている。
「ええ、そうね。これは警視庁の捜査次第だけど、私たちは引き続きストリップ劇場の潜入捜査を続けるのは決まっていることよ。でもモモ、あい変わらずあなたって、情報を仕入れるのが早いわね。一体だれにその事を聞いてくるのかしら、もしかして課長に聞いているの？」

ゆかりの、その質問に答えて、モモは、
「えーっ、違いますよ。電話番兼課長の秘書官、渡辺良子さんに聞いているんです。彼女は私なんかよりも、もっと情報通で色々な事知っていますよ。さすがおつぼね様ですよね」

モモはそういうと、へへへと笑って首を傾げていた。
すると、
「へー、渡辺良子さんね？　でもあの人、近々、特務機関を引退するっていう噂がなかったかしら？　それにもう直ぐアメリカから秘書官の望月早苗さんが、研修を終えて帰ってくるから、渡辺さんは秘書官代理を降ろされるらしいわよ。そのことは知っているモモ？」

ゆかりは大して重要ではなかったが、モモに話題をふっていた。
「えっ、うそ、それ本当なんですか？　渡辺さん特務機関辞めちゃうの？　それに望月秘書官まで帰ってくるとなると、また小煩い小言を言う人がふえることになりますね？　ナオ先輩にとっては、不都合なんじゃありません？　望月秘書官で、ナオ先輩に厳しいですものね。また課長と一緒に、先輩を再教育し直そうとするんじゃないんですか？　望月さんて、特務機関の規律に関してはうるさい人ですから、きっとそうなりますよ。ナオ先輩、気をつけた方がいいですよ」

モモはゆかりからの質問を受けると、ナオに対して、そう言って注意を促していた。
しかし、それに対してナオは別に何とも思っていないように、モモの言葉にこう言っていた。

「モモあのね、私としては望月さんが帰ってこようと、こまいと、それほど問題になんかならないわ。それに私は、それほど望月さんに目を付けられるようなことはしていないし、別に帰ってきたところで不都合なことになんかならないわよ。あまり私に問題あるような事、言わないで欲しいわ。こう見えても私は、真面目な特務機関の隊員なんだからね。変なふうに話をすすめるのはよして・・・」

だが、それを受けるとモモは、
「えーっ、ナオ先輩そんな事言っていますけど、ナオ先輩が問題児であるということは、あの警視庁にさえ聞き及んでいる有名な伝説になりつつあるんですよ。だから、先輩が、真面目を主張するって、ちょっと可笑しい気が私としてはするんですよ。やっぱりナオ先輩は、特務機関の問題児ですよ、いくら否定しても駄目ですよ」

と言って、ナオを馬鹿にしたように笑いたてていた。

だが、三人がそんな話をそれから二時間半近く続けていると、時間はもう午後の六時三十分を過ぎていた。その為、ゆかりとモモは今日、ナオのアパートに泊まる予定もないので、そろそろ家に帰る支度を始めだす。

しかし、帰り支度といっても、ただゆかりが持ってきたおせち料理の重箱を風呂敷に包んだり、さっきナオが煎れてくれた紅茶のカップを台所で洗ったりするだけであったが、それが済むと、ゆかりとモモは、ナオと一緒にアパートの玄関を出た。

そして寒空の日が暮れた夜の街を、駅に向かって歩き始める。

ナオは、ゆかりとモモの二人を途中まで見送るつもりで、足はサンダル姿でぺたぺたと音をたてて歩いている。

だが今日は、ナオ、ゆかり、モモにとって、一応、有意義な一日が過ごせたといってもいい。

ナオのアパートで色々馬鹿な話もしたし、浅草、浅草寺にも初詣に行った。

それは三人にとって何気ない元日のありふれた日常であったが、それでも楽しかったのは事実だ。だから、この三人にとってはこの先、何の不安もなく日常が過ぎていくのがごく当たり前のことなのかもしれない。

三人で取るに足らない話に盛り上がり、一日一日を過ごしていく。

その為、今日もそのありふれた三人の日常は、終わりを迎えようとしていた。

ナオは途中まで、ゆかりやモモを見送ると、その後はさよならといって踵を返し、自分のアパートへと帰っていく。

そして、ゆかりやモモも、それから家へと帰宅、彼女たちがまた会うのは、約二日後の四日からだ。

しかし・・・

しかし、この時点では、三人は何事もなく平凡な一日を過ごす事が出来ていた。

だが、この後モモは別として、ナオとゆかりには、あのような突然の不測の事態が生じる事になるとは、この段階では今の三人には思いもよらなかった筈である。

これから二日後に、ナオとゆかりにとっては、その身を危険に曝される様な予想だにしていなかったある事態が起こる。

それがどう変転するかは、今の段階では言えないが、これはここに来て一種の見物たる山場を迎えたといってもいいだろう。

だから、ナオとゆかりが、今後どうなるのか？

それは、以後の話によって明らかになる。

では次の章へ・・・

自認認証：表明表記

自認認証：表明表記

小説タイトル：ハード・ガンズ① 特務機関E X X P：上巻

著者：秋月しょう一郎

初期考案年日：1989年～1990年頃

執筆期間：2002年01月中旬頃～2002年06月中旬頃まで・・・

備考：第八回スニーカー大賞 応募作品の一作品の一つ。

(多分、選考外失格作品・・・でも当時の選考委員の先生や当時の最前衛で活躍していたプロの作家陣やスニーカー文庫編集部の方等が読んだ作品であると思う)

※画像借用：Photo by Specna Arms from Pexels

ハード・ガンズ① 特務機関EXXP：上巻

著 秋月しょう一郎

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
